

国土舘大学審査学位論文

「高齢者の犯罪行動説明理論の構築について

ーグレイの BIS/BAS 強化感受性理論からの検討ー」

江崎 徹治

高齢者の犯罪行動説明理論の構築について  
ー グレイの BIS/BAS 強化感受性理論からの検討 ー

国士舘大学大学院法学研究科  
法学専攻 博士後期課程

指導教員                      辰 野 文 理  
1 5 D F 0 0 1                江 崎 徹 治

2 0 2 0

## 目 次

### 第1章 我が国の人口動態と高齢者犯罪の動向

#### 第1節 我が国の人口動態

- 1 推移と予測・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1
- 2 主要諸外国との比較・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1

#### 第2節 我が国の高齢者犯罪の動向

- 1 犯罪の動向と特徴・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 2
- 2 高齢犯罪者の処遇・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 3
- 3 諸外国との比較・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 4

#### 第3節 再犯防止対策と高齢犯罪者との関係・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 5

#### 第4節 高齢者の犯罪行動の原因や犯罪からの離脱・立直りに関する研究の問題点

- 1 高齢者の特性・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 6
  - (1) 老年学の視点・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 6
  - (2) 心理学の視点・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 9
  - (3) 社会学の視点・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 10
- 2 高齢者の犯罪行動の原因に関する問題点
  - (1) 高齢者の犯罪行動全般・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 11
  - (2) 高齢者の万引きに関する研究・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 12
  - (3) 犯罪の定義や研究の視点・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 14
    - 1) アイゼンクの主張・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 15
    - 2) ジェフェリーの主張・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 16
    - 3) ゴットフレッドソン・ハーシの主張・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 17
    - 4) ウィクストラムの主張・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 17
- 3 高齢者の犯罪からの離脱・立直りに関する研究の問題点
  - (1) 我が国における再犯防止対策の今日的経緯・・・・・・・・・・・・・・・・ 19
  - (2) 犯罪者の処遇に関する研究・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 19
  - (3) 犯罪からの離脱・立直りに関する研究・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 21

### 第2章 高齢者の犯罪行動と犯罪からの離脱・立直りを説明するための統合モデルの検討

#### 第1節 犯罪の発生や増幅に関する研究の概観

##### 1 社会構造論的視点による研究

- (1) 人間生態的研究・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 22
- (2) アノミー論と緊張理論
  - 1) デュルケムのアノミー概念・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 23
  - 2) 構造的アノミー論・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 24
  - 3) 緊張理論・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 24
  - 4) アグニューの一般緊張理論・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 25
  - 5) 下層階級文化理論・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 26
  - 6) 副次文化理論・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 26

7) 潜在価値論と漂流理論	27
8) 異質的機会構造理論	28
2 社会過程論的視点による研究	
(1) 社会過程の枠組み	
1) 文化葛藤理論	30
2) 異質的接触理論	30
3) 異質的同一化理論	31
4) 社会的学習理論	32
(2) ラベリング理論	33
3 高齢者の犯罪行動の視点による検討	34
第2節 個人の犯罪性向の形成時期に関する研究の概観	
1 生物社会学的視点からの研究	
(1) 古典的研究	
1) ロンブローゾの研究	35
2) ゴーリングの研究	35
3) ゴダートの研究	36
4) フートンの研究	37
(2) 遺伝的研究	
1) 双生児研究	37
2) 養子研究	38
2 心理学的視点からの研究	
(1) 精神分析	39
(2) 体型とパーソナリティに関する研究	
1) クレッチマーの研究	39
2) シェルドンの研究	40
3) グリュック夫妻の研究	41
(3) 反社会的パーソナリティ	42
(4) ライフスタイル理論	42
(5) 心理学的学習理論	43
3 行動学習に関する脳神経科学の視点による研究	43
4 個人特性に関する心理学と脳神経科学の融合による気質研究	46
(1) アイゼンクの理論	47
(2) グレイの理論	49
(3) クロニンジャーの理論	51
(4) ロスバートの理論	52
5 統制理論の枠組み	
(1) 自己統制理論	53
(2) 社会的絆理論	54
(3) セルフコントロール理論	55
6 アグニューの超特質理論	57

7 高齢者の犯罪行動の視点による検討	57
第3節 犯罪と生得的な気質に関する近年の研究	
1 国内の研究	
(1) MPI 研究会 (1972) の研究	58
(2) 井上 (2008) の研究	59
(3) 原田ほか (2009) の研究	59
2 国外の研究	
(1) アーネッタ・ニューマン (2000) の研究	59
(2) ニューマンほか (2005) の研究	60
(3) リューほか (2008) の研究	60
(4) パイスレスほか (2009) の研究	61
(5) ブリュネラほか (2009) の研究	61
(6) ワラックほか (2015) の研究	61
(7) テイラー・アイマン (2015) の研究	62
第4節 個人の犯罪性向の継続変化に関する研究の概観	
1 ライフイベントと非行・犯罪からの離脱との関係	
(1) ウイルソン・ハースタインの理論	62
(2) モフィットの二重経路発達理論	63
(3) サンプソン・ラウブの年齢一段階理論	64
(4) ファリントンの反社会的潜在特性認知統合 (ICAP) 理論	65
2 非行・犯罪からの離脱の過程におけるアイデンティティ及び認知の変化	
(1) マルナの罪の回復の脚本理論	66
(2) ジョルダーノの認知的変化の AL 群理論	67
3 高齢者の犯罪行動からの立直りの視点による検討	67
第5節 高齢者の犯罪行動と犯罪からの離脱・立直りを説明するための統合モデル の検討	68
第6節 本研究の新奇性と仮説	71
第3章 調査研究	
第1節 目的	72
第2節 方法	
1 調査期間	72
2 対象者	72
3 調査紙の内容	
(1) BIS/BAS 尺度日本語版 (20 項目)	73
(2) セルフコントロール尺度短縮日本語版 (13 項目)	74
(3) 発達課題尺度日本語版 (80 項目)	74
(4) デモグラフィック項目	75
4 手続き	
(1) 一般高齢者	76

(2) 施設高齢者	76
5 倫理的配慮	77
第3節 結果	
1 調査対象者のデモグラフィック特徴	
(1) 一般高齢者	77
(2) 施設高齢者	77
2 BIS/BAS 尺度	
(1) 確証的因子分析	79
(2) 信頼性分析	79
(3) BIS/BAS 尺度平均点の差の検定	
1) 施設の有無 (一般と施設)	80
2) 性別 (男性と女性)	80
3) 年齢 (69 歳以下と 70 歳以上)	80
3 セルフコントロール尺度	
(1) 確証的因子分析	81
(2) 信頼性分析	81
(3) BSCS-J 尺度平均点の差の検定	
1) 施設の有無 (一般と施設)	81
2) 性別 (男性と女性)	82
3) 年齢 (69 歳以下と 70 歳以上)	82
4 発達課題尺度	82
(1) 信頼性分析	83
(2) 発達課題尺度平均点の差の検定	
1) 施設の有無 (一般と施設)	83
2) 性別 (男性と女性)	84
3) 年齢 (69 歳以下と 70 歳以上)	84
5 BIS 尺度平均点とデモグラフィック項目との交互作用の検討	
(1) BIS 尺度平均点(高群・低群)と小学生のころの養育者と一般・施設別	85
(2) BIS 尺度平均点(高群・低群)と小学生のころのしつけと一般・施設別	85
(3) BIS 尺度平均点(高群・低群)と小学生のころの生活状況と一般・施設別	86
(4) BIS 尺度平均点(高群・低群)と小学生のころの学業と一般・施設別	87
(5) BIS 尺度平均点(高群・低群)と学歴と一般・施設別	87
(6) BIS 尺度平均点(高群・低群)と 40 代、50 代の職業と一般・施設別	88
(7) BIS 尺度平均点(高群・低群)と婚姻歴と一般・施設別	88
(8) BIS 尺度平均点(高群・低群)と児童期の万引き経験と一般・施設別	89
(9) BIS 尺度平均点(高群・低群)と飲酒嗜好と一般・施設別	90
(10) BIS 尺度平均点(高群・低群)と喫煙嗜好と一般・施設別	90
(11) BIS 尺度平均点(高群・低群)とギャンブル嗜好と一般・施設別	91
6 BAS 尺度平均点とデモグラフィック項目との交互作用の検討	
(1) BAS 尺度平均点(高群・低群)と小学生のころの養育者と一般・施設別	92

(2) BAS 尺度平均点(高群・低群)と小学生のころのしつけと一般・施設別	93
(3) BAS 尺度平均点(高群・低群)と小学生のころの生活状況と一般・施設別	93
(4) BAS 尺度平均点(高群・低群)と小学生のころの学業と一般・施設別	94
(5) BAS 尺度平均点(高群・低群)と学歴と一般・施設別	95
(6) BAS 尺度平均点(高群・低群)と 40 代、50 代の職業と一般・施設別	95
(7) BAS 尺度平均点(高群・低群)と婚姻歴と一般・施設別	96
(8) BAS 尺度平均点(高群・低群)と児童期の万引き経験と一般・施設別	96
(9) BAS 尺度平均点(高群・低群)と飲酒嗜好と一般・施設別	97
(10) BAS 尺度平均点(高群・低群)と喫煙嗜好と一般・施設別	97
(11) BAS 尺度平均点(高群・低群)とギャンブル嗜好と一般・施設別	98
7 BAS 下位尺度平均点とデモグラフィック項目との交互作用	
(1) BAS_D 尺度平均点(高群・低群)と小学生のころの養育者と一般・施設別	99
(2) BAS_D 尺度平均点(高群・低群)と喫煙嗜好と一般・施設別	100
(3) BAS_R 尺度平均点(高群・低群)と小学生のころの養育者と一般・施設別	100
(4) BAS_R 尺度平均点(高群・低群)と小学生のころの学業と一般・施設別	101
(5) BAS_F 尺度平均点(高群・低群)と小学生のころの養育者と一般・施設別	102
(6) BAS_F 尺度平均点(高群・低群)と児童期の万引き経験と一般・施設別	103
(7) BAS_F 尺度平均点(高群・低群)と喫煙嗜好と一般・施設別	104
8 BIS/BAS 尺度平均点(高群・低群)の組合せとセルフコントロールの関係	105
9 セルフコントロールと発達課題との関係	105
(1) 信頼性	106
(2) 自律性	106
(3) 自主性	106
(4) 勤勉性	107
(5) 同一性	107
(6) 親密性	108
(7) 生殖性	108
(8) 統合性	109
10 BIS/BAS と高齢期の万引き行動との関係	
(1) 統計的特徴	109
(2) BIS/BAS 尺度平均点(高群・低群)の組合せと万引き経験の有無と時期	109
(3) 万引きをした時の状況と万引き経験の有無と時期の関係	110
(4) 高齢期の万引き経験とデモグラフィック項目との関係	111
(5) 人生の振り返りと BIS/BAS 尺度平均点(高群・低群)の組合せ	112
11 BIS/BAS とソーシャルサポートの受領との関係	112
第4節 考察	
1 尺度の評価	
(1) BIS/BAS 尺度	114
(2) セルフコントロール尺度	119
(3) 発達課題尺度	120

2	BIS/BAS とセルフコントロールとの関係	120
(1)	BIS 尺度平均点(高群・低群)と BSCS-J 尺度平均点と経験した環境の 交互作用	121
1)	BIS と小学生のころの生活状況がセルフコントロールに与える影響	121
2)	BIS と離婚がセルフコントロールに与える影響	121
(2)	BAS 尺度平均点(高群・低群)と BSCS-J 尺度平均点と経験した環境の 交互作用	122
1)	BAS と小学生のころの養育者がセルフコントロールに与える影響	122
2)	BAS と学歴がセルフコントロールに与える影響	123
3)	BAS と喫煙嗜好がセルフコントロールに与える影響	124
(3)	BIS/BAS 尺度平均点(高群・低群)の組合せがセルフコントロールに 与える影響	125
3	セルフコントロールと発達課題の関係	126
4	BIS/BAS 尺度平均点(高群・低群)と高齢期の万引き行動との組合せの 関係	127

#### 第4章 総合的考察

第1節	本調査研究の結論	129
第2節	本調査研究の限界と今後の課題	
1	本調査研究の限界	
(1)	脳科学における責任の所在	130
(2)	人権と生命倫理	131
2	今後の課題	
(1)	BIS/BAS 尺度の検討	132
(2)	発達課題やソーシャルサポートと BIS/BAS の関係の検討	132
3	犯罪者に対する刑罰と社会内処遇に関する展望	132

引用文献	135
------	-----

#### 巻末資料

1	調査対象者の人口統計的特徴	150
2	調査用紙	153



## 第1章 我が国の人口動態と高齢者犯罪の動向

### 第1節 我が国の人口動態

#### 1 推移と予測

平成 30 年版高齢社会白書によれば、我が国の 65 歳以上の高齢者人口は、1950（昭和 25）年には総人口の 5%に満たなかったが、1970（昭和 45）年に 7%を超え、さらに、1994（平成 6）年には 14%を超えた。高齢化率はその後も上昇を続け、現在 27.7%に達しており、2065 年には 38.4%、うち 75 歳以上が 25.5%に達すると推計されている<sup>1</sup>。また、我が国の総人口は、長期の人口減少過程に入っており、2029 年に人口 1 億 2,000 万人を下回った後も減少を続け、2053 年には 1 億人を割って 9,924 万人となり、2065 年に 8,808 万人になると推計されている<sup>2</sup>（Figure 1-1-1）。

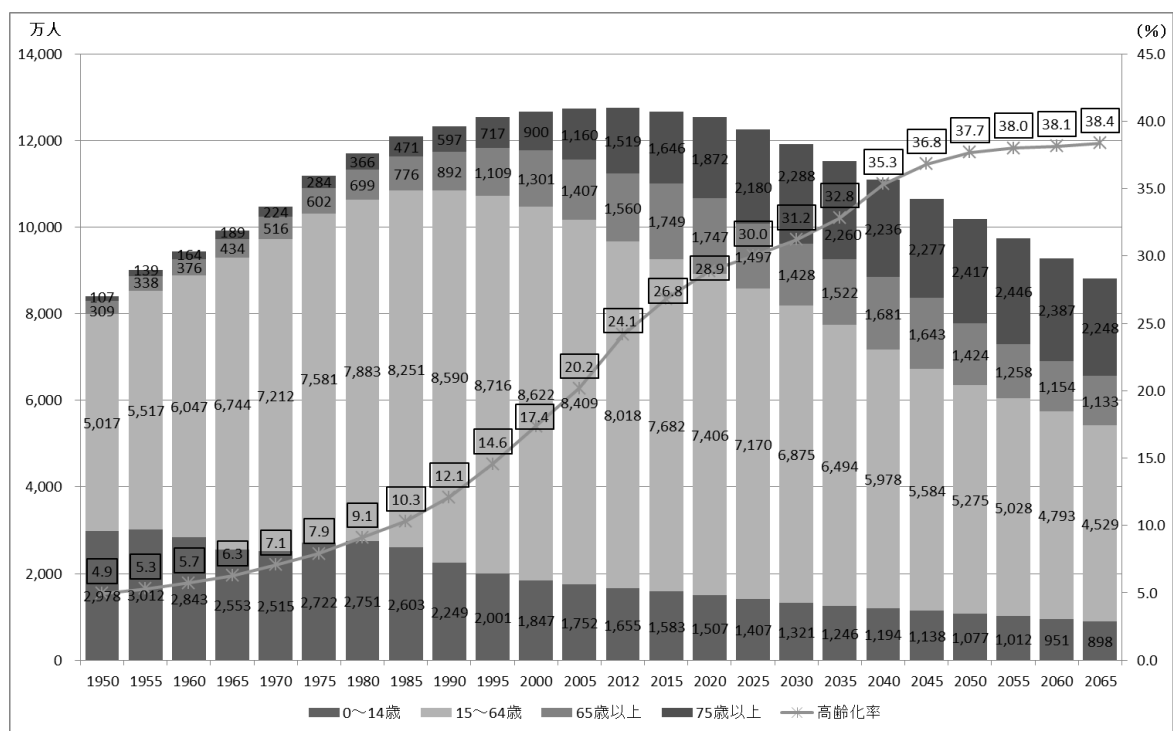


Figure1-1-1 年齢層別人口及び高齢化率の推移と将来予想

注) 平成 30 年版高齢者白書を参考に、2010 年までは総務省「国勢調査」、2012 年は総務省「人口統計」（平成 24 年 10 月 1 日現在）、2015 年以降は国立社会保障・人口問題研究所「日本の将来推計人口（平成 30 年 1 月推計）」の出生中位・死亡中位仮定による集計結果を用いて作成した。

#### 2 主要諸外国との比較

平成 30 年版高齢者白書は、高齢化速度の倍化年数（高齢化率が 7 %を超えてからその倍の 14%に達するまでの所要年数）を諸外国と比較した。フランスが 126 年、スウェーデンが 85 年、比較的短いドイツが 40 年、イギリスが 46 年であるのに対し、我が国は、1970（昭和 45）年に 7 %を超えると、その 24 年後の 1994（平成 6）年には 14%に達し

1 『平成 30 年版高齢社会白書』（内閣府，2019）2 頁。

2 前掲注 1，3 頁。

ているとし、我が国の高齢化率が、世界に例をみない速度で進行していることを指摘した<sup>3</sup>（Figure 1-1-2）。ただし、我が国の伸び率は鈍化する一方、韓国が 18 年、シンガポールが 20 年、中国が 23 年など、今後、アジアの一部の国で、我が国を上回るスピードで高齢化が進むことが見込まれていることも指摘した<sup>4</sup>。

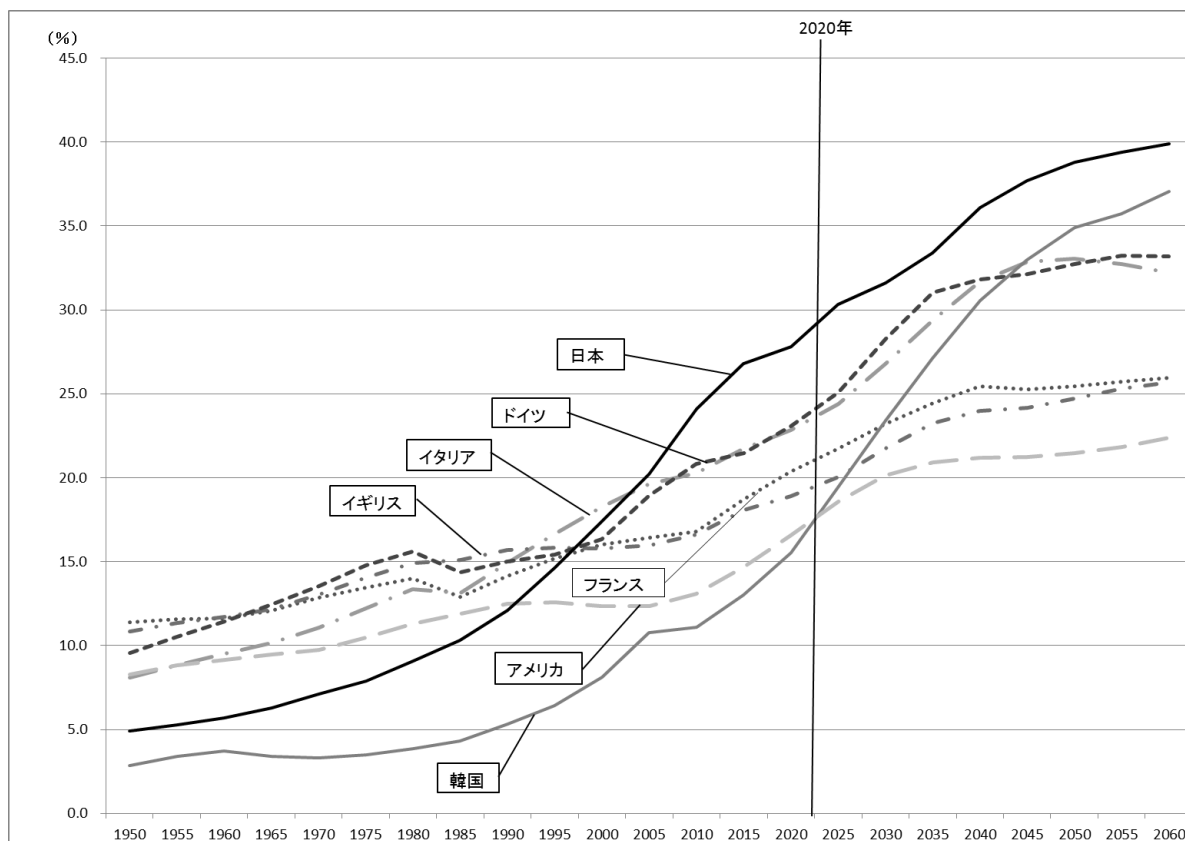


Figure 1-1-2 高齢化率の推移の国際比較

注)「人口推計」(総務省統計局, 2018)を参考に、我が国と関係の深い欧米、今後深刻な少子高齢化を迎える韓国については、国際連合の World Population Prospects : The 2018 Revision により、我が国については国立社会保障・人口問題研究所の出生中位、死亡中位仮定の予想値を用いて作成した。

## 第2節 我が国の高齢者犯罪の動向

### 1 犯罪の動向と特徴

Table 1-2-1 は、警察統計<sup>5</sup>において 1989 (平成元) 年から 2014 (平成 26) 年までの 25 年間における 65 歳以上の高齢者の一般刑法犯の罪名別・罪種別検挙人員について、1998 年を基準にして推移をみたものである。殺人 3.08 倍、強盗 14.50 倍、窃盗 7.50 倍、傷害 11.03 倍、暴行に至っては 71.75 倍など、強制性交・強制わいせつを含む全ての罪種において高齢化率の増加率を上回っている。特に、2012 年中における万引きの検挙人員は 65 歳以上が 28,673 人 (万引き検挙人員全体の 28.95%) で 19 歳以下の少年 25,649 人 (同 19.93%) を上回った。また、増加率も 7.20 倍と 65 歳以上の高齢者犯罪の中では万引き

3 前掲注 1, 6 頁。

4 前掲注 1, 6 頁。

5 『警察統計年鑑』(警察庁刑事局編, 1989~2014)。

の検挙人員が最も多く、増加率も高いことがわかる。年齢構成からすれば高齢者の検挙人員が増加するのは当然のように思われる。しかし、高齢化率は 1989 年からの 25 年間で約 2.31 倍になったのに対し、同期間における 65 歳以上の高齢者の一般刑法犯総検挙人員は約 7.85 倍で高齢化率をはるかに上回っている。また、同期間における年齢層別総検挙人員について 1989 年を基準として倍率を比較すると、20 歳から 25 歳までが 1.14 倍、25 歳から 29 歳までが 1.86 倍、30 歳から 39 歳までが 2.04 倍、40 歳から 49 歳までが 1.95 倍、50 歳から 59 歳までが 1.95 倍、60 歳から 64 歳までが 3.59 倍、65 から 69 歳が 5.63 倍、70 歳以上は 9.91 倍に上昇している。50 歳以上の年代層から検挙倍率が高くなる傾向にあるが、特に 65 歳以上の高齢者の上昇が著しい。これは、単に年齢が高くなると罪を犯す者が増加するという単純なことではないが、現在の高齢者の集団に問題があるのか、あるいは社会制度に問題があるのかは別としても、犯罪と年齢が何らかの問題を媒介として相関関係にあるということが考えられる。いわゆる団塊の世代が 75 歳以上の後期高齢者に仲間入りをし、今後ますます高齢化率が加速することを考えると、罪を犯す高齢者の問題解決に向けた取り組みは喫緊の課題である。

Table1-2-1 1989 年を基準とした 2014 年の総人口及び年代別検挙人員の増加倍率

年代/項目(25年間の倍率)	総人口	総検挙	殺人	強盗	傷害	暴行	窃盗	詐欺	乗物盗・占脱	万引き
14歳未満	0.71	0.34	1.00	1.13	1.16	1.87	0.27	0.41	0.21	0.31
14～19歳	0.60	0.37	0.35	0.48	0.31	0.43	0.24	1.61	0.18	0.25
20～24歳	0.70	1.14	0.37	1.42	0.48	1.53	1.33	2.27	0.61	1.26
25～29歳	0.84	1.86	0.62	1.85	0.84	2.29	2.40	2.81	0.77	1.57
30～39歳	0.92	2.04	0.61	2.21	1.14	3.16	2.80	1.92	0.70	1.54
40～49歳	0.95	1.95	0.56	2.22	1.12	3.57	2.82	1.28	0.57	1.57
50～59歳	0.99	1.95	0.61	2.49	1.73	6.21	2.07	1.49	0.80	1.42
60～64歳	1.37	3.59	2.09	5.71	4.83	19.04	3.31	2.62	2.04	2.30
65歳以上	2.31	7.85	3.08	14.50	11.03	71.75	7.50	5.93	4.22	7.20
うち65～69歳	1.87	5.63	5.57	10.00	9.67	55.85	5.02	5.11	3.21	3.90
うち70歳以上	2.53	9.91	3.41	36.00	12.62	92.19	9.70	7.36	5.18	10.09
総人口	1.03	1.15	0.70	1.47	0.81	2.67	1.05	1.84	0.36	0.93
65以上が占める割合(%)	25.88	13.28	18.30	11.25	13.56	26.84	15.44	3.22	11.64	30.07

注) 1989 年から 2014 年の内閣府統計及び警察統計を使用し、1989 年を基準として倍率を示した。

## 2 高齢犯罪者の処遇

「高齢者及び精神障害のある者の犯罪と処遇に関する研究」(法務総合研究所, 2017。以下「研究部報告 56」という。)によれば、高齢者の刑法犯起訴人員の増加傾向は、男女ともに見られる。2015 (平成 27) 年における全刑法犯起訴人員は 2008 (平成 18) 年のピーク時から約 30 ポイント減少したのに対し、高齢者のそれは最近 20 年間で一貫して上昇した。2015 (平成 27) 年の 65 歳から 69 歳の者及び 70 歳以上の者の刑法犯起訴人員は、1996 (平成 8) 年と比べると、それぞれ約 4.6 倍、約 11.6 倍 (高齢者全体では約 6.9 倍) に増加し、女性高齢者では、それぞれ約 11.1 倍、約 39.7 倍 (女性高齢者全体では約 21.0 倍) と大きく増加した<sup>6</sup>。特に、窃盗罪及び公務執行妨害罪に罰金刑が新設された 2006 (平成 18) 年には 5,577 人、翌 2007 (平成 19) 年には 6,584 人と、それぞれ 1,000 人規模で急増し、2015 (平成 27) 年には 9,045 人 (前年比 3.9%増) となり、2006 (平成 18) 年と比較して約 1.6 倍に増加した。刑法犯起訴人員に占める高齢者の比率は、1996 (平成 8) 年は 2.0%であったが、年々上昇し、2015 (平成 27) 年は 11.7%となり、女性のそれは 3.3%から 24.1%に上昇した。さらに、入所受刑者人員 (総数) は、1996 (平成 8) 年以

6 研究部報告 56『高齢者及び精神障害のある者の犯罪と処遇に関する研究』(法務省法務総合研究所, 2017) 6 頁。

降 2006（平成 18）年のピーク 3 万 3,032 人まで増加し続けた後、減少し続けている。一方、高齢入所受刑者人員は、1996（平成 8）年以降ほぼ一貫して増加し、2015（平成 27）年は 2,313 人（前年比 1.3%増）となり、2006（平成 18）年と比べて、22.9%増加した。女性の入所受刑者人員は、1996（平成 8）年以降 2006（平成 18）年の 2,333 人まで増加し続けた後、若干減少しつつも高止まり状況にあるが、女性の高齢入所受刑者は、2006（平成 18）年の 177 人から 2015（平成 27）年には 319 人（前年比 8.1%増）へと、約 1.8 倍に増加した。特に、70 歳以上の女性は、同期間において、89 人から 181 人（前年比 19.2%減）へと、約 2 倍に増加し、2010（平成 22）年以降は 65 歳から 69 歳の女性の人員を上回った。2015（平成 27）年の高齢入所受刑者人員は、2006（平成 8）年と比べると、総数で約 4.5 倍に増加し、女性では約 9.4 倍に、そのうち 70 歳以上の女性は約 15.1 倍に激増した。また、罪名別構成比は、男女ともに年齢層が高くなるにつれ、窃盗の割合が高くなる。女性は、その傾向が顕著であり、65 歳未満の者では、覚醒剤取締法違反が 45.3%と、窃盗（34.9%）より高いが、高齢者では、窃盗が 65 歳から 69 歳の者で 78.3%、70 歳以上の者で 86.7%を占めている<sup>7</sup>。

### 3 諸外国との比較

平成 20 年版犯罪白書では「諸外国における高齢者犯罪の動向と処遇」という章を設け、法制度や統計手法の違いから一様に比較はできないとしながら、韓国、フランス、ドイツ、イタリア、スウェーデン、イギリス及びアメリカの 7 か国と我が国における高齢者犯罪の比較を試みた。それによれば、2006 年の検挙人員の高齢者比は、我が国が 24.9%で最も高いが、2006 年と 1996 年の高齢者比を比較すると、2006 年は 1996 年に対し、韓国が約 1.8 倍、ドイツが約 1.2 倍、米国が約 1.0 倍、我が国が約 1.9 倍となった。各国の 2006 年と 1996 年の検挙人員の高齢人口比を比べると、2006 年は 1996 年の、韓国が約 1.8 倍、ドイツが約 1.1 倍、米国が約 0.7 倍、我が国が約 2.4 倍であった<sup>8</sup>。我が国の検挙人員の高齢人口比の伸びが最も高いとされ、上記 7 か国と比較して高齢者 10 万人当たりの検挙人員の倍率が高齢化率を上回るのは、我が国のみであることがわかる。太田（2009）は、海外にもスウェーデンやドイツ、アメリカ、韓国など高齢化の著しい国があるが、高齢化率にしても、高齢者の犯罪率にしても、我が国よりもはるかに低い。各国の統計は簡単に比較することはできないし、そもそもドイツや韓国は日本よりもはるかに犯罪率が高く、高齢者の犯罪率も高いが、日本における高齢者犯罪の増加は世界的にも特異な状況であることが分かると述べた<sup>9</sup>。

---

<sup>7</sup> 前掲注 6, 6-7 頁。

<sup>8</sup> 『平成 20 年版犯罪白書～高齢犯罪者の実態と処遇～』（法務総合研究所, 2009）326-336 頁。

<sup>9</sup> 太田達也「高齢者犯罪の実態と対策」警察政策 11 巻（2009）128 頁。

### 第3節 再犯防止対策と高齢犯罪者との関係

「再犯防止に関する研究」(法務総合研究所, 2007。以下「研究部報告 42」という。)は、1948(昭和 23)年から 2006(平成 18)年 9 月 30 日までの間に確定した(刑法上の過失犯及び危険運転致死傷罪並びに道路交通を除く。)犯歴 100 万人及び再犯者に限定した犯歴 50 万人を無作為に抽出し、これらを対象として、再犯の全体像や経年による再犯の傾向の変化等を分析した。その結果、約 30%の再犯者によって、約 60%の犯罪が行われているという事実を明らかにした<sup>10</sup>。また、多数回の犯歴を持つ者ほど、犯歴の件数全体の増加要因になっており高齢者の場合、他の年齢層と比べて、6 月を超え 1 年以内の期間に再犯を犯す者の比率が 31.1%と際立って高く、6 月以内の者も併せると、約半数の者が 1 年以内の期間に再犯を犯していることも明らかにした<sup>11</sup>。2009(平成 21)年に、高齢又は障害を有する刑事施設入所者等であって、かつ、適当な帰住予定地が確保されていない者を対象として、保護観察所長が特別の手續きに基づき、帰住予定地の確保その他必要な生活環境の整備を行う「地域生活定着支援事業」が厚生労働省と法務省のモデル事業として始まり、2012(平成 24)年 3 月にすべての都道府県に「地域生活定着センター」が設置された。同年 7 月、犯罪対策閣僚会議は「再犯防止に向けた総合対策」を発表した。その中で、高齢者については、その再犯期間が短いことに注目し、刑務所から出た直後の指導・支援を強化するとともに、刑務所収容中、福祉や年金に関する基礎的知識の付与、対人スキルの向上等、出所後の生活へのスムーズな適応を目指した指導を充実すると述べ、いわゆる「出口支援」対策を強く打ち出した。さらに、複数の地方検察庁では、福祉や精神福祉の専門家を常駐させ、検察官の相談に応じるなど、いわゆる「入口支援」対策を進めている。また、東京地方検察庁に社会福祉士が配置され、起訴猶予対象者を福祉へつなぐ業務が行われ始め、他の地方検察庁にも拡大している。さらに、2013(平成 25)年 10 月からは、検察庁と保護観察所との連携による更生緊急保護事前調整モデルが施行された。2014(平成 26)年の犯罪対策閣僚会議では、「宣言：犯罪に戻らない、戻さない」を決定し、国の使命として、2020 年オリンピック・パラリンピック東京大会を控え、世界一安全な日本を創ること及び犯罪・非行の繰り返しを食い止め、安全・安心に暮らせる社会を構築することを宣言した。

一方、「高齢犯罪者の実態と意識に関する研究—高齢受刑者及び高齢保護観察対象者の分析—」(法務総合研究所, 2007。以下「研究部報告 37」という。)は、高齢者は刑事施設への入所回数が増加するにつれ、罪名が窃盗(万引きや自転車盗など軽微なもの)と詐欺(無銭飲食などの軽微なもの)に集約されていく傾向にあることを明らかにした<sup>12</sup>。また、入所回数が増えるにしたがって再犯期間が次第に短くなり、入所回数が 20 度以上の者では、窃盗と詐欺の合計で約 8 割を占め、出所後 3 か月未満で刑務所に再入所した者が約半数を占めているとした<sup>13</sup>。また、平成 20 年版犯罪白書は、窃盗は年齢層が上がるほど、盗犯等の防止及び処分に関する法律による加重類型(常習累犯窃盗及び常習特殊窃盗)の占

<sup>10</sup> 研究部報告 42「再犯防止に関する研究」(法務総合研究所, 2007) 222 頁。

<sup>11</sup> 前掲注 10, 235 頁。

<sup>12</sup> 研究報告 37『高齢犯罪者の実態と意識に関する研究—高齢受刑者及び高齢保護観察対象者の分析—』(法務総合研究所, 2007) 45 頁。

<sup>13</sup> 前掲注 12, 32 頁。

める割合が顕著であり、高齢者層では 31.5%を同類型が占めていることを指摘した<sup>14</sup>。また、研究部報告 56 は、高齢再入者に対する特別調査を行った。その結果、犯行の動機は、約半数が生活困窮等であり出所後の自立が困難な状況が伺われる一方、盗み癖、自己使用・消費目的、節約目的等もそれぞれ半数ないし 3 分の 1 を占めたことを報告した<sup>15</sup>。平成 20 年版犯罪白書は「原因の徹底的な解明なくして、有効な対策を立てることなどできるはずがない。」「高齢者犯罪の研究は、このような健全な高齢社会の実現ため必要不可欠な社会科学的作業と評するとすることができるものであると考えている。」と述べた<sup>16</sup>。

#### 第 4 節 高齢者の犯罪行動の原因や犯罪からの離脱・立直りに関する研究の問題点

本節では、まず、高齢者の特性を理解するため、老年学、心理学、社会学の各領域の知見を概観する。その後、高齢者の犯罪行動の原因に関する問題点、再犯防止や犯罪からの離脱・立直りに関する問題点について検討する。

##### 1 高齢者の特性

マリンチャック (Malinchak, 1980 = 辻本・西村, 1983) は、犯罪と老年学を研究する理由について、無知と無策のゆえに回避してきた<sup>17</sup>ことにあるとし、被害者としての老人、犯罪防止プログラムの対象としての老人、刑事司法制度においてボランティアとして働く老人、犯罪者としての老人という 4 つの概念的枠組みを示した<sup>18</sup>。そして、犯罪者としての老人の犯罪原因を主に異質的接触理論、緊張理論、葛藤理論、ラベリング理論という犯罪学及び離脱理論・活動理論という老年学に基づいて検討した。その結果、高齢者を犯罪に走らせてしまう原因について、地位・役割の喪失、金銭的自立の喪失に直面し、自己実現を拒否されたときの欲求不満及び孤独を環境要因としてあげた。そして、高齢の犯罪者とは、社会的規範、社会慣習を大部分、自分に内面化してきたが、晩年に至り「黄金の時代」に適応し、生を全うするためにこれまでの内面化された道徳や法規範から自分を解放した者であると結論付けた<sup>19</sup>。さらに、刑事司法の問題点は、犯罪は決して根絶できず、ただ抑止するだけであるということ認めないことだと主張した<sup>20</sup>。

##### (1) 老年学の視点

人は、一般的に加齢とともに肉体や精神が衰える。したがって、ほとんどの老年学研究者が加齢による体力、認知能力、感覚、精神運動などの低下という問題を取り上げている。アシュリーとバル (Atchley & Barusch, 2004 = 宮内, 2005) は、ジェロントロジーとはエイジングを生物学、心理学、社会心理学、社会学という 4 つの視点から理解するために

<sup>14</sup> 前掲注 8, 246 頁。

<sup>15</sup> 前掲注 6, 172 頁。

<sup>16</sup> 前掲注 8, 221 頁。

<sup>17</sup> マリンチャック (著) (辻本義男・西村春夫 訳)『老人と犯罪—せまりくる高齢化社会のために—』(成文堂, 1983) 3 頁。

<sup>18</sup> 辻本ほか・前掲注 17, 15 頁。

<sup>19</sup> 辻本ほか・前掲注 17, 242 頁。

<sup>20</sup> 辻本ほか・前掲注 17, 1 頁。

必要な根拠をもつことであるとした。そして、エイジングによる変化を、加齢効果、年齢効果、時代効果の3つの概念から考察すべきであると主張した<sup>21</sup>。老年学の諸理論では、個人が年をとることに対してどのように適応するかという離脱理論、活動理論及び継続性理論が有名である。「離脱理論」とは、高齢者は、自然のなりゆきとして若者の仕事を奪わないように自ら所属する社会システムを維持するために社会的役割から離脱すべきだとする考え方<sup>22</sup>に基づく。「活動理論」とは、中年期の活動や態度を可能な限り長期にわたって維持すべきだとする考え方<sup>23</sup>に基づく。「継続性理論」は、自らの認識と社会環境からの圧力から、高齢者は、内的継続性と外的継続性に向かって動機づけられ、継続性を維持したいという気持ちになるのだとする考え方<sup>24</sup>である。ハビガーストほか（Havighurst, Neugarten & Tobin, 1968）は、離脱と活動、そして、生活満足の関係を分析した結果、離脱理論で説明できる部分も説明できない部分もあれば、活動理論で説明できる部分もできない部分もあり、離脱理論も活動理論も、それ独自では現実の多様な加齢パターンを説明できないからともに大きな修正を必要とすると主張した。そして、その修正の方向として、高齢期の多様な生活様式を説明する重要な次元として個人のパーソナリティに注目することを提案した<sup>25</sup>。

小田（2004）は、老年学の研究が適応研究から始まったのは、初期の社会老年学者の多くが理論的なよりどころにしていたのが社会心理学における象徴的相互作用論であったからだと主張する<sup>26</sup>。また、離脱理論、活動理論、継続性理論という3つの理論に共通することは、離脱理論の提唱者であるカミングとヘンリーも、それを活動理論の観点から批判、検証したハビガースト・ニューガートン・トビンもシカゴ大学人間発達委員会が実施したThe Kansas City Studies of Adult Lifeの中心メンバーであり、継続性理論も、この研究から発展させられた社会心理学的適応理論であったとする<sup>27</sup>。また、小田（2004）は、離脱理論は65歳以上の人口が9%程度であったアメリカで発達した理論であり、現在では妥当性を否定されているとする。そして、活動理論は、活動の質やタイプ、水準について更に検討が必要である。継続性理論は、いまなお生成途上の理論であるが、ライフ・コース理論や年齢階層理論などと接合させることによってミクロ理論からミクロ-マクロ連続理論に発展させることが可能ではないかと考えると主張した<sup>28</sup>。最近では、カーステンセンほか（Carstensen et al., 1999）がそれまでの理論に対する批判を踏まえ、高齢者の行動に強く影響する要因は高齢という単なる年齢的な事実ではなく、自分の人生に残された時間の捉え方よるという社会情動的選択理論を提唱した<sup>29</sup>。渡部・澁谷（2010）は、社会情

---

<sup>21</sup> アシュレイ・バル（著）（ニッセイ基礎研究所ジェロントロジーフォーラム 監訳）（宮内康二 編訳）『ジェロントロジー：加齢の価値と社会の力学』（きんざい, 2005）3-5 頁。

<sup>22</sup> Cumming, E., & Henry, W. H. (1961). *Growing Old: The Process of Disengagement*. New York: Basic Books.

<sup>23</sup> Atchley, R. C. (1989). A Continuity Theory of Normal Aging. *The Gerontologist*, 29(2), 183-190.

<sup>24</sup> Havighurst, R. J. (1961). Successful Aging. *The Gerontologist*, 1, 8-13.

<sup>25</sup> Havighurst, R. J., Neugarten B. L., & Tobin, S. S. (1968). *Disengagement and Pattern of Aging*. In Neugarten B. L. ed. *Middle Age and Aging*. University of Chicago Press.

<sup>26</sup> 小田利勝「社会老年学における適応理論再考」神戸大学発達科学部紀要 11 巻 2 号（2004）155 頁。

<sup>27</sup> 小田・前掲注 26, 156 頁。

<sup>28</sup> 小田・前掲注 26, 168 頁。

<sup>29</sup> Carstensen, L. L., & Isaacowitz, D. M., & Charles, S. T. (1999). Taking time seriously: A theory of socioemotional selectivity. *American Psychologist*, 54(3), 165-181.

動的選択理論に基づいて、振り込め詐欺に遭いやすい高齢者の研究を行った。その結果、行動が積極的で失敗に対する不安が低い高齢女性は詐欺犯罪被害傾向が高いと主張した<sup>30</sup>。我が国における最近の老年学研究としては、橋本・厚海（2015）は、自宅外で行う多彩な余暇活動に取り組むことが主観的幸福感を高める上で有効であること及び経済状況満足度や余暇活動に対する総合的な満足度も主観的幸福感に対して影響を持つとした。そして、余暇時間を過ごす上での自身の状況評価として、健康状況や一緒に活動する仲間の存在が満足な余暇活動の実施のために重要な要素であると主張した<sup>31</sup>。また、西村ほか（2016）は、下町に居住する高齢者の生活満足度を規定する要因は、社会的孤立度であるとした。そして、社会的孤立は、表面的・形式的な付き合いだけではなく、地域で個人的に相互関係が持てる友達を作ることによって改善され得ると主張した<sup>32</sup>。一方、ウルズラ（Ursula, 1987 = 滝川, 1991）は、高齢者の社会的な接触の範囲が狭いのは、高齢者の能力を社会の利便性が奪った結果だとした<sup>33</sup>。また、孤独と孤立の概念の違いについて明確にした上、マスメディアや国民によって孤立した老人像がつくられているとして、高齢者に対するステレオタイプに対して強く批判した<sup>34</sup>。ただし、より一層重要な点は、高齢者自身の精神的怠惰であると主張した<sup>35</sup>。さらに、高齢者が問題とみなされるような状態になるのは、本人が高齢になる前に準備を怠った自己責任であること及び自ら積極的に高齢者の仲間入りをしようとする人々の存在を厳しく批判し、社会構造にのみ責任を転嫁すべきでないことを強調した<sup>36</sup>。ただし、高齢になるほど、その人が築いてきた学歴、社会経済的地位、生活環境、あるいは遺伝（病気、パーソナリティ）が現在ある状況に影響を及ぼし、その格差が大きくなる。その人が持つスキルが高いほど老いの程度は低く、都会に居住している高齢者は地方に居住している高齢者に比べ老いの程度が低いという相関関係にあると主張した<sup>37</sup>。しかしながら「老年学」は、あくまでサクセスフル・エイジングやウェル・ビーイングを追及した学問である<sup>38</sup>から、加齢と犯罪行動に関するようなネガティブな研究はなされていない。古川（2014）も、現実のところ、高齢犯罪者のみを他の年齢層と比較して対象化していくことはできそうもないと述べている<sup>39</sup>。

<sup>30</sup> 渡部 諭・澁谷康秀「犯罪被害に遭いやすい高齢者の認知バイアス—高齢者はなぜ犯罪に狙われやすいのか—」社会安全研究財団 2010 年一般研究助成最終報告書（2010）21 頁。

<sup>31</sup> 橋本成仁・厚海尚哉「高齢者の余暇活動と主観的幸福感に関する研究」土木学会論文集 D3（土木計画学）71 巻 5 号、土木計画学研究・論文集 32 号（2015）574 頁。

<sup>32</sup> 西村茉桜・橋口美香・川村和史・平野裕子「T 町在住の高齢者の生活満足度を規定する要因」保健学研究 28 号（2016）17 頁。

<sup>33</sup> ウルズラ（著）（滝川昇 訳）『老いの心理学』（六法出版社, 1991）283 頁。

<sup>34</sup> 滝川・前掲注 33, 283・297 頁。

<sup>35</sup> 滝川・前掲注 33, 359 頁。

<sup>36</sup> 滝川・前掲注 33, 360 頁。

<sup>37</sup> 滝川・前掲注 33, 363 頁。

<sup>38</sup> NPO 法人生活・福祉環境づくり 21・日本応用老年学会『ニッポンのネクストステージ高齢社会の「生・活」事典—「生・活」知識検定試験公式テキスト—』（社会保険出版社, 2011）40 頁。

<sup>39</sup> 古川 隆司「社会福祉・老年学からみた高齢者犯罪（特集 高齢者犯罪対策）—（社会安全フォーラム高齢者犯罪の実態と対策）」警察学論集 67 巻 6 号（2014）19 頁。



## (2) 心理学の視点

生涯発達という観点から、幼児や児童期における人格の発達段階に焦点を当てた代表的な理論としてはフロイト (Froud S.) の精神分析論<sup>40</sup>が挙げられる。ただし、下仲 (2012) は、フロイトについて、青年期 (性器期) で発達は最終段階を迎え、その後の中年期、高齢期は形成された人格の総仕上げか、その特徴がさらに固定化する時期ぐらいにしか考えていなかったと指摘した<sup>41</sup>。その後、ユング (Jung, 1960) やエリクソン (Erikson, 1959)、レヴィンソン (Levinson, 1978 = 南, 1980) らは、人格はライフサイクルを通して段階的に発達するという立場で研究成果を発表した<sup>42,43,44</sup>。ただし、下仲 (2012) は、ユングは中年期の人格発達に注目したが、最後の高齢期については、児童期と同じく他者への完全依存の時期であり、問題のない時期と見ていたと批判した<sup>45</sup>。また、レヴィンソン (Levinson, 1978 = 南, 1980) は、自身が研究当時 45 歳であったことから、35 歳から 45 歳までの 40 人の男性を対象に面接法から個人史を作成し、それに基づいて成人前期 (17 歳から 40 歳)、中年期 (40 歳から 60 歳) のそれぞれに発達期 (安定期) と前後の期の橋渡しをするために 5 年程度の過渡期があると述べた。そして、過渡期の最も基本的な問題は、次の新しい生活構造を作り上げられるように現在の生活構造を見直し、修正することである。ただし、各時期の課題によってしばしば危機に陥り、深刻な内面的葛藤が生じやすいと主張した<sup>46</sup>。さらに、このライフサイクル論を完全なものとするために、高齢期 (60 歳以上) と晩年期 (80 歳以上) の暫定的な見解を提唱した。なぜ、暫定的かということ、自分が経験していない年齢のことについては理解できないからであると述べた<sup>47</sup>。レヴィンソンは、高齢期の発達課題は社会から報いられることに関心を示すよりも自分の内面的資質を活用することに関心を増す。また、自分の人生、それは完全無欠ではなかったとしてもそれを受け入れることが重要となるという仮説を提唱した<sup>48</sup>。一方、エリクソン (Erikson, 1959) は、人の生涯は出生から死に至るまで各々新しい成長の可能性を持った段階の連続であるとみなし、生涯に 8 つの発達段階を仮定したライフ・コース理論を構築した<sup>49</sup>。各段階では違った重要な発達課題があり、それを達成した場合と達成できなかった場合の心理状態を仮定し、課題を達成できなかった場合の絶望を「アイデンティティの拡散」と呼んだ<sup>50</sup>。高齢期は、人生最後の段階で 65 歳前後から始まるとされ、この時期での重要な課題と達成できなかった場合の危機は「統合対絶望」であるとした。そして、これまで生きてきた人生全体について、それがたとえ完璧な人生でなくてもその人生に意義と価値を見出すことができれば高齢期を絶望感や苦しさを味わわずに過ごすことができ、死の訪れを受容するこ

40 クインダス (著) (福本修 監訳) 『フロイトを読む一年代順に紐解くフロイト著作一』 (岩崎学術出版社, 2013)。

41 下仲順子 『老年心理学』 (培風館, 2012) 89-90 頁。

42 ストー (著) (山中康弘 監訳) (皆藤 章・川崎克哲・菅野信夫・濱野清志 訳) 『エッセンシャル・ユングーユングが語るユング心理学一』 (創元社, 1997) 214 頁。

43 エリクソン (著) (小此木啓吾 編訳) (小川攪之・岩男寿美子 訳) 『自我同一性ーアイデンティティとライフサイクルー』 (誠信書房, 1980) 55 頁。

44 レヴィンソン (著) (南 博 訳) 『ライフサイクルの心理学 (上)』 (講談社学術文庫, 1992) 25 頁。

45 下仲・前掲注 41, 90 頁。

46 南・前掲注 44, 48-49 頁。

47 南・前掲注 44, 72-73 頁。

48 南・前掲注 44, 77-80 頁。

49 小此木ほか・前掲注 43, 157-160 頁。

50 小此木ほか・前掲注 43, 114 頁。

とができる。しかし、統合に失敗した者は、もう人生をやり直すことができないという絶望の淵に立たされてしまうと主張した<sup>51</sup>。エリクソン（Erickson, 1982）は晩年、著書「ライフサイクル、その完結」において、人生には第9段階があって再び最初の段階に回帰し、前段階のアイテムを後の段階に相応しい形に焼き直す発達のための退行が生じると仮定した<sup>52</sup>。これは、年齢に特有の葛藤を解決するための試みであると述べた。この考えを表した理由は、8つの段階を考えたのは自身が中年期であり、自身を真に老いた者として想像してみる気持ちもなければ、その能力もなかったからであり、自身が80歳になった現在、発達というものの全ての歴史的相対性を考え直した結果であるとした<sup>53</sup>。

### （3）社会学の視点

第1に、コホートの問題である。中尾（2014）は、1940年から46年の間に出生したコホートを問題にした<sup>54</sup>。確かに、このコホートは戦後動乱期に感受性豊かな年齢であり、少年犯罪の第1次ピーク時を形成した。また、2000年ころに年金受給者となり、その頃から高齢者犯罪が増加した。したがって、このコホートに問題があることは否定できない。第2に、「孤独」、「孤立」という問題が挙げられる。平成28年版高齢社会白書（内閣府, 2016）によれば、高齢者のいる世帯構成は単独世帯が増加傾向にあり、2014（平成26）年では約25%を占めている。近所の人との付き合いについて、相談する／される、病気の時に助け合うと回答する割合が、調査対象国のなかで低い水準となっており、さらには家族以外の人で、相談や互いに世話をし合ったりする友人がいない割合は高い水準となっている<sup>55</sup>。第3に、「生活困窮」という問題が挙げられる。前掲同白書によれば、経済的な意味で、日々の暮らしに困ることがあるか尋ねたところ、経済的に困っていない高齢者の割合（「困っていない」と「あまり困っていない」の計）は、スウェーデンが87.3%で最も多く、日本77.5%、ドイツ77.0%、アメリカ68.3%と続いている<sup>56</sup>。橘木（2016）は、高齢者間の格差について、高齢者の経済格差を生む最大の要因は、高齢になる前にどれだけ教育を受けるかに始まって、どういう職業で、どこで働くかが賃金や所得を決め、消費・貯蓄で代表されるような生活のあり方などが高齢者の年金に代表されるような所得、そして何よりも重要なのは資産の額を決めるのである。さらに強調すべきことは、親の世代からどれだけの額の遺産を受領するのか、あるいはしないのかも決定的な影響力がある。…夫婦ともに健康であれば問題は少ないが、どちらかが死亡して高齢単身者になったとき、生活苦、看護、介護、一人暮らしの寂しさなどで、困難が一挙に押し寄せると述べた<sup>57</sup>。さらに、このような困難を生んだ要因として、人口の年齢構成の変化は国民が低出生率を選択した結果のことなので、いかに子供を育てる環境が社会の中に整っていないとしても、国民全体でその責任を負わなければならないと述べ、政府と同じだけ国民にも責任があることを

<sup>51</sup> 小此木ほか・前掲注43, 123-124頁。

<sup>52</sup> エリクソン（著）（村瀬孝雄・近藤邦夫 訳）『ライフサイクル：その完結』（みすず書房, 1989）81頁。

<sup>53</sup> 村瀬ほか・前掲注52, 148頁。

<sup>54</sup> 中尾暢美「激増する高齢者犯罪」専修人間科学論集 社会学編4（2）（2014）101-117頁。

<sup>55</sup> 『平成28年版高齢社会白書』（内閣府, 2016）63頁。

<sup>56</sup> 内閣府・前掲注55, 64頁。

<sup>57</sup> 橘木俊昭『21世紀日本の格差』（岩波書店, 2016）186-190頁。

指摘した<sup>58</sup>。

このように老年学においても社会学的視点があり、時代的背景として象徴的相互作用論の影響を受けてきたことがわかる。そして、同じ研究で同じデータを用いても異なった結論が導き出されるが、研究に携わった研究者同士で議論ができていたので、最終的には、いずれの結論も完全ではないとされている。心理学においては、著名な研究者であっても、自分自身がその年齢に至らなければ思い至らないことがあることを認め、理論の修正を行っている。

## 2 高齢者の犯罪行動の原因に関する問題点

### (1) 高齢者の犯罪行動全般

太田（2006）は、万引きを含む軽微な窃盗を犯す要因と高齢者が犯罪を行う要因では、生活困窮と社会的孤立、精神的負担という共通の要因が確認できると述べた<sup>59</sup>。また、細井ほか（2014）は、刑事施設の協力によって得た高齢受刑者に対する調査アンケートと元当事者が運営する NPO の協力で得た高齢受刑者に対する自由記入のアンケートを基に質的統計分析を行った。その結果、犯罪の原因は「物欲・金銭欲」であったとした<sup>60</sup>。また、ニュージーランドとの比較において、ニュージーランドの高齢受刑者は、我が国の高齢受刑者と比較して他者志向であり、前向きであることを明らかにした<sup>61</sup>。さらに、藤野（2016）は、女性高齢財産犯について、1）窃盗の場面構造からの分析、2）類型論的考察、3）社会的要因と個人的要因からの考察、4）精神病理的側面からの考察など多方面の知見から検討した。その結果、盗る行為は、犯罪文化に接することなく、また、さほどエネルギーを使うことなく行える犯罪形態であるとした。そして、モノ・金は人と違って逆らわないし、盗ったという入手過程を切り離してとらえられればモノ・金自体はなんら変わらないため、獲得できたモノ・金に満足感や高揚感を抱くことができる。また、その窃取過程でも達成感を得られるなど、情動発散が図られやすいものであり、実際、いずれの事例にも経済的意味合い以外のものを見て取れると主張した<sup>62</sup>。

一方、高齢者犯罪の研究動向をレビューした古川（2016）は、高齢者の犯罪ないし高齢犯罪者への関心は近年高まっている反面、近年まで研究対象へのアプローチは法務省等のデータに依存せざるを得なかったことも影響し、これに関する調査研究はまだ途上と考えられるとした。そして、海外では 1980 年台後半からイギリス・アメリカで論文や文献刊行が始まり、約 10 年後、国内でも犯罪白書や専門誌の特集を中心に犯罪関連学会で論文等が増えたが、演繹的な理論モデルはいまだに存在しない。そして、単なる処遇・実践の

---

<sup>58</sup> 橘木・前掲注 57, 75-82 頁。

<sup>59</sup> 太田達也「高齢者犯罪の動向と刑事政策的対応—研究序章—」罪と罰 43(4) (2008) 10-14 頁。

<sup>60</sup> 細井洋子・小柳 武・渡辺 芳・古川隆司・Pratt, J.『高齢受刑者の生活キャリアと生活環境の変遷』（2014 年度科研費一般報告, 2014）5 頁。

<sup>61</sup> 細井ほか・前掲注 60, 24 頁。

<sup>62</sup> 藤野京子「女性高齢財産犯の実情」早稲田大学大学院文学研究科紀要第 1 分冊 哲学/東洋哲学/心理学社会学/教育学 61 (2016) 5-20 頁。

具体的「紹介」ではなく、また良貨を駆逐しないことが望まれると主張した<sup>63</sup>。また、川上（2018）は、我が国の高齢者犯罪の特異性について、アメリカの高齢犯罪者と比較した。アメリカにおいては、我が国ほど急激ではないものの、高齢者の犯罪が増加する一方、矯正施設に収容されている高齢受刑者数においては激増し、深刻な社会問題となっている。そしてアメリカでは、こうした高齢受刑者の処遇に関して近年数多くの研究が行われている。しかし、高齢になってから軽微な犯罪に手を染める者が多くを占める我が国の高齢者犯罪の状況は、諸外国と比較しても非常に特異なものであるといえると主張した<sup>64</sup>。川上が主張するように諸外国と比較して特異な状況であるにもかかわらず、我が国の高齢者犯罪行動の研究は、古川（2016）が指摘したとおりに、社会学的、刑事政策的な視点からの経験論的なものがほとんどである。

## （2）高齢者の万引きに関する研究

堀田・湯原（2010）は、国内外ともに高齢者の万引きに関する実証研究が少ないことを指摘した<sup>65</sup>。わが国における最大規模の調査は、太田（2009, 2014）が2005年から07年に警察庁と共同で行ったものである。その結果、65歳以上の高齢刑法犯検挙人員のうち3分の2は高齢になってから初めて検挙された高齢初犯者であり、高齢期以前から複数の検挙歴がある早期累犯者の割合は21%であったと報告した<sup>66</sup>。そして、経済的問題や福祉的問題も無縁とは思われないが、社会的孤立がそれらの要因と重なることで高齢犯罪が起きやすくなるのではないかと主張した<sup>67</sup>。

全国都道府県警察においては、岩手県警と岩手県立大学の「いわて地域犯罪防止研究調査会（ICPR）」（2008）<sup>68</sup>、警視庁と学識経験者の『「万引きをしない・させない」社会環境づくりと規範意識の醸成に関する調査研究委員会』（2009）<sup>69</sup>、北海道警と北海道大学の「犯罪脆弱者対策研究委員会」（2011）<sup>70</sup>、警視庁と学識経験者、各種団体代表者等の「東京万引き防止官民合同会議」（2012）<sup>71</sup>、香川県警察と香川大学の「万引き防止対策に関する調査と社会的実践」（大久保・時岡・岡田，2013）<sup>72</sup>など地元の大学や有識者と連携した研究を行って成果を発表した。これらの研究で動機や背景として明らかにされたことは、主に生活困窮や希薄な人間関係といった社会的要因であった。

一方、国外では、バービンほか（Babin, B. J., & Babin, L. A., 1996）は、万引きを企図

<sup>63</sup> 古川隆司「高齢者犯罪に関する研究動向」犯罪社会学研究 41（2016）98-103頁。

<sup>64</sup> 川上麻由「我が国における高齢者犯罪の特異性について－米国における高齢者犯罪研究からの一考察－」中央大学大学院研究年報 47（2018）132頁。

<sup>65</sup> 堀田利恵・湯原悦子「高齢になって初めて犯罪に手を染めた女性犯罪者に関する研究（総説）」日本福祉大学社会福祉論集 123（2010）81頁。

<sup>66</sup> 太田達也「高齢者犯罪の対策と予防－高齢犯罪者の特性と警察での対応を中心に－」警察学論集 67(6)（2009）5頁。

<sup>67</sup> 太田・前掲注 66, 8頁。

<sup>68</sup> いわて地域犯罪防止研究調査会（ICPR）『犯罪の加害者となる高齢者に関する調査・研究』（岩手県立大学社会福祉学部細江研究室, 1999）。

<sup>69</sup> 「万引きをしない・させない」社会環境づくりと規範意識の醸成に関する調査研究委員会『万引きに関する調査研究報告書』『万引きをしない・させない」社会環境づくりと規範意識の醸成に関する調査研究委員会, 2009）。

<sup>70</sup> 北海道警察犯罪脆弱者対策研究委員会『犯罪脆弱者調査最終報告書－犯罪を起こさない、起こさせない社会環境を目指して－』（北海道警察犯罪脆弱者対策研究委員会, 2011）。

<sup>71</sup> 東京万引き防止官民合同会議『万引きに関する調査研究報告書』（東京万引き防止官民合同会議事務局, 2011）。

<sup>72</sup> 大久保智生・時岡晴美・岡田涼『万引き防止対策に関する調査と社会的実践』（ナカニシヤ出版, 2013）。

する消費者の情動に関する道徳的認知の効果を研究した。調査対象は、ミシシッピ州の高校生 49 人（平均年齢 16 歳、レンジ 15-18 歳）、大学生 65 人（平均年齢 22 歳、レンジ 20-23 歳）、成人 54 人（平均年齢 41 歳、レンジ 30-60 歳）である。約 15 人ずつのグループで、万引きのシナリオを読ませ、匿名で質問紙調査に回答を得た。シナリオを読んだ回答者の反応が万引き行為の方へどれくらい有利又は不利に傾くかについて 6 件法のリッカート形式で回答を得た。また、回答者の道徳的・倫理的な信念を **Moral equity**（5 項目）、**Contracutationalism**（3 項目）、**Relativism**（3 項目）から構成された多次元倫理判定尺度（**MEJS**）（Reidenbach et al., 1991）を用いて収集した。万引き行為に対する「態度」と「動機」を従属変数として二項回帰分析を行った結果、1）「年齢」と「情動」の間に交互作用が認められ、「情動」が大学生や成人よりも少年において最も重要な説明変数である。2）万引きという異常な消費者行動は「情動」を考慮しなければならない。3）万引きは、年齢層によって異なる意思決定の性質があることをそれぞれ確認した<sup>73</sup>。

ブランコほか（Blanco, Grant, Petry, Simpson, Alegria, Liu, & Hasin, 2008）は、アメリカの成人の一生涯における万引きの傾向と病気との相関に関する研究を行った。調査は、2001 年から 2002 年の間に行われ、18 歳から既婚高齢者まで 43,000 人以上の住民を対象とした。面接調査を行い「アルコール中毒・対人障害面接 **DSM-IV** 尺度」をベースとして、情動、不安そして薬物障害とパーソナリティ障害について分析した。その結果、一生涯に万引き経験のあるアメリカ国民は約 10%であった。また、万引きと精神疾患との間に強い関連性も発見された<sup>74</sup>。ブランコほか（Blanco et al., 2008）は、万引きと最も強力な関連は、突発的衝動制御不全障害、反社会的パーソナリティ障害、薬物依存、ギャンブル依存、そして分裂障害である。万引きは、比較的ありふれた行動であるが、万引きの歴史は、精神保健サービスの利用と心理学的な悪化という障害の合併症の割合とかなり関連していると主張した<sup>75</sup>。

イーガン・テイラー（Egan & Taylor, 2010）は、114 人の買い物客の被験者に対し、性格、不正な消費者行動（**UCB**）、万引きに対する態度の測定を実施した。その結果、情緒安定性（**ES**）が低く、外向性が高い（**E**）、共感性（**A**）、良心性（**C**）及び知性（**I**）が低い人は、**UCB**と万引きをより説明した。万引きと **UCB** に対する態度はどちらも、**C** の低下、**A** の低下、**I** の低下、**ES** の上昇によって最もよく予測された。構造方程式モデルは、不正な消費者行動という潜在変数が低 **A** と低 **C** によって予測され、**E** と若年齢が **UCB** だけを予測することを発見した<sup>76</sup>。これらの結果は、**UCB** が一過性の日和見主義を反映しており、成熟と教育によって低下する可能性があることを示しているが、不正な消費者行動には反社会的傾向の一般的な予測因子が含まれる。ただし、法医学研究で最も重視されるのは性的及び暴力的な犯罪であるため、個人差が少ない軽犯罪に影響を及ぼす程度は不明

<sup>73</sup> Babin, J. B., & Babin, L. A. (1996). Effects of Moral Cognitions and Consumer Emotions on Shoplifting Intentions. *Psychology & Marketing*, 13(8), 793.

<sup>74</sup> Blanco, C., Grant, J., Petry, N. M., Simpson, H. B., Alegria, A., Liu, S., & Hasin, D. (2008). Prevalence and Correlates of Shoplifting in the United States: Results From the National Epidemiologic Survey on Alcohol and Related Conditions (NESARC). *American Journal of Psychiatry*, 165(7), 910.

<sup>75</sup> Blanco, et al.・前掲注 74, 911.

<sup>76</sup> Egan, V., & Taylor, D. (2010). Shoplifting, unethical consumer behavior, and personality. *Personality and Individual Differences*, 48(8), 882.

だと主張した<sup>77</sup>。このように、国外では、万引きという高齢者の犯罪行動を、社会環境の変化にうまく反応できない個人の問題として精神医学的見地から研究しているものが多いように思われる。

江崎（2014）は、国内の先行研究を踏まえ、次の2点を指摘した。第1に、高齢者の万引きが増加しているとはいえ検挙人員は高齢者人口の1割にも満たない（Table1-2-1参照）。「生活困窮」や「孤独」という状態に置かれている高齢者も多いはずだが、なぜ、万引きを犯してしまう者がいるのか。逆に言えば、なぜ、ほとんどの高齢者は万引きという犯罪行動をしないのかという心理的な背景が明らかにされていない。第2に、国内の先行研究は、主に警察統計を用いていることから変数が名義尺度であり、心理的要因や多変量間における相関関係は明らかにされていない。間隔尺度を採用し、高度な統計手法を用いているのは、大久保他（2013）の研究のみである。しかし、この研究も質問紙の記入は事件を取扱った警察官が行っている。我が国では、高度な統計手法を用いて分析を行うために必要なデータが公表されておらず、警察機関と共同しなければデータ収集ができないこと自体に問題がある。さらに、警察機関内においても取調べにあたった警察官を通した間接的調査によらざるを得ない事情は、我が国の刑事訴訟上の制約にある。本来、被疑者の個人情報を得やすい立場にある警察であるが、それ故にこそできないというジレンマがあることは理解すべきであるとした<sup>78</sup>。しかし、犯罪調査の困難性という問題は大きい、それに甘んじて目を逸らせることは許されないのではないのか。また、藤野（2016）が、高齢女性の窃盗の動機について経済的意味合い以外のものが見て取れると主張しているとおり、万引きを、何の労力もスキルも必要としない自己利益を追求する行為としてらえ、そのような行為性向を心理学や精神医学の視点から測定可能な変数として捉えるような研究が必要なのではないだろうか。

### （3）犯罪の定義や研究の視点

一般的に近代の犯罪研究の始まりは19世紀前期であるといわれている（藤本，1978）<sup>79</sup>。さらに、200年の歴史にもかかわらず、犯罪という人間の行動の原因を理解しようとする学問は多岐に及び犯罪の定義を統一することの困難性が指摘（守山・小林，2016）されている<sup>80</sup>。サザランド・クレッシー（Sutherland & Cressey, 1960 = 高沢・所，1974）は、犯罪は人間の行動であって、非犯罪的な行動と多くの点で共通のものを持っており、他の人間行動を説明するものに用いられるのと同じ一般的な枠組みの中で説明されなくてはならないと主張した<sup>81</sup>。しかし、それから60年が経過しているのに大きな進展がみられないところからすれば、これまでの犯罪原因研究は、目標とする「犯罪の定義」そのものに問題があったか、研究の視点に問題があったのか、あるいは両方に問題があったのではないかという疑問を持つ。リリーほか（Lilly et al., 2011 = 影山，2013）は、現行犯罪学は

<sup>77</sup> Egan et al.・前掲注 76, 882.

<sup>78</sup> 江崎徹治「高齢者の万引き非行の要因についてーハーシの社会的絆理論を適用してー」（日本大学大学院博士前期課程学位論文（未公刊，2014）8-9頁。

<sup>79</sup> 藤本哲也『犯罪学講義』（八千代出版，1978）3頁。

<sup>80</sup> 守山 正・小林寿一『ビギナーズ犯罪学』（成文堂，2016）5-10頁。

<sup>81</sup> サザランド・クレッシー（著）（平野龍一・所一彦訳）『犯罪の原因（犯罪学原論Ⅰ）』（有信堂，1974）56頁。

新旧の考え方を混合したものであり、主要な犯罪理論の概念は現実社会に帰結することになるから、その概念が実行可能となった特有の歴史的背景や理論家がたどった人生も考慮する必要があると主張した<sup>82</sup>。また、ウォルシュ（Walsh, 2015 = 松浦, 2017）は、標準的な犯罪学の教科書では生物学的及び心理学的理論から始まり、先祖返りや XYY 症候群などを取り上げて重要な概念を台無しにしており、それが何十年も続いてきたと批判した。そして、fMRI による脳の画像解析など最新観測技術の劇的進展によって生物社会学研究がもたらした遺伝学や神経科学における新奇な発見が重要な環境要因の正確な特定を可能にすると主張した<sup>83</sup>。これまで犯罪の定義や研究の視点に対して異論を唱えてきた主な研究者として、アイゼンク、ジェフェリー、ゴットフレッドソンとハーシ、ウィクストラムが挙げられる。

#### 1) アイゼンク<sup>84</sup>の主張

菊田・西村（1989）は、学習理論の立場から、最初に犯罪の説明を試みたのはアイゼンクであろうと述べた<sup>85</sup>。アイゼンク（Eysenck, 1964 = MPI 研究会, 1972）は、なぜ人は犯罪者になるのかではなく、なぜ多くの人々が犯罪者にならないのかを説明することに力点を置き、ほとんどの人にオペラント条件づけより古典的条件づけに大きい効果があるからだと主張した<sup>86</sup>。また、条件づけられた良心は、事前に経験した不快な効果を伴う連合によって、反社会的な活動にかかわらないようにしているし、いったん行為にかかわったならば、自らの罪に対して不快に感じやすく、その差異は、不快な結果のタイミングにあると仮定した<sup>87</sup>。また、アイゼンク（Eysenck, 1979）は、犯罪行動の促進又は抑制に関わる良心は、幼少期の条件付けによって成立するものであるから、犯罪行動は、行動療法によらなければ除去できず、精神分析やカウンセリングなどの治療法では不可能であると主張した<sup>88</sup>。つまり、犯罪行動は遺伝要因と経験した環境の相互作用という学習の結果であるという理由からである。ただし、バートルほか（Bartol & Bartol, 2005 = 羽生ほか, 2011）は、アイゼンクの理論を用いたその後の研究を概観し、神経症傾向と犯罪的・反社会的行為の関係を検討した結果、明らかにその関係の存在を支持していないとした。また、アイゼンクが犯罪性を説明する主要なものとして古典的条件付けを強調し、他の学習理論や媒

<sup>82</sup> リー・カレン・ボール（著）（影山任佐 監訳）（藤田眞幸・小林寿一・石井利文・小島秀吾・岩井宣子・安宅勝弘・鈴木護 訳）『犯罪学—理論的背景と帰結—第5版』（金剛出版, 2013）15-17 頁。

<sup>83</sup> ウォルシュ（著）（松浦直己 訳）『犯罪学ハンドブック』（明石書店, 2017）3 頁。

<sup>84</sup> Caballo, V. E. (1997). Hans Jurgen Eysenck (1916-1997), *Revista Latinoamericana de Psicología*, 29(3), 517-522. <[https://www.researchgate.net/search.Search.html?type=publication&query=Hans%20Jurgen%20Eysenck%20\(1916-1997\)](https://www.researchgate.net/search.Search.html?type=publication&query=Hans%20Jurgen%20Eysenck%20(1916-1997))>. (2019.10.1) : アイゼンク（Hans Jurgen Eysenck, 1916-1997）は、ベルリンで俳優の両親の下で生まれたが、2歳のときに両親が離婚し、祖母と一緒に暮らした。その後、母親がユダヤ人映画プロデューサーと再婚して引き取られ、ディジョンカレッジでフランスの歴史と文学を1年間学んだが、ヒトラーが政権を取ったため1934年にイギリスに逃れた。アイゼンクは、物理学を勉強したかったが要件を満たさず、やむを得ず心理学を学んだと言われている。1940年にロンドン大学で心理学の博士号を取得した。第二次世界大戦後、モーズレイ病院の心理学部長に任命され、1949年に渡米したことをきっかけに臨床心理学プログラムを確立した。その後、1955年から83年までロンドン大学の教授として教鞭を執り、附属精神医学研究所の名誉教授であったとされる。

<sup>85</sup> 菊田幸一・西村春夫『犯罪・非行と人間社会—犯罪学ハンドブック—』（評論社, 1982）35 頁。

<sup>86</sup> アイゼンク（著）（MPI 研究会 訳）『犯罪とパーソナリティ』（誠信書房, 1972）149-152 頁。

<sup>87</sup> MPI 研究会・前掲注 86, 155-159 頁。

<sup>88</sup> Eysenck, H. J. (1979). Crime and Personality. *Medico-Legal Journal*, 47(1), 27.

介（認知）プロセスを無視する傾向は、彼の理論の最も有害な弱点かもしれないと述べた<sup>89</sup>。アイゼンクの理論は、共同研究者であり教え子のグレイ（Gray J. A.）によって、より神経生理学的な基盤に沿うように修正が行われ、外向的な人は条件づけが悪いのではなく、罪の脅威に対して相対的に感受性が低いからであるとされた。そして、この反応を起こす心理的なメカニズムを理論化している。アイゼンクやグレイの理論については次章で再考する。

## 2) ジェフェリー<sup>90</sup>の主張

ニエツェル（Nietzel, 1979）は、犯罪行動がスキナー学派のオペラント条件付けの原理に従って学習されたものであると最初に主張した犯罪学者はジェフェリーであると述べた<sup>91</sup>。ジェフェリー（Jeffery, 1965）は、犯罪行動は学習行為であり、サザランドの異質的接触理論は基本的に正しいが、修正されるべきであると主張した<sup>92</sup>。しかし、一方で、ジェフェリー（Jeffery, 1976）は、スキナーなどの行動分析派が心の動きを無視していることについて批判している。また、1960年代の刑事司法制度について、警察から裁判所を経て刑務所にいたる処罰による犯罪抑止の失敗を厳しく批判した<sup>93</sup>。さらに、ジェフェリーは、サザランドの下で博士の学位を取得したとされるが、サザランドやシカゴ学派をはじめとするアメリカ犯罪学の考え方を厳しく批判した。その理由は、人間の行動は物理的有機体と物理的環境の相互作用であるのに、犯罪社会学者は、行動の遺伝的根拠を否定し、犯罪が発生する環境を無視しているためであるとした<sup>94</sup>。また、犯罪者を捕まえて処罰するのではなく、犯罪を予防することに注力しなければならない。そして、犯罪という行動障害を予防する試みは、遺伝学、生物心理学、都市デザインの組み合わせに基づいていなければならないという結論に達したと主張した<sup>95</sup>。我が国では、ジェフェリーは、環境デザインを工夫することによって犯罪の機会を減少させることを目指した研究者であると知られている。しかし、同時に、胎児に与える影響を考慮して妊娠中の母親への強い衝撃を防ぎ、栄養の供給、ストレスなどに配慮することや出産後に乳幼児の栄養に気をつけること、さらに乳幼児の夜尿症、暴力、火遊び、遊び、学校の無断欠席などの問題に早期に取り組むことが重要な犯罪予防策になると主張した<sup>96</sup>ことはあまり知られていない。藤本（1984）は、アメリカにおいて生物学的犯罪学が発達しなかった理由について 1920 年代から 30 年代にかけてシカゴ学派が優勢を占めたという単なる歴史的偶然という指摘もあ

<sup>89</sup> バートル C. R.・バートル A. M.（著）（羽生和紀 監訳）（横井幸久・田口真二 編訳）『犯罪心理学—行動科学のアプローチ』（北大路書房, 2007）117 頁。

<sup>90</sup> Fishbein, D. (2008). The American Sociological Association, 2007 OBITUARIES. <<https://www.asc41.com/obituaries/2007obits.html>> (2019.10.1). : ジェフェリー（Jeffery Clarence Ray, 1921 - 2007）は、アイダホ州で生まれ、コルビー大学、サザンイリノイ大学、アリゾナ州立大学で学位を取得した後、1947年からエドウィン・H・サザランドの下で学び、51年にインディアナ大学で社会学の博士号を取得した。ワシントン大学の精神医学研究所研究員、ニューヨーク大学ロースクールに犯罪学の客員講師として勤務した後、アリゾナ大学の社会学教授として教鞭を執った。また、1970年から71年の間、アメリカ犯罪学会の会長を務めた。

<sup>91</sup> Nietzel, M. T. (1979). *Crime and its modification: A social learning perspective*. Pergamon Press. 103.

<sup>92</sup> Jeffery, C. R. (1965). Criminal Behavior and Learning Theory. *Journal of Criminal Law and Criminology*, 56(3), 300.

<sup>93</sup> Jeffery, C. R. (1976). *Crime prevention through environmental design (2nd.edition)*. Sage Publications, Inc. 10.

<sup>94</sup> Jeffery 前掲注 93, 95-127.

<sup>95</sup> Jeffery 前掲注 93, 269-286.

<sup>96</sup> Jeffery, C. R. (1971). *Crime prevention through environmental design*. Sage Publications, Inc.



るが、犯罪学者の知識不足や過小評価と無縁ではないとした。また、人間は自由意思を持つという仮説が生物学的前提と相容れないこと及び社会学的犯罪学の基盤となっているラマルク主義の共産原則や環境決定主義の概念が生物学的犯罪学理論の基盤となる行動の遺伝的基礎概念や個人間の遺伝学的相違についての概念を打破するという結果をもたらしたことを指摘した<sup>97</sup>。

### 3) ゴットフレッドソン<sup>98</sup>・ハーシ<sup>99</sup>の主張

ゴットフレッドソン・ハーシ (Gottfredson & Hirschi, 1990 = 大淵, 2018) は、現代の犯罪学について、行為や行為の組合せが異なれば、異なる特徴が示唆されると考えており、犯罪行為の一般的性質や類似の非犯罪行為との関連性、あるいは犯罪に巻き込まれる標的の性質などには、ほとんど注意が払われていないと批判した<sup>100</sup>。そして、「犯罪」を威力や偽計を用いた自己利益を追求する行為と定義するとともに、セルフコントロールを一時的な誘惑に対する脆弱性とした<sup>101</sup>。また、低セルフコントロールは児童期の早期に確立され、一生を通じて持続する傾向があり、養育不足の結果であるとした<sup>102</sup>。そして、ほとんどの犯罪は何のスキルも必要ない突発的行為であり、長期的利益をほとんど、あるいはわずかしかもたらさないとする低セルフコントロール理論を主張した<sup>103</sup>。ゴットフレッドソンとハーシのセルフコントロール理論については次章で再考する。

### 4) ウィクストラム<sup>104</sup>の主張

ウィクストラム (Wiskström, 2006 = 2013) は、1) 犯罪とは何か (犯罪理論が説明す

---

<sup>97</sup> 藤本哲也『犯罪学諸論』(成文堂, 1984) 140-147 頁。

<sup>98</sup> Bill, G. (2012). The Oregonian, Michael Gottfredson sole finalist for University of Oregon president. <[https://www.oregonlive.com/education/2012/06/michael\\_gottfredson\\_sole\\_final.html](https://www.oregonlive.com/education/2012/06/michael_gottfredson_sole_final.html)> (2018.8.30). : ゴットフレッドソン (Michael Ryan Gottfredson) は、1951 年に生まれ、カルフォルニア大学で少年非行に関するハーシの講義を受けたことをきっかけに、ハーシの下で博士号を取得した。ハーシにニューヨーク州立大学アルバニー校へ招かれて二人で研究を展開し、この関係はアリゾナ大学でも続いた。1976 年から 79 年までニューヨーク大学刑事司法研究センター研究員、1977 年から 79 年まで刑事司法研究科助教、1981 年から 83 年までイリノイ大学社会学部助教授、1983 年から 85 年までカルフォルニア州クレアモント大学院助教授を務めた後、アリゾナ大学に移り、1985 年から 2000 年までさまざまな役職を歴任し、2012 年から 14 年 8 月までオレゴン大学の学長を務めた。

<sup>99</sup> ハーシ (著) 森田洋司ほか (監訳)「非行の原因—家庭・学校・社会へのつながりをもとめて—最新版」22-23 頁 (文化書房博文社, 2010) : ハーシ (Hirschi, 1935 - 2017) は、ユタ州に生まれ、ユタ大学に入学し、カルフォルニア大学で社会学の博士号を得たのち、ワシントン大学、カルフォルニア大学、ニューヨーク大学、アリゾナ大学で教鞭を執った。1982 年から 83 年の間アメリカ犯罪学会の会長を務め、1986 年にエドウィン H. サザランド賞、2016 年にストックホルム賞を受賞した。

<sup>100</sup> ゴットフレッドソン・ハーシ (著) (大淵憲一 訳)『犯罪の一般理論—低自己統制シンドローム—』(丸善出版, 2018) 12 頁。

<sup>101</sup> 大淵・前掲注 100, 13 頁。

<sup>102</sup> 大淵・前掲注 100, 86-87 頁。

<sup>103</sup> 大淵・前掲注 100, 80-81 頁。

<sup>104</sup> University of Cambridge, Institute of Criminology People Professor Per-Olof Wikström. <<https://www.crim.cam.ac.uk/People/professor-per-olof-wikstrom>> (2019. 9. 30). : ウィクストラム (Per-Olof Helge Wikström) は、1955 年にスウェーデンのウブサラで生まれた。1976 年にストックホルム大学で学士号、85 年に博士号を取得した。1979 年から 90 年までストックホルム大学の犯罪学科で教鞭をとり、1985 年から 90 年までスウェーデン犯罪防止全国評議会の上級研究員、90 年から 94 年の間は研究部門長であった。93 年ストックホルム大学犯罪社会学准教授として戻り、その間の 1995 年から 96 年までスウェーデン国立警察大学の主席研究員として勤務した。97 年にケンブリッジ大学に移籍し、2001 年に生態学及び発達学的犯罪学の教授に就任した。現在は、Girton College の教授、Peterborough 思春期及び青少年期発達研究所 (PADS+) の主任研究員を兼務している。1991 年にエジンバラ大学北部奨学生賞、94 年にセリン・グリュック賞を受賞した。2002 年にスタンフォード大学行動科学研究センター、10 年にアメリカ犯罪学会、11 年に英国アカデミーの委員に選出された。2016 年にストックホルム賞を受賞し、17 年に UNED (スペイン) から Honoris Causa 博士に任命された。

べきもの)、2) 人を犯罪に向かわせるもの(行動理論)、3) この過程で起きる個人的特徴、経験、環境特性の相互作用(説明レベルの統合)の3つの概念を明らかにしない限り、犯罪の原因という問題にきちんと対応できないとした<sup>105</sup>。そのうえ、これらの点に徹底して取り組まなければ必要な理論的根拠を欠くこととなり、犯罪を説明するうえで、個人的発達と変化の役割、体系的要因の役割、及びこれらの経時的変化を正確に評価できないと主張した。その上で、第1に、犯罪理論が説明すべき犯罪とは、道德規範を破る行為であると定義した。そして、万引きのような軽微な犯罪は習慣であり、そこには規範意識が働いていないと主張した<sup>106</sup>。ウィクストラムの主張に従えば、犯罪そのものが道德規範なのであり、規範意識が低いから罪を犯すという表現をしている限り、犯罪の原因は解明できない。第2に、犯罪行為の説明に焦点を置いた犯罪学理論は非常に少ない。犯罪学理論はむしろ、犯罪関与の範囲内での個人差、あるいは犯罪(または加害者)率の地域及び場所による差異の説明を目的としていると批判する。そして、個人の特徴や経験や環境特性が、人に法に定める道德規範を破る時にどう影響しているのかを説明できる行動理論がなければ、なぜ犯罪への関与、地域や場所による犯罪率の変動に個人差が生じるのかという疑問に対して信憑性のある説明を提示することができないと主張した<sup>107</sup>。第3に、社会構造や組織の特徴という体系的要因や関連する社会過程は、何が個人を犯罪行為に向かわせるかを説明できない。言い換えると、関連する体系的要因及び個人の生活史は、犯罪行為の原因というよりも、原因の原因と見なすことができると主張した<sup>108</sup>。ウィクストラムの考え方では、犯罪習慣のある人が、道德規範を働かせるのは、見慣れない環境にある場合と何らかの原因で習慣的行動が中断された場合の2つである<sup>109</sup>。そして、これらの3つの概念を説明するために、「犯罪生成の状況的行動理論(Situational Action Theory of Crime Causation)」を提唱した。この理論が目的とするのは、個人の特徴、経験、環境特性がどのように相互作用して、法という道德規範の違反に個人を向かわせるかを説明することにある。ウィクストラムは、この理論の基礎となっているのは、個人の行動(非行動)とは結局のところ、ある状況の特殊性に直面した時に、どのように自分の行動選択肢を認識して選択するかが結果として表れるかという主張である。行動選択肢や選択プロセスの認識は、個人やその環境(状況)と本人の行動(非行動)を結び付ける主要な状況メカニズムだと考えられている。これらの基本メカニズムを通じて、個人の特性や経験が行動へ及ぼす影響と、本人が活動する環境(状況)の特徴とを統合することができると主張した<sup>110</sup>。確かに、個人がどうして、そのような行動をするのかということを1つの視点(理論)から説明することは困難である。ウィクストラムは、2002年にイギリスにおいて「犯罪に至る社会的文脈」ネットワーク(SCoPiC; Social Context of Pathway in Crime)を創立し、社会的文脈のなかでの犯罪学の統合に関する検討を行っている(Wikström & Sampson, 2003)。

<sup>105</sup> ウィクストラム・サンブソン(著)(松浦直己 訳)『犯罪学研究－社会学・心理学・遺伝学からのアプローチ』(明石書店, 2016) 72 頁。

<sup>106</sup> 松浦・前掲注 105, 90-93 頁。

<sup>107</sup> 松浦・前掲注 105, 82-83 頁。

<sup>108</sup> 松浦・前掲注 105, 76 頁。

<sup>109</sup> 松浦・前掲注 105, 111 頁。

<sup>110</sup> 松浦・前掲注 105, 104 頁。

これら研究者の主張は、以下の3点に要約される。

第1に、「犯罪」とは自己利得欲という本能に近い行動、あるいは単に道德規範を破る行為と考えるべきである。したがって、社会構造や組織の特徴という体系的要因や関連する社会過程は、何が個人を犯罪行動に向かわせるかを説明できない。第2に、犯罪研究は、犯罪に関与した人の差異や地域・場所の犯罪率ではなく、ある状況の特殊性に直面した時に、どのように自分の行動選択肢を認識して選択するかという個人の行動特性を対象とすべきである。第3に、行動特性は、遺伝的特徴、人生早期の経験の相互作用による学習の結果として解明しなければならない。これらの研究者の主張の詳細は後述するとして、次に、再犯防止や犯罪からの離脱・立直りの問題について検討することとしたい。

### 3 再犯防止や犯罪からの離脱・立直りに関する問題点

我が国における高齢者の犯罪や再犯の問題は、これまで見たとおり諸外国には見られない特異な状況である。そして、高齢者の犯罪が急増した時期と再犯問題が取り上げられた時期が同じである。ところが、高齢者の再犯防止や犯罪からの離脱・立直りに関する研究は、犯罪行動の原因の研究以上に進んでいない。そこで、犯罪からの離脱・立直りに関する研究について、高齢者に特化せず問題点を検討する。

#### (1) 我が国における再犯防止対策の今日的経緯

我が国において保護観察や受刑者の処遇を含めた再犯防止対策が注目されたのは2000年前後である。再犯防止対策が注目されたことの要因の第1は、刑法犯認知件数が急増し、2002年に過去最高を記録するとともに刑事施設等における過剰収容が生じたこと。第2は、衆議院議員が秘書給与詐取事件で服役した後、2003年に事件の内容や獄中での出来事を綴った書籍を出版し、刑事施設に収容されている知的障がいや高齢の累犯者の実態が国民に衝撃を与えたこと。第3は、2004年から05年にかけて仮釈放者や執行猶予者などの凶悪犯罪が連続して発生したこと。また、同時期に刑務所内で刑務官による受刑者殺傷事件が発生したことなどがあげられる。その結果、監獄法は改正の上、2006年に刑事収容施設及び被収容者等の処遇に関する法律として施行された。また、犯罪者予防更生法と執行猶予者保護観察法は統合・改正の上、2008年に更生保護法として施行され、前2法は廃止された。そして、法律の目的として、受刑者は「改善更生の意欲の喚起及び社会生活に適応する能力の育成を図ること」、保護観察は「社会生活を通じて社会復帰を目指し、再犯を防ぐこと」が明確にされた。

#### (2) 犯罪者の処遇に関する研究

アンドリューほか(Andrews D. A., Bonta, J., & Hoge, R. D., 1990)は、効果的な再犯防止には、犯罪リスクの高い当事者を選定し、その人の犯罪誘発要因にあった認知行動療法による処遇(Risk-Need-Responsivity《RNR》Model)が必要かつ重要であると主張した<sup>111</sup>。さらに、アンドリューほか(Andrews D. A. et al., 1990)は、1980年前後の犯罪

---

<sup>111</sup> Andrews D. A., Bonta, J., & Hoge, R. D., (1990). Classification for Effective Rehabilitation; Rediscovering Psychology. *Criminal Justice Behavior*, 17(1), 19-52.

行為や治療効果に関する先行研究の結果を用いてメタ分析を行い、自らの理論の証明となる証拠を提示した<sup>112</sup>。ボンタ（Bonta, 2012）は、我が国の社会内処遇においても RNR モデルが有効ではないかとする論文を寄稿した。ただし、精神分析による治療が主流の日本において認知行動療法が受け入れられるかどうか懸念を示した<sup>113</sup>。これに対して、ウォード・スチュワート（Ward & Stewart, 2003）は、犯罪行為者に対し、社会的に受け入れられる方法で、重要な社会的ないし個人的グズを得るために必要な処遇を行うべきであるとするグッドライフモデル（以下「GL モデル」という。）を提唱した。そして、RNR モデルに対して、1）ピン刺しからリスクというピンを抜いた穴が残るだけである。2）個人のアイデンティティを軽視している。3）自己選択が考慮されていない。4）犯罪的ニーズだけでなく、非犯罪的ニーズ（不安感、低い自尊心、心理的苦痛など）が治療上の協力関係を害するおそれがある。5）人間は特定の社会的及び文化的な文脈に埋め込まれた存在であるから、処遇計画は本人が釈放される個別の状況において機能するスキルや資源に焦点を当てたものでなければならないと批判した<sup>114</sup>。ただし、ウォードほかは、2つのモデルは対立するものではなく、補完し合うものであるとした<sup>115</sup>。その後、ウォード・キャノン（Ward & Cannon, 2006）は、自ら、GL モデルには原因論とそれに基づいた処遇指針が不在であることに言及し、見直しを図った<sup>116</sup>。それは、ウォード・ビーチ（Ward & Beech, 2005）によって発展された統合的性犯罪理論<sup>117</sup>を GL モデルに組み込むことであった。統合的性犯罪理論によれば、人間の心理的機能は、動機／情動系、行為選択／統制系、認知／記憶系という3つの相互作用によって構成されている。そして、脳の発達（遺伝・進化）による生物学的要因と生態学的地位（社会的・文化的環境、個人的状況、物理的環境）による社会学習的要因が、これら機能系に影響を与えるとされる<sup>118</sup>。さらに、ウォード・マルナ（Ward & Marna, 2007）は、GL モデルは、あらゆるタイプの個人に対する治療的枠組みとして完成させられたとした<sup>119</sup>。これに対し、アンドリューほか（Andrews, Bonta, & Wormith, 2011）は、GL モデルは、犯罪被害の脅威を軽視している。また、原因の説明、測定（理解）不可能などエビデンスがないと反論した<sup>120</sup>。RNR モデルも GL モデルも、懲罰を加え、公共危険を排除するため社会から隔離しておくだけというこれまでの刑事施設における処遇の在り方に異議を唱えている。しかし、RNR モデルは、社会を守るために犯罪行為者を治療すべきと考える矯正実務関係者によって支持され、GL モデ

---

<sup>112</sup> Andrews D. A., Zinger, I., Hoge, R. D., Bonta, J., Gendreau, P., & Cullen, F. T. (1990). Does Correctional Treatment Work? A Clinically Relevant and Psychologically Informed Meta-Analysis. *Criminology*, 28(3), 369-404.

<sup>113</sup> ボンタ（著）（染田恵 監訳）「日本の犯罪者の社会内処遇制度における RNR モデルの有効性」『更生保護学研究創刊号』（日本更生保護学会, 2012）43-56 頁。

<sup>114</sup> Ward, T. & Stewart, C., (2003). The treatment of sex offenders: Risk management and good lives. *Professional Psychology Research and Practice*, 34(4), 354-355.

<sup>115</sup> Ward et al.前掲注 114, 357.

<sup>116</sup> Ward, T. & Cannon, T. A., (2006). Rehabilitation, etiology, and self-regulation: The comprehensive good lives model of treatment for sexual offenders. *Aggression and Violent Behavior*, 11(1), 80.

<sup>117</sup> Ward, T. & Beech, A. R., (2005). An integrated theory of sexual offending. *Aggression and Violent Behavior*, 11(1), 44-63.

<sup>118</sup> Ward et al.前掲注 116, 81-82.

<sup>119</sup> Ward, T. & Marna, S., (2007). *Rehabilitation: Beyond the risk paradigm*, Routledge.

<sup>120</sup> Andrews, D. A., Bonta, J., & Wormith, J. S. (2011). The Risk-Need-Responsivity (RNR) Model; Does Adding the Good Lives Model Contribute to Effective Crime Prevention? *Criminal Justice and Behavior*, 38(7), 749-751.

ルは、まずは犯罪行為者が社会の中で犯罪行動をしなくても済むように受け入れるべきであるとする元当事者や更生保護に携わる者に支持されているように思われる。処遇の良し悪しとは、すなわち当事者が地域社会で自分らしい生活を送り、かつ再び犯罪に手を染めないでいられるという問題であるから、我が国の高齢者の再犯防止にも欠かせない極めて重要な知見であるとする。しかし、犯罪行動の原因究明を含め、十分な実証研究が行われているとは言えない。

### (3) 犯罪からの離脱・立直りに関する研究

国外では、犯罪からの離脱や立直りは、「Desistance」、「Recovery」、「Resilience」などという単語の表現で研究されている。「青少年の立ち直り（デシスタンス）に関する研究」（法務総合研究所，2019。以下「研究部報告 58」という。）は、近年、非行・犯罪からの離脱（デシスタンス）に関する研究が注目を集め、米国や英国を中心として研究が積み重ねられているとしている。そして、我が国においても、数は少ないものの、非行少年の立ち直りを主題とした研究が試みられていると述べている<sup>121</sup>。また、同報告は、デシスタンス研究に至る流れとして、非行・犯罪に手を染めた多くの少年が、一定年齢までにそれらの行動を止めるという年齢犯罪曲線の知見を経て発達犯罪学、ライフ・コース犯罪学の発展につながったとしている。そして、緊張理論、学習理論、統制理論を、主に犯罪の発生や増幅について説明する従来の犯罪学と位置づけ、発達犯罪学、ライフ・コース犯罪学は、個人の犯罪性向の形成時期や継続変化をどのように説明するか等を探求していると説明している<sup>122</sup>。さらに、主要なデシスタンス研究を、1) 非行・犯罪の継続・離脱パターン、2) ライフイベントと非行・犯罪からの離脱との関係、3) 非行・犯罪からの離脱の過程におけるアイデンティティ及び認知の変化に分類している<sup>123</sup>。そして、デシスタンス研究は、そもそも「非行・犯罪からの離脱」の定義が研究者によって分かれていること、定義したデシスタンスを測定するための指標をどのように設定するのかという大きな課題があることを指摘している<sup>124</sup>。我が国の研究は、数は少ないものの主に少年鑑別所・少年院等や発達心理学の研究者によって行われてきた。例えば、近藤ほか（2008）は、少年鑑別所に入所中の男子 110 人に対して、抑うつに耐える力に関する質問紙調査を行った。その結果、親を援助者としてとらえることができるかどうか、立直りに影響する要因であるという結果を得たと報告した<sup>125</sup>。

平成 20 年版犯罪白書は「原因の徹底的な解明なくして、有効な対策を立てることなどできるはずがない。」「高齢者犯罪の研究は、このような健全な高齢社会の実現ため必要不可欠な社会科学的作業と評するとすることができるものであると考えている。」と述べた。

この要請に応えるには、まず、本章で挙げた問題点を基に犯罪行動の原因に関する先行研究を概観し、高齢者の犯罪行動に応用可能な研究について検討する必要がある。

<sup>121</sup> 研究部報告 58『青少年の立ち直り（デシスタンス）に関する研究』（法務総合研究所，2019）3 頁。

<sup>122</sup> 研究部報告 58・前掲注 121 3-4 頁。

<sup>123</sup> 研究部報告 58・前掲注 121, 5-8 頁。

<sup>124</sup> 研究部報告 58・前掲注 121, 9 頁。

<sup>125</sup> 近藤淳哉・岡本英生・白井利明・栃尾順子・河野莊子・柏尾眞津子・小玉彰二「非行からの立ち直りにおける抑うつに耐える力とソーシャル・ネットワークとの関連」犯罪心理学研究 46(1)（2008）11 頁。

## 第2章 高齢者の犯罪行動と犯罪からの離脱・立直りを説明するための統合モデルの検討

前章では、我が国における高齢者の犯罪行動や再犯防止の問題は、諸外国に比較して質・量ともに特異であると指摘されているにもかかわらず、実証的な研究が少ない実情にあることを確認した。その原因は、第1に、犯罪行為を行った者から直接データを得ることが諸外国に比較して困難であること。第2に、成人以降の犯罪研究は、ほとんど社会学や刑事政策の視点からなされ、反対に、発達心理学や精神医学からの研究は、ほとんど少年を対象に行われていることなどがあげられた。犯罪年齢曲線が示すように、青少年期特有の行動特性があるのであれば、高齢者は少年の50年後の姿であるから、高齢になって更生保護施設に在会する者は、年齢曲線から外れた者、あるいは高齢になってから少年と同じような行動に戻った者であるともいえる。したがって、青少年を対象にした犯罪行動や犯罪からの立直り研究は、高齢者の犯罪行動や犯罪からの離脱・立直りにについても応用できるのではないかと考えた。そこで、犯罪に関する主な先行研究について、まず研究部報告58に倣いつつも独自の視点で、主に犯罪の発生や増幅に関する研究及び個人の犯罪性向の形成時期や継続変化に関する研究に分類する。そして、アイゼンク、ジェフェリー、ゴットフレッドソン・ハーシ、ウィクストラムが主張する犯罪の意義や研究の視点に立って高齢者の犯罪行動や犯罪からの離脱・立直りの説明に応用できるかどうか批判的に概観する。次に、高齢者の特性に関する研究の知見と犯罪に関する先行研究の知見とを融合させることで、高齢者の犯罪行動と犯罪からの離脱・立直りを説明するための統合モデルを検討する。

### 第1節 犯罪の発生や増幅に関する研究の概観

#### 1 社会構造論的視点による研究

##### (1) 人間生態的研究

ヴォルド・バーナード (Vold & Bernard, 1985 = 平野ほか, 1990) によれば、ショウとマッケイは、バージェスの同心円理論を実証的に支持する研究成果を残すとともに、犯罪への関与を規定するのは、地域に居住する個々人の性質ではなく、地域の性質そのものであると主張した<sup>126</sup>とされる。リリーほか (Lilly, et al., 2011 = 影山ほか, 2013) は、ショウとマッケイは、シカゴ大学の教授陣ではなく州が支援する児童補導クリニックの研究員であった。博士号を取得するには至らなかったが、シカゴ大学の大学院生として学び多大な影響を受けたと述べた<sup>127</sup>。藤本 (1978) は、文化伝播論の骨子は、非行多発地域においては、非行を生む固有の文化があり、非行文化が伝達されるという仮説にあるとした<sup>128</sup>。また、藤本 (1978, 2003) は、ショウとマッケイにとっての問題は、そうした非行地域が

<sup>126</sup> ヴォルド・バーナード (著) (平野龍一・岩井弘融 監訳) (星野周弘・田村雅幸・荒木伸怡・横山実・内山絢子・松木良夫・米川重信 訳)『犯罪学—理論的考察—』(東京大学出版会, 1990) 195 頁。

<sup>127</sup> 影山ほか・前掲注 82, 56 頁。

<sup>128</sup> 藤本・前掲注 79, 11-12 頁。

アメリカのような豊かな国で何故発生するのかということで、そのためには、少なくともアメリカ社会の本質の分析、経済的・政治的機構の分析が必要であったはずであり、それを怠ったところに限界があったと指摘した<sup>129,130</sup>。安香（2008）は、ショウとマッケイが出した結論は、経済的貧困や人口構成の複雑だが、それらを非行多発の直接的原因と考えるのではなく、そのために社会的に不利であり、世代間でまともな行動規範・様式の継承が不全になるという、いわば媒介変数を介在させての理解をすべきであるという主張であったと解釈した<sup>131</sup>。スナッドグラス（Snodgrass, 1976）は、彼らがこのような見解に至ったのは、2人が田舎町でクリスチャンの家庭に生まれ育ったという個人的経験と関連すると指摘した<sup>132</sup>。また、ウォルシュ（Walsh, 2015 = 松浦, 2017）は、どうして解体した近隣コミュニティに住む住民の大部分が深刻な犯罪に及ばないのか、また犯罪行動に至ったとしても、なぜごく少数の人間だけが大多数の犯罪に関与したのかについて、生態学理論は何も説明できなかったと批判した<sup>133</sup>。

## （2）アノミー論と緊張理論

### 1）デュルケム<sup>134</sup>のアノミー概念

デュルケム（Durkheim, 1893 = 井伊, 1989）は、集合的意識によって支配される機械的連帯の原始的社会では、法は個人が社会の集合意識を脅かすことがないように規制する働きをしてきた。しかし、社会が大きく複雑になるにつれ、悪事を働いた個人に向けられ、原状回復的な機能を持つようになったとした。そして、機械的連帯から有機的連帯への変化は分業や異質性を増大させ、個人はより多くの孤独、社会的孤立、同一性の喪失を感じるようになった。ここに現代社会の病床としての道徳的無機性状態（アノミー）がはびこり、集合意識からの多くの離反行為が目立つようになったと主張した<sup>135</sup>。リリーほか（Lilly et al., 2011 = 影山, 2013）は、デュルケムの研究は19世紀後半の産業革命の後に続く劇的な社会変動の時代に生み出されたものである。マルクスとエンゲルスは、このような状況について資本主義を生み出した経済変動の結果とみたが、デュルケムは、これに賛同せず、経済的秩序よりも道徳的秩序に求めたと主張した<sup>136</sup>。菊田・西村（1982）は、犯罪とは社会にとって正常で機能的であるとするデュルケムの犯罪の概念は、その当時犯罪研究の常識になっていたロンブローゾらの実証学派による、犯罪を異常な人間の異常な行動とする犯罪概念とは真正面から対立するものであっただけに、内外において注目されたと評価した<sup>137</sup>。また、藤本（1984）は、従来、ベンサムによって心理的事象であるとされて

<sup>129</sup> 藤本・前掲注 79, 13 頁。

<sup>130</sup> 藤本哲也『犯罪学原論』（日本加除出版, 2003）62 頁。

<sup>131</sup> 安香 宏『犯罪心理学への招待—犯罪・非行を通して人間を考える—』（サイエンス社, 2008）126 頁。

<sup>132</sup> Snodgrass, J. (1976). Clifford R. Shaw and Henry D. McKay: Chicago criminologists. *British Journal of Criminology*. 16, 4.

<sup>133</sup> 松浦・前掲注 83, 166 頁。

<sup>134</sup> 平野ほか・前掲注 126, 166 頁：デュルケム（Emile Durkheim, 1858-1917）は、ドイツにおいて実験心理学者のウィルヘルム・ブントの下で、社会科学と倫理学との関係を研究した。

<sup>135</sup> デュルケム（著）（井伊玄太郎 訳）『社会分業論（上）』（講談社学術文庫, 1989）189-191 頁。

<sup>136</sup> 影山ほか・前掲注 82, 103 頁。

<sup>137</sup> 菊田ほか・前掲注 85, 24 頁。

いた抑止に対する仮説は、生物学や心理学は存在しないとまで提言したデュルケムの諸説に全面的に従った後世の社会学者たちによって社会統制の問題を心理学次元から社会的レベルの問題にまで移行させられたとした<sup>138</sup>。

## 2) 構造的アノミー理論

メスナー<sup>139</sup>・ローゼンフェルド<sup>140</sup> (Messner & Rosenfeld, 2001) は、アメリカでは、懲罰的な手段による社会的統制が当然の事実として認められており、逆説的な意味を持つアメリカンドリームの特徴は、出身や地位にかかわらないという平等主義と金銭的成功の目標への信念という普遍主義であるとした<sup>141</sup>。しかし、経済的不平等を特徴とする社会構造において、経済的に不平等であるというステータスは、容易に不成功であり価値がないと見なされ、必然的に多くの人々に深刻なジレンマを引き起こしていると主張した<sup>142</sup>。ウォルシュ (Walsh, 2015 = 松浦, 2017) は、メスナーとローゼンフェルドは、アメリカの経済至上主義的姿勢は、他の制度が持つ向社会的機能の価値を低減、又は崩壊させ、行き過ぎた金銭的報酬の追求へと向かわせることになり、このような状況は犯罪誘発的だと考えていると批判した<sup>143</sup>。さらに、リリーほか (Lilly et al., 2011 = 影山ほか, 2013) は、相互扶助と集団への義務の重要性の強調と、個人的権利や利益と特権の強調を低下させることを含むような文化的方向付けの新たな見直しをしないままに、アメリカが明確で持続的な犯罪減少に成功することはあり得ないように思えると警告した<sup>144</sup>。

## 3) 緊張理論

マートン<sup>145</sup> (Merton, 1957 = 森ほか, 1961) は、アメリカの平等主義イデオロギーは、金銭的成功を追求するにあたって、競争相手のない個人や集団の存在を暗黙に否定しているのに、同じ成功のシンボルが万人に共通するものと考えられているとした。しかし、現

<sup>138</sup> 藤本・前掲注 97, 209 頁。

<sup>139</sup> University at Albany State University New York. <<https://www.albany.edu/news/experts/8025.php>>. (2019. 10.1): メスナー (Steven Fredrick Messner, 1951 - ) は、コロンビア大学で学士号を、プリンストン大学で修士号、1978 年に博士号を取得した。コロンビア大学と南海大学で教鞭を執り、アルバニー校の社会学部の教授となった。2010 年から 11 年までアメリカ犯罪学会の会長を務めた。

<sup>140</sup> University of Missouri-St. Louis. <<https://www.ums1.edu/ccj/faculty/rosenfeld.html>> (2019. 9.30): ローゼンフェルド (Richard Rosenfeld, 1948 - ) は、オレゴン大学で 1972 年に学士号、84 年に社会学の博士号を取得した。4 年間スキッドモア大学で社会学の助教授として働いた後、ミズーリ大学に就職し、1989 年に首都圏研究センターの助教授兼研究員、2007 年犯罪学及び司法の学芸員教授に任命され、2014 年に名誉教授になった。また、2009 年から 10 年までアメリカ犯罪学会の会長を務めた。

<sup>141</sup> Messner, S. F., & Rosenfeld, R. (2013). *Crime and the American Dream* 5th.ed. Cengage Learning, 5.

<sup>142</sup> Messner・前掲注 140, 9.

<sup>143</sup> 松浦・前掲注 83, 171 頁。

<sup>144</sup> 影山ほか・前掲注 82, 100 頁。

<sup>145</sup> 高城和義「マートン文書の『知の社会史』上の意義—マートン研究の今日的課題—」帝京社会学 24 号 (2011) 62-64 頁: ロバート・キング・マートン (Robert King Merton: 本名 Meyer Robert Schkolnick, 1910-2003) は、フィラデルフィアのスラムのユダヤ系ロシア人の家庭に生まれ、高校在学中はカーネギー図書館等の文化施設に足繁く通っていた。姉の恋人の影響で手品師を目指し、手品の舞台でのステージネームが Robert Merton であり、終生この名前を名乗るようになった。テンプル大学の指導教授ジョージ・E・シンプソン (George E. Simpson) に連れられてアメリカ社会学会の年次総会に出席したことがきっかけでハーバード大学大学院へ進み、ピティリム・ソローキン (Pitrim A. Sorokin) 及びタルコット・パーソンズ (Talcott Parsons) らに師事した。大学院修了後は、ハーバード大学講師、チューレン大学教授を経て、1941 年以降 73 年の退官までコロンビア大学で教鞭をとった。また、ポール・ラザースフェルド (Paul Lazarsfeld) とともにコロンビア大学応用社会調査研究所において中心的役割を担った。さらに、1956 年アメリカ社会学会会長に就任し、94 年には、アメリカ国家科学賞を授与された。



実の社会組織では目標達成の機会に階級的差別が存している。こうした背景において、「大望」というアメリカの基本的な美德が「逸脱的行動」という基本的な悪徳を促していると主張した<sup>146</sup>。リリーほか (Lilly et al., 2011 = 影山, 2013) は、マートンは、スラム街から大学教授に昇進した。この出自から、マートンにとっての支配的現実とは、人種的異質性と文化葛藤であり、シカゴ学派が主張するようなスラム地区での生活が不可避免的な犯罪因であるということを信じなかったとした<sup>147</sup>。また、マートンの論文「社会構造とアノミー」(1938) は、貧困は個人ではなく社会システムの誤りであるという市民権運動の言語概念になる時代を迎え、コーエンの「非行少年」(1955) とクロワード・オーリンの「非行と機会」(1960) という2冊が出版されるまでは広範な注目を集めることはなかったと主張した<sup>148</sup>。菊田・西村(1989) は、マートンは、人間の行動は遺伝した素質の結果であるとする生物学的理論や精神病学、とくに人間は生物学的欲望と社会的拘束との間の不可避な葛藤によって特徴付けられるとするフロイト理論に真っ向から反対した。そして、マートンにとって重要な課題は、ある人に同調的行動より非同調的行動をとることを仕向ける社会構造の解明にあったと評価した<sup>149</sup>。また、藤本(1978, 2003) は、マートンの理論は、いわば中範囲理論 (middle-range theory) として、基礎理論における抽象的概念と、実証的研究における現実問題との統一的説明原理を見いだすことを目的としている。しかも、犯罪行動以外の逸脱行動一般を説明するための基礎概念の確立をも意図したものであったといえ、アノミー理論がグランド・セオリーといわれる由縁のものがここにあるのであると評価した<sup>150,151</sup>。

#### 4) アグニュー<sup>152</sup>の一般緊張理論

アグニュー (Agnew, 1992) は、緊張が生じることにより、他者に対する一般的な否定的態度が形成され、犯罪や非行につながる可能性がある。そして、人は否定的状況や他者との関係性を非難されると怒りで反応しようとし、この怒りが復讐への渴望を掻き立てると主張した<sup>153</sup>。また、緊張にうまく対処できる人とうまく対処できない人の差は、気質、知能、創造性、問題解決能力、人間関係能力、自己効力感、自尊感情などの個人特性であると主張した<sup>154</sup>。さらに、アグニューほか (Agnew, Brezina, Wright & Cullen, 2002) は、怒りや苛立ちによって、ある状況に反応する傾向が高く、かつ低いセルフコントロールを有している若者は、そうでない若者と比較してより緊張に対して犯罪行動として反応しや

---

<sup>146</sup> マートン (著) (森東吾・森好夫・金沢実・中島竜太郎 訳)『社会理論と社会構造』(みすず書房, 1961) 136 頁。

<sup>147</sup> 影山ほか・前掲注 82, 81-82 頁。

<sup>148</sup> 影山ほか・前掲注 82, 82 頁。

<sup>149</sup> 菊田ほか・前掲注 85, 25-26 頁。

<sup>150</sup> 藤本・前掲注 79, 66 頁。

<sup>151</sup> 藤本・前掲注 130, 111 頁。

<sup>152</sup> Clark, C. (2010). Emory Report. <[https://www.emory.edu/EMORY\\_REPORT/stories/2010/06/07/Robert\\_agnew\\_profile.html](https://www.emory.edu/EMORY_REPORT/stories/2010/06/07/Robert_agnew_profile.html)>. (2019.10.1) : アグニュー (Robert Agnew) は、1953 年にニュージャージー州アトランティックシティで生まれた。1975 年にラトガース大学で学士号、ノースカロライナ大学で 78 年に修士号、80 年に社会学の博士号を取得した。1980 年にエモリー大学に就職し、2006 年から 09 年まで社会学科長を務めた。また、2012 年から 13 年までアメリカ犯罪学会の会長を務め、2015 年にエドウィン・サザランド賞を受賞した。

<sup>153</sup> Agnew, R. (1992). A General Strain Theory. *Criminology*. 30(1), 60.

<sup>154</sup> Agnew・前掲注 153, 73-74.

すいと報告した<sup>155</sup>。ウォルシュ（Walsh, 2015 = 松浦, 2017）は、アグニューの偉大な業績は、人がどのように緊張に対処するのかとした点であると評価した<sup>156</sup>。

## 5) 下層階級文化理論

ミラー<sup>157</sup>（Miller, 1958）は、下層階級には独特な価値観に基づく文化があり、これらの文化は、政治・経済・法律機構を支えている中層階級の文化と異なるものであるが故に、下層階級の全生活様式の本質的な諸要素を含む一定の文化的関心に従うことは、中層階級の人々から反社会的だと評価され、犯罪や非行と定義づけされやすいと主張した<sup>158</sup>。藤本（1978, 2003）は、ミラーは下層階級に顕著な犯罪の発生過程をよく説明する点において高く評価されているが、その理論の特色は、犯罪や非行に直接的に影響を与えるものは、下層階級社会そのものであり、長い間につちかわれたその共同社会に固有な文化であるとした点にあると主張した<sup>159,160</sup>。菊田・西村（1989）は、サブカルチャーの理論を総じて、1）下層階級において犯罪発生率が高いことを説明してきた際に主に公式統計を利用したが、その後に行われた多くの実証研究では、逸脱行動の実行度は、下流階層に集中しているとはいえない。2）マートンのアノミー論に続く有効な理論として紹介されたが、日本社会に特有の青少年問題の根源（受験戦争からの脱落、一億総中流意識の実質的格差、家族制度にまつわる親族関係の軋轢など）を払拭できるのかと疑問を投げかけた<sup>161</sup>。

## 6) 副次文化理論

コーエン<sup>162</sup>（Cohen, 1966 = 細井, 1968）は、なぜ多くの非行がはっきりした目的や利益を持たず、むしろ、非功利的で、悪意のある、否定的なものにみえるかという視点から、非行は下層階級の少年たちが置かれている社会状況との関係において説明されなければならないと主張した<sup>163</sup>。リリーほか（Lilly, et al., 2011 = 影山ほか, 2013）によれば、コーエンは、学生時代にマートンやサザランドのセミナーを受講し大きな影響を受けたとされ

---

<sup>155</sup> Agnew, R., Brezin, T. Wright, J. P., & Cullen, F. T. (2002). Strain, Personality Traits and Delinquency: Extending General Strain Theory. *Criminology*. 40(1), 63-65.

<sup>156</sup> 松浦・前掲注 83, 328 頁。

<sup>157</sup> Arizona State University Gang Research at ASU. <<https://ccj.asu.edu/gangresearch>> (2019.10.1). : ミラー（Walter B. Miller, 1920 - 2004）は、フィラデルフィアで生まれた。シカゴ大学で人類学の修士号を取得し、1948 年ハーバード大学で人類学の博士号を取得した。Phi-Beta-Kappa の卒業生であった。1948 年から 53 年までフォックスインディアン応用人類学プロジェクトの一員として活動した。アリゾナ州立大学のホームページ等によれば、1957 年から 64 年まで、ボストンのロックスベリーギャング非行研究プロジェクトの責任者を務めたが、ジャズ、ブルース、ブルーグラスのミュージシャンであったことが若いギャング達との関係を築くの役に立った。

<sup>158</sup> 菊田ほか・前掲注 85, 25-26 頁。

<sup>159</sup> 藤本・前掲注 79, 66 頁。

<sup>160</sup> 藤本・前掲注 130, 111 頁。

<sup>161</sup> 菊田ほか・前掲注 85, 111-112 頁。

<sup>162</sup> 影山ほか・前掲注 82, 82 頁; American Sociological Association, Obituaries 2015. <[https://www.asanet.org/sites/default/files/savvy/footnotes/feb15/obit\\_0215.html](https://www.asanet.org/sites/default/files/savvy/footnotes/feb15/obit_0215.html)>. (2019.10.1) : コーエン（Albert K. Cohen, 1918 - 2014）は、ハーバード大学の学生だった時にマートン（Robert K. Merton）の専門科目を受講した。コーエンは 1 年後インディアナ大学に移り、そこでサザランド（Edwin H. Sutherland）が主催していたセミナーを受講した。そして、1942 年にインディアナ大学で社会学の修士号、1951 年にハーバード大学大学院でパーソンズ（Talcott Parsons）の指導の下で社会学の博士号を取得した。18 年間インディアナ大学で教鞭を執った後、コネチカット大学に移籍し、1988 年の退職まで社会学の教授を務めた。その間、1984 年から 85 年までアメリカ犯罪学会の副会長を務め、1993 年にエドウィン H. サザランド賞を受賞した。

<sup>163</sup> コーエン（著）（細井洋子 訳）『逸脱と統制』（至誠社, 1968）110 頁。

る<sup>164</sup>。藤本（1978, 2003）は、コーエンの理論は、そもそも非行副次文化の出現についての歴史的構築を意図したものであるのに、非行文化の起源についての歴史的資料が不足している等の批判がなされていることを紹介した。また、自らも、コーエンの理論は、キー・コンセプトである反動形成の概念を証拠立てるためにも、研究対象となった母集団の心理的特性に関するデータを必要とすると批判した<sup>165,166</sup>。

## 7) 潜在価値論と漂流理論

サイクス<sup>167</sup>・マッツァ<sup>168</sup>（Sykes & Matza, 1957）は、コーエンの非行副次文化理論を批判し、非行少年は支配的な規範、価値に指向しながらも、それらの規範からの逸脱行為を正当化し合理化する方法を知っていると主張した<sup>169</sup>。その方法として、責任の否定、実害の否定、被害者の否定、非難者への非難、より高い忠義への訴えという5つの「中和の技術」をあげた。そしてこれらの技術は個人が内面化している価値・規範を麻痺させ得るほど十分に強いものではないが、少なくとも社会統制の攻撃をかわすために何らかの助けになると主張した<sup>170</sup>。藤本（2003）は、マッツァとサイクスの非行中和技術の根本原理は、非行者と社会との関連において、その非類似性を強調する従来の伝統的視点から、逆に両者の類似性に着目するとした。そして、非行行動の説明は、より大きな社会の文化の伝統的価値観が正常な形においてではないにせよ、非行者にも認容されているのだとする点にあると述べた<sup>171</sup>。マッツァ（Matza, 1964 = 非行理論研究会, 1986）は、それまでの非行原因に関する実証主義的決定論に異を唱えながらも、古典学派のいうところの行為者の意思を考慮する、いわゆる「やわらかい決定論」によるべきであると主張した<sup>172</sup>。そして、非行少年は、ある時は非行行動へ、またある時は遵法的な行動へと、その時その時の状況において態度を決定するのであり、いわば、犯罪行動と遵法行動との間を漂流しているの

<sup>164</sup> 影山ほか・前掲注 82, 83 頁。

<sup>165</sup> 藤本・前掲注 79, 74 頁。

<sup>166</sup> 藤本・前掲注 130, 119 頁。

<sup>167</sup> American Sociological Association, Obituaries 2010. <<https://www.asc41.com/obituaries/2010obits.html>>. (2019.10.1). : サイクス (Gresham M' Cready Sykes, 1922 - 2010) は、ニュージャージー州で生まれ、1950年にプリンストン大学で修士号、1954年にノースウェスタン大学で社会学の博士号を取得した。1974年から88年まで、プリンストン、ダートマス、ノースウェスタンなどのいくつかの大学で教鞭を執った後、バージニア大学で社会学の教授となり、1980年にエドウィン H. サザランド賞を受賞した。

<sup>168</sup> University of California Berkeley, Sociology. <<http://sociology.berkeley.edu/david-matza-1960>>. (2019.9.30). : Sabri, I. (2019). The Daily Californian, (October 12, 2019). Pillar in the field of sociology: UC Berkeley professor emeritus David Matzo dies at 87. <<https://www.dailycal.org/2018/04/11/pillar-field-sociology-uc-berkeley-professor-emeritus-david-matza-dies-87/>>. (2019.10.1). : マッツァ (David Matza, 1930 - 2018) は、トルコ移民の父とギリシャ移民の母の間にニューヨーク州のハーレム地区で3人兄弟の末子として生まれた。両親は文盲であったが、教育熱心で同地区のユダヤ教教育センターで6年生まで勉強した。恩師に才能を認められ、1941年に両親とともにブロンクスに引っ越して公立学校で勉強を続けた。1953年から54年の間、現在のニューヨーク大学で社会学を学び、プリンストン大学で急進的な社会的・政治的運動について学び1955年に学士号を取得した。サイクスの影響で少年非行について博士論文を作成することを決めた。1957年から59年までテンプル大学で講師を務め、60年にシカゴ大学ロースクールで博士号を取得した。1961年からカルフォルニア大学パークレー校で教鞭を執り、終身名誉教授となった。また、マッツァは社会の自然現象としての逸脱に近づくことの重要性と逸脱した自己の展望ということを堅持し、社会の反応の観点から逸脱を研究したラベリング理論に強く反対した。

<sup>169</sup> Sykes, G. M. and Matza, D. (1957). Techniques of Neutralization: A Theory Delinquency. *American Sociological Review*, 22(6), 666-667.

<sup>170</sup> Sykes・前掲注 169, 667-669.

<sup>171</sup> 藤本・前掲注 130, 146 頁。

<sup>172</sup> マッツァ (著) (非行理論研究会 訳)『漂流する少年:現代の少年非行論』(成文堂, 1986) 7-16 頁。

で、犯罪行動を起こすときには、法律からの中和と悪事の中和を用いていると主張した<sup>173</sup>。ただし、翻訳者の上芝らは、司法に対して非行少年のもつ不正義印象に基づく腹立たしさや、非行少年たちが習慣的規範を受け入れている証拠として「非行は良くないことだ」と否定する意識は、後の研究者による調査で支持されなかったこと、及び中和については、ハーシの追試的研究で支持されているが、漂流や青少年期の非行逸話性に関して測定し得る変数を探し出し測定する必要があることを指摘している<sup>174</sup>。藤本（2003）は、マッツアの非行漂流概念は、測定可能なレベルのものではなく、その内容は、経験科学的な調査によって明らかにされる必要があるとの批判も成り立つであろうが、マッツアが、通常の文化的価値に潜む、因習的社会の仕組みにその基盤を持っていることは重要であると評価している<sup>175</sup>。

一方、ヴォルド・バーナード（Vold & Bernald, 1985 = 平野・岩井, 1990）は、マッツアの理論について、積極的な非行要因は、いかなる理論的な枠組みから見ても偶発的で測定できないのかもしれないが、非行の道からそれることも同じように偶発的で測定できないのかもしれないと批判している<sup>176</sup>。また、ウォルシュ（Walsh, 2015 = 松浦, 2017）は、中和理論の唯一の政策提言は、ラベリング理論のそれと全く反対であるとした。そして、例えば、犯罪者の監督責任を保持する刑事司法機関の職員（保護観察官）は、犯罪者が言い逃れしようとすることにに対して厳しく対処すべきである。もし犯罪者が自身の行為を合理化できると考えているのなら、矯正への取り組みは一層困難となるだろう。犯罪者自身の思考パターンが自らの長期的予後に悪影響を与えることを、犯罪者自身に知らせる必要があると主張した<sup>177</sup>。

## 8) 異質的機會構造理論

クロワード<sup>178</sup>・オーリン<sup>179</sup>（Cloward & Ohlin, 1960）は、個人が犯罪に陥るか陥らないかは、その人がどの程度非行副次文化に接触し、それを学習する機会と実際に非合法的な行為を遂行する機会に接近し得たか、あるいは反対に合法的な行動の学習と遂行の機会か

---

<sup>173</sup> 非行理論研究会・前掲注 172, 85-87 頁。

<sup>174</sup> 非行理論研究会・前掲注 172, 293 頁。

<sup>175</sup> 藤本・前掲注 130, 139 頁。

<sup>176</sup> 平野ほか・前掲注 126, 275 頁。

<sup>177</sup> 松浦・前掲注 83, 216 頁。

<sup>178</sup> Flanders, S. (Aug. 23, 2001). Richard Cloward, Welfare Rights Leader, Dies at 74. The New York Times, p.B9. <<https://www.nytimes.com/2001/08/23/nyregion/richard-cloward-welfare-rights-leader-dies-at-74.html>> (2019.10.1).: クロワード（Richard Andrew Cloward, 1926 - 2001）は、ニューヨーク州ロチェスターで女性権利活動家の母と急進的パブテスト派牧師の父との間に生まれた。第二次世界大戦中、アメリカ海軍少尉として従軍した後、1949年にロチェスター大学で学士号、1950年にコロンビア大学ソーシャルワークスクールで修士号を取得した。1951年から54年までアメリカ陸軍中尉として陸軍刑務所でソーシャルワーカーとして勤務し、1954年にコロンビアの社会福祉学部の助教授になって、ヘブライ大学、アムステルダム大学、カルフォルニア大学、アリゾナ大学で教鞭を執り、1958年にコロンビア大学で社会学の博士号を取得した。

<sup>179</sup> Fox, M. (Jan. 3, 2009), Lloyd E. Ohlin, Expert on Crime and Punishment, Is Dead at 90. The New York Times, p.A28. <<https://www.nytimes.com/2009/01/04/us/04ohlin.html>>. (2019.10.1).: オーリン（Lloyd Edgar Ohlin, 1918 - 2008）は、マサチューセッツ州ベルモントでスウェーデンの移民両親の元に生まれた。1940年にブラウン大学で学士号、42年にインディアナ大学で社会学の修士号を取得し、第二次世界大戦中はアメリカ陸軍に従軍した。1947年から53年まで、イリノイ州のパロール及び審議会の研究者として勤務し、朝鮮戦争中はジョージワシントン大学の人的資源研究室で朝鮮戦争捕虜収容所の状況を調査した。1953年から56年までシカゴ大学の矯正教育研究センターを指揮し、1954年にシカゴ大学で社会学の博士号を取得した。1956年にニューヨークソーシャルワークスクールに勤務し、後に研究センターの所長に任命された。

らどの程度遮断されていたかによって決定されると主張した<sup>180</sup>。ヴォルド・バーナード (Vold & Bernald, 1985 = 平野・岩井, 1990) は、クロワードとオーリンの理論に対する批判として、1) 合法的機会の欠如に関して、不公平感を持つような分別のある若者として、非行少年を描写している。2) 緊張の反応のなかで発展していく非行副次文化の3類型は、データによって支持されない。3) 緊張理論は、本来的に直感的な訴えに頼っており、科学的理論としては、その立証も否定も共に困難であることの3点を挙げた<sup>181</sup>。藤本 (1978, 2003) は、クロワードとオーリンは、個人を、合法的・非合法的機会に位置づけ、その機会のもつ合法的・非合法的手段への通路が、社会構造的差異によって異なる点を強調し、個人と社会構造へのダイナミックな関係において、犯罪現象を説明しようと試みた。ここにおいて、マートンのアノミー理論は、明確にシカゴ学派の伝統的な理論と結合したといえるのであり、1960年代までの犯罪理論の統合が、この異質的機会理論によって達成されたと評価した<sup>182,183</sup>。瀬川 (1990) は、アメリカ政府は、ケネディ大統領政権下の「貧困への挑戦」政策の一環として、オーリンらに少年非行対策の具体的施策の立案を依頼し、1961年の少年非行予防・取締法に結実させた。この趣旨に基づき、ニューヨーク市で「青少年動員計画 (Mobilization for Youth: MFY)」と呼ばれる青少年非行防止プログラムが実施された。さらに、ジョンソン大統領政権下での「偉大な社会」推進計画の中で「貧困との戦い」を宣言し、大規模な予算を投じたが、オーリンらの意図した合法的機会の拡大にはいたらず、失敗に終わったと述べた<sup>184</sup>。さらに、ヴォルド・バーナード (Vold & Bernald, 1985 = 平野・岩井, 1990) は、緊張理論が内包する政策的意味を現実世界で達成することは困難であるということを「貧困に対する戦い」の失敗が例証していると批判した<sup>185</sup>。一方、リリーほか (Lilly et al., 2011 = 影山ほか, 2013) は、MFYの指導陣は、機会の不平等を維持している政治機構を変革するため、学校ボイコットや貧困層の権利擁護の裁判闘争や選挙人名簿登録などの運動を推進したことから市職員と政治的対立を起こした。その間に不適切な基金運営の疑いでFBIの捜査を受け、オーリンとクロワードを含めた指導陣の解雇とプログラムの放棄という結果に終わったが、これを失敗と判断すべきか疑問を投げかけた<sup>186</sup>。

---

<sup>180</sup> Cloward, R. A., & Ohlin, L. E. (1960). *Delinquency and Opportunity*. The Free Press, New York.150.

<sup>181</sup> 平野ほか・前掲注 126, 226-228 頁。

<sup>182</sup> 藤本・前掲注 79, 86 頁。

<sup>183</sup> 藤本・前掲注 130, 130-131 頁。

<sup>184</sup> 瀬川 晃『犯罪学』(成文堂, 2009) 91 頁。

<sup>185</sup> 平野ほか・前掲注 126, 231 頁。

<sup>186</sup> 影山ほか・前掲注 82, 98-99 頁。

## 2 社会過程論的視点による研究

### (1) 社会過程の枠組み

#### 1) 文化葛藤理論

セリン<sup>187</sup> (Sellin, 1938 = 小川・佐藤, 1973) は、全く異質な文化の中に突然入り込んだ場合の規範同士の対立を「第一次的葛藤」、社会の変動が急激に生じた場合の対立を「第二次的葛藤」と呼んだ<sup>188</sup>。そして、犯罪を異常な行動とみなし、それは単に集団規範の違反に過ぎないともいえるが、一方で、異常な行動をとらせるような文化的要素と結合したパーソナリティのダイナミックな表現ともいえるから、パーソナリティの構造やその発展過程に焦点を合わせて、犯罪者を非犯罪者と区別する法則を発見することが重要であると主張した<sup>189</sup>。藤本 (2003) 及び瀬川 (1998) は、セリンがこのような主張をした背景には、自らが北欧からの移民であることの体験があったと説明した<sup>190,191</sup>。菊田・西村 (1989) は、セリンに対する批判の多くは、犯罪者は異なった規範に反応しているとする考えに集中しているが、これは、同じ規範に応じながらも、それらの規範と結びついた報酬の希少性が考えられるからであると述べた<sup>192</sup>。安香 (2008) は、対人関係という観点とはとられていないし、発想の源である「複数文化のぶつかりあい」という命題はまぎれもなく巨視的なものであるから、社会過程論に含めることができると述べた<sup>193</sup>。

#### 2) 異質の接触理論

サザランド<sup>194</sup>・クレッシー<sup>195</sup> (Sutherland & Cressey, 1970 = 高沢・所, 1974) は、犯罪行動は人間の行動であって、非犯罪的な行動と多くの点で共通のものを持っており、他の人間行動を説明するものに用いられるのと同じ一般的な枠組みの中で説明されなくて

<sup>187</sup> セリン (著) (小川太郎・佐藤勲平 訳)『文化葛藤と犯罪』(法政大学出版局, 1973) 138-140 頁: セリン (Thorsten Sellin, 1896 - 1994) はスウェーデンで生まれ、17歳の時に両親と一緒にカナダに渡った。19歳のときオーガスタナ大学で学士号を取得し、ペンシルベニア大学で社会学の修士号と博士号を取得した後、1922年から67年まで同大学で教鞭を執った。また、セリンは、犯罪統計の専門家で1944年に米国の統一刑事統計法の起草を助けたとされる。さらに、ペンシルベニア大学のホームページによれば、セリンは、1949年から51年まで国際刑事警察機構の事務総長、1956年から65年まで国際犯罪学会の会長を務めた。

<sup>188</sup> 小川ほか・前掲注 187, 125 頁。

<sup>189</sup> 小川ほか・前掲注 187, 47 頁。

<sup>190</sup> 藤本・前掲注 130 86 頁。

<sup>191</sup> 瀬川・前掲注 184, 96 頁。

<sup>192</sup> 菊田ほか・前掲注 85, 31 頁。

<sup>193</sup> 安香・前掲注 131, 131 頁。

<sup>194</sup> 安香・前掲注 131, 138 頁: サザランド (Edwin Hardin Sutherland, 1883 - 1950) は、カンザス州とネブラスカ州で育ち、1904年にサウスダコタ州スーフォールズ大学で歴史学の学士号、13年にシカゴ大学で社会学と経済学の博士号を取得した。40歳を過ぎてから、イリノイ大学でしばらく教鞭をとり、著書「Criminology」を出版した。その数年後、シカゴ大学に戻り、そこで数年間を過ごしたが、1935年(52歳)にインディアナ大学へ移り、新設された研究施設の長となり、1969年に主著「Principle of Criminology」の3版の中ではじめてこの理論を提起した。

<sup>195</sup> The New York Times, (July 28, 1987), Buy Reprints. Prof. Donald R. Cressey, 68, Expert on Sociology of Crime B6. <<https://www.nytimes.com/1987/07/28/obituaries/prof-donald-r-cressey-68-expert-on-sociology-of-crime.html>>. (2016.10.1).: クレッシー (Donald Ray Cressey, 1919 - 1987) は、ミネソタ州で生まれ、1943年にアイオワ大学で学士号、50年にインディアナ大学で社会学の博士号を取得した。カルフォルニア大学サンタバーバラ校で社会学を教えながら、ホワイトカラー犯罪の研究を続け、サザランドと共に30年間にわたって犯罪学の書籍を執筆した。退職後、ホワイトカラー犯罪の研究財団である金融犯罪防止研究所の所長、1966年から67年の間は、大統領の法執行及び司法管理委員会の組織犯罪に関する顧問を務めた。職業的詐欺に関する「詐欺の三角法」を発表した。

はならないと主張した<sup>196</sup>。その上で、犯罪は、社会組織に根差すものであり、またその社会組織の表現であるから、分裂した社会組織で多発する。そして、個々の犯罪行動は9つの過程を経て学習され、法律違反に対する意義付けの学習において、法律違反の否定がその肯定を超過するときに犯罪者となるという仮説を提唱した<sup>197</sup>。この理論は、アメリカ犯罪学におけるグラント・セオリー（藤本, 1978）<sup>198</sup>とされ、多くの研究がなされている反面、多くの批判もある。藤本（1978, 2003）は、重要な批判として、1）人は何故そのような異質的接触を持つに至ったのか。2）犯罪行動における人格的特性、人格的諸要素又は心理学の変数に関して、適切な注意を払っていない。3）個人の反応の型、あるいは感受性の型を考慮に入れていない。4）学習過程を単純化しすぎているという4点を紹介した<sup>199,200</sup>。また、瀬川（1998）は、本理論が妥当するのは少年非行とホワイトカラー犯罪であり、偶発的、激情的犯罪は説明できないこと、社会心理学的な側面が強く実証不可能なことが多いことなどの批判があるとした<sup>201</sup>。ただし、藤本（1978, 2003）は、異質的接触理論の価値は、犯罪行動を解明するに際し、従来の諸説のように生物学的あるいは心理学的な偏倚性という仮説に頼ることなしに、犯罪を正常な人間の正常な学習された行動として把握したことにあるといえようと評価していることに留意すべきである<sup>202,203</sup>。

### 3）異質的同一化理論

グレイザー<sup>204</sup>（Glaser, 1956）は、サザランドの異質的接触理論を多元的・統合理論として評価するとともに、それを、犯罪文化への単なる接触の経験だけではなく、接触した犯罪文化にどの程度自分をまきこませるかということが、犯罪行動を決定づけるとする異質的同一化理論を主張した<sup>205</sup>。藤本（2003）は、サザランドに対するグレイザーの批判の要点について、1）文化に接触するということと、それに同一化するということは別のことであり、同一化の概念をとり入れることによって犯罪文化に接触しながらも犯罪を行わない人がいることを説明できる。2）異質的接触理論は、犯罪一般ではなく、あるタイプの犯罪しか説明できないし、偶然の契機で犯罪をなしたものについての説明を困難にするが、同一化の概念を用いることによって、こうした欠点を補うことができるということに

<sup>196</sup> サザランド・クレッシー（著）（平野龍一・所一彦 訳）『犯罪の原因（犯罪学原論Ⅰ）』（有信堂, 1974）56頁。

<sup>197</sup> 平野ほか・前掲注 196, 64-65頁。

<sup>198</sup> 藤本・前掲注 79, 19頁。

<sup>199</sup> 藤本・前掲注 79, 19-21頁。

<sup>200</sup> 藤本・前掲注 130, 67頁。

<sup>201</sup> 瀬川・前掲注 184, 95頁。

<sup>202</sup> 藤本・前掲注 79, 21頁。

<sup>203</sup> 藤本・前掲注 130, 68-69頁。

<sup>204</sup> Sanders, R. (2013). Berkley News (March 1, 2013). Physics Nobelist and biotech pioneer Donald Glaser dies at 86. < <https://news.berkeley.edu/2013/03/01/physics-nobelist-and-biotech-pioneer-donald-glaser-dies-at-86/> > (2019.10.1). : グレイザー（Glaser Daniel, 1918 - 2017）は、ニューヨーク市で生まれ、1939年にシカゴ大学で学士号を取得し、第二次世界大戦で従軍した後、ドイツのアメリカ占領地で刑務官として勤務した。シカゴ大学に戻り1947年に修士号、54年に哲学の博士号を取得した。1954年から68年までイリノイ大学社会学部教授、学部長を経て、1968年から70年までラトガース大学教授、1970年から南カルフォルニア大学教授、1989年から上級研究員兼名誉教授を最後に引退した。また、1979年から80年までアメリカ犯罪学会の会長を務め、1976年にエドウィン H. サザランド賞、1990年にボルマー賞を受賞した。

<sup>205</sup> Glaser, D. (1956). Criminology Theories and Behavioral Images. *American Journal of Sociology*. 61, 438-439.

あると説明した<sup>206</sup>。しかし、諏訪（1959）は、グレイザーの主張する分化的同一化理論の論拠は一方法論として認め得るが、サザランド理論の根底はあくまでも「acquire through learning」であるのであって、この学習の理論展開をおし進めるためには、刺激—反応、そして洞察という作用によって考えていく方が明確にサザランドの理論を解明できるのであり、この方が効果的な統合的犯罪理論の準拠枠となり得ると思われると批判した<sup>207</sup>。一方、グレイザーは著書「Crime in Our Changing Society」（Glaser, 1978）において、異質的同一化理論に代えて「Differential Anticipation Theory（異質的期待理論）」を提唱した。そこでは、社会的絆、発達の学習及び機会の認知の結果として、犯罪を行うことによって得られる満足への期待が、それらの源泉から生じる好ましくない期待を超越したときは、人はいつでも、どこでも犯罪を行おうと試みると主張した<sup>208</sup>。藤本（2003）は、この理論について、機会の認知に焦点を当てたクロワードとオーリンの緊張理論と、異質的学習に焦点を当てたサザランドの学習理論、それに社会的絆に焦点を当てたハーシの社会的絆理論の統合が試みられていると言ってよいであろうと評価した<sup>209</sup>。

#### 4) 社会的学習理論

バートル夫妻（Bartol & Bartol, 2005 = 羽生ほか, 2011）は、ジェフエリーの主張直後にバージェスとエイカーズが賛同し、さらに犯罪行動がオペラント条件付けを通じて獲得、維持されるという主張をしたと紹介した<sup>210</sup>。

バージェス<sup>211</sup>・エイカーズ<sup>212</sup>（Burgess & Akers, 1966）は、サザランド理論を社会的学習理論の中に位置づけ、犯罪行動の行動型が非犯罪行動のそれとは異なる弁別刺激となり、かつ、それに対する反応に、学習者にとって正の強化が与えられるような強化随伴性を持つとき、その犯罪行動型は学習者に定着するとした。また、こうした学習は、対人接触の中でも、対人接触がない非社会的状況の中でも起き、強化の量や頻度などによって犯罪行動型の強度が決定され、弁別の際にどのようなルールや規範が適用されるかによって、犯罪行動型の質や方向性が決定されると主張した<sup>213</sup>。齊藤（2014）は、エイカーズは、指導教授のクイニー（Quinney R.）が異質的接触理論の再評価について研究していたこともあって、異質的接触理論における学習の要素について、より科学的で客観的な説明ができないかという疑問を持っていたとした。そこで、当時大学で同僚だったバージェスがオペ

<sup>206</sup> 藤本・前掲注 130, 73 頁。

<sup>207</sup> 諏訪源四郎「Daniel Glaser の犯罪理論と行動のイメージ」家庭裁判所月報 11 巻 9 号（1959）70 頁。

<sup>208</sup> Glaser, D. (1978). *Crime in our changing society*. Holt, Rinehart and Winston. 126-128.

<sup>209</sup> 藤本・前掲注 130, 78 頁。

<sup>210</sup> 羽生ほか・前掲注 89, 172 頁。

<sup>211</sup> American Sociological Association. <<https://www.asanet.org/ernest-w-burgess.>>. (2019.10.1) : バージェス (Ernest Watson Burgess, 1886 - 1966) は、オンタリオ州でカナダ系アメリカ人として生まれた。オクラホマのキングフィッシャーカレッジから、シカゴ大学へ進み、大学院で研究を続け、1916 年にシカゴ大学社会学助教授、27 年に教授となった。また、1934-35 年にアメリカ社会学会の会長を務めた。

<sup>212</sup> Bernard, T. J. Encyclopedia Britannica. <<https://www.britannica.com/biography/Ronald-L-Akers.>> (2019.10.1). エイカーズ (Ronald Louis Akers) は 1939 年にインディアナ州ニューアルバーニで生まれた。1966 年にケンタッキー大学で社会学の博士号を取得した。1965 年から 72 年までワシントン大学で社会学を教え、1972 年から 74 年までフロリダ大学で犯罪学の教授、1974 年から 80 年アイオワ大学、1980 年から 85 年までフロリダ大学でそれぞれ社会学科長を務め、1994 年に研究センター所長になった。また、1978 年から 79 年まで、ジェフエリーの後任としてアメリカ犯罪学会会長を務め、1988 年にエドウィン H. サザランド賞を受賞した。

<sup>213</sup> Burgess, R. L., & Akers, R. L. (1966). Differential association-reinforcement theory of criminal behavior. *Social Problems*, 14 (2), 128-147.



ラント条件づけを専門とし、エイカーズが犯罪学を専門とするという学問的背景のもとに提唱した理論が、異質的接触強化理論であると説明した<sup>214</sup>。齊藤（2014）は、ジェフェリー（1965）及びバージェスとエイカーズ（1966）の違いについて、バージェスとエイカーズは、1）サザランドの9つの命題をなぞって改定を明確にした。2）周囲の仲間の反応などの社会的報酬の重要性を強調している。3）報酬の要素と嫌な要素とのバランスをより強調したことの3点を挙げた。さらに、ジェフェリーの1965年の論文、バージェスとエイカーズによる1966年の論文は、いずれも思弁的な理論提唱にとどまり、データによる実証的検討はなされていないと指摘した<sup>215</sup>。エイカーズほか（Akers, Krohn, Lanza-Kaduce & Radosevich, 1979）は、アメリカ中西部の3つの州における3千人を超える青少年をサンプルとした飲酒行動と薬物行動に関する調査を行った。そして、逸脱行動の社会的学習理論は、異質的接触、異質的強化、意味付与及び模倣という変数によって多くを説明できることが強く支持されると主張した<sup>216</sup>。齊藤（2014）は、学習理論以外の理論では容易に対抗できないような統計的な説明力の高さが得られ、従来の異質的接触強化理論という名称は廃止され、社会的学習理論が提唱されたと評価した<sup>217</sup>。さらに齊藤（2014）は、社会的学習理論は、バンデュラ（Bandura）の影響を受けて模倣・モデリングという要素を追加したことであること及び集団内のプロセスだけではなく、地域社会の構造的な要素も取り入れていることが異質的接触強化理論との大きな違いであると評価した<sup>218</sup>。一方、ウォルシュ（Walsh, 2015 = 松浦, 2017）は、社会的学習理論は、異なる環境に取り込まれ、ついには犯罪者にまで成り果てる受動的人間を想定したり、異なる環境の暴露のみで犯罪行動を説明したりしており、つまりは環境に付随する個人差を無視していると批判した<sup>219</sup>。

## （2）ラベリング理論

菊田・西村（1989）は、犯罪非行理論としてのラベリング理論は、犯罪者、非行者の生成と、犯罪、非行生活の深まりを、ラベル付けに象徴される相互作用的社会過程から分析する理論であると説明している<sup>220</sup>。藤本（2003）は、ラベリング論と普通呼ばれているものは、厳密に言えば、理論というよりも一つの概念的枠組みであり、ラベリング理論の内容も、これを説く学者によって様々であるとした。さらに、ラベリング論は、既成の伝統的な価値観が揺らぎ始めた当時においては新鮮なものとして受け止められたが、ラベリング論は、理論ではなく単なる視点の転換に過ぎないと批判した<sup>221</sup>。安香（2008）は、ラベリング論は、民族的構成や経済的階級など種々の点で複雑な米国社会での法規制におけるさまざまな問題に関連して、直ちに取り上げられて、体制批判の論拠とされたことも多か

<sup>214</sup> 齊藤知範「犯罪行為が学習される？」岡邊 健（編）『犯罪・非行の社会学—常識をとらえなおす視座』（有斐閣ブック, 2014）141頁。

<sup>215</sup> 齊藤・前掲注 214, 142頁。

<sup>216</sup> Akers, R. L., Krohn, M. D., Lanza-Kaduce, L., & Radosevich, M. (1979). Social Learning and Deviant Behavior: A Specific Test of a General Theory. *American Sociological Review*, 44(4), 651.

<sup>217</sup> 齊藤・前掲注 214, 142頁。

<sup>218</sup> 齊藤・前掲注 214, 143頁。

<sup>219</sup> 松浦・前掲注 83, 198頁。

<sup>220</sup> 菊田ほか・前掲注 85, 48頁。

<sup>221</sup> 藤本・前掲注 130, 168頁。

ったようだとした。そして、我が国でもある時期、少年司法手続きの存在自体がむしろ少年非行を作り出す源であるかのような論議がなされたが、複数の研究者の実証研究によって、我が国の法制度の偏りなどの存在はほぼ否定されているとみられていると説明した<sup>222</sup>。リリーほか (Lilly, et al., 2011 = 影山ほか, 2013) は、2000 年ころから、受刑者再入の問題に手をつけずに、烙印付けする再統合の政策を遂行していくことが、累犯を深化させ、公共の安全に脅威をもたらすとの認識が高まってきたとした。そして、少なくともラベリング理論は、刑事司法の制裁の効果は複雑であり、常識で考えるのと異なり得るということを警告したという点で有意義であると評価した<sup>223</sup>。

### 3 高齢者の犯罪行動の視点による検討

社会構造論的視点による理論は、アイゼンク、ジェフェリー、ゴットフレッドソン・ハーシ、ウィクストラムが批判するように、同じ社会構造に置かれても犯罪を行わない人々がいることに目を向けていない。また、リリーほか (Lilly et al., 2011 = 影山ほか, 2013) の主張のとおり、社会構造論は、当時のアメリカにおける社会経済的混乱や政治的混乱が背景にあり、理論家がたどった人生経験も大きく影響していると思われる。しかたがって、我が国の高齢者の犯罪行動の原因としてそのまま受け入れることは難しい。一方、社会過程論的視点による理論は、我が国の高齢者の犯罪行動においても一つの要因として考慮すべきであると考え。特に、サザランドとクレッシーがいう、「犯罪行動は人間の行動であって、非犯罪的な行動と多くの点で共通のものを持っており、他の人間行動を説明するものに用いられるのど同一の一般的な枠組みの中で説明されてはならない。」という主張は注目すべきである。このような考え方をしなければ、犯罪行動と犯罪行動からの離脱・立直りという同一人物の行動を同一の理論で説明することができない。しかし、サザランドとクレッシーは、ジェフェリーが批判するように環境に反応する個々の人間の違いに視点を当てていない。また、マッツアとサイクスが中和の理論として青少年の行動特性として述べていることは、万引きで検挙された高齢者にも当てはまる。それは、動機について「つい、魔が差して。」という供述をすることである。これをその場を繕う嘘あるいは言い訳と捉えてしまえばそれまでだが、ウィクストラムの主張どおり「万引きのような軽微な犯罪は習慣であり、そこには規範意識が働いていない。」と考えれば、全く矛盾しない。つまり、犯罪は規範意識が低い者が犯すという単純なことではなく、規範を知識として理解していても犯罪行動をしてしまうことがあるということである。自分でも説明できないような行動はどのように身に付くのだろうか。

---

<sup>222</sup> 安香・前掲注 131, 147-148 頁。

<sup>223</sup> 影山ほか・前掲注 82, 174-175 頁。

## 第2節 個人の犯罪性向の形成時期に関する研究の概観

### 1 生物社会学的視点からの研究

#### (1) 古典的研究

##### 1) ロンブローゾ<sup>224</sup>の研究

この分野の論説で最初にあげられるのはロンブローゾの生来犯罪人説である。ヴォルド・バーナード (Vold & Bernald, 1985 = 平野・岩井, 1990) によれば、ロンブローゾは、実証犯罪学の真の基礎は、多元的原因という考えに基づく犯罪行動の原因の究明であるから、ロンブローゾを実証犯罪学の創設者とするには、少し変則的であるとされる。その理由として、1876年に出版された「犯罪人」の中で、隔世遺伝による犯罪者という理論によって、主に知られたことで運命づけられたとする。しかし、ロンブローゾの考え方は、年齢とともに変化し、生物学的要因よりもむしろ環境的要因に目を向けるようになったとされる<sup>225</sup>。バートルほか (Bartol & Bartol, 2005 = 羽生ほか, 2011) によれば、ロンブローゾの業績は娘のジーナ (Gina Lombroso) によってまとめられ、最終的には環境要因がある特定のタイプの犯罪の深化において重要であると認めるに至ったとされている<sup>226</sup>。また、リリーほか (Lilly, et al., 2011 = 影山ほか, 2013) は、ロンブローゾは、犯罪者を更生させて正常な市民として社会に復帰させる可能性に気づいており、また、それを支持していたと述べている<sup>227</sup>ことに留意すべきである。

##### 2) ゴーリング<sup>228</sup>の研究

ゴーリング (Goring, 1913) は、ロンブローゾの研究を、手法は劣悪かつ無計画で、結果を自分が望むように歪曲して解釈したと厳しく批判した。そして、刑務医官という立場で 3,000 人以上の英国人犯罪者と多数の英国人非犯罪者の集団を比較した研究の結果を基に「The English Convict: A Statistical Study」を著した<sup>229</sup>。犯罪者と英国工兵隊の兵士を比較して頭部の突起や身体的特徴に統計上有意な差はない。また、犯罪者を罪種別にグループ分けし、37 の特殊な身体的特徴について比較したが罪種別の犯罪者間に有意な差はなく、あったとしても環境要因の選択効果との関連から生じたものでしかなかったと報告した<sup>230</sup>。ただ、終始一貫して、犯罪者は、同じ職種グループの非犯罪者よりも身長と体重

<sup>224</sup> 平野ほか・前掲注 126 頁：ロンブローゾ (Cesare Lombroso, 1835 - 1909) は、ヴェネツィアのユダヤ人家庭に生まれ、精神医学の専門家となった。チューリン大学での学研生活が、彼の主たる経歴であった。

<sup>225</sup> 平野ほか・前掲注 126, 42 頁。

<sup>226</sup> 羽生ほか・前掲注 89, 87 頁。

<sup>227</sup> 影山ほか・前掲注 82, 45 頁。

<sup>228</sup> Driver, E. (1957). Pioneers in Criminology XIV--Charles Buckman Goring (1870-1919). *Journal of Criminal Law and Criminology*, 47(5), 515-525. : ゴーリング (Charles Buckman Goring, 1870 - 1919) は、ロンドン大学で教育を受け、1893年に心理学と論理哲学で学士号、95年に修士号、1903年に医学の博士号を取得した。1902年から亡くなった19年まで、様々な英国の刑務所で医務官として従事した。

<sup>229</sup> Goring, C., (1913 = 2016). *The English Convict: A Statistical Study*, Wentworth Press 126.

<sup>230</sup> Goring・前掲注 229, 173.

の劣等性が見られたことを報告した<sup>231</sup>。ヴォルド・バーナード (Vold & Bernald, 1985 = 平野・岩井, 1990) は、ゴーリングの研究について、有罪者のグループと犯罪をしていない人々のグループの厳密な比較であり、それゆえ生来的犯罪者と犯罪傾向をもった人と、普通の人という区別をしたわけではないとした。そして、方法論的には、身体的、精神的特徴の客観的な測定法を用いることに終始したと解説した<sup>232</sup>。この点に関し瀬川(1989)は、ゴーリングは、体格が劣っていることのほか、知能的欠陥と道徳的欠陥があると指摘し、これらが遺伝によると認めていたことは見逃すべきではない。ゴーリングは、当時の社会的ダーウィニズムや優生学運動に強い影響を受けており、悪しき者の排除により国民の質を高め、大英帝国の権威を復活させることを目指していたとした。また、この研究に協力していた統計学者ピアソンも過激な優生学者であると紹介し、ゴーリングとロンブローゾの基本的立場に大きな隔たりはなく、ゴーリングも犯罪人類学の流れを出るものではないと批判した<sup>233</sup>。

### 3) ゴダート<sup>234</sup>の研究

瀬川(1989)は、ゴダート (Goddart, 1912) は、カリカック一族の遺伝による家族性の精神欠陥について出版し、その後、ダクデールのデューク一族の追跡調査を行ったと紹介した<sup>235</sup>。そして、1914 年に行われたゴダートの調査は内容の不完全さや追試報告によって根拠を失ったほか、近年になって著書に使用した写真の被写体に修整が加えられていることが明らかにされているとした<sup>236</sup>。また、ゴダートは、当初、知能と犯罪の関連性を強調したが、後に自らの調査が正確性を欠いていたことを認めたこと及び知能が純粋に遺伝的なものでなく、少なくとも教育によって改善が可能であるとして自らの見解を改めたことを批判した<sup>237</sup>。ヴォルド・バーナード (Vold & Bernald, 1985 = 平野・岩井, 1990) は、第一次世界大戦時の受刑者と徴兵された者の知能検査では、2つの集団間に有意差はないとされるなど、一連の研究から、犯罪行動を説明するための基礎として、精神薄弱を考える立場はほとんど消滅した。しかし、1970 年代には、特に非行少年に関して再び支持されるようになったと批判的に解説している<sup>238</sup>。一方、ウォルシュ (Walsh, 2015 = 松浦, 2017) は、IQ と犯罪との関連が強力であることが研究で確かめられていると主張した<sup>239</sup>。

<sup>231</sup> Goring・前掲注 229, 200.

<sup>232</sup> 平野ほか・前掲注 126, 59 頁。

<sup>233</sup> 瀬川・前掲注 184, 62 頁。

<sup>234</sup> Encyclopedia Britannica, Goddard, Henry H. (1866–1957). <<https://www.encyclopedia.com/education/encyclopedias-almanacs-transcripts-and-maps/goddard-henry-h-1866-1957>> (2019.10.14). : ゴダート (Henry Herbert Goddard, 1866 - 1957) は、メイン州の牧畜農家で熱心なクエーカー教徒の両親の下に生まれたが、ゴダートが9歳のとき父が亡くなり、1877年に寄宿学校に入学した。1886年ハバフォード大学で学士号を取得し、南カルフォルニア大学でフットボールチームのコーチを務めながら、臨時でラテン語、歴史と植物学を教えた。1889年にハバフォード大学で数学の修士号を取得し、その年から91年までオハイオ州のクエーカー校の校長、93年にオークグローブセミナーの校長を務めた。クラーク大学で1899年に心理学の博士号を取得した後、ペンシルベニア州立の普通高校で教え、1906年から18年まで、ニュージャージー州の精神薄弱児の研究ディレクターを務めた。1918年にオハイオ州青少年研究局の局長に就任し、22年にオハイオ大学の異常臨床心理学科の教授になり、38年に引退するまでその職に就いた。1943年にオハイオ大学の名誉教授、46年にペンシルベニア大学の名誉教授となった。

<sup>235</sup> 瀬川・前掲注 184, 176 頁。

<sup>236</sup> 瀬川・前掲注 184, 178 頁。

<sup>237</sup> 瀬川・前掲注 184, 238 頁。

<sup>238</sup> 平野ほか・前掲注 126, 81 頁。

<sup>239</sup> 松浦・前掲注 83, 253 頁。

#### 4) フートン<sup>240</sup>の研究

ヴォルド・バーナード (Vold & Bernald, 1985 = 平野・岩井, 1990) は、ハーバード大学の人類学者フートン (Hooton, 1939) は、豊かな財政力で受刑者 14,000 人、非犯罪者 3,000 人を対象とした大規模で精巧な測定や分析による調査でゴーリングの研究を再検討したと紹介した<sup>241</sup>。さらに、フートンの用語は明確であり、要点をついているとしながら、1) 犯罪者と非犯罪者の身体的な差を犯罪者群の劣等性の証拠とする論理性が循環論法である。2) 犯罪者と非犯罪者との差と同程度の、ないしはそれ以上の差を多くの面で発見しておきながら、無視している。また、身体的な劣等性は遺伝によると主張したが、その証拠をほとんど示さなかった。3) 罪種別の記述をするにあたって、調査した受刑者の少なくとも半数には過去に収容歴があり、その人々の前回収容時の罪種は今回調査時の罪種とは多くの場合異なっているという事実を無視したと批判した<sup>242</sup>。

### (2) 遺伝的研究

#### 1) 双生児研究

レーン<sup>243</sup> (Raine, 1993) は、13 の双生児研究をまとめた統計をレビューし、犯罪への一致率が二卵性双生児では 20.6%であるのに対し、一卵性双生児では 51.1%であり、これは犯罪に及ぼす遺伝的影響が本質的に存在していることを示していると主張した<sup>244</sup>。

また、バートル夫妻 (Bartol & Bartol, 2005 = 羽生ほか, 2011) は、双生児研究のデータは、遺伝を犯罪の重要な構成要素と考えることは賢明だろうということを明確に示しているとする。一方、ほとんどの初期の双生児の一致率研究は、犯罪行動を明確に定義していなかったか、あるいは大部分は非暴力的な犯罪行為を使用していると指摘した<sup>245</sup>。

<sup>240</sup> Garn, S. M., & Giles, E. (1995). National Academy of Sciences, Ernest Albert Hooton 1887-1954. <[www.nasonline.org/publications/biographical-memoirs/memoir-pdfs/hooton-earnest.pdf](http://www.nasonline.org/publications/biographical-memoirs/memoir-pdfs/hooton-earnest.pdf)> (2019.10.1). : フートン

(Ernest Albert Hooton, 1887 - 1954) は、イギリス人でメソジスト教会の神父であった父とカナダ人の母の間にウィスコンシン州クレマンズビルで生まれた。両親は学問を重視し 3 人の子供全てを大学卒業させた。フートンは小柄で近眼だったことから幼少期から学者を目指した。19 歳でローレンスカレッジを卒業し、1911 年にウィスコンシン大学で考古学の博士号を取得した。その後、ロードス奨学金を受けてオックスフォードで研究し、1912 年に人類学の博士号を取得した。1913 年にハーバード大学の教授に就任し、40 年間勤務した。

<sup>241</sup> 平野ほか・前掲注 126, 61 頁。

<sup>242</sup> 平野ほか・前掲注 126, 61-63 頁。

<sup>243</sup> University of Pennsylvania School of Arts and Sciences, Department of Criminology. <<https://crim.sas.upenn.edu/people/adrian-raine>> (2019.10.1). : レーン (Adrian Raine) は、1954 年にイギリスで生まれた。1977 年にオックスフォード大学で実験心理学の学士号を取得し、82 年にヨーク大学で心理学の博士号を取得した。その後、イギリスの刑務所に心理職として勤務し、1984 年にノッティンガム大学精神科の行動科学の講師、86 年にモーリシャスチャイルドヘルスプロジェクトのディレクターに任命された。1987 年にアメリカに移住し、南カリフォルニア大学で心理学の助教授、90 年に准教授、99 年に Robert G. Wright 心理学教授の地位を得た。2007 年にペンシルベニア大学の犯罪学及び精神医学の教授、Penn Integrates Knowledge 教授も務めた。英国心理学会の若手心理学者賞 (1980)、精神衛生研究所の研究科学者開発賞 (1993)、精神衛生研究所の独立科学者賞 (1999)、ジョセフ・ズビン記念賞 (1999 年) 及び USC の準会員賞 (2003 年) を受賞した。2007 年から実験犯罪学アカデミー会員、11 年からアメリカ心理学会会員である。

<sup>244</sup> Raine, A. (1993). *The psychopathology of crime: Criminal behavior as a clinical disorder*. San Diego, CA: Academic Press.79.

<sup>245</sup> 羽生ほか・前掲注 89, 99 頁。

一方、ダッジ<sup>246</sup>・パティ (Dodge & Petti, 2003) は、特定の遺伝子が、発達上、行為の問題に特別の関連があるかもしれないが、ほとんどの問題行動にとって遺伝的な基盤は、遺伝子の組み合わせを反映しており、それは人生の異なる時点で様々な方法で発現するようである。しかし、環境要因もまたその行動の形成に顕著な役割を果たしていると主張した<sup>247</sup>。

## 2) 養子研究

メドニック<sup>248</sup>・ハッチングス (Mednick & Hutchings, 1983) は、デンマークで 1927 年から 47 年までに養子とされた 1 万 4,427 人に対する有罪判決歴を、その実父母と養父母の有罪判決記録を比較した<sup>249</sup>。その結果、実父母のどちらかに有罪判決が下されているならば、養子 (実子) が有意に増加することが判明し、実父母と養子の犯罪の種類は関係がなく、子供は実親の犯罪のことを知っていたという証拠はなかったとした。このことから、メドニックとハッチングスは、犯罪者の親から遺伝した何らかの要因が、子供の犯罪行動を増加させたのだらうと主張した<sup>250</sup>。また、ライト・カレン (Wright & Cullen, 2012) は、生物社会学的犯罪学は、犯罪学を科学と実証的観察に根付いた学問へと発展させ、多様な学際領域や研究方法学へと連結させることを可能にすると主張した<sup>251</sup>。さらに、ウォルシュ (Walsh, 2015 = 松浦, 2017) は、これまでの遺伝行動学が指摘しているのは、G (Gene) × E (Environment) という遺伝・環境相互作用研究の重要性である。犯罪学者はある程度の遺伝学を習得する必要性に迫られていると指摘した<sup>252</sup>。そして、生物社会学的研究は、伝統的理論の概念の基盤を成すメカニズムを説明しうる堅実な科学的根拠を提示していると評価する一方、反社会的行動における強力な遺伝的負因を抱えているのは、思春期以前から非行を始め、ライフ・コースにわたって犯罪行為を持続させる、慢性的犯罪者のみであると主張した<sup>253</sup>。また、人の全ゲノム配列が解明され、我々が思考したり行

---

<sup>246</sup> Duke Sanford School of Public policy, Faculty Kenneth A. Dodge, <<https://sanford.duke.edu/people/faculty/dodge-kenneth>> (2019.10.15). : ダッジ (Kenneth A. Dodge) は、1954 年生まれでイリノイ州シカゴで育った。1975 年にノースウェスタン大学で心理学の学士号、1978 年にデューク大学で心理学の博士号を取得した。インディアナ大学、コロラド大学、ヴァンダービルト大学で教壇に立ち、現在は、デューク大学の早期学習政策研究の Pritzker 教授兼心理学と神経科学の教授であり、デューク大学児童家族政策センターの創設者でもある。400 を超える科学論文を発表しており、チャイルドマインド研究所優秀科学者賞、国際侵略研究学会 JP スコット賞、国立衛生研究所上級研究科学者賞を受賞した。また、2003 年に「最も引用されている科学者」として Web of Science によって認められた。

<sup>247</sup> Dodge, K. A., & Pettit, G. S. (2003). A biological model of the development of chronic conduct problems in adolescence. *Developmental Psychology*, 39, 351.

<sup>248</sup> Bell, S. (2015) In memoriam : Sarnoff Mednick, 87. <<https://news.usc.edu/80381/in-memoriam-sarnoff-mednick-87/>> (2019.10.1). : メドニック (Sarnoff A. Mednick, 1928 - 2015) は、優生学の時代に続いて遺伝学に対する反発の後に精神障害の遺伝的基礎を再検討した最初の科学者であった。ニューヨーク州ブロンクスでユダヤ人移民の両親のもとに生まれ、1948 年にニューヨーク市立大学で学士号、コロンビア大学で修士号を取得した後、ノースウェスタン大学のアンダーウッド (Benton J. Underwood) の下で 1954 年に心理学の博士号を取得した。シカゴ大学のポストドク研究員からハーバード大学の講師に任命され、1958 年にカルフォルニア大学バークレー校の客員研究助教に就任した。1968 年にニューヨークの社会調査のための新設校の教授に就任し、1977 年から 2008 年の退職までに南カルフォルニア大学の教授として教壇に立った。

<sup>249</sup> Mednick S. A., Gabrielli W. F., & Hutchings B. (1983). Prospective Studies of Crime and Delinquency, *Journal of Criminal Law and Criminology*, 74(1), 252-253.

<sup>250</sup> Mednick et al.・前掲注 249, 264-268.

<sup>251</sup> Wright, J. P., & Cullen, F. T. (2012). The Future of Biosocial Criminology: Beyond Scholars' Professional Ideology. *Journal of Contemporary Criminal Justice*, 28(3), 237.

<sup>252</sup> 松浦・前掲注 83, 286 頁。

<sup>253</sup> 松浦・前掲注 83, 285 頁。

動したりするときに脳でどのようなことが起こっているのかを画像化できる技術が進歩してきた。このような理由にその他の要因も付随し、生物社会学的研究は一気に犯罪学に應用されるようになったと主張し<sup>254</sup>。さらに、リリーほか（Lilly, et al., 2011 = 影山ほか, 2013）は、犯罪学者が、彼らの生物学的理論化に対するイデオロギー嫌いを断念すべき時期がやってきたことは明白であると主張した<sup>255</sup>。

## 2 心理学的視点からの研究

### （1）精神分析

精神分析学の父とされるフロイト（Sigmund Freud）は、人間は生まれつき攻撃的なエネルギー増加の影響を受けやすく、それが危険な水準に達する前に発散又は消耗させなければならぬと確信していた<sup>256</sup>。また、ヴォルド・バーナード（Vold & Bernald, 1985 = 平野・岩井, 1990）は、フロイト自身は犯罪行動について詳しく議論しているわけではないが、少なくともある種の人々は、常に罪悪感や不安感をもたらす肥大化した超自我（スーパーエゴ）をもつゆえに、犯罪行動を行うと示唆していると述べている<sup>257</sup>。精神分析理論は、フロイトの後継者であるアドラー、ユング、アイヒホルンなどによって展開された<sup>258</sup>。

菊田・西村（1989）は、精神分析理論によれば、何らかの理由によってエゴの現実吟味力が弱まったり、スーパーエゴの形成が不十分であったりする場合に犯罪は生じると考えられ、人は正常、神経症的、犯罪的等と分かれることになり、すべては精神内界における問題となると述べている<sup>259</sup>。一方、アイゼンク（Eysenck, 1986 = 宮内ほか, 1988）は、フロイトの精神分析論を科学的根拠がないとして厳しく批判した<sup>260</sup>。

### （2）体型とパーソナリティに関する研究

#### 1) クレッチマー<sup>261</sup>の研究

クレッチマー（Kretschmer, 1925 = 齊藤, 1944）は、人間の体格は、衰弱型、力士型、肥満型に分けることが可能である。また、性格は内分泌系の発達によって循環気質と分裂気質に分けることが可能であり、それぞれの体格と気質が結びつく可能性が高いと主張した<sup>262</sup>。そして、循環気質は、社交的、開放的、明朗快活な一方、静かで落ち着いたところ

---

<sup>254</sup> 松浦・前掲注 83, 279-280 頁。

<sup>255</sup> 影山ほか・前掲注 82, 391 頁。

<sup>256</sup> クインダス（著）（福本修 監訳）『フロイトを読む一年代順に紐解くフロイト著作一』（岩崎学術出版社, 2013）242-244 頁。

<sup>257</sup> 平野ほか・前掲注 126, 124 頁。

<sup>258</sup> 平野ほか・前掲注 126, 127 頁。

<sup>259</sup> 菊田ほか・前掲注 85, 34-35 頁。

<sup>260</sup> アイゼンク（著）（宮内勝、中野明德、藤山直樹、小澤道雄、中込和幸、金生由紀子、海老沢尚、岩波明 訳）『精神分析に別れを告げよう—フロイト帝国の衰退と没落』（批評社, 1988）25 頁。

<sup>261</sup> 『20 世紀西洋人名辞典』（日外アソシエーツ, 1995）483 頁：クレッチマー（Kretschmer Ernst, 1888 - 1964）は、ドイツで生まれ、ミュンヘン大学で医学を学び、躁うつ病に関する論文で博士号を取得した。第一次世界大戦では、軍医を努め、1926 年マールブルク大学精神神経科教授、1946 年から 59 年の間チュービンゲン大学教授だった。

<sup>262</sup> クレッチマー（著）（スプロット = 齊藤良象 訳）『體格と性格』（肇書房, 1944）156 頁。

があり、この特徴の持ち主には、肥満型の体格が多い<sup>263</sup>。分裂気質は、非社交的、内閉的、きまじめ、敏感な部分と鈍感な部分を持ち合わせ、細長型、力士型に多く見られると主張した<sup>264</sup>。クレッチマーの主張を基にした実証研究は我が国でも行われ、吉益（1952）<sup>265</sup>や中田（1987）<sup>266</sup>によって従来の研究とある程度一致する報告がなされた。ヴォルド・バーナード（Vold & Bernald, 1985 = 平野・岩井, 1990）は、クレッチマーの1955年のドイツ語版の著書について、「体質型と犯罪」という章では、4,414例の統計分析に基づいているとしながら、詳細な統計的分析は示されず、言語的な一般化と主張の形をとっていること及び単にある種の体形がある種の犯罪者層に多いという全般的な傾向を述べているにすぎないとした。さらに、精神病の治療を受けていない非犯罪者層のサンプルと特別に比較されているわけでもない、それゆえこの方法では、どの違いが、どの特定の型が、調査された犯罪者に特有のものかを決定することはできないと批判した<sup>267</sup>。

## 2) シェルドン<sup>268</sup>の研究

シェルドン・スチーブンス（Sheldon & Stevens, 1942 = 1970）は、クレッチマーの体格類型を当てはめる調査を行った結果、いずれの類型にも属さない対象者が多数生じたことから、対応する身体と気質の類型を胎生学や発達生理学で知られている事実を取り入れて独自の類型学を作り上げた<sup>269</sup>。内胚葉からは消化器系が発生し、中胚葉からは骨、筋肉や運動器官系の腱が発生し、外胚葉からは神経系の結合組織や皮膚及びそれらの附属組織が発生すると考えた。そして、それぞれの器官の発達によって、内胚葉型は太っている、中胚葉型は筋骨が発達している、外胚葉型はやせている者が多いとした<sup>270</sup>。さらに、気質の特徴を示す650語を分析し、50の特性にまとめ、これらの特性を基準として内蔵緊張型、身体緊張型、頭脳緊張型に分類した。最終的に、内胚葉と内蔵緊張型、中胚葉と身体緊張型、外胚葉と頭脳緊張型の相関が比較的強いと主張した<sup>271</sup>。ヴォルド・バーナード（Vold & Bernald, 1985 = 平野・岩井, 1990）は、シェルドンは、より派手なフートンの研究結果を、ほんの少ししか留保条件を付けずに受け入れ、著書に肯定的に引用している。フートンの解釈の基本的前提に対する彼の全面的な賛意は明らかであり、それを強調していると批判した<sup>272</sup>。

<sup>263</sup> 齊藤・前掲注 262, 197-232 頁。

<sup>264</sup> 齊藤・前掲注 262, 232-286 頁。

<sup>265</sup> 吉益脩夫『犯罪心理学』（東洋書館, 1952）275 頁。

<sup>266</sup> 中田 修『犯罪精神医学』（金剛出版, 1987）170 頁。

<sup>267</sup> 平野ほか・前掲注 126, 64 頁。

<sup>268</sup> 『20 世紀西洋人名辞典』（日外アソシエーツ, 1995）657 頁：シェルドン（William Herbert Sheldon 1898 - 1977）は、ロードアイランド州で自然主義者の父と助産婦の母の下に生まれた。祖父は、ウィリアムジェームズである。ワーウィック退役軍人記念高校からブラウン大学に進学し、コロラド大学で修士号、1933年にシカゴ大学で心理学の博士号を取得した。種々の仕事を経て、チューリッヒのカール・ユングのもとで2年間学び、フロイトやクレッチマーと友好を持った。帰国後、ハーバード大学に移動し、第二次世界大戦に軍医として陸軍に従軍した。1947年から59年まで、コロンビア大学医学部の体質研究所の所長とオレゴン大学医学部の教授であった。

<sup>269</sup> Sheldon, W. H., & Stevens, S. S. (1942 = 1970). *The varieties of temperament: a psychology of constitutional differences*. Macmillan Pub Co. 5-10.

<sup>270</sup> Sheldon・前掲注 269, 10-11.

<sup>271</sup> Sheldon・前掲注 269, 13-23.

<sup>272</sup> 平野ほか・前掲注 126, 66 頁。



### 3) グリュック夫妻<sup>273</sup>の研究

グリュック夫妻 (Glueck & Glueck, 1950) は、年齢、一般的知能、民族・人種的身分、居住地などの条件をマッチングさせた 500 人の累犯的な非行少年と 500 人の非行のない少年に対してロールシャッハテストと精神医学的な面接を実施し、両者を比較して非行少年に共通する 16 の性格特性があることと中胚葉型が多いことを見いだした<sup>274</sup>。また、グリュック夫妻 (Glueck & Glueck, 1956) は、性格特性や社会的条件と非行との関係を調べるため、それまでに収集したデータから 67 項目の性格特性と 42 項目の社会的条件を詳細に分析した<sup>275</sup>。その結果、一般的に中胚葉型は、攻撃的な行動を行うのに特にふさわしい特性 (身体的な強さ、エネルギー、感受性の鈍さ、緊張や欲求不満を行動であらわす傾向) によって明確に特徴づけられることを見いだした。また、同時に、反社会的冒険を抑制する要因となる不全感、権威に対する明らかな従順さ、情緒的不安定さなどを相対的に持ち合わせていないという特徴があるということも見いだした<sup>276</sup>。ただし、非行者となった中胚葉型の少年には、幼児期の伝染病への罹患性、破壊性、不全感、情緒的不安定、情緒的葛藤など一般の中胚葉型には見られない特徴が見られること明らかにした<sup>277</sup>。加えて、家庭の投げやりな習慣、家族全体のレクリエーションが欠けていること、家庭内のレクリエーション用の設備が貧弱なことという 3 つの社会・文化的要因が中胚葉型の非行に深く関与していると主張した<sup>278</sup>。そして、これらの差異を非行性の識別指標として非行早期予測表を作り上げた<sup>279</sup>。ヴォルド・バーナード (Vold & Bernard, 1985 = 平野・岩井, 1990) は、グリュック夫妻の研究に対しては、青年期の急激な体型変化に対するコントロールがなされていないこと、体型を決める方法が外見の判断だけで精密な測定が行われていないこと、非行群が施設に収容された少年だけであることなどの批判があると紹介した<sup>280</sup>。安香 (2008) は、このような因子群が提起された段階では、因子間、要因間、側面間の関連や構造的な意味までは吟味・考察されることもなく、総花的で列挙的な提示に留まっていたと見なさざるを得ない。また、現実社会での非行者と無非行者との割合では圧倒的に無非行者の方が多く、サンプル数が両者ともに 500 人と均等にすることは妥当でないということも含めて、批判が多くなされていると解説した<sup>281</sup>。ただし、安倍・樋口 (1959) は、グリュック夫妻の目的は、刑法学者として判事の個人的経験や感情で量刑が下されていること

<sup>273</sup> 安倍治夫・樋口幸吉『グリュック犯罪予測法入門』(一粒社, 1959) 85-86 頁; Encyclopedia Britannica, Sheldon Glueck and Eleanor Glueck. <<https://www.britannica.com/biography/Glueck-Sheldon-and-Glueck-Eleanor#ref196545>>. (2019.10.1). : グリュック刑事学基盤は、著名な神医学者でもあり、チャイルド・ガイダンスへの草分けでもあった実兄バーナード・グリュック博士の影響に負うところが少なくないといわれる。夫のシェルドン・グリュック (Sheldon Glueck, 1896-1980) は、ロシア帝国のワルシャワに生まれ、6 歳のころにアメリカに渡った。1920 年ジョージワシントン大学法学部を卒業後、1929 年にハーバード大学のスタッフとなり、主として刑事学、刑法を教えた。また、妻のエレノア (Eleanor Glueck, 1889-1972) は、ブルックリンで生まれた。1919 年にバーナードカレッジを卒業した後、ニューヨーク大学社会福祉学部に進学し、21 年に学士号、23 年に教育学の修士号、25 年には博士号を取得した。エレノアは、バーナードの研究室で勤務していたことから当時新進気鋭の弁護士であったシェルドンと出会い 1922 年に結婚した。

<sup>274</sup> Glueck, S., & Glueck, E. (1950). *Unraveling juvenile delinquency*. Harvard University Press, 272-283.

<sup>275</sup> Glueck, S., & Glueck, E. (1956). *Physique and Delinquency*. Harper & Brothers Publishers, New York. 27.

<sup>276</sup> Glueck et al.・前掲注 275, 218-221.

<sup>277</sup> Glueck et al.・前掲注 275, 221-223.

<sup>278</sup> Glueck et al.・前掲注 275, 224-225.

<sup>279</sup> Glueck et al.・前掲注 275, 225-227.

<sup>280</sup> 平野ほか・前掲注 126, 67 頁。

<sup>281</sup> 安香・前掲注 131, 169 頁。

を疑問視し、客観的な予後の非行予測表を作成することであったと述べている<sup>282</sup>ことに留意すべきである。

### (3) 反社会的パーソナリティ

バートル夫妻 (Bartol & Bartol, 2005 = 羽生ほか, 2011) によれば、いわゆるサイコパスという用語はいろいろな態度、情緒的特徴、そして行動特性を要約するのに使われる、論議を生むラベルであった<sup>283</sup>。アメリカ精神医学会 (APA) は、1952 年にサイコパスという表現を精神疾患診断統計マニュアル (DSM) から削除して正式にソシオパスとし、1968 年にソシオパスというラベルを反社会的人格障害 (antisocial personality disorder: APD) に改めた。さらに、DSM-V (2004) では、社会的規範や他者の権利・感情を軽視し、人に対して不誠実で、欺瞞に満ちた言動を行い、暴力を伴いやすい傾向があるパーソナリティ障害としたとされる<sup>284</sup>。さらに、犯罪的サイコパスは、自律神経と大脳皮質の両方の覚醒が低く、脳波が幼児のものによく似たパターンを示し、少年期に ADHD であった可能性が高いなどの知見が得られているとした<sup>285</sup>。そして、サイコパスチェックリスト (Psychopathy Checklist: PCL) (Hare, 1980) <sup>286</sup>で測定される一次的サイコパスが、特殊な認知と情緒スタイル、生理学的指標、保護者不在と問題行動によって特徴づけられる幼少期を含む特有の特徴を持っていることは、極めて明らかであると主張した<sup>287</sup>。ただし、ウォルシュ (Walsh, 2015 = 松浦, 2017) は、彼らはもっとも極悪非道であるが、全犯罪者の中の、ほんの一部であると主張している<sup>288</sup>。

### (4) ライフスタイル理論

ウォルターズ<sup>289</sup> (Walters, 1990) は、犯罪行動とは、無責任、衝動性、放埒、否定的な人間関係、そして社会的規範に対する慢性的逸脱傾向に裏打ちされた、日常生活パターン若しくはライフスタイルの一部と考えた。ライフスタイル理論は、条件付け、選択、認知という主要な 3 概念を有している<sup>290</sup>。また、衝動性と低 IQ は犯罪の根幹となる要因であり、多大な影響を受けた他者への愛着が最も重要な環境条件付けであるとした。この理論の主要な概念のうちの「認知」とは、生物学的・環境的条件付けの結果として発展させた認知スタイル及びそのような条件付けに反応する様式での行動パターンを示す。この理論

---

<sup>282</sup> 安部ほか・前掲注 273, 86-91 頁。

<sup>283</sup> 羽生ほか・前掲注 89, 121 頁。

<sup>284</sup> 羽生ほか・前掲注 89, 122-124 頁。

<sup>285</sup> 羽生ほか・前掲注 89, 164-165 頁。

<sup>286</sup> Hare, R. D. (1980). A research scale for the assessment of psychopathy in criminal populations. *Personality and Individual Differences*, 1(2), 111-119.

<sup>287</sup> 羽生ほか・前掲注 89, 165 頁。

<sup>288</sup> 松浦・前掲注 83, 272 頁。

<sup>289</sup> KutztownUniversity. <<https://www.kutztown.edu/academics/colleges-and-departments/liberal-arts-and-sciences/departments/criminal-justice/faculty/glenn-walters.htm>>. (2019.10.1). : ウォルターズ (Glenn Walters) は、1976 年にレバノンバレー大学で心理学の学士号、78 年にペンシルベニア州インディアナ大学で臨床心理学の修士号、82 年にテキサス工科大学でカウンセリング心理学の博士号を取得し、以後 27 年間、アメリカ陸軍の懲戒兵舎の臨床心理士、3 つの連邦刑務所の心理学及び薬物プログラムコーディネーターなどを務めた。2011 年からペンシルベニア州カッツタウン大学の准教授に就いている。

<sup>290</sup> Walters, G. D. (1990). *Criminal Lifestyle: Patterns of Serious Criminal Conduct*. Sage Publications, Inc. 96-97.

では、カットオフ（被害者の苦痛を減算する能力）、権利（自分たちは社会に面倒を見てもらって当然である）、権力志向（権力の強弱で世界を理解する）、認知的怠慢（刹那的思考、柔軟性のない思考）、非連続性（思考パターンの統合ができない）など8つの認知的特徴又は思考的誤謬が存在し<sup>291</sup>、犯罪者自らが思考パターンを変容しない限り、犯罪行動を止めることは不可能であると主張した<sup>292</sup>。ウォルシュ（Walsh, 2015 = 松浦, 2017）は、ライフスタイル理論に対し、思考的誤謬しか扱っていないこと、そしてなぜ思考的誤謬が存在するのか述べているが、その理由についての説明が不十分であるという弱点を指摘している<sup>293</sup>。

### （5）心理学的学習理論

菊田・西村（1989）は、学習理論の立場から提出された犯罪理論として最も優れているのは、攻撃、性役割行動、道徳性などの社会行動について精力的な研究を行ったバンデュラの考えであると主張した<sup>294</sup>。

バンデュラ<sup>295</sup>（Bandura, 1973）は、犯罪は、親の拒否や愛情の剥奪などに対する直接的な反応などではなく、逸脱行動が何らかの形で是認されたり、逸脱行動をとるモデルを観察したりする機会が多かった場合に、その行動はその人の行動レパートリーの中に組み込まれていき、特定の条件下に置かれると具体的な犯罪行動として表面化すると主張した<sup>296</sup>。さらに、犯罪を抑圧する手法は、無意識に潜んだ欲求不満や葛藤の解決を図ることではなく、直接問題になっている、望ましくない行動型を学習理論に従って除去することであると<sup>297</sup>。スレイター・クイン（Slater & Quinn, 2012 = 加藤ほか, 2007）は、バンデュラのボボ人形研究は行動主義者の方向性を越えて、報酬がなくてもモデルの観察と模倣のみで攻撃性の学習が可能であるという理解へと考えを進めたと評価した<sup>298</sup>。

## 3 行動学習に関する脳神経科学の視点による研究

バートル夫妻（Bartol & Bartol, 2005 = 羽生ほか, 2011）は、これまでに得られたデータでは、ある人々は社会的価値観や規範に反する行動をするような生物学的素因をもって生まれ得るし、環境要因がそれを抑制し、あるいは促進するかもしれないことを示してい

<sup>291</sup> Walters・前掲注 290, 151-155.

<sup>292</sup> Walters・前掲注 290, 177-178.

<sup>293</sup> 松浦・前掲注 83, 272 頁。

<sup>294</sup> 菊田ほか・前掲注 85, 35 頁。

<sup>295</sup> Nolen, J. L. Encyclopedia Britannica. <<https://www.britannica.com/biography/Albert-Bandura>>. (2019.10.1). : バンデュラ（Albert Bandura）は、1925 年にカナダアルバータ州の人口 400 人たらずの辺境地でポーランド系の父とウクライナ系の母の下に生まれ、5 人の姉を持つ。飲酒とギャンブルのサブカルチャーにさらされていた町での生活が、後の精神病理学への興味の起源として人生に対する見方と視野を広げるのを助けた。1949 年に渡米し、56 年に帰化した。バンデュラが心理学を学んだことは、まったくの偶然であったとされ、時間つぶしのために心理学コースを取り、そして主題に夢中になって 3 年間で学士号を取得した。ブリティッシュコロンビア大学で心理学のボロカン賞を受賞し、その後、理論心理学の当時の中心地であるアイオワ大学に移り、ベントン（Arthur Benton）の下で 1951 年に修士号、52 年に博士号を取得した。大学では、ジェームズ（William James）から直接学術的な指導を受けたほか、ハルとスペンス（Clark Hull & Kenneth Spence）は共同研究者であった。1953 年にスタンフォード大学で教授に就任し、以来その職に就いていた。1974 年に、アメリカ心理学会（APA）の会長に就任した。

<sup>296</sup> Bandura, A. (1973). *Aggression: A social learning analysis*. Prentice Hall PTR. 93-94.

<sup>297</sup> Bandura・前掲注 296, 95-97.

<sup>298</sup> スレイター・クイン（著）（加藤弘通・川田学・伊藤崇 監訳）『発達心理学再入門－ブレークスルーを生んだ 14 の研究』（新曜社, 2017）225 頁。

るとした。そして、子供から着実に成長を遂げたかどうかにかかわらず、常習犯罪者は、彼らの神経生理学的問題に社会環境がどのように反応するかに大きく依存しているように見えると主張した<sup>299</sup>。脳神経科学における還元主義的な考え方として、クオーツ・セヨノウスキ (Quartz & Sejnowski, 1997) は、我々がどんな経験をするかによって神経連絡パターンの構築が決定づけられると主張した<sup>300</sup>。また、ペリー・ポラード (Perry & Pollard, 1998) は、乳幼児期に敷設された脳内回路は、成人期に敷設されたものよりも脱落抵抗性がある。つまり、あらゆる体験は、否定的な回路で処理される可能性があるから、否定的な体験によって組織された脳は、あらゆる種類の反社会的行動につながるおそれがあると主張した<sup>301</sup>。さらに、ル・ドゥ<sup>302</sup> (LeDoux, 2002 = 森・谷垣, 2004) は、神経科学者が一般的に問題とする意識の脳内過程よりも、むしろ意識に上らない脳内過程が、実は人間の行動の基本の大部分を占めていると考えた<sup>303</sup>。そして、ばかばかしくない意味のある還元主義的な立場から、人格は、脳内のニューロン相互の接続パターンであり、その接合部であるシナプスを通して行われ、過去のシナプス伝達によって書き込まれた情報が呼び起こされることによって行われることを考えれば、自己とはシナプス的なものである。つまり、学習とは遺伝子的にプログラムされた学習能力に依存しており、人格の一貫性がもたらされるのは、学習と、それによってシナプスが生み出した結果である記憶とが主要な役割を果たしていると主張した<sup>304</sup>。また、心理療法自体も学習経験であり、シナプスの変化が関係している。脳の回路と心理学的経験とは別べつなものではなく、むしろ同じことの異なる表現なのである<sup>305</sup>。脳は子ども時代に、遺伝子と環境の両方の影響によって組み立てられ、それぞれの神経システムにおいて、シナプス接続は環境に誘発される神経活動によって調節されると主張した<sup>306</sup>。

一方、全体主義的な考え方として、人工知能という言葉を作成したことでも知られる MIT のミンスキー<sup>307</sup> (Minsky, 2006 = 竹林, 2009) は、「意識」に対する現在の研究方法につ

---

299 羽生ほか・前掲注 89, 102 頁。

300 Quartz, S.R., & Sejnowski, T. J. (1997). The neural basis of cognitive development: A constructivist manifesto. *Behavioral and brain sciences*. 20 (4), 555.

301 Perry, B. D., & Pollard, R. (1998). Homeostasis, stress, trauma, and adaptation: A neurodevelopmental view of childhood trauma. *Child and Adolescent Psychiatric Clinics*. 7(1), 46.

302 NYU Art & Science. Center for Neural Science, as.nyu. <edu/cns/people/faculty.Joseph-e-ledoux.html.>

(2019. 8.30). : ル・ドゥ (Joseph E. LeDoux) は、1949 年にルイジアナ州でロデオパフォーマー兼肉屋を営む父母のもとに生まれた。1972 年にルイジアナ州立大学に入学し経営学と心理学を専攻し、修士課程に進んだが、心理学への関心が高まり、1974 年からロバート・トンプソンの研究所に参加した。ガザニガの下、1977 年にニューヨーク州立大学で博士号を取得した。78 年コーネル医科大学に博士研究員として加わり、89 年に同大学の神経科学研究センター准教授、91 年に教授に昇進し、2005 年に名誉教授となった。

303 ル・ドゥ (著) (森憲作 監訳) (谷垣暁美 訳) 『シナプスが人格をつくる一脳細胞から自己の総体へ』 (みすず書房, 2004) 13-18 頁。

304 森ほか・前掲注 303, 207 頁。

305 森ほか・前掲注 303, 388 頁。

306 森ほか・前掲注 303, 456 頁。

307 Rifkin, G. (2016). The New York Times, Marvin Minsky, Pioneer in Artificial Intelligence, Dies at 88. <<https://www.nytimes.com/2016/01/26/business/marvin-Minsky-pioneer-in-artificial-intelligence-dies-at-88.html>>

(2018.7.30). : ミンスキー (Marvin Lee Minsky, 1927 - 2016) は、ニューヨーク市で医師の父とシオニズム運動家の母というユダヤ人家庭に生まれた。地元の高校からマサチューセッツ州のフィリップス・アカデミーに転校した。1944 年から 45 年まで海軍に従軍した後、ハーバード大学で数学を学び 1950 年に卒業した。その後、1954 年にプリンストン大学で数学の博士号を取得し、1958 年以降、マサチューセッツ工科大学に所属した。1959 年にジョン・マッカーシーと共に MIT コンピュータ科学・人工知能研究所の前身となる研究所を創設し、MIT で電気工学とコンピュータ科学の終身名誉教授であった。

いて、問題は脳の異なる部分で進行する多くのプロセスのすべての結果を、たった一つの箱の中に詰め込もうとしたことであるとした。そして、いまだに「意識」の秘密を発見しようとする多くの科学者たちは、脳波やある細胞の特定の振る舞い、あるいは量子力学の数字の中に秘密を見つけようとしていると主張して還元主義を批判した<sup>308</sup>。また、ル・ドゥの博士研究の指導教員であったガザニガ<sup>309</sup> (Gazzaniga, M. S.) は、ヴィゴツキーの知性仮説を取り上げ、人類が進化の過程で複雑な技術、文化的制度、記号体系などを生み出すには、競争ではなく協力が必要だった<sup>310</sup>とした。そして、人間は自動的なプロセスがいくつも働いているので、激変する生活環境は人間の行動や思考、さらにはゲノムにまで影響を及ぼし、遺伝的同化とニッチ構築によってボールドウィン効果を発揮するようになったと述べた。また、個人の行動を制限したことが、最終的に遺伝子変異を招くと同時に遺伝子プールも変化し、攻撃性といった情動反応を制御する選択システムができあがった。複雑な社会的相互作用を可能にするには、他者の精神状態を理解する能力であるとし<sup>311</sup>、他人が考えている内容をある程度の正確さで推測できるのは、人間が生来持つ能力で、これらの能力を「心の理論」と名づけた<sup>312</sup>。さらに、自由意志という概念は、人類史の特定の時代に支持されていた社会的、心理的信念から出てきたものであり、現代科学の知識が背景にないだけではなく、矛盾さえしているとした。そして、自由意志は統制されたものではなく、脳内のモジュールに分散され、モジュールが従わなくてはならない規則にある。精神プロセスが脳を制約し、また、その逆という二つのインターフェースで起きていると主張した<sup>313</sup>。また、ガザニガ (Gazzaniga, 2008 = 柴田, 2018) は、我々が下す決断はすべて「接近」か「回避」かの選択に基づいており、道徳的判断も例外ではない。これらの決断はバイアスメカニズムの影響下にあり、そのメカニズム自体は人間が標準装備して生まれてくる情動を引き出しているとした<sup>314</sup>。さらに、カシオポ<sup>315</sup>・ペトリック (Caciopo & Petrick, 2008 = 柴田, 2010) は、人間は孤独感につきまといられると、社会的認知が歪むとともに自己調節の能力も弱まるので、ほかの人の物の見方を受け入れにくくなりがちで

308 ミンスキー (著) (竹林洋一 訳)『ミンスキー博士の脳の探検：常識・感情・自己とは』(共立出版, 2009) 124 頁。

309 University of California, Santa Barbara, (2018). College of Letters & Science. <<https://www.psych.ucsb.edu/people/michael-gazzaniga>> (2019.9.30). : ガザニガ (Michael S. Gazzaniga) は、1939 年にカルフォルニアで生まれ、1961 年にダートマス大学を卒業した。カルフォルニア工科大学で精神生物学を学び、分離脳研究でノーベル賞を受賞したロジャー・スペリーの下、1964 年に博士号を取得した。カルフォルニア大学サンタバーバラ校の教授で SAGE 精神研究センター所長である。2001 年から大統領生命倫理評議会のメンバーを 9 年間務めたほか、法と神経科学の関わりを研究する法・神経科学プロジェクト (Law and Neuroscience Project) の代表でもある。

310 ガザニガ (著) (藤井留美 訳)『<わたし>はどこにあるのかーガザニガ脳科学講義ー』(紀伊國屋書店, 2014) 187 頁。

311 藤井・前掲注 310, 193-196 頁。

312 藤井・前掲注 310, 200-201 頁。

313 藤井・前掲注 310, 273-276 頁。

314 ガザニガ (著) (柴田裕之 訳)『人間とは何か；脳が明かす「人間らしさ」の起源 (下)』(ちくま文庫, 2018) 206 頁。

315 Roberts, S. (2018). The New York Times, John Cacioppo, Who Studied Effects of Loneliness, Is Dead at 66. <<https://www.nytimes.com/2018/03/26/obituaries/john-cacioppo-who-studied-effects-of-loneliness-is-dead-at-66.html>> (2018.8.15) カシオポ (John Terrence Cacioppo, 1951 - 2018) は、テキサス州マーシャルでチェーンソー流通会社を営んでいた父母の間に生まれた。1973 年ミズーリ大学で経済学の学士号、1977 年にオハイオ州立大学で心理学の博士号を取得した。シカゴ大学認知社会心理学センターを設立し、シカゴ大学で研究副学長及び国立研究所の Arete Initiative の監修者のほか、亡くなるまで社会神経科学、心理学科、精神神経科及び行動神経科学科で教鞭をとった。心理科学協会、パーソナリティ社会心理学会、消費者心理学会、心理生理学会、社会神経科学学会の会長を務めた。

あるとした<sup>316</sup>。そして、孤独は遺伝子に組み込まれた警告のシグナルで、社会的なつながりを促す適応行動である。成長のプロセスで個体が発達していくにあたっては、ダウンロードと上書きを繰り返すのではない。成長するにつれて、より未熟で動物的な衝動を捨て去るのではなく、オンラインで処理するような高度な形式をとれるようになっていくにすぎないとした<sup>317</sup>。さらに、孤独感を覚えると、実行制御と自己調節の機能が低下し、衝動的で利己的な行動につながり得る。認知と感情移入を歪め、社会的同調をする上での妥協と互惠、適切なさじ加減で行われる服従と支配、仲裁、社会的制裁、同盟の形式などの認知に支障をきたす<sup>318</sup>。遺伝的な傾向は変えられないが、孤独感によって自己調節の能力が失われたとしても、社会環境の特定の側面は変えられると主張した<sup>319</sup>。

経済協力開発機構（OECD, 2007 = 小泉, 2010）は、1）ある行動に関与する生理学的要素、情動的要素、認知的要素は、相互作用が絶え間なく行われているため、切り離して考えることは不可能である<sup>320</sup>。2）脳科学は、否定的な情動が学習を妨げることを解明することにある。扁桃体や海馬、ストレスホルモン（グルココルチノイド、エピネフリン、ノルエピネフリン）が、学習や記憶に対する否定的な情動作用の媒介に重要な役割を果たしている<sup>321</sup>。3）成人教育であれ、仕事や社会活動であれ、高齢者が学習を継続する機会が多いほど、神経性疾患の発現や進行を遅らせる可能性が高くなると主張した<sup>322</sup>。また、ガザニガ（Gazzaniga, 2011 = 藤井, 2014）は、1）我々は、社会的な相互作用ができるように生まれたときから配線されている。全般的な認知能力は食料や生殖相手などの争奪という競争が原動力になって発達したものの、ヒトにしかない側面（目的や意図の共有、他者と共同で注意を向ける、協力のために意思を疎通させる）を引き出したのは社会的協力だった<sup>323</sup>。2）道徳性を生み出す神経回路は脳全体に広く分布しているらしく、すでにいくつも確認されている。自動的な共感、他者に対する暗黙の評価、情動反応を含む社会的反応は多くが生まれつきのものであり、それらが道徳がらみの判断に参考情報を与えている。道徳観が問われる状況への対応は同じでも、その理由は人によって違う。行動や判断の方針に影響を与える情動システムや特殊な道徳的判断システムに遺伝や経験による個人差があるからであると主張した<sup>324</sup>。

#### 4 個人特性に関する心理学と脳神経科学の融合による気質理論研究

アイゼンク以降の気質理論を研究したアーロン<sup>325</sup>（Aron, 1996）は、ユングが主張した

<sup>316</sup> カシオポ（著）（柴田裕之 訳）『孤独の科学一人はなぜ寂しくなるのかー』（河出書房社, 2010）32-33 頁。

<sup>317</sup> 柴田・前掲注 316, 117 頁。

<sup>318</sup> 柴田・前掲注 316, 279 頁。

<sup>319</sup> 柴田・前掲注 316, 300 頁。

<sup>320</sup> OECD（著）（小泉英明 監修）（小山麻紀・徳永優 訳）『脳からみた学習—新しい学習科学の誕生—』（明石書店, 2010）42 頁。

<sup>321</sup> 小泉ほか・前掲注 320, 100 頁。

<sup>322</sup> 小泉ほか・前掲注 320, 5 頁。

<sup>323</sup> 藤井・前掲注 310, 187 頁。

<sup>324</sup> 藤井・前掲注 310, 223 頁。

<sup>325</sup> Psychology Today. (2019). <<https://www.psychologytoday.com/us/experts/elaine-n-arons-phd>> (2019.10.15). : アーロン（Elaine Aron）は、カルフォルニア大学バークレー校の Phi Beta Kappa 学生として学士号、ヨーク大学で臨床心理学の修士号、同校パシフィカ大学院に進み、C. G. Jung 研究所でインターンをしながら臨床発達心理学の博士号を取得した。

生得的に敏感な感受性を持つ人を「ハイリー・センシティブ・パーソン (HSP)」と名付けた<sup>326</sup>。そして、アロン (Aron, 2010) は、生得な感受性を用いた理論は、アイゼンクに始まりグレイを経てロスバートに結実したと主張した<sup>327</sup>。

#### (1) アイゼンクの理論

アイゼンク・グッドジョンソン (Eysenck & Gudjonsson, 1989) は、犯罪に関する社会学の理論に対し、第二次世界大戦以降流行しているさまざまな社会学的理論は、基本的に誤っており、事実と反すると思われるので、多くの点で同意できないと批判した<sup>328</sup>。アイゼンク夫妻 (Eysenck & Eysenck, 1977) は、犯罪行動は、神経系の特徴とある環境条件との間の相互作用の結果である<sup>329</sup>と主張した。また、アイゼンク (Eysenck, 1973) は、環境要因、神経生物学的要因及びパーソナリティ要因の組み合わせが、いろいろなタイプの犯罪を生じさせるのであり、犯罪は遺伝だけで理解することはできないが、環境だけでも理解することができないとした<sup>330</sup>。さらに、アイゼンク・グッドジョンソン (Eysenck & Gudjonsson, 1989) は、生得的なのは、犯罪そのものや犯罪性ではない。それは、中枢神経系と自律神経系の異常が、環境、しつけや他の多くの環境要因と反応して、ある種の反社会的行動へ向かう可能性を増加させると述べ、中枢神経系と自律神経系の反応性、感度、興奮性のために犯罪行動に連動しやすいと主張した<sup>331</sup>。アイゼンクは、当初、パーソナリティを外向性 (E) と神経症傾向 (N) という二次元で捉えていたが、実証研究と統計分析に基づき、最終的に、精神病質 (P) と知能 (g) という4つの高次要因を仮定した。ただし、知能は犯罪の原因となる要因であるが、寄与している程度は少ないと結論してよいと述べた<sup>332</sup>。アイゼンク・ラックマン (Eysenck & Rachman, 1965 = 黒田, 1967) は、典型的な外向性者は、易怒、攻撃的、信頼できない、内向性者は、攻撃的ではなく、信頼でき、倫理規範を大切にすると述べ、つまり、神経症傾向得点が高い者は、ストレスに対し強く、かつ持続的に反応し、恐怖症や強迫観念のような症状を示す。この次元の反対側に位置する人たちは対照的に情緒的に安定し、穏やかで抑制した行動を示すと主張した<sup>333</sup>。アイゼンク夫妻 (Eysenck & Eysenck, 1970) は、神経症傾向は、あらかじめ子供時代に獲得された行動を強く促進する動因として作用すると予測した<sup>334</sup>。しかし、バートル夫妻 (Bartol & Bartol, 2005 = 羽生ほか, 2011) は、アイゼンクも他の研究者も、まだ精神病質傾向を示す神経系のメカニズムを確立していない<sup>335</sup>と述べた。アイゼンク

<sup>326</sup> Aron, E. N. (1996). Love and expansion of the self: The state of the model. *British Journal of Psychotherapy*, 3(1), 45-58.

<sup>327</sup> Aron, E. N. (2010). *Psychotherapy and the Highly Sensitive Person*. Routledge. 238.

<sup>328</sup> Eysenck, H. J. & Gudjonson, G. H. (1989). *The Case and Causes of Criminality*. Institute of Psychiatry. University of London. 1.

<sup>329</sup> Eysenck, S. B. G., & Eysenck, H. J. (1977). *Crime and Personality: (3rd. ed.)*. London: Routledge & Kegan Paul. 12.

<sup>330</sup> Eysenck, H. J. (1973). *The inequality of man*. San Diego, CA: EDITS. 171.

<sup>331</sup> Eysenck et al.・前掲注 328. 7.

<sup>332</sup> Eysenck et al.・前掲注 328, 50.

<sup>333</sup> アイゼンク・ラックマン(著)(黒田実郎 訳)『精神科学全書 神経症—その原因と治療』(岩崎学術出版社, 1967) 23-24 頁。

<sup>334</sup> Eysenck, S. B. G., & Eysenck, H. J. (1970). Crime and Personality: An empirical study of the three-factor theory. *British Journal of Criminology*, 10, 228.

<sup>335</sup> 羽生ほか・前掲注 89, 110 頁。

(Eysenck, 1967 = 2008) は、外向性、内向性の生理学的基礎について、中枢神経系、特に網様体賦活系 (reticular activating system: RAS) とよばれる脳幹の中央部分にある微小だが複雑な神経回路網の中のあるメカニズムに遺伝的な差異があり、それによって外向性一内向性の軸において人々が異なると仮定した<sup>336</sup>。RAS は、大脳皮質とよばれる領域を喚起し注意する、見張りの役割をすると考えられている。思考、記憶、意思決定のようなあらゆる高次機能が、大脳皮質で行われている。RAS は、大脳皮質を覚醒させ、入力刺激への注意を喚起する。大脳皮質に情報を伝える神経経路は、RAS に伝わる副経路へ分かれる<sup>337</sup>。人間行動の背後にある動機付けは、刺激及び皮質の覚醒を適正なレベルにしようとする欲求である。外向性者は最適な皮質の覚醒レベルを維持するために高いレベルの刺激が必要であると仮定されている。一方、内向性者は、RAS の増幅効果のために比較的低いレベルの刺激を要求するといわれている<sup>338</sup>。アイゼンク (Eysenck, 1981) は、犯罪行動に関わった大部分の人は、皮質の覚醒が低く、周りの環境から刺激や興奮を得ようとする強い動機を持つとする<sup>339</sup>。アイゼンクの理論の要約は Table2-2-1 のとおりである。

Table2-2-1 アイゼンクの理論の要約

パーソナリティ特性	神経生物学的影響	高得点	低得点
外向性	網様体賦活系、中枢神経系	刺激を追求	刺激を回避
神経症的傾向	自律神経系	神経質、不安定	安定、穏やか
精神病質傾向	アンドロゲン過多	強い心性	弱い心性

出典：Bartol & Bartol, = 羽生ほか, (2011)

アイゼンク (Eysenck, 1967 = 2008) によれば、神経症傾向 - 安定性次元は自律神経系と関係しており、副交感神経は交感神経の平衡をとるもので、情動性に差があるのはこれらの機能区分ごとの感度の違いに起因しているが、いずれもいわゆる内臓脳又は辺縁系の支配を受けている。神経回路が複雑な配列を持っていることに加えて、辺縁系は海馬、扁桃、帯状束そして視床下部を含んでいる。視床下部は、自律神経系を最も大きく支配しており、情緒を司る中心的器官である。神経症傾向の人は通常よりも敏感な大脳辺縁系を持つと考えられ、すぐ感情的になり、それは長い期間持続する<sup>340</sup>とした。また、情動性が高い人は低い人よりも犯罪にかかわる可能性が高いと仮定した<sup>341</sup>。バートル夫妻 (Bartol & Bartol, 2005 = 羽生ほか, 2011) は、この仮定は、情動性が要因となって人に習慣的行動様式をとらせるという一貫した研究の知見を基礎としている<sup>342</sup>と主張した。アイゼンク (Eysenck, 1983) は、神経症傾向は、人が獲得したどんな無意識の、あるいは常習的な行動であっても促進する。さらに、若いときは年をとったときほど習慣が強くないので、神経症傾向は成人の犯罪者に関しての重要な要素であるが、青年期の犯罪ではさほど重要ではなく、幼少期の犯罪では最も低いと予想されるとした<sup>343</sup>。アイゼンクの最新の精神病

<sup>336</sup> Eysenck, H. J. (1967 = 2008). *The biological basis of personality*. Springfield, IL: Charles C. Thomas. 231.

<sup>337</sup> Eysenck・前掲注 336, 231-233.

<sup>338</sup> Eysenck・前掲注 336, 110.

<sup>339</sup> Eysenck, H. J. (1981). *A model for personality*. New York, Springer. 32.

<sup>340</sup> Eysenck・前掲注 336, 234-235

<sup>341</sup> Eysenck・前掲注 336, 237.

<sup>342</sup> 羽生ほか・前掲注 89, 110 頁。

<sup>343</sup> Eysenck, H. J. (1983). *Personality, conditioning, and antisocial behavior*. In W. S. Laufer & J. M. Day (Eds.),



質傾向次元においても、神経生理学的メカニズムは確立されていない。アイゼンクは、これらのパーソナリティ変数を測定するために、モーズレイ人格目録 (MPI)、アイゼンク人格目録 (EPI) 及びアイゼンク人格質問紙 (EPQ) などの自己評定質問紙を開発しており、現在は、細川・大山 (Hosokawa & Ohoyama, 1993) によって EPQ の改訂版日本語版 (EPQ-R) が発表されている<sup>344</sup>。バートル夫妻 (Bartol & Bartol, 2005 = 羽生ほか, 2011) は、アイゼンクの業績は犯罪に関する広範で検証可能な理論で、研究を刺激し続けていると評価した。一方で、多様な神経学上の欠損や神経系の作用を、犯罪行動の主な理由とすることは単純化しすぎている、生物心理学的、神経生物学的要因が犯罪行動の一要因となっているかもしれないが、犯罪 (特に暴力行為) は社会環境の中での重要な人々との相互作用の結果として発生するという公算の方が大きいと批判している<sup>345</sup>。

## (2) グレイ<sup>346</sup>の理論

グレイ (Gray, 1970) は、自らの動物実験の結果や行動分析論文のレビューを基に恐怖とストレス (回避行動学習) は同じ脳神経系が働くという仮説を提唱した<sup>347</sup>。一般的にグレイは、アイゼンクを批判したといわれている。確かにグレイ (Gray, 1981) は、アイゼンクが編集した著書「A Model for personality」に「A Critique of Eysenck's Theory of Personality」を投稿している<sup>348</sup>。論文の内容は、アイゼンクのパーソナリティ理論を修正するものであるが、それは、あくまで基礎となった理論は後の理論によって当然に修正され得ることを前提に、敬意を払った上で理論を発展させたのである。一連の状況から判断すれば、アイゼンクは、自らの理論をグレイによって発展させられることを当然に期待していたものと理解することが合理的である。グレイ (Gray, 1970) は、アイゼンクの理論をより神経生理学的な基盤に沿うように修正を行い、外向的な人は条件づけが悪いのではなく、罪の脅威に対して相対的に感受性が低いからであるとした。そして、この反応を起こす心理的なメカニズム (脳下垂体系、その脳幹からのモノアミン作動性求心路及び前頭葉におけるその新皮質突起を含む) を「行動抑制系」(Behavioral Inhibition System; BIS) と名づけた<sup>349</sup>。グレイ (Gray, 1981, 1994) は、BIS は懲罰、報酬及び新奇性の信

---

Personality theory, model development, and criminal behavior. Lexington Books.

<sup>344</sup> Hosokawa, T. & Ohoyama, M., (1993). Reliability and Validity of Japanese Version of the Short-Form Eysenck Personality Questionnaire-Revise. *Psychological Reports*, 72, 832-835.

<sup>345</sup> 羽生ほか・前掲注 89, 120 頁。

<sup>346</sup> Hodges, H., Harnad, S., Finlay, B. L., & Bloom, P. (2004). Cambridge University Press. In Memoriam: Jeffrey Gray (1934-2004). <<https://www.cambridge.org/core/journals/behavioral-and-brain-sciences/article/in-memoriam-jeffrey-gray-19342004/4596ABFD7885C2F08A6E5E35544EDC27>>. (2018.4.5). : グレイ (Jeffrey Alan Gray, 1934 - 2004) は、ロンドンのイーストエンドで生まれた。グレイが 7 歳のときに仕立屋だった父が亡くなり、小間物商の母が一人で育てた。1952 年から 54 年まで従軍し、終戦後、オックスフォードマグダレン大学の法学部に進み、1959 年に心理学と哲学の学士号を取得した。1959 年から 60 年まで精神医学研究所 (現キングスカレッジロンドン) において臨床心理学者として訓練を受け、アイゼンクの下で動物の感情的行動に対する環境的、遺伝的及びホルモンの影響の研究を行って 1964 年に心理学の博士号を取得した。その後、オックスフォード大学で実験心理学の講師に就任し、1983 年にアイゼンクの後を継いで精神医学研究所の所長に就任した。1999 年に定年した後も名誉教授としてスタンフォード大学の行動科学の先端研究センターで実験研究を続け、ギャンブル監視機関の心理学の専門員を務め、2001 年にギャンブルレビュー報告書を作成した。

<sup>347</sup> Gray, J. A. (1970). The psychophysiological basis of introversion-extraversion. *Behavioral Research and Theory*, 8, 249-266.

<sup>348</sup> Gray, J. A. (1981). *A critique of Eysenck's theory of personality*. In Eysenck, H. J. (Ed.). *A model for Personality*. Springer. 246-276.

<sup>349</sup> Gray・前掲注 347, 261-264.

号に敏感である。BIS の機能は、恐怖、不安、欲求不満及びこれらの手がかりに対する悲しみのような否定的な感情の経験を担っていると主張した<sup>350,351</sup>。一方、欲求の動機づけを制御すると考えられる心理的メカニズムは、行動アプローチシステム又は行動賦活系システム（Behavioral Activation System; BAS）と呼ばれている<sup>352</sup>。なお、BAS という名称はフォウルズ（Fowles, 1980）によるものである<sup>353</sup>。グレイ（Gray, 1994）は、BAS は、報酬、非懲罰、懲罰からの逃避の信号に敏感であり、人に目標への接近を開始（又は増加）させ、希望、喜び、幸福などの肯定的な感情の経験を担っていると主張した<sup>354</sup>。ただし、カーバー・ホワイト（Caver & White, 1994）は、このメカニズムは、カテコールアミン作動性、特にドーパミン作動性の経路が中心的役割を果たすと考えられているが、BAS の神経基盤は BIS よりも明確に特定されていないと述べた<sup>355</sup>。グレイは、動物実験を重ね、闘争逃走系（FFS; Fight-Flight System）という概念を取り入れた<sup>356</sup>が、人間の行動には当てはまりがよいようである（安田・佐藤, 2002）<sup>357</sup>。グレイが主張した感情行動の制御システムは、コナー（Connor, D. F. = 小野, 2008）<sup>358</sup>によって Table2-2-2 のとおり、要約されている。

Table2-2-2 グレイの感情行動の制御システム

	BIS	BAS	FFS
強化刺激	罰と無報酬に対する嫌悪刺激	報酬と罰がないことに対する条件刺激（報酬学習と罰の回避）	生得的な恐怖刺激（非条件的）
感情	不安、心配、憂慮	（報酬）要求 （罪から逃れる）安心	恐怖
行動	抑制	（報酬への）積極的接近 略奪的攻撃性 （罰から逃れる）積極的回避	防御的攻撃性
神経解剖学	中隔—海馬システム、パペッツ回路 内側前脳束（NEと5-HT） 新皮質構造（内臭、前頭、帯状皮質）	腹側被蓋核（A10核） 内側前脳束（DA） 側坐核、腹側線状帯	扁桃体、内側前脳束（NE） 視床の腹内側核 中脳の中心灰白質

出典：Connor, D. F. = 小野（2008）

ただし、ル・ドゥ（LeDoux, 2002 = 森ほか, 2004）は、グレイの仮説を評価しつつ、1）すべての古典的抗不安薬に共通する点だという理由で、GABA 伝達だけに注目している。2）扁桃体の役割を考慮に入れていなかったと批判している<sup>359</sup>。

パーソナリティ変数の測定は、グレイ自身が参加した研究（Wilson, Barrett & Gray,

<sup>350</sup> Gray・前掲注 348, 261.

<sup>351</sup> Gray, J. A., (1994). *Framework for a taxonomy of psychiatric disorder*. In van Goozen, S. H. M., van de Poll, N. E., & Sergeant, J. A. (Eds.), *Emotions: Essays on emotion theory*. Lawrence Erlbaum 34-36.

<sup>352</sup> グレイ（著）（八木欽治 訳）『ストレスと脳』（朝倉書店, 1991）295-296 頁。

<sup>353</sup> Fowles, D. C. (1980). The three-arousal model: implications of Gray's two-factor learning theory for heart rate, electro-dermal activity and psychopathology. *Psychopathology*, 17, 89-90.

<sup>354</sup> Gray・前掲注 421, 40-42.

<sup>355</sup> Caver, C. S., & White, T. L. (1994). Behavioral Inhibition, Behavioral Activation, and affective responses to Impending Reward and Punishment: The BIS/BAS Scales. *Journal of Personality and Social Psychology*, 67, (2) 319.

<sup>356</sup> Gray・前掲注 351, 39-40.

<sup>357</sup> 安田朝子・佐藤 徳「行動抑制システム・行動接近システム尺度の作成ならびにその信頼性と妥当性の検討」心理学研究, 73 (2002) 235 頁。

<sup>358</sup> コナー, D. F. (著) 小野善郎（訳）『子どもと青年の攻撃性と反社会的行動：その発達理論と臨床介入のすべて』（明石書店, 2008）275 頁。

<sup>359</sup> 森ほか・前掲注 303, 424-429 頁。

1989) においても完成できなかった<sup>360</sup>が、カーバー・ホワイト (Caver & White, 1994) が BIS/BAS 感受性尺度<sup>361</sup>、また、トルビアほか (Torrubia, Ávila, Moltô, & Casras, 2001) が SPSRQ (The Sensitivity to Punishment and Sensitivity to Reward Questionnaire) という自己記述式質問紙<sup>362</sup>を完成させた。

### (3) クロニンジャー<sup>363</sup>の理論

クロニンジャー (Cloninger, 1987) は、神経生理学的、遺伝学的な視点から動物や人間の学習を研究する神経行動学や行動遺伝学を基盤に置いて精神疾患を説明する中で、アイゼンクやグレイの理論に影響を受けながらも独自の気質理論を構築した。当初、気質は、損害回避 (Harm Avoidance)、新奇性追求 (Novelty Seeking)、報酬依存 (Reward Dependence) の 3 因子からなるとし、自己記述式質問紙の TPQ (Tridimensional Personality Questionnaire) を開発した<sup>364</sup>。その後、クロニンジャーほか (Cloninger, Svrakic, & Przybeck 1993) は、パーソナリティは、環境への無意識反応特徴である「気質」4 因子 (TPQ 3 因子に「固執」を加えた) と意識的に行動をコントロールしようとする特徴を「性格」と定義し、自己志向、協調、自己超越の 3 因子で構成されるとする 7 次元モデルを提唱して自己記述式質問紙の TCI (Temperament and Character Inventory) を開発した<sup>365</sup>。そこでは、最初は遺伝的に決定される気質によって自己洞察的学習を繰り返す中で性格の発達が動機づけられる。しかし一方で、その性格が発達していく中で、今度は性格による気質の調整がなされると主張した<sup>366</sup>。クロニンジャーは、ヒースほか (Heath, Cloninger, & Martin, 1994) とともに、オーストラリア人の成人双生児 2,680 組に対して TPQ を実施し、下位尺度の損害回避、新奇性追求、報酬依存を用いて多変量遺伝三角分解モデルによる遺伝学的解析の結果、パーソナリティと遺伝子が関連すると発表した。そして、EPQ (Eysenck Personality Questionnaire) と同じ遺伝的変異の次元を 54%~61% 評価することを確認した<sup>367</sup>。これらの分析は、アイゼンクとクロニンジャーの人格システムは、同じ次元の人格を代替的に評価するのではなく、むしろそれぞれが遺伝

---

<sup>360</sup> Wilson, J. M., Barrett, P. T., & Gray, J. A. (1989). Human Reactions to Reward and Punishment: A questionnaire of Gray's personality theory. *British Journal of Psychology*, 80, 509-515.

<sup>361</sup> Caver et al.・前掲注 355, 319-333.

<sup>362</sup> Torrubia, R., Ávila, C., Moltô J., & Casras, X. (2001). The Sensitivity to Punishment and Sensitivity to Reward Questionnaire (SPSRQ) as measure of Gray's anxiety and impulsivity dimensions. *Personality and Individual Differences*, 31, 837-862.

<sup>363</sup> Washington University School of Medicine in St. Louis, Department of Psychiatry. <<https://psychiatry.wustl.edu/people/c-robert-cloninger-md-phd/>> (2019.10.1). クロニンジャー (Claude Robert Cloninger) は、1944 年に英語教師で実業家の父と元女優の母の間にテキサス州ボーモントで生まれた。1966 年にテキサス大学で哲学、文化人類学、心理学の学士号、1969 年にワシントン大学医学部でグズ (Samuel Guze) の下で精神医学の博士号を取得し、70 年までワシントン大学に教員として残った。現在、Barnes-Jewish Hospital (South) のパーソナリティ心理生物学センター所長、ウォレス・レナード精神科教授、遺伝学・心理学の教授のほか国立科学アカデミー医学研究所のメンバーである。

<sup>364</sup> Cloninger, C. R. (1987). A systematic method for clinical description and classification of personality variants: A proposal. *Archives of General Psychiatry*, 44, 573-588.

<sup>365</sup> Cloninger, C. R., Svrakic, D. M., & Przybeck, T. R. (1993). A psychological model of temperament and character. *Archives of General Psychiatry*, 50, 975-990.

<sup>366</sup> Cloninger, et al.・前掲注 364, 979-982.

<sup>367</sup> Heath, A. C., Cloninger, C. R., & Martin, N. G. (1994). Testing a model for the genetic structure of personality: A comparison of the personality systems of Cloninger and Eysenck. *Journal of Personality and Social Psychology*, 66(4), 773.

可能な違った人格構造を評価し、互いに補完するものであるとした<sup>368</sup>。しかし、安藤ほか（Ando et al., 2002）は、日本人に対する TCI 調査の結果、クロニンジャー理論の性格次元は、気質次元で説明できると批判している<sup>369</sup>。

#### （４）ロスバート<sup>370</sup>の理論

ロスバート・デリベリー（Rothbart & Derryberry, 1981）は、気質を「体質的な基盤を持つ、感情・活動・注意に関する反応性と自己制御における個人差」と定義している<sup>371</sup>。反応性とは、外的・内的環境の変化に対する反応性を指し、一般的な傾向（例えば、否定的な情動性）から、特定の感情（例えば、恐れ易さ）や活動（例えば、心肺機能の反応性）まで、さまざまなレベルのものを含むとする。自己制御は反応性を調節するような機能を持っており、自ら刺激に注意を向けたり、反応を抑えたりすることが含まれるとする<sup>372</sup>。また、運動機能と覚醒システムの側面と注意システムと同様に、気質そのものが発達すると主張していることが特徴である<sup>373</sup>。ロスバート（Rothbart, 2000）は、乳幼児から中学生までの各発達段階の気質特性を測定した<sup>374</sup>。その際、乳児期は親からのアンケート、幼稚園児及び就学前、小・中学生には児童行動調査票（CBQ）<sup>375</sup>を用いた。その結果、接近と肯定的傾向は、辺縁系回路<sup>376</sup>が、恐怖関連情報の処理には、扁桃体の中心核が深く関わっていることを確認するとともに、行動は、恐怖のような反応的な感情システムや Effortful Control などの自己調整的な注意システムによって調整することができるとした<sup>377</sup>。また、恐怖は、道徳的行動の感情的不快要素の発達においても重要で、気質の不安や恐怖の高い人は、罰の予感に比較的敏感であるというグレイほかの主張<sup>378</sup>や刑罰に関連する道徳的行動として犯罪を抑止することがより容易になるとするダインストバイヤー（Dienstbier, 1984）の主張<sup>379</sup>を支持した<sup>380</sup>。そして、6歳と7歳の子供を対象とした研

<sup>368</sup> Heath, et al.前掲注 366, 774.

<sup>369</sup> Ando, J., Ono, Y., Yoshimura K., Onoda, N., Shinohara, M., Kanda, S., Asai, M. (2002). The genetic structure of Cloninger's seven-factor model of temperament and character in a Japanese sample. *Journal of Personality*, 70, 605-606.

<sup>370</sup> Barlow, J. (2016). University of Oregon Around, Mary Rothbart Honored for her Career in Personality Psychology. <<https://around.uoregon.edu/content/mary-rothbart-honored-her-career-personality-psychology>>. (2018.8.30). ロスバート（Mary K. Rothbart）は、1940年にモンタナ州ルイスタウン生まれた。1962年にオレゴン州の Reed College で心理学の学士号を取得し、1966年にスタンフォード大学で発達心理学者のエレノア・マッコビーの指導の下で心理学の博士号を取得した。ロスバートは、その後、オレゴン大学で心理学の教授として教鞭を執り続け、引退後も名誉教授として、ポズナー（Michael Posner）を含む後輩研究者を引き続き支援している。

<sup>371</sup> Rothbart, M. K., & Derryberry, D. (1981). Development of individual differences in temperament. In: Lamb ML, Brown AL, editors. *Advances in developmental psychology*. 1, 37.

<sup>372</sup> Rothbart, et al.・前掲注 370, 37.

<sup>373</sup> Rothbart, et al.・前掲注 370, 64-65.

<sup>374</sup> Rothbart K. M., Stephan A. A., & David E. Evans. (2000). Temperament and Personality: Origins and Outcomes. *Journal of Personality and Social Psychology*, 78 (1), 122-135.

<sup>375</sup> Rothbart, M. K., Ahadi, S., Hershey, K., & Fisher, P. (2001). *Investigations of temperament at 3-7 years: The children's behavior questionnaire*. Manuscript submitted for publication.

<sup>376</sup> Rothbart, M.K., Derryberry, D., & Posner, M. I. (1994). A psychobiological approach to the development of temperament. *Individual differences at the interface of biology and behavior*. 83-116.

<sup>377</sup> Rothbart, et al.・前掲注 373, 127-128.

<sup>378</sup> Gray, J. A., & McNaughton, N. (1982 = 2003). *The Neuropsychology of Anxiety: An Enquiry into the Functions of the Septo-Hippocampal System*, (2nd.ed.). Cambridge University Press.

<sup>379</sup> Dienstbier, R.A. (1984). The role of emotion in moral socialization. Faculty Publications, *Department of Psychology*. 114. 510-511.

<sup>380</sup> Rothbart, et al.・前掲注 373, 128.

究では、否定的な感情の内面化要素は、罪悪感や恥を経験する傾向（感情的不快感）などの社会的特性と、Effortful Control は共感（積極的な道徳的規制）と罪悪感／恥に関連し、気質は、さまざまな方法で環境と相互作用すると主張した<sup>381</sup>。また、大学生に対する成人気質アンケートを実施し、Orienting Sensitivity（内的、外的及び感情的感受性の負荷、連想感性で定義される）、外向性（報酬と罰からの注意シフト、注意喚起、注意のシフトへの負荷）、否定的傾向（恐怖、欲求不満のための負担）、Effortful Control（不快感、悲しみなど）などのラベル付けされた因子を有する明確な4因子構造をもたらし、要因の3つは、子どもと気質の研究から出てきた幅広い要因（外向性、Effort Control 及び否定的傾向）に非常に類似していることを確認した<sup>382</sup>。これらのプロセスは、他の非ヒト動物に見られるような精神生物学的モデル及び特性に関連している。それらは、他者や物理世界への感じ方や方向づけ、そしてその世界への人の適応を形作るための初期の基盤として見ることができると主張した<sup>383</sup>。

## 5 統制理論の枠組み

### （1）自己統制理論

レックレス<sup>384</sup>ほか（Reckless et al., 1967）は、非行発生率の高い地域に住む無非行少年の自己概念について大規模な調査を行い、良い自己観念が非行に対する絶縁体となっていると主張した<sup>385</sup>。具体的には、犯罪動機の源泉としては、身体生理的な衝動、欲求不満や貧困のような圧力及び犯罪的な仲間や非合法な機会という牽引力があるとした。そして、これに対して、抑制のタイプは、組織化された社会における慣習的行動を強化するように作用し、規則の内在化を促進し、支持的な関係を提供する外的抑制及び犯罪への圧力や牽引力から個人を絶縁したり、これらに個人が抵抗できるようにしたりする内的抑制があるとした。また、内的抑制には、自分自身を、法を守る市民とみなす肯定的な自己概念、達成可能な成功目標を持つ現実的な目標志向性、人生における失敗や困難に対処できる欲求不満耐性、伝統的な価値観、法律、慣習、行動様式を受容する規範の保持があると主張した<sup>386</sup>。ヴォルド・バーナード（Vold & Bernald, 1985=平野・岩井, 1990）は、レックレスの理論は、多くの犯罪・非行理論を検討する包括的な枠組みと見なし得るものである。しかしこの理論は、そうした多くの理論に何もつけ加えていないように思われると批判した

<sup>381</sup> Rothbart, et al.・前掲注 373, 130.

<sup>382</sup> Rothbart, et al.・前掲注 373, 132-133.

<sup>383</sup> Rothbart, et al.・前掲注 373, 133.

<sup>384</sup> Bernard, T. J. (Sep 16, 2019). Encyclopedia Britannica. Walter Reckless. <<https://www.britannica.com/biography/Walter-Reckless>>. (2019.10.1). : レックレス（Walter Reckless, 1899 - 1988）は、ペンシルベニア州フィラデルフィアで生まれ、シカゴ大学に入学し、そこでパークとバージェスと共に犯罪の観察研究を行い、売春に関する論文によって1925年に社会学の博士号を取得した。1925年から40年までヴァンダービルト大学の社会学部で教鞭を執る傍ら、カンザス大学のスミス（Mapheus Smith）とともに1932年、「Juvenile Delinquency」を出版した。これには少年の身体的・精神的特徴、社会的背景、学校の不適応が含まれていた。1940年から69年までオハイオ大学の社会行政学と犯罪学の教授として教鞭を執る傍ら、1956年にディンツとマレイ（Dinitz & Murray）とともに「containment theory」を発表した。また、1963年にエドウィン H. サザランド賞を受賞し、1964年か66年までアメリカ犯罪学会の会長を務めた。

<sup>385</sup> Reckless, W. C., Dinitz, S., & Kay, B. (1967). Pioneering with Self-Concept as a Vulnerability Factor in Delinquency. *Journal of Criminal Law and Criminology*, 58(4), 520.

<sup>386</sup> Reckless・前掲注 384, 518-519.

387。また、リリーほか (Lilly, et al., 2011 = 影山ほか, 2013) は、レックレスは、統制のさまざまな原因のみならず、ショウとマッケイが取り組まなかった解体した地域でなぜ非行に走らない若者がいるのかというという問題を探求した。しかし、抑止理論もまた、デュルケムの伝統に則り、道德秩序を経済的構造よりも根源的と見なし、この道德秩序は、複雑な社会の中で際限のない欲望を持ち、否定に対するこらえもなく、そして社会生活の伝統的規則に従う覚悟もない個人の問題とかなりの程度関係するとみるのであると批判した<sup>388</sup>。

## (2) 社会絆理論

ハーシ<sup>389</sup> (Hirschi, 1969 = 森田ほか, 2010) は、非行と逸脱行動に対する分析視点を、緊張理論 (動機づけ理論)、文化的逸脱理論及びコントロール理論 (社会的絆理論) に3区分した<sup>390</sup>。そして、緊張理論は、階級理論であり、そもそも社会階級が非行に不可欠なほど強く結びついているとする誤謬に端を発していると厳しく批判した<sup>391</sup>。また、分析的帰納法に依って立つサザランドの手法を批判した<sup>392</sup>。しかし、文化的逸脱論には一般性や複雑性があるとして緊張理論のように切り捨てることなく自らの実証研究と対比させた<sup>393</sup>。また、ハーシ (Hirschi, 1969 = 森田ほか, 2010) は、多くの人は、何故非行を犯さないのかを問い<sup>394</sup>、社会のだれもが社会的同調に向けて社会化される中で、人生の初期において社会的絆が適正に育まれなかった者は、自己統制が弱いから非行や逸脱に走ると主張した<sup>395</sup>。そして、社会的絆の要素として、愛着 (attachment)、関与 (commitment)、巻き込み (involvement)、信念 (belief) の4つを挙げた<sup>396</sup>。

藤本 (2003) は、社会的絆理論に対する批判として、1) 研究のほとんどが、本質的には非行少年ではない若者の、比較的ささいな違法行為に焦点を当てたものであり、凶悪な犯罪を説明する原理としては有効なものではない。2) ハーシの社会的絆を構成している、愛着、関与、包絡、信念についての明確な定義がない。3) 政治やイデオロギーと無縁か価値中立性を標榜するものであり、そのために、具体的な政策や提言がなされていないという3点を挙げた<sup>397</sup>。また、瀬川 (1998) は、ハーシのボンド理論については、ボンドが弱まれば逸脱を生むというという見方は一面にすぎず、犯罪の発生が絆を弱めるのではないかという点も無視できず、ボンドと犯罪の相互作用論が必要なのではないかとの批判が

387 平野ほか・前掲注 89, 273 頁。

388 影山ほか・前掲注 82, 113 頁。

389 ハーシ (著) (森田洋司・清水新二 監訳) (森田洋司・清水新二・竹内郁雄・原田豊・島和博・山根真理・津富宏・山本祥子・上野加代子・田村雅夫・谷岡一郎・松田智子 訳) 『非行の原因—家庭・学校・社会へのつながりをもとめて—最新版』 (文化書房博文社, 2010) 122-123 頁: 翻訳者の森田によれば、ハーシ (Travis Warner Hirschi, 1935-2017) は、ユタ州に生まれ、ユタ大学に入学し、カルフォルニア大学で社会学の博士号を得たのち、ワシントン大学、カルフォルニア大学、ニューヨーク大学、アリゾナ大学で教鞭を執った。また、1982年から83年の間アメリカ犯罪学会の会長を務め、1986年にエドウィン H. サザランド賞、2016年にストックホルム賞を受賞した。

390 森田ほか・前掲注 388, 17 頁。

391 森田ほか・前掲注 388, 247 頁。

392 森田ほか・前掲注 388, 26 頁。

393 森田ほか・前掲注 388, 27 頁。

394 森田ほか・前掲注 388, 252 頁。

395 森田ほか・前掲注 388, 252 頁。

396 森田ほか・前掲注 388, 245-251 頁。

397 藤本・前掲注 130, 290 頁。

あると述べた<sup>398</sup>。さらに、アンネバーほか (Unnever, Cullen, Mathers, McCulture, & Allison, 2009) は、ハーシから提供を受けたリッチモンドユースプログラムのデータ・セットを再分析した。その結果、アフリカ系アメリカ人少年が受けた人種差別体験は社会的絆による非行の予測因子に匹敵する強い因子であることを発見したことから、結果の捏造とまで糾弾した<sup>399</sup>。リリーほか (Lilly, et al., 2011 = 影山ほか, 2013) は、この研究結果を踏まえ、もし、ハーシが 1960 年代に彼の研究を拡張させ、人種差別体験の調査項目を含ませたならば、人種差別体験はアフリカ系アメリカ人少年によって経験される一種の明確な犯罪危険因子として探求されるものになっていただろうと述べた<sup>400</sup>。確かに、ハーシの研究は、人種的偏見を意図的に避けたと思われる。しかし、アンネバーほか (Unnever et al., 2009) は、アフリカ系アメリカ人青年の中においても社会的絆理論の効果を認めており、最終的には、人種的偏見を科学的に研究する必要性を提言している<sup>401</sup>。

### (3) セルフコントロール理論

ゴットフレッドソン・ハーシ (Gottfredson & Hirschi, 1990 = 大淵, 2018) は、「犯罪」を威力や偽計を用いた自己利益を追求する行為と定義するとともに、セルフコントロールを一時的な誘惑に対する脆弱性と定義した<sup>402</sup>。そして、ほとんどの犯罪は何のスキルも必要ない突発的行為であり、長期的利益をほとんど、あるいはわずかしきもたらさないとする低セルフコントロール理論を主張した<sup>403</sup>。つまり、低セルフコントロールの人間は、1) 目の環境にある有形の刺激に反応し、満足遅延よりも犯罪によって目の享楽を志向する。2) 大胆、積極的、身体的傾向がある。3) 忍耐力や辛抱強さ、勤勉性に欠ける。4) 犯罪的でない別のタイプの即座の快楽の追求性もあるという特性を持つ<sup>404</sup>。また、低セルフコントロールは児童期の早期に確立され、一生を通じて持続する傾向があり、養育不足の結果であると主張した<sup>405</sup>。

藤野 (2012) は、1994 年にこの理論を最初に我が国に紹介したのは自身であるが、セルフコントロールの程度が幼少期に決定されるという主張やセルフコントロールと社会的絆が同義であるという主張に対しては異論がある。セルフコントロールと社会的絆の双方を視野に入れることは、非行・犯罪に至る個人内の過程と対社会との関係性をふまえることを意味するのであって、今後、その関係を明らかにすることが期待されると述べている<sup>406</sup>。また、上田 (2007) は、一般的犯罪理論におけるセルフコントロールの論争点について整理した<sup>407</sup>。そして、上田・尾山・津富 (2009) は、セルフコントロールと社会的絆理

<sup>398</sup> 瀬川・前掲注 184, 113 頁。

<sup>399</sup> Unnever, J. D., Cullen, F. T., Mathers, S. A., McClure, T. M., & Allison, M. C. (2009). Racial Discrimination and Hirschi's Criminological Classic: A Chapter in the Sociology of Knowledge. *Justice Quarterly*, 26(3), 383-384.

<sup>400</sup> 影山ほか・前掲注 82, 132 頁。

<sup>401</sup> Unnever et al.・前掲注 398, 404.

<sup>402</sup> 大淵・前掲注 100, 13 頁。

<sup>403</sup> 大淵・前掲注 100, 80-81 頁。

<sup>404</sup> 大淵・前掲注 100, 82 頁。

<sup>405</sup> 大淵・前掲注 100, 86-87 頁。

<sup>406</sup> 藤野京子「セルフコントロールの概念をめぐって—Gottfredson & Hirshi の Self-Control についての心理学的視点からの検討—」早稲田大学大学院文学研究科紀要第 1 分冊 58 号 (2012) 31 頁。

<sup>407</sup> 上田光明「犯罪学におけるコントロール理論の最近の展開と主な論争点の検討」犯罪社会学研究 32 (2007) 134-144 頁。

論との整合性について実証的研究を行った結果、一般犯罪理論の理論としての理解が進んでいけば、ハーシの尺度がセルフコントロール尺度の主流となり、尺度化に関する実証研究的検討が一層求められることになるだろうと締めくくっている<sup>408</sup>。さらに、高橋(2016)は、セルフコントロールが合理的な現象かどうかという点については議論の余地があるとしながら、セルフコントロールという考え方により、いままでの犯罪学にはなかった「犯罪行為も選択された行動である。」という視点がもたらされたことは意義深いと評価した<sup>409</sup>。リリーほか(Lilly, et al., 2011 = 影山ほか, 2013)は、ハーシとゴットフレッドソンは、社会的絆理論とセルフコントロール理論がどのように収斂し、離散するのかを明らかにしなかった。また、犯罪の一般理論では社会的絆の限界と、自己統制理論が犯罪性に関する我々の理解を前進させると二人が確信している理由を説明する試みがなされていないと批判した<sup>410</sup>。

一方、ウォルシュ(Walsh, 2015 = 松浦, 2017)は、2007年に犯罪学者に対して行った調査で、社会的コントロール理論とセルフコントロール理論が多く研究者に支持されていることを認めている。しかし、セルフコントロールは犯罪性向を説明するうえで、必要条件であって、十分条件ではない。また、個々人のセルフコントロールのレベルの変動が、単純に養育者の行動の変動に影響を与えているのであり、子供の側の効果を見逃しているのではないかという批判があることを紹介している<sup>411</sup>。確かに、ハリス(Harris, 1998 = 石田, 2017)は、子供の行動は保護者により規定されるのとまったく同様に、保護者の行動もまた子供の誘導的行動により規定されており、社会化とは双方向性のプロセスであることが明らかにされていると主張した<sup>412</sup>。

さらに、ウィクストラム・ Sampson は(Wiskström & Sampson, 2006 = 松浦, 2013)は、現在最も支持されている犯罪原因の理論はゴットフレッドソンとハーシによるものであり、自己統制の極めて重要な役割が強調されていると評価した。しかし、自己統制は特性ではなく、自制心を働かせることができるのは個人が行動選択肢について深く考えた場合のみであると主張し、自己統制の重要性について認めつつも犯罪行為の主要因だとすることについて批判した<sup>413</sup>。その上で、万引きのような常習的に行われる軽微な犯罪は習慣であり、そこでは道徳的規範は働いていないとする犯罪生成の状況的行動理論(Situational Action Theory of Crime Causation)を提唱した<sup>414</sup>。

---

408 上田光明・尾山 滋・津富 宏「General Theory of Crime におけるセルフコントロールの尺度化」犯罪社会学研究 34 (2009) 129 頁。

409 高橋雅治『セルフコントロールの心理学』(北大路書房, 2017) 238 頁。

410 影山ほか・前掲注 82, 137 頁。

411 松浦・前掲注 83, 204-207 頁。

412 ハリス(著)(石田理恵 訳)『子育ての大誤解(新版)―重要なのは親じゃない(下)』(早川書房, 2017) 204-211 頁。

413 松浦・前掲注 105, 112 頁。

414 松浦・前掲注 105, 113 頁。



## 6 アグニューの超特質理論

アグニュー<sup>415</sup> (Agnew, 2005) は、自律神経系や脳内化学変化という生物学的要因は、易怒性や低セルフコントロールに直接影響を与え、これらが生物学的要因に及ぼす効果を通して、他の領域に間接的な影響を与えるとした。そして、この理論により、性別、人種、年齢、低社会経済的地位 (Socioeconomic status: SES) が及ぼす犯罪性向については説明可能であると、青年期のみ非行行動に手を染める者とライフ・コースを通して犯罪を続ける者の差異を説明できると主張した<sup>416</sup>。アグニュー (Agnew, 1987) は、女性よりも男性のほうが生得的に易怒性—低セルフコントロール傾向を示しやすいと述べた<sup>417</sup>。また、アグニュー (Agnew, 2005) は、低 SES 家族の出自を持つ個人は易怒性等の特性を引き継ぎやすく、これらの特性を顕在化させている可能性がある。その理由は、低 SES の個人はそのような特性に関連する遺伝子多型を両親から受け継ぐだけでなく、高 SES の個人と比較すると、出生前の薬物中毒の暴露や出生時の問題など、これらの特性に環境的に影響を与えそうな生物学的負因を多く抱えてしまうからだとして主張した<sup>418</sup>。つまり、青年期の未熟な行動はこの時期の脳の未成熟と関連があり、彼らの脳は猛烈な勢いで再編成しているので、さらに興奮しやすくなるという主張である。しかし、ウォルシュ (Walsh, 2015 = 松浦, 2017) は、アグニューは、犯罪からの離脱に関して触れていないし、モフィットのような異なる発達経路について明示的な説明がされていないし、ファリントンやサンプソン・ラウブの言及よりも貧弱であると批判した<sup>419</sup>。

## 7 高齢者の犯罪行動の視点からの検討

古典的な生物社会学的視点による理論は、犯罪者と非犯罪者とは別の人種である、あるいは非犯罪者より劣った人間であるとするもので、アイゼンク、ジェフェリー、ゴットフレッドソン・ハーシ、ウィクストラムの批判が妥当する。一方、遺伝的研究は、日常の行動は遺伝的要素が確認できるが、最終的には、環境要因との相互関係として理解すべきであるとの結論である。また、ヘア (Hare, 1980) のサイコパス研究、メドニック・ハッチングス (Mednick & Hutchings, 1983) の養子研究やレーン (Raine, 1993) の双生児研究などの研究対象は、極端な暴力行為を伴う犯罪が主で、高齢者犯罪の一部しか説明できない。さらに、心理学の視点は、人間の体型・行動・パーソナリティなどをいくつかの種類に分ける根拠を示している。しかしこれは、犯罪者と非犯罪者に分類することと同じことに過ぎない。重要なことは、どうしてそのような体型・行動・パーソナリティになるのかという遺伝的、環境的要因を追究することである。

法務総合研究所 (2007) によれば、高齢者は、刑事施設への入所回数が増加するにつれ、

<sup>415</sup> Clark, C. (2010). Emory Report. <[https://www.emory.edu/EMORY\\_REPORT/stories/2010/06/07/Robert\\_agnew\\_profile.html](https://www.emory.edu/EMORY_REPORT/stories/2010/06/07/Robert_agnew_profile.html)>. (2019.10.1) : アグニュー (Robert Agnew) は、1953 年にニュージャージー州アトランティックシティで生まれた。1975 年にラトガース大学で学士号、ノースカロライナ大学で 78 年に修士号、80 年に社会学の博士号を取得した。1980 年にエモリー大学に就職し、2006 年から 09 年まで社会学科長を務めた。また、2012 年から 13 年までアメリカ犯罪学会の会長を務め、2015 年にエドウィン・サザランド賞を受賞した。

<sup>416</sup> Agnew, R. (2005). *Why do criminals offend? : A general theory of crime and delinquency*. Roxbury Publishing Co. 213.

<sup>417</sup> Broidy, L. & Agnew, R. (1987). Gender and Crime: A General Strain Theory Perspective. *Journal of Research in Crime and Delinquency*, 34(3), 299.

<sup>418</sup> Agnew・前掲注 415, 143.

<sup>419</sup> 松浦・前掲注 83, 328 頁。

罪名が窃盗（万引きや自転車盗など軽微なもの）と詐欺（無銭飲食などの軽微なもの）に集約されていく傾向にある。また、入所回数が増えるにしたがって再犯期間が次第に短くなり、入所回数が 20 度以上の者では、窃盗と詐欺の合計で約 8 割を占めているとした。このような我が国の高齢者犯罪の現状をもとに、個人のライフ・コースにおいて高齢になって軽微な犯罪を繰り返す理由を考えるには、ゴットフレッドソンとハーシが主張するセルフコントロールが重要な説明概念になると考える。しかし、ゴットフレッドソンとハーシが主張するセルフコントロールは、人生の初期に形成されるとしても、これらの個人的規制がどのように学習されるのかという点についての説明がなされていない。その点、気質研究は、動物実験や脳に障害を持った人の治療によって得られた脳神経科学的知見の不足部分を心理学的知見で補ってなされたものであり、同じ環境に置かれても犯罪を行わないことの説明に適用可能であると考ええる。さらに、ウィクストラムは、個人の行動（非行動）とは結局のところ、ある状況の特殊性に直面した時に、どのように自分の行動選択肢を認識して選択するかが結果として表れるかという認知傾向の研究の必要性を示唆した。

ガザニガ（Gazzaniga, 2008 = 柴田, 2018）は、我々が下す決断はすべて「接近」か「回避」かの選択に基づいており、道徳的判断も例外ではないと主張した。これに従えば、低セルフコントロールの人の特徴は、目前の「報酬への接近」反応、あるいは目前の「罰からの回避」反応の強弱のバランスが悪いと捉えることができるのではないか。このことは、グレイ（Gray, 1981）が主張する不安や恐怖に反応して「回避」しようとする中枢神経系に関わる心理的メカニズムである行動抑制系（BIS）と報酬に反応して「接近」しようとする末梢神経系に関わる心理的メカニズムである行動賦活系（BAS）によって評価できるのではないだろうか。

セルフコントロール理論、気質理論及び行動学習に関する脳科学の知見に従えば、「回避と接近」の感受性をもたらす生得的な心理的メカニズムの差が養育環境などと相まって、セルフコントロールの高低に影響を及ぼす。そして、低セルフコントロールの者が生活困窮に陥ると、一時的な誘惑に勝てず自己利益を追求する行動を起こすと考えることが可能ではないだろうか。このようなことから、次節において、近年の気質理論研究について概観する。

### 第3節 犯罪と生得的な気質に関する近年の研究

アイゼンク（Eysenck, 1964 = MPI 研究会, 1972）が出版した著書名は、**Crime and Personality**（邦題：犯罪とパーソナリティ）であり、パーソナリティによって犯罪行為を説明しようと試みている<sup>420</sup>。ところが、グレイはもちろん尺度を作成したカーバーとホワイト（Caver & White, 1994）も BIS/BAS 気質という生得的感受性の高低が犯罪行為に関係しているとは述べていない。しかしながら、イギリスやアメリカ、カナダなどにおいては、受刑者や被疑者を対象に気質と犯罪の関連を調査した研究が数多く行われている。残念なことに、我が国では、ほとんどが青少年を対象にした基礎研究である。

---

<sup>420</sup> MPI 研究会・前掲注 86, x vi-x ix 頁。

## 1 国内の研究

### (1) MPI 研究会 (1972) の研究

日本版モーズレイ性格検査を用いて少年院在院者と大学生を比較したところ、外向性 (E)・神経症質 (N) 尺度得点とも大学生よりも少年院在院者の方が高かった。しかし、知能指数との相関関係はなかった。また、罪種別にみると、いずれの犯罪も N 尺度の得点がいちじるしく高く、少年院在院者群の情緒不安定性が示された。E 尺度得点については、強盗を除いて一般的に高い。強姦、恐喝、ぐ犯、傷害、殺人などを行った少年たちは、明らかに E・N 両得点とも高く、精神病質象限に位置するなど、アイゼンクの主張をほぼ支持した<sup>421</sup>。

### (2) 井上 (2008) の研究

非行と気質の関係を調査するため、クロニンジャーの気質と性格の 7 因子モデル (Temperament and Character Inventory ; TCI) 日本語版 (木島, 1996) を用い、少年鑑別所の 14 歳から 19 歳の在所者 189 人に施行した。そして、他の研究で得たノーマル群 (平均年齢 19.2 歳) のデータと比較した結果、鑑別所群は、報酬依存 (RD)、固執 (P)、自己志向 (SD)、C (協調) が有意に高かった。鑑別所群の中でも、鑑別判定が在宅保護とされるような非行の進んでいない者で、最も RD が高いことは、この気質特徴が非行化の一要因になりうるとともに、C の高さという性格特徴を発達させ、比較的速やかな立ち直りも示唆するものと考えられた<sup>422</sup>。

### (3) 原田ほか (2009) の研究

社会的迷惑行為や逸脱行為といった反社会的行動とセルフコントロールの関係について、脳科学的基盤が仮定されている気質レベルのセルフコントロールと成長の過程で獲得された能力レベルのセルフコントロールという 2 側面から検討した。大学生と高校生 641 名を対象に、気質レベルでは BIS/BAS・EC 尺度を、能力レベルでは、社会的自己制御 (SSR) 尺度を用いた。分析の結果、気質レベルよりも能力レベルのセルフコントロールの方が、反社会的行動により強く影響を与えていた<sup>423</sup>。

## 2 国外の研究

### (1) アーネッタ・ニューマン (Arnetta & Newman, 2000) の研究

ウィスコンシン州南部の白人刑務所の 18 歳から 39 歳までの受刑者のうち実験 1 では 58 名、実験 2 では 64 名を対象にした。参加者は、知的レベルの低い者、薬物使用者、サイコパスチェックリスト (Hare, 1985) で「サイコパス」と診断された者は除かれている。

<sup>421</sup> MPI 研究会・前掲注 86, 276-283 頁。

<sup>422</sup> 井上和則「少年鑑別所在所者の TCI の特徴」日本パーソナリティ心理学会大会発表論文集 17 (2008) 170-171 頁。

<sup>423</sup> 原田知佳・吉澤寛之・吉田俊和「自己制御が社会的迷惑行為および逸脱行為に及ぼす影響—気質レベルと能力レベルからの検討—」実験社会心理学研究 48 (2) (2009) 122-136 頁。

犯罪者に報酬と罰を伴う連続的な作業を行わせ、グレイらの3次元モデルの妥当性を評価した。非刺激的な訓練段階から報酬のみ（実験1）及び能動回避（実験2）段階までの応答時間並びに心拍数（HR）の有意な増加は、行動的アプローチ／活性化システム（BAS）の予測と一致した。衝動特性は、実験1ではBASの応答時間と相関したが、実験2では相関しなかった。実験1では、皮膚コンダクタンス応答（SCRs）が報酬単独から混合動機段階（ $p < .05$ ）に反応し、また両実験ではSC指数が懲罰手がかりに反応して増加した（ $p < .05$ ）。結果は、行動抑制系（BIS）の予測と一致した。モデルの変動予測と一致して、報酬のみ（実験1）から能動回避（実験2）を混合動機段階に変更したところ、混合動機段階の開始を意味する懲罰手がかりの開始に対する応答促進への初期の傾向を示しているにもかかわらず、応答時間の有意な低下（ $p < .001$ ）を示した。参加者は、両方の研究において、これらの段階の間に心拍数の有意な減少を示したが、この効果は実験1においてのみ明らかであった（ $p < .002$ ）。BISは応答時間に影響を与え、心拍数は実験1の不安と有意（ $p < .05$ ）に相関していたが、意外にも、いずれの実験においても不安はBISのSC指数と相関しなかった。データの多くはGray / Fowlesモデルの妥当性を支持しているが、この理論の更なる検討が示唆された<sup>424</sup>。

## （2）ニューマンほか（Newman, MacCoon, Vaughn, & Sadeh, 2005）の研究

グレイ（Gray, 1987）の行動抑制システムと行動活性化システム（BIS/BAS）の妥当性を確認するために、ウィスコンシン州刑務所の健康や知能が正常な45歳以下の男性受刑者517人にサイコパスチェックリスト（Hare, 2003）と不安尺度（Welsh, 1956）、SPSRQ（Torrubia, Ávila, Moltó, & Caseras, 2001）、BIS / BAS 尺度（Carver & White, 1994）を使用した。一次的サイコパスは弱いBISと中程度のBASに関連し、二次的サイコパスは強いBAS及び中程度のBISと関連すると仮定した。一次的サイコパスの結果は予測通りであったが、二次的サイコパスは、強いBAS予測を明らかに支持したもののBIS予測は中間的な結果だった<sup>425</sup>。

## （3）リユーほか（Leue, Brocke, & Hoyer, 2008）の研究

青年男性の反社会的行動（ASB）との関係を調査するため、犯罪者群（ $n = 85$ ）と非犯罪者群（ $n = 50$ ）の行動抑制／行動活性化システム（BIS/BAS）尺度得点を比較した。その結果、BIS/BAS得点とASB（精神病質、問題惹起、アルコール使用）が関係していることが示された。グループ間比較では、犯罪者のBAS\_D及びBISが高いことが示された。回帰分析は、報酬欲求（BAS\_D又はBAS\_F）に関連する気質は、精神病質傾向気質を積極的に予測し、飲酒が問題であることを示した。対照的に、報酬への反応（BAS\_R）は、精神障害と負の関連があり、問題を引き起こす。BISの低下は、精神病質のみに関連していた。この結果は、BASの報酬特性がASBの理解に有用であり、青少年のASBの異なる

<sup>424</sup> Arnetta, P. A., & Newman, J. P. (2000). Gray's three-arousal model: an empirical investigation. *Personality and Individual Differences*, 28, 1171-1189.

<sup>425</sup> Newman, J. P., MacCoon, D. G., Vaughn, L. J., & Sadeh, N. (2005). Validating a distinction between primary and secondary psychopathy with measures of Gray's BIS and BAS constructs. *Journal of Abnormal Psychology*, 114(2), 319-323.

側面に関連する報酬処理の次元を検討することの重要性が示唆された<sup>426</sup>。

(4) パイスレスほか (Poythress, Skeem, Weir, Lilienfeld, Douglas, Edens, & Kennealy, 2008) の研究

フロリダ州、オレゴン州、ユタ州、ネバダ州、テキサス州で刑務所に服役中の 21 歳以上の 1,515 人の犯罪者のサンプルを使用した。調査結果は、カーバーとホワイトの BIS / BAS 尺度は、犯罪者と非犯罪者で多少異なる動作をすることを示唆している。主な違いは、BIS 尺度の構造と機能にあると思われる。BIS 尺度は、学生とコミュニティのサンプルとの単一スケールを構成するが、犯罪者の恐怖感度と不安に関連する個別の因子に分かれる。恐怖の感受性と不安の個別の評価は、これらの機能を異なるシステムに割り当てるように改訂され RST (Gray & McNaughton, 2000) と一致している。犯罪者に対する現在の BIS / BAS 尺度の信頼性と有効性のさらなる調査をし、改訂 RST で定義されているように、恐怖感度と BIS の機能をより適切に捉えることができる新しい対策の開発を強く推奨すると主張した<sup>427</sup>。

(5) ブリュネラほか (Brunellea, Douglasb, Pihlc, & Stewart, 2009) の研究

32 人の女性犯罪者と 32 人の統制群について、行動賦活系と行動抑制系の測定、並びに失望／内省、不安感受性、衝動性及び刺激探求性の人格次元について比較した。ロジスティック回帰分析の結果、薬物乱用／依存症、衝動性及び刺激探求性が現在の状況に対する重要な独立因子であった。薬物使用障害は、刺激探索性と拘禁状態を部分的に説明した。これらの結果は、男性集団と同様に、抑止されていない人格特性及び薬物使用は、女性の犯罪行為と関連しており、介入の重要な標的となり得ることが示唆された<sup>428</sup>。

(6) ワラックほか (Wallace, Malterer, & Newman, 2009) の研究

強化感受性理論 (RST; Gray, 1987; Gray & McNaughton, 2000) は、サイコパスを理解するための貴重なツールであることが証明されている。最近の研究では、一次的サイコパスと二次的サイコパスを有する個人に、行動抑制系 (BIS) と行動賦活系 (BAS) という 2 つの RST 構成概念が関連しているとされている。男性被疑者 472 人のサンプルで BIS/BAS 構成概念とサイコパスチェックリスト改訂版 (PCL-R) の第 1 因子 (対人／情動面) 及び第 2 因子 (衝動的／反社会的行動面) との関係を調査したところ、第 1 因子への BIS の影響は BAS の影響よりも顕著であり、第 2 因子への BAS の影響は BIS の影響よりも顕著であった<sup>429</sup>。

---

<sup>426</sup> Leue, A., Brocke, B., & Hoyer, J. (2008). Reinforcement sensitivity of sex offenders and non-offenders: An experimental and psychometric study of reinforcement sensitivity theory. *British Journal of Psychology*, 99, 361-378.

<sup>427</sup> Poythress, N. G., Skeem, J. L., Weir, J., Lilienfeld, S. O., Douglas, S. K., Edens, J. F., & Kennealy, P. J. (2008). Psychometric Properties of BIS/BAS Scales in a Large Sample of Offenders Carver and White's (1994), *Personality and Individual Differences*, 45(8), 732-737.

<sup>428</sup> Brunellea, C., Douglasb, R. L., Pihlc, R. O., & Stewart, S. H. (2009). Personality and substance use disorders in female offenders: A matched controlled study. *Personality and Individual Differences*, 46, 472-476.

<sup>429</sup> Wallace, J. F., Malterer, M. B., & Newman, J. P. (2009). Mapping Gray's BIS and BAS constructs on to Factor 1 and Factor 2 of Hare's Psychopathy Checklist - Revised. *Personality and Individual Differences*, 47(8), 812-816.

#### (7) テイラー・アイマン (Taylor, & Eitle, 2015) の研究

サウスフロリダにおいて、あらかじめ行動及び家族特性に統計的有意差のない 19 歳から 21 歳の者について BIS/BAS 尺度を用い測定した。それらの者を対象に 2 年後 (21 歳から 23 歳) に追跡調査を行い、648 人を把握した。2 年間に薬物使用で逮捕された者のストレスによるトラウマ体験と BIS/BAS の関係を見た。その結果、常態的に BIS 得点が高い者は、高い BAS 得点で逮捕率が増加し、BIS 得点在中程度又は高い者は、BAS\_D 得点が高いと逮捕率は低下した。これとは対照的に、生涯のトラウマと逮捕との間には正の関連があり、この関係は、その後のそれぞれの BAS 得点のレベルの大きさに関係していた<sup>430</sup>。

### 第 4 節 個人の犯罪性向の継続変化に関する研究の概観

#### 1 ライフイベントと非行・犯罪からの離脱との関係

##### (1) ウイルソン<sup>431</sup>・ハースタイン<sup>432</sup>の理論

ウイルソン・ハースタイン (Wilson and Herrnstein, 1985) は、犯罪者は犯罪によって得られる利益と犯罪に伴うコストを比較考量したうえで、犯罪を実行するか否かを決定していると主張した<sup>433</sup>。ただし、同じ条件にあるならば、犯罪を実行するか否かの選択には、例えば、知能が低いこと、養育者に犯罪者を持つこと、あるいは自律神経系が過敏に反応しすぎることなどの生物学的・心理学的な特性を持つ者は犯罪を選択する可能性が高いとした<sup>434</sup>。一方で、家庭生活が乱れていること、学校に適応できないこと、あるいは非行サブカルチャーに属していることなどの環境的な要因も犯罪性に大きな影響を及ぼし、犯罪の防止には、厳格な刑罰よりも家庭の絆と教育が有効であると主張した<sup>435</sup>。

---

<sup>430</sup> Taylor, J. & Eitle, D. (2015). The moderating role of BIS/BAS personality tendencies in the relationship between General Strain and Crime. *Deviant Behavior*, 36, 874-889.

<sup>431</sup> Woo, E. Los Angeles Times, (March 3, 2012). James Q. Wilson dies at 80; pioneer in 'broken windows' approach to improve policing. <<https://www.latimes.com/local/obituaries/la-me-james-q-wilson-20120303-story.html>> (2019.9.30). : ウイルソン (James Quinn Wilson, 1931 - 2012) は、コロラド州デンバーで生まれ、カルフォルニア州ロングビーチで育った。シカゴ大学で 1952 年に学士号、57 年に修士号、59 年に政治科学の博士号を取得した。1961 年から 87 年までハーバード大学、1987 年から 97 年まで UCLA、1998 年から 2009 年まで Pepperdine 大学の教授を務めた。ハーバード大学 MIT の都市共同研究センター長、American Enterprise Institute の学術顧問及び大統領 Foreign Intelligence Advisory (1985 - 1990) 評議会の議長、大統領生命倫理評議会のメンバーを歴任した。

<sup>432</sup> Goleman, D. New York Times (Sept. 16, 1994). Richard Herrnstein, 64, Dies; Backed Nature Over Nurture, <<https://www.nytimes.com/1994/09/16/obituaries/richard-herrnstein-64-dies-backed-nature-over-nurture.html>> (2019.10.1). : ハースタイン (Richard Julius Herrnstein, 1930 - 1994) は、ニューヨークのユダヤ系ハンガリー人移民の家族に生まれた。音楽・芸術高校を卒業後、ニューヨーク市立大学で学士号、1955 年に行動心理学の博士号を取得した。アメリカ陸軍に 3 年従軍した後、ハーバード大学の心理学教授としてスキナーと鳩研究所で勤務するとともに、選択行動と行動経済学に関する研究を行ったほか、1967 年から 71 年までハーバード大学の心理学科長であった。また、1977 年に、アメリカ芸術科学アカデミーの会員に選出された。

<sup>433</sup> Wilson, J. Q., & Herrnstein, R. J. (1985). *Crime and Human Nature*. Simon and Schuster: New York. 52.

<sup>434</sup> Wilson・前掲注 432, 66.

<sup>435</sup> Wilson・前掲注 432, 506-507.

## (2) モフィット<sup>436</sup>の二重経路発達理論

モフィット (Moffitt, 1993) は、犯罪に至る大多数の若者は青年期に離脱していき、ごく少数の者のみが犯罪行動を持続させるとした<sup>437</sup>。そして、前者を青年期限定型 (AL) 犯罪者、後者を生涯持続型 (LCP) 犯罪者と呼んだ<sup>438</sup>。LCP 犯罪者は、男児全体の 5 から 10% を占める小さな集団で、思春期以前に犯罪行為に手を染め、成人期以降も犯罪行動を持続させ、神経心理学的及び気質的機能障害を有し、低 IQ、多動性、不注意、否定的感情、そして低衝動抑制に特徴付けられるとした。そして、これらの問題は、脳発達における遺伝的かつ環境的要因の複合的影響に由来すると主張した<sup>439</sup>。また、環境的リスク要因には、10 代のシングルマザー、低い社会経済的地位、虐待・ネグレクト、一貫性のない躾などが含まれる。これら関連し合う個人的かつ環境的機能障害が、ネガティブな個人と環境の累積的相互作用プロセスを生み出し、結果的に半社会的態度や行動にどっぷりとつかったライフ・コースへと導く<sup>440</sup>。そして、AL 犯罪者は、ごく普通の若者であり、彼らの犯罪とは仲間集団で羽目をはずした 1 つの社会現象であって、何ら持続的なパーソナリティ機能障害を反映したものではないと主張した<sup>441</sup>。リリーら (Lilly, et al., 2011 = 影山他, 2013) によれば、モフィットは、神経心理学的欠陥が犯罪への関与と関連するという仮説のもとに大学院で研究していた。1984 年にスカイダイビングの事故で足を骨折して車椅子で研究室にいたとき、偶然にも学部の来訪客からニュージーランドにおけるコホート追跡調査に加わることを要請され、調査に参加した。ところが、2 年間に及ぶニュージーランドの研究結果は、自らの仮説とは違い、人生早期に逸脱行動を開始する神経心理学的欠陥に罹患している若者群とこのような欠陥を持たず、青少年になって遅れて非行に参加する若者群がいることが明らかになった。そこで、二重経路発達理論を考え付いたとされる<sup>442</sup>。また、当初、論文を「Criminology」に投稿したが採用されず、後に「American Psychologist」で公表されたと紹介した<sup>443</sup>。ティトゥル (Tittle, 2000) は、年齢・犯罪関係及びライフコースパターンへの最も革新的なアプローチであると評価した<sup>444</sup>。しかし、リリーほか (Lilly, et al., 2011 = 影山ほか, 2013) は、二重経路発達理論について、1) 一部の調査

<sup>436</sup> Duke Institute for Genome Sciences & Policy. Terrie Moffitt, PhD. <<https://web.archive.org/web/20120223175057/http://www.genome.duke.edu/directory/faculty/moffitt/>>. (2019.10.15). : モフィット (Terrie E. Moffitt) は、1955 年にドイツユルンベルグで生まれ、ノースカロライナ州で育った。1977 年にノースカロライナ大学で学士号を取得し、1981 年に南カルフォルニア大学で臨床心理学の修士号、84 年に博士号を取得した。85 年にウィスコンシン大学マディソン校の助教授になり、95 年に教授に昇進した。その後、精神医学研究所、キングスカレッジロンドンを経て、現在、デューク大学の Knut Schmidt Nielsen 心理・神経科学教授及びキングスカレッジロンドン精神医学研究所教授を務めている。さらには、ニュージーランドダニーデンの学際的健康開発研究所の副所長で、環境リスク縦断的 twin 研究 (E-risk) を指揮している。夫は、共同研究者でもあるカスピ (Avshalom Caspi) である。アメリカ心理学会の早期職業貢献賞 (1993)、臨床児童心理学の優秀キャリア賞 (2006)、ストックホルム賞 (2007) を受賞している。また、ナフィールド生命倫理評議会 (行動遺伝学研究の倫理) や米国国立科学アカデミー (銃器や暴力の研究) などの機関の調査パネルを務めたほか、Academy of Medical Sciences (1999)、American Society of Criminology (2003)、British Academy (2004) 及び Academia Europaea (2005) の研究員でもある。

<sup>437</sup> Moffitt T. (1993). Adolescent-Limited and Life-Course-Persistent Adolescent Behavior: A Developmental Taxonomy. *Psychological Review*, 100(4), 675.

<sup>438</sup> Moffitt・前掲注 436, 676.

<sup>439</sup> Moffitt・前掲注 436, 677-678.

<sup>440</sup> Moffitt・前掲注 436, 681-682.

<sup>441</sup> Moffitt・前掲注 436, 687-688

<sup>442</sup> 影山ほか・前掲注 82, 409-410 頁。

<sup>443</sup> 影山ほか・前掲注 82, 410 頁。

<sup>444</sup> Tittle, C. R. (2000). Control balance: In R. Paternoster & R. Bachman (Eds.), *Explaining criminals and crime: Essays in contemporary theory*. Los Angeles: Roxbury 315-334.

では AL 群がさらに、2つの下位群に分類できるという結果から、犯罪への参入とこれからの離脱という発達の仕方の複雑さを完全に把握するには、あまりにも簡略化されすぎている。2) 犯罪者の類型学的探求は愚かな仕事である。AL も LCP も実際には存在しておらず、むしろ学者たちが犯罪者の分布を考え、データに人為的な分離点を設けるために、作成されたものであると批判している<sup>445</sup>。また、モフィットの理論は、ほとんど暴力的犯罪をとりあげていることに留意する必要がある。

### (3) サンプソン<sup>446</sup>・ラウブの年齢一段階理論

ラウブ・サンプソン (Laub, & Sampson, 1993) は、グリュック夫妻が 25 年間かけて追跡収集した少年犯罪に関する 3 回の縦断的データを再分析し、ライフ・コースにおける犯罪を年齢一段階理論 (a theory age-graded of informal social control) によって説明できると主張した<sup>447</sup>。この中では、ハーシの社会的絆の概念を、青少年期だけでなく、成人期に至るまでの人々の関係の質によって形成される社会資本 (social capital) として捕らえ直した<sup>448</sup>。そして、人生とは変化 (ライフイベント) の連続であり、多くのソーシャルキャピタルを持たない人は、そのライフイベントによって反社会的方向へと経路が変化する場合がある。そのようなイベントをターニングポイントと呼び、これを理論の中で最も重要な概念であると述べた。さらに、サンプソン・ラウブ (Sampson & Laub, 2005) は、犯罪中止はいくつかの要因と行為者性 (human agency) との集合の結果であると主張した<sup>449</sup>。リリーほか (Lilly, et al., 2011 = 影山ほか, 2013) は、サンプソンとラウブは、犯罪傾向の早期からの個人差の重要性を否定しないものの、発達社会学が社会学の意識を失っていないことを示すために社会的絆を援用したと述べている<sup>450</sup>。また、サンプソンとラウブは、ゴットフレットソンとハーシ (Gottfredson & Hirschi, 1990) とは対照的に、犯罪行動は連続性だけでなく、時間とともに起こる連続性と変化の双方を特徴としていること及びモフィット (Moffit, 1993) とは対照的に、連続性が明確に区分けされた犯罪者の一群を構成するとか、変化が犯罪者の第 2 の群を構成することを否定したのだと主張した<sup>451</sup>。リリーほか (Lilly, et al., 2011 = 影山ほか, 2013) は、サンプソンとラウブは、ライフ・コースを通じての社会的絆の優位性を示すことによって、人が示す犯罪性の水準

<sup>445</sup> 影山ほか・前掲注 82, 413-414 頁。

<sup>446</sup> Harvard University, Robert J. Sampson. <<https://scholar.harvard.edu/sampson/home>> (2019.10.1). : サンプソン (Robert J. Sampson) は、1956 年にニューヨーク州で生まれた。1977 年にバッファロー大学で社会学の学士号、83 年ニューヨーク大学オールバニー校で刑事司法の博士号を取得した。その後、シカゴ大学で 12 年間、イリノイ大学で 7 年間教員を務め、1994 年から 2002 年までアメリカ弁護士会の上級研究員、1997 年から 98 年及び 2002 年から 03 年にカリフォルニア州スタンフォードの行動科学高等研究センターの研究員を務めた。2005 年にはアメリカ芸術科学アカデミーの研究員、2006 年に国立科学アカデミーのメンバーに選出された。現在は、ハーバード大学ヘンリー・フォード II の社会科学教授、アメリカ弁護士会附属研究所教授、ボストンエリアリサーチ・イニシアティブの名誉監修者、2016 年から英国アカデミー研究員、2018 年からジョン・サイモン・グッゲンハイム財団の研究員である。2011 年にラウブ (Laub) とともにストックホルム賞を受賞し、2011 年から 12 年のアメリカ犯罪学会の会長を務めた。

<sup>447</sup> Sampson, R. J. & Laub, J. H. (1993). Turning Points in the Life-Course: Why change matters to the study of Crime, *Criminology*, 31(3), 303-305.

<sup>448</sup> Sampson et al.・前掲注 446, 310.

<sup>449</sup> Sampson, R. J. & Laub, J. H. (2005). A life-course view of the development of crime. *Annals of the American Academy of Political and Social Science*. 602, 42.

<sup>450</sup> 影山ほか・前掲注 82, 414 頁。

<sup>451</sup> 影山ほか・前掲注 82, 414 頁。



には幼児期以外の社会的過程は無関係であるというゴットフレッドソンとハーシによる攻撃から、社会学を救出する手助けをしたと評価した。しかし、この挑戦は、連続性の原因は自己統制なのか、それとも社会的統制なのかという単純な議論を超えてなされるべきであろう。そして、他のライフ・コース理論も同様だが、犯罪上の軌跡はあれかこれかの型の変数によってではなく、個人的そして社会的条件の交錯ないし連動によって動かされているとした。また、ある程度人は自分の人生の設計者であるが、己の現在の選択とありうる未来とを劇的に制約するライフ・コースに埋め込まれてもいる。この複雑な過程をいかに解明するかはこれからの犯罪学者たちの注目を集める可能性があり、この解明こそがサンプルソンとラウブのごく最近の業績の中心課題となっていると評価した<sup>452</sup>。

#### (4) ファリントン<sup>453</sup>の反社会的潜在特性認知統合 (ICAP) 理論

ファリントン (Farrington, 2003) は、ロンドンの貧困地域に生まれ育った少年らの縦断的コホート研究に基づき、初期の生物学的要因及び環境要因が行動選択に影響し、これらの行動選択が特殊な認知若しくは思考様式を導いているとする反社会的潜在特性認知統合理論 (The Integrated Cognitive Antisocial Potential Theory: ICAP) を提唱した<sup>454</sup>。ファリントン (Farrington, 2003) によれば、この理論の鍵となるのは、反社会的潜在特性 (Antisocial Potential: AP) であり、個人の抱えるリスク、犯罪関与の性向及び認知を示す。そして、認知とは、想定したことを実際の行動へと移すための思考若しくは意思決定のプロセスである。AP とは、比較的少数のレベルから多数のレベルを有する者まで連続体を形成するように秩序だっており、そのレベルは経時変化やライフイベントにより変化するが、ピークは青年期である<sup>455</sup>。ファリントンは、長期的 AP と短期的 AP を区分した。そして、長期的 AP 保持者の多くは貧困家庭出身であり、社会化が未熟で衝動的で、刺激探求性が強く、低 IQ である。短期的 AP 保持者はこのような特性をほとんど有しておらず、ある状況や誘因に反応して自身の AP を一時的に増大させていると考えた。ただし、短期的 AP は犯罪行動関与の結果として、経時的に長期的 AP へと変化する可能性がある<sup>456</sup>。ICAP 理論は犯罪からの離脱にも関心を寄せており、離脱とは社会的かつ個人的理由と、個人の AP レベルの推移の両者の関連により起こると考えた<sup>457</sup>。

<sup>452</sup> 影山ほか・前掲注 82, 417 頁。

<sup>453</sup> Carleton University. David Philip Farrington. <<https://carleton.ca/socanth/wp-content/uploads/David-Farringtons-Resume-October-2016.pdf>> (2019.10.1). : ファリントン (David Philip Farrington) は、1944 年イギリスランカシャー州で生まれた。Ormskirk Grammar School を卒業後、ケンブリッジ大学に進み、心理学の学士号、修士号、博士号を取得した。1969 年に犯罪学の研究責任者、74 年に犯罪心理学の助教、76 年に講師、92 年に教授になった。1971 年から 2000 年まで学部生の犯罪予防と犯罪心理学の指導、1975 年から 78 年及び 1983 年から 2004 年まで刑事司法専門上級犯罪学コースの責任者、1998 年から 2016 年までピッツバーグ大学の Western Psychiatric Institute and Clinic 精神科の非常勤教授を務めた。また、アメリカ犯罪学会 (1998 - 99)、ヨーロッパ心理学会 (1997 - 99)、イギリス犯罪学会 (1990 - 93)、実験犯罪学アカデミー (2001 - 03) の会長を務めた。さらに、刑事司法科学アカデミー (2004 - 10) 及び国際犯罪学会 (1998 - 2009) のメンバー、2015 年から 16 年まで、アメリカ犯罪学会の発達及びライフ・コース犯罪学分野の委員長を務めた。

<sup>454</sup> Farrington, D. (2003). Developmental and Life-course Criminology : Key Theoretical and Empirical Issues - The 2002 Sutherland Award Address. *Criminology*. 41(2), 220-255.

<sup>455</sup> Farrington・前掲注 453, 231.

<sup>456</sup> Farrington・前掲注 453, 233-236.

<sup>457</sup> Farrington・前掲注 453, 236-239

## 2 非行・犯罪からの離脱の過程におけるアイデンティティ及び認知の変化

### (1) マルナの罪の回復の脚本理論

マルナ (Maruna, 2001 = 津富ほか, 2011) は、イギリスのリバプールで 65 人の元犯罪者と犯罪者との面接による調査を行った<sup>458</sup>。その結果、貧困、児童虐待、低学歴、労働からの離脱、合法的上昇機会の欠乏など多様なリスク要因を特徴とし、全員が持続的な犯罪経歴を持っていた。そして、これらの犯罪者の一部は、すでに犯罪から身を引いていたが、これらの二群は社会史、心理史、犯罪歴からは明確に区分されなかったと主張した<sup>459</sup>。マルナ・コップス (Maruna & Copes, 2005) は、停止群と持続群は、彼らの犯罪生活の認知的理解が極めて異なっており、停止群は、ひどく殺伐とした生活史の中でも事を成し遂げる理由と目的を見出すことが可能であるという人生の物語を抱くことができた群であったと主張した<sup>460</sup>。マルナ (Maruna, 2001 = 津富ほか, 2011) は、持続性犯罪者は、犯罪にも刑務所にもつくづく嫌気がさしているけれども、薬物依存、貧困、学歴や技能の不足、あるいは社会的な偏見のために、自分の人生を変えるには無力であると感じており、選択肢がないと感じていると述べた<sup>461</sup>。これに対して、停止した者たちは、薬物を売り、車を盗み、刑務所で服役した約 10 年の歳月を説明し、犯罪から手を切ったことを説明し正当化し得る、まとまりのある「回復の脚本」によって達成している<sup>462</sup>。そして、この物語は、犯罪を継続している犯罪者の物語と、1) 本人の真の自己を形作る、中核的な信念の形成、2) 自己の運命に対する自己の支配という楽観的な認識、3) 生産的でありたい、そして社会、とりわけ次の世代にお返ししたいという気持ちという 3 つの点で根本的に異なっていると主張した<sup>463</sup>。人生のやり直しとは、再社会化や治療されるとはみなされず、自分の「本当の私」を外部の制約から解放する過程である。この過程では、最初は、自分が自分を信じられないが、パートナーや社会的組織が信じてくれるという外部からの証明を受けて初めて、自分自身を内面化し、自分の運命を選べるということを自覚する<sup>464</sup>。そして、そのようにして立ち直った元当事者が自分のライフストーリーを道徳譚として構築・再構築することは、それ自体が、重要な行動的改善を継続するための大切な要素であると主張した<sup>465</sup>。リリーほか (Lilly, et al., 2011 = 影山ほか, 2013) は、ともあれ将来のライフ・コース研究者はいかにして犯罪者や元犯罪者が自分達の同一性を確立し、自らの人生を思い描くのかということに一層体系的に注意を向けることになろうと評価した<sup>466</sup>。

<sup>458</sup> マルナ (著) (津富宏 監訳) (河野荘子 訳)『犯罪からの離脱と「人生のやり直し」—元犯罪者のナラティブから学ぶ—』(明石書店, 2011) 71-72 頁。

<sup>459</sup> 津富ほか・前掲注 457, 82-83 頁。

<sup>460</sup> Maruna S., & Copes H. 2005. What Have We Learned from Five Decades of Neutralization Research?. *Crime and Justice*. 32, 280-281.

<sup>461</sup> 津富ほか・前掲注 457, 105-118 頁。

<sup>462</sup> 津富ほか・前掲注 457, 119-122 頁。

<sup>463</sup> 津富ほか・前掲注 457, 123 頁。

<sup>464</sup> 津富ほか・前掲注 457, 134-136 頁。

<sup>465</sup> 津富ほか・前掲注 457, 147-148 頁。

<sup>466</sup> 影山ほか・前掲注 82, 421 頁。

## (2) ジョルダーノの認知的変化の AL 群理論

ジョルダーノほか (Giordano, Gernkovich, & Rudolph, 2002) は、犯罪者、とりわけ成人犯罪者は意図的かつ反省的である。我々は、演ずる者と周囲の環境とのより相互的な関係を理論化し、この変化の過程における作用に重きを置いていると主張した<sup>467</sup>。さらに、変化と停止が生じるためには、犯罪者は、第一に、変化に対する一般的な認知の開放性 (general cognitive openness to change) を発展させる必要がある。第二に、持続的な逸脱とは基本的に両立しない新たな事態と規定されるものを含んでいる。第三に、変化は、背後にあるべき限界自己 (marginal self) を取り替えるひとつの魅力的で枠に収まった交換自己 (replacement self) を形成し始めようとする犯罪者の試みを含んでいる。第四に、停止過程が比較的完全なものとなるのは、この演ずる者がこれらの逸脱行動を肯定的、実現可能なものとか、当人に相ふさわしいものと、もはや見なさない時であると主張した<sup>468</sup>。リリーほか (Lilly, et al., 2011 = 影山ほか, 2013) は、違いはさておき、認知変化に関するジョルダーノほかの、罪の贖いの台本に関するマルナの、そして行為者性に関するサンプルソンの各業績において一致していることは、犯罪者は彼らがライフ・コースにおいて辿る経路は能動的な参与である点であるとした。そして、この見方は、犯罪者が犯罪経路に最初に置かれその後何年間も縛り付けられてきた構造的、個人的なリスク因子の重要性を、減じるという意味ではない。また、犯罪的ライフ・コースからの離脱は単純に一つの自然な過程であるとか、幸運にも良き伴侶や仕事の機会に恵まれるといった事柄ではなく、活用されたり、場合によっては失われるのかするのだが、変化のための留め金 (hooks for change) を可能にする選択は犯罪者が行っているのであるとした。そして、将来への理論と探求への挑戦は犯罪行為性の意味と、犯罪者が自分の人生と犯罪停止を考え直す厳密な仕方を今以上に明確にすることであると主張した<sup>469</sup>。

## 3 高齢者の犯罪からの立直りの視点による検討

ル・ドゥ (LeDoux, 2002 = 森・谷垣, 2004) は、人格の一貫性がもたらされるのは、学習とそれによってシナプスが生み出した結果である記憶とが主要な役割を果たしていると主張した。また、心理療法自体も学習経験であり、シナプスの変化が関係している。脳の回路と心理学的経験とは別べつなものではなく、むしろ同じことの異なる表現なのであると主張した。また、ガザニガ (Gazzaniga, 2011 = 藤井, 2014) は、我々は、社会的な相互作用ができるように生まれたときから配線されている。全般的な認知能力は食料や生殖相手などの争奪という競争が原動力になって発達したものの、ヒトにしかない側面 (目的や意図の共有、他者と共同で注意を向ける、協力のために意思を疎通させる) を引き出したのは社会的協力だった。自動的な共感、他者に対する暗黙の評価、情動反応を含む社会的反応は多くが生まれつきのものであり、それらが道徳がらみの判断に参考情報を与えている。道徳観が問われる状況への対応は同じでも、その理由は人によって違う。行動や判断の方針に影響を与える情動システムや特殊な道徳的判断システムに遺伝や経験による

<sup>467</sup> Giordano, R.C., Cernkovich, S.A., & Rudolph, J.I. (2002). Gender, crime, and desistance: Toward a theory of cognitive transformation. *American Journal of Sociology*, 107, 999-1000.

<sup>468</sup> Giordano et al.・前掲注 466, 1000-1003.

<sup>469</sup> 影山ほか・前掲注 82, 423 頁。

個人差があるからであると主張した。犯罪を行い始めたとき同様、矯正や更生保護などに関わる他者との人間的な接触をきっかけにして、これまでの自分の行動特性を意識し、コントロールする術を身に着けて、それを継続させることが犯罪からの離脱ではなかろうか。このような一連の行動を説明可能なモデルはあるのだろうか。

#### 第5節 高齢者の犯罪行動を説明するための統合モデルの検討

ここまで、犯罪の発生や増幅と犯罪性向の形成時期、犯罪と生得的な気質、個人の犯罪性向の継続変化に関する先行研究を概観し、それらを高齢者の犯罪行動や犯罪からの離脱・立直りの研究に応用できないか検討した。そして、1) 犯罪行為と非犯罪行為、そして犯罪からの離脱は同一の理論で説明できなくてはならない。2) 犯罪の本質を人間の自然の姿に求め、犯罪性を生得的な「接近・回避」の感受性と人生経験の相互作用の関係として研究する必要がある。3) 高齢者の犯罪は、ライフ・コースという文脈の中で犯罪からの立直りの可能性についても考慮する必要があることについて言及した。

江崎（2017）は、このような観点からエリクソン（Erikson, 1959）、ゴットフレッドソン・ハーシ（Gottfredson & Hirschi, 1990 = 大淵, 2018）、グレイ（Gray, 1981, 1994）の研究及び脳神経科学の知見などを取り入れ、高齢者の犯罪行動を説明するための統合モデルを提唱した（Figure 1-5-1）<sup>470</sup>。

江崎（2017）は、セルフコントロールは、「不安や恐怖からの回避」や「報酬への接近」という生得的な感受性（BIA/BAS）及び児童期から成人期までの人間関係を主とした人生経験の相互作用に影響を受ける。ただし、うまく育まれなかったセルフコントロールであっても、良好な人間的触れ合いを体験することによって認知を変化させ<sup>471</sup>、ある程度行動を変容させることができると仮定した。そして、男性のライフサイクルとしてレビンソン（Levinson, 1978）が児童期と青年期、成人期、中年期、老年期の4段階に分けた<sup>472</sup>ことを参考に、人生を児童期・青年期から成人期への過渡期、成人期から中年期への過渡期、中年期から老年期の過渡期の3段階に区分した。そして、モデルの各段階におけるBIS/BAS、セルフコントロール、発達課題、ソーシャル・サポートの関係を以下の通り仮定した。

第1に、児童期と青年期は、両親や教師、友人など他者から大きな影響を受ける受動的な立場である期間が長い。したがって、両親などの深い愛情のもと、本人のBIS/BASに相応した躰がなされれば高いセルフコントロールが育まれ、エリクソン（Erikson, 1959）が主張するような基本的信頼、自主性・自律性、勤勉性などの発達課題<sup>473</sup>を身に付けていく。養育者から本人のBIS/BASにそぐわない躰がなされたり、養育者の愛情が不足すると、セルフコントロールがうまく育まれず発達課題が達成できなかったり非行に走ったりする可能性が高い。また、万引きの成功体験などの学習によって非行が習慣化する。ただし、

<sup>470</sup> 江崎徹治「万引きを繰り返す高齢者の行動を説明するためのモデル構築」国土館大学法研論集 18(2017) 123-150 頁。

<sup>471</sup> 森ほか・前掲注 301, 388 頁。

<sup>472</sup> 南・前掲注 44, 45-49 頁。

<sup>473</sup> 小此木ほか・前掲注 43, 61-100 頁。

セルフコントロールがうまく育まれなかったことで非行に走っても、成人期に至るまでの過渡期にソーシャル・サポートをうまく受容し、意識的な行動抑制ができれば非行から立ち直ることができる。そして、成人期の発達課題に挑戦することができる。ただし、浦(1992=2004)によれば、ストレッサーが一定のレベルを超えるものになると、人はストレスに陥り、抑うつを高め、適応の水準を下げでしまうことから、可能な限り早い時点でのサポートが重要であるとする<sup>474</sup>。

第2に、成人期から中年期は、一家を構え、職場で中心的な立場となるなど、能動的に自己の人生を築く時期である。仕事や結婚を通じて社会や他者との関係が深まるとともに、多くのストレスフルな出来事を体験する。また、仕事や家庭での人間関係を基に同一性、親密性、生殖性といった発達課題<sup>475</sup>を身に付けなければならない。さらに、児童期から青年期に身に付けるべき発達課題が残っている場合は、それらについてもクリアしなければならない。セルフコントロールが低いことで安定した仕事に就けなかったり、結婚生活がうまくいかないと犯罪に走ったり発達課題を達成できなかったりする。さらに、学習によって犯罪行動が強化される可能性がある。ただし、児童期から青年期に犯罪に手を染めてしまった場合であっても、この過渡期にソーシャル・サポートをうまく受容し、意識的な行動抑制ができれば犯罪から離脱し、老年期の発達課題に挑戦することができるとした。

第3に、老年期は、加齢に伴う機能喪失や失敗や挫折の経験というストレスフルな喪失体験を克服しながら、人生の終焉を迎えるために自己の統合という発達課題<sup>476</sup>を身に付けなければならない。また、成人期に身に付けるべき発達課題が残っている場合は、それらについてもクリアしなければならない。セルフコントロールが低いことで安定した収入や良質な人間関係が築けない場合は、自己の統合に失敗し、自信を喪失して絶望感に打ちひしがれたり、社会的不適合を起こしたりして孤立すると考えられる。そして、万引きの成功体験や高齢者だから許されるという世の中に対する甘えや迷惑をかける人などいないという開き直りなどによって犯罪行動を強化してしまう可能性がある。ただし、成人期に犯罪を習慣化させてしまった場合であっても、ソーシャル・サポートをうまく受容し、行動を抑制できれば、犯罪から離脱することや高い自由度を肯定的に捉えて自己統合に成功する可能性がある。

---

<sup>474</sup> 浦 光博『支え合う人と人—ソーシャル・サポートの社会心理学—』（サイエンス社、2004）51-52 頁。

<sup>475</sup> 小此木ほか・前掲注 43, 101-122 頁。

<sup>476</sup> 小此木ほか・前掲注 43, 123 頁。

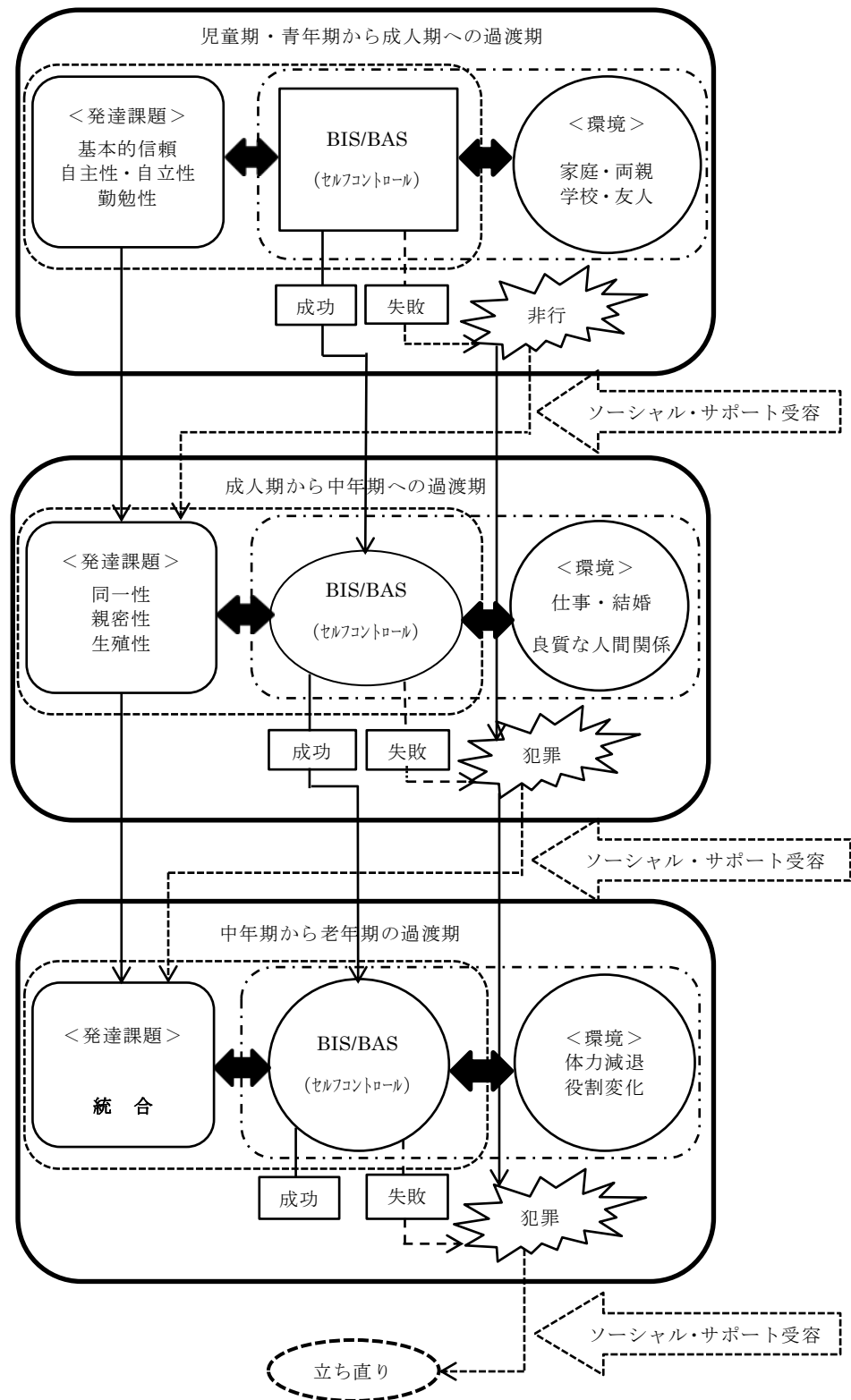


Figure 1-5-1 高齢者の犯罪行動を説明するための統合モデル  
江崎（2017）を一部変更した。

## 第6節 本研究の新奇性と仮説

高齢者の再犯防止が声高に叫ばれていながら、罪を犯して帰住先がなく施設に在会するような高齢者を対象とした心理学あるいは脳神経科学をもとにした研究は管見の限り見当たらない。

本研究では、「犯罪」を何らのスキルも必要としない自己利益を追求する行為、あるいは、単に規範を破る行為と捉えるべきと考えた。そして、研究すべきは、犯罪とされる行為に限らず、ある状況において目前の誘惑あるいは欲求不満に反応し規範を破りやすい「犯罪性向」であるとした。さらに、犯罪性向は低いセルフコントロールに起因し、セルフコントロールの差は、恐怖、不安や欲求不満など否定的な感情の経験を担っている **BIS** と報酬や目標への接近など肯定的な感情の経験を担っている **BAS** という生得的な感受性と児童期の養育者や生活状況を含む人生経験の相互作用に影響を受ける。そして、それは高齢になっても大きく変化しない。ただし、低いセルフコントロールが影響して軽微な犯罪を繰り返した高齢者でも、更生保護施設などにおいてソーシャル・サポートをうまく受容し、意識的に行動を抑制することを学習すれば犯罪から離脱することができるという仮説を立てた。

そのため、罪を犯して更生保護施設に在会している高齢者と社会経済的地位は高くないものの、社会において仕事を続けている一般高齢者に対し、養育環境を含む人生経験及び **BIS/BAS** 尺度、セルフコントロール尺度、発達課題尺度を含む質問調査を実施して比較することとした。

この仮説が証明されれば、ゴッドフレッドソンとハーシが主張した犯罪の一般理論の弱点として指摘されるセルフコントロールの測定やその起源の一端を解明することができる。また、江崎（2017）の統合モデルの主要部分が説明可能であれば、課題とされる高齢者の再犯防止対策の一助になると考えた。

## 第3章 調査研究

### 第1節 目的

高齢者の犯罪行動と再犯防止や犯罪からの離脱・立直りを探ることを目的として研究を行った。

### 第2節 方法

#### 1 調査期間

2017年6月から2019年6月までの約2年を要した。更生保護施設<sup>476</sup>は、2018年6月1日現在全国に103か所（うち女子のみ収容7施設、男女とも収容8施設）設置されているが、そのうち3分の2は定員20名以下の小規模施設である<sup>477</sup>。また、中には高齢者を受け入れない施設があるほか、たとえ65歳以上の在会者がいても、1施設1名から数名である。このような状況の中、施設に直接赴いて調査を実施したため、分析に耐えうる数を回収するのに長期間を要した。

#### 2 対象者

調査対象者として、更生保護施設に在会している65歳以上の男女（以下「施設高齢者」という。）、統制群として清掃やビルメンテナンスに従事している65歳以上の男女（以下「一般高齢者」という。）を選定した。

調査対象者を更生保護施設在会者としたのは、次のような理由である。まず、刑務所での調査であるが、視察先の刑務所で相談したところ、在監者に対する調査は刑務官の負担が大きく、本研究の調査項目の分量では許可される可能性が小さいとの指摘を受けた。次に、地域定着支援センター<sup>478</sup>を運営する主要な複数の団体の管理者に相談したが、65歳以上の在会者はいわゆる特別調整<sup>479</sup>にかかった者であることからIQ70以下の者が多く、調査票の質問を理解して答えることは不可能であるとの指摘を受けた。その点、更生保護施設は、概ね3か月（最大6か月）の間に就労先や居住先を探し自立することを目標にしている。また、高齢や病気のため就労できない者であっても、生活保護を受ければ自活できる者である。更生保護施設では、日常生活の人的触れ合いをとおしたSST（Social Skill Training）などを利用した更生教育を行っている。

<sup>476</sup> 法務省は、罪を犯して自立更生ができない者について、保護観察所からの委託や保護を必要としている本人からの申出によって一定の期間保護し、その円滑な社会復帰を助け、再犯を防止するために設置している。運営主体は、法務省から委託を受けた社会福祉法人等である。

<sup>477</sup> 全国更生保護連盟ホームページ<<https://www.kouseihogo-net.jp/hogohoujin/institution.html>>（2019年10月30日閲覧）。

<sup>478</sup> 厚生労働省は、罪を犯して矯正施設に収容されたが、出所しても高齢や障害等の理由で自立した生活ができない者の再犯防止対策として2009（平成21）年7月から地域生活定着支援事業を開始した。北海道は3施設だが、他の都府県ごとに1施設設置されている。運営主体は、厚生労働省から委託を受けた社会福祉法人等である。

<sup>479</sup> 特別調整対象者とは、概ね65歳以上の高齢者又は身体障害、知的障害若しくは精神障害を有する矯正施設入所者で、住居や家族等の受入先がなく、保護観察所から特別調整協力等の依頼のあった福祉的な支援が必要な出所予定者をいう。



統制群を清掃やビルメンテナンスに従事している者とした理由は、まず、施設高齢者は、犯罪白書等で社会経済的地位が低いという特徴が報告されている。そこで、統制群としては、再犯防止や社会復帰の観点から、同様の育成環境に置かれながらも罪を犯さない高齢者がふさわしいと思われた。その点、更生保護関係者から、更生保護施設退会者の多くが年齢、性別、学歴、経験不問の清掃やビルメンテナンス関連会社に就職しているという事実を確認した。

### 3 調査票の質問項目

#### (1) BIS/BAS 尺度日本語版 (20 項目)

カーバー・ホワイト (Caver & White, 1994) は、グレイが主張する行動抑制系 (BIS) と行動賦活系 (BAS) が行動に影響を与えと考え、BIS/BAS 感受性を自己申告で評価するための尺度を開発した<sup>480</sup>。カーバー・ホワイトは、マックアンドリュース・スチール (MacAndrew & Steele, 1991)<sup>481</sup>、トルビア・トベナ (Torrubia & Tobena, 1984)<sup>482</sup>、ウイルソン・グレイ・バレット (Wilson, Gray, & Barrett, 1989)<sup>483</sup>の BIS/BAS 測定法やクロニンジャー (Cloninger, 1987) が開発した 3 次元人格質問 (TPQ)<sup>484</sup>など他の測定法をすべて批判して退けた。その理由を、BIS と BAS の感受性は、一般的な情緒的調子ではなく、適切な種類の状況に対する反応を評価するものであるのに社会的な反応と感受性を混同していることや内部整合性の問題を挙げている<sup>485</sup>。そして BIS と BAS は神経系では区別され、2つの感受性は直交していると推定されるから、BIS/BAS の高低は、いろいろな組み合わせが予想されると述べている<sup>486</sup>。BIS は 1 因子だが、BAS は、3つの下位尺度で構成される。駆動尺度 (Drive) は、望まれる目標への持続的な追求に関連する項目、新奇性尺度 (Fun Seeking) は、新奇な刺激や報酬刺激に対して思い付きで接近しやすい傾向、報酬反応性尺度 (Reward Responsiveness) は、報酬の存在や予期に対するポジティブな反応に焦点を当てた項目とされる<sup>487</sup>。高橋ほか (2007) は、カーバー・ホワイト (Caver & White, 1994) による原版の無関連項目を除く 20 項目について、バック・トランスレーションにより翻訳し、信頼性・妥当性を確認した<sup>488</sup>。本研究においてこの尺度を利用した理由は、カーバー・ホワイト (Caver & White, 1994) が他の尺度を批判していることだけでなく、対象者の学歴及び年齢等を考慮して、質問項目数が少ないこと及び質問内容が平易であることである。このような理由から、本調査では、高橋ほか (2007)

<sup>480</sup> Caver, et al.・前掲注 355, 319-333.

<sup>481</sup> MacAndrew, C., & Steele C. (1991). Gray's behavioral inhibition system: A psychometric examination. *Personality and Individual Differences*, 12 (2), 157-171.

<sup>482</sup> Torrubia, R., & Tobena, A. (1994). A scale for the assessment of susceptibility to punishment as a measure of anxiety: Preliminary results. *Personality and Individual Differences*, 5(3), 371-375.

<sup>483</sup> Wilson, J. M., Barrett, P. T., & Gray, J. A. (1989). Human Reactions to Reward and Punishment: A questionnaire of Gray's personality theory. *British Journal of Psychology*, 80, 509-515.

<sup>484</sup> Cloninger・前掲注 364, 573-588.

<sup>485</sup> Caver, et al.・前掲注 355, 321-322.

<sup>486</sup> Caver, et al.・前掲注 355, 320.

<sup>487</sup> Caver, et al.・前掲注 355, 322-323.

<sup>488</sup> 高橋雄介・山形伸二・木島信彦・繁杣数男・大野 裕・安藤寿康「Gray の気質モデル—BIS/BAS 尺度日本語版の作成と双生児法による行動遺伝学的検討—」パーソナリティ研究 15-3 (2007) 276-289 頁。

の質問ニュアンスを壊さないと思われる範囲内で漢字を平仮名にするとともに表記方法を若干変えた。これらの質問に「あてはまる」、「少しあてはまる」、「あまりあてはまらない」、「あてはまらない」の4段階で回答を求めた。

## (2) セルフコントロール尺度短縮日本語版 (13 項目)

ゴットフレッドソン・ハーシ (Gottfredson & Hirschi, 1990 = 大淵, 2018) は、セルフコントロールは単一次元の行動特性であると主張した<sup>489</sup>が、アーネクレフほか (Arneklev et al., 1993) は、これを批判した<sup>490</sup>。批判を受けたハーシ (Hirschi, 2004) は、理論を一部改訂した 9 項目からなる測定尺度を提案している。しかし、質問内容は、「あなたは、先生があなたのことをどう思っているか気になりますか。」や「あなたの母親は、あなたが家にいない時にあなたがどこにいるかを知っていますか。」など少年を対象にした質問に終始している<sup>491</sup>。その点、尾崎ほか (2016) は、セルフコントロールの個人差を測定する自己・他者評価尺度は 100 種類以上あるが、これらの大半は食行動や学校適応など、場面を限定した測定法である。状況を設定せずに測定が可能で表面妥当性が最も高い測定法は、タンネイほか (Tangney, et al., 2004) が開発した Self-Control Scale であると主張した。そして、短縮版 (13 項目) を邦訳して Brief Self-Control Scale (BSCS-J) と命名し、大学生と 21 から 69 歳の日本人を対象に施行した結果、十分な信頼性と構成概念妥当性を得たと報告した<sup>492</sup>。本調査では、BSCS-J に「あてはまる」、「少しあてはまる」、「どちらともいえない」、「あまりあてはまらない」、「あてはまらない」の 5 段階で回答を求めた。

## (3) 発達課題尺度日本語版 (80 項目)

エリクソン (Erikson, 1959 = 小此木, 1960) は、人の生涯は出生から死に至るまで各々新しい成長の可能性を持った段階の連続とみなして生涯に 8 つの発達段階があると仮定し、発達課題を心理社会的危機という概念で捉えようとした<sup>493</sup>。ニューマン夫妻 (Newman, B. M., & Newman, P. R., 1984 = 福富, 1988) は、心理社会的危機とは、人がその発達の各段階において、社会的環境からの要請に適応しようとする心理的努力であり、「危機」という言葉は、一連の異常な事象というよりも、通常のストレスと緊張を意味している。各発達段階で社会は、そこに住んでいる人々に対して何らかの精神的要求を課す。これらの要求は、個々人に穏やかではあるが持続的な行動の指針や期待として受け止められ、より大きなセルフコントロール、技能の発達、目標に関連することもあり、以前の危機を解決できたかどうかは、現在や将来の危機の解決に影響を及ぼすと主張した<sup>494</sup>。下仲ほか (2000) は、エリクソンの理論を客観的に測定するためにドミノ・アフォンソ (Domino & Affonso,

<sup>489</sup> 大淵・前掲注 100, 315 頁。

<sup>490</sup> Arneklev, B. J., Harold, G., Grasmick, C. R., Tittle, R. J., & Bursik, Jr. (1993). Low self-control and imprudent behavior. *Journal of Quantitative Criminology*, 9 (3), 235.

<sup>491</sup> Hirschi, T. (2004). Self-control and crime. In R. F. Baumeister & K. D. Vohs (Eds.), *Handbook of self-regulation: Research, theory, and applications*. The Guilford Press. 537-552.

<sup>492</sup> 尾崎由佳・後藤崇志・小林麻衣・沓澤 岳「セルフコントロール尺度短縮版の邦訳および信頼性・妥当性の検討」*心理学研究* 87(2) (2016) 144-154 頁。

<sup>493</sup> 小此木ほか・前掲注 43, 157-160 頁。

<sup>494</sup> ニューマン・ニューマン (著) (福富護 訳)『生涯発達心理学：エリクソンによる人間の一生とその可能性』(川島書店, 1988) 29-31 頁。

1990) が人生の成熟期に位置している成人を対象として開発した IPB 尺度 (Inventory of psychosocial balance) を邦訳し、25 歳から 64 歳までの地域住民を対象に施行した。その結果、各段階とも原版 15 項目 (合計 120 項目) を 10 項目 (合計 80 項目) に削減することによって十分な信頼性と構成概念妥当性を得た<sup>495</sup>と報告した。本調査では下仲らに倣って各質問に、「あてはまる」、「少しあてはまる」、「どちらともいえない」、「あまりあてはまらない」、「あてはまらない」の 5 段階で回答を求めた。

#### (4) デモグラフィック項目

- 1) 性別
- 2) 年齢
- 3) 小学生のころの養育者: 「両親」、「実母と義父」、「実父と義母」、「実母のみ」、「実父のみ」、「祖父母」、「親戚」、「里親」、「施設」、「その他」、「わからない」の 10 区分で回答を求めた。
- 4) 小学生のころのしつけ: 「甘やかされた」、「どちらともいえない」、「きびしかった」の 3 区分で回答を求めた。
- 5) 小学生のころの生活状況: 「普通より貧しい」、「普通」、「普通より裕福」の 3 区分で回答を求めた。
- 6) 小学生のころの学業: 「普通よりできがわるかった」、「普通」、「普通よりできがよかった」の 3 区分で回答を求めた。
- 7) 最終学歴: 「小学校 (尋常高等小学校)」、「中学校」、「高等学校 (旧制中学)」、「専門学校・高専」、「大学校 (旧制高校)」、「大学院」、「その他」の 7 区分で回答を求めた。
- 8) 40 代から 50 代のころの主な職業: 「正社員」、「契約 (派遣) 社員」、「臨時 (パート) 社員」、「店員」、「工員」、「建設作業員」、「公務員」、「教職員」、「自営業」、「専門職」、「その他」、「専業主婦」、「無職」の 13 区分で回答を求めた。
- 9) 40 代から 50 代のころの生活状況: 「普通より貧しかった」、「普通」、「普通より裕福だった」の 3 区分で回答を求めた。
- 10) 現在の同居者: 「配偶者 (内縁を含む)」、「子供、孫」、「友人、知人」、「自分ひとりだけ」、「更生施設・寮での集団」、「その他」の 6 区分で回答を求めた。
- 11) 婚姻歴: 「現在もしている」、「あるが離婚」、「あるが死別」、「したことがない」の 4 区分で回答を求めた。
- 12) 現在の主な収入源: 「年金のみ」、「年金と給料 (売上) などの両方」、「給料 (売上) のみ」、「生活保護」、「無収入」の 5 区分で回答を求めた。
- 13) 受給している年金の種類: 「厚生 (船員・炭鉱・共済) 年金」、「国民年金」、「恩給」、「その他」、「無受給」の 5 区分で回答を求めた。
- 14) 月収: 「5 万円未満」から「30 万円未満」までは 5 万円刻み、30 万円以上から 40 万円未満、40 万円以上の 8 区分で回答を求めた。
- 15) 人生の振り返り: 「こんなはずではなかった」、「どちらともいえない」、「こんなものだ

---

<sup>495</sup> 下仲順子・中里克治・高山 緑・落合千恵子「E.エリクソンの発達課題尺度の検討—成人期以降の発達課題を中心として」心理臨床学研究 17(6) (2000) 525-537 頁。

とっていた」の3区分で回答を求めた。

- 16) 老後の準備：「何もしなかった」、「会社や他人の指示に従った」、「自分で勉強して準備した」の3区分で回答を求めた。
- 17) 酒、タバコ、ギャンブル：「飲まない」「吸わない」「やらない」、「飲む」「吸う」「やる」に、それぞれの項目に「やめた」を加えた3区分で回答を求めた。
- 18) 現在世話になっている人：「施設の先生」、「配偶者（同居人）」、「子供・孫」、「兄弟姉妹」、「その他の親戚」、「友人・知人」、「役所の人」、「保護司の先生」、「その他」の9区分で回答を求めた。
- 19) 児童期の万引き経験：「有・無」で回答を求めた。
- 20) 受領ソーシャルサポート（8項目）  
宗像（1989）が作成した質問紙<sup>496</sup>を参考に手段的・情緒的それぞれ4項目について、「まったくのぞまない」、「ちょうどいい」、「もっとのぞみたい」の3区分で回答を求めた。
- 21) 自分が万引きする責任：「自分」、「親・兄弟・子供」、「誰の責任でもない」、「社会や経済」、「役所（福祉事務所）」、「コンビニ・スーパー」、「警察」、「万引きしたことがない」の8区分で回答を求めた。
- 22) はじめて万引きをしたときから現在まで万引きを行っていた時期：年表を塗りつぶす方法で回答を求めた（以下、万引きをしたことがあると回答した者のみ）。
- 23) 捕まる前の万引きの頻度：「ほぼ毎日」、「週に1回くらい」、「月3～4回くらい」、「月1回くらい」、「年に数回」の5区分で回答を求めた。
- 24) 万引きをする状況：「万引きをする店は、よく買い物に置くところだ」、「なにもかん考えずに、万引きしてしまうことがある」、「万引きしてしまっても、つかまらなければ気にしない」という質問に「はい」、「いいえ」の2区分で回答を求めた。

#### 4 手続き

##### （1）一般高齢者

都内の清掃事業者及びビルメンテナンス会社の営業所に直接赴き、所長等の責任者に研究の趣旨を説明した。所長等が説明して同意が得られた者に所長等から質問紙、返信用封筒を手渡ししてもらい、各自回答の上、個々に指導教員の在籍する研究室宛てに返信してもらった。2業者から89名（男31名、女58名）の協力を得た。うち、内容に不備のなかった83名（男29名、女54名、平均年齢69.96歳）を分析対象とした。

##### （2）施設高齢者

あらかじめ全国の更生保護施設の施設長に研究の概要を電話及びFAXで連絡し、了解を得た。そして、対象者が在会しており、かつ当該対象者から回答の同意が得られた施設に直接赴き、施設長に研究の趣旨及び回答要領を説明した。その際、対象者が高齢であることにかんがみ、文章の意味について尋ねられた場合は、誘導にならないように指導するこ

---

<sup>496</sup> 中川米造・宗像恒次『医療・健康心理学』（福村出版、1989）117-136頁。

と及び回答の欠落防止を確認することについて依頼した。施設長から対象者に質問紙、返信用封筒を手渡してもらい、各自回答の上、対象者から指導教員の在籍する研究室宛てに返信してもらった。20施設から117名（うち、女性4施設から13名）の協力を得た。うち、内容に不備のなかった108名（男97名、女11名、平均年齢70.57歳）を分析対象とした。

## 5 倫理的配慮

「人を対象とした研究に関する国士舘大学倫理委員会」の事前審査を受け、承認を得た（2017年5月）。また、施設高齢者、一般高齢者については、施設長又は営業所長等の責任者から協力の趣旨及び次の7点の倫理的配慮を説明した。1）調査への協力は自由であり、調査に協力しなくても不利になることはないこと、2）アンケートは、研究目的のみに利用し、アンケートの回答が他に漏れることはないこと、3）アンケートは匿名で行い、どのような形でもアンケートの回答に関して個人が特定されることはないこと、4）アンケートは研究者によって厳重に保管され、本研究終了後には、シュレッダーで破棄すること、ならびに研究は博士論文の完成をもって終了とすること、5）収集したデータに関しては、博士論文完成後5年間、厳重に保管し、再検証を目的とした開示の要望に応えること、6）自宅などプライバシーが守れる環境でアンケートへの回答ができること、7）調査結果の公表に際しても、あらゆる面から個人が特定されないよう最大限の配慮をすること。

## 第3節 結果

### 1 本調査のデモグラフィック特徴

#### （1）一般高齢者

調査対象の83名は、65歳から87歳まで、平均年齢69.96歳であるが、65歳から69歳が59.4%である。男性が約34.9%、女性が約65.1%と女性が多い。小学生のころの養育者は、実父母が84.3%、実母と義父が1.2%、実父と義母が3.6%、実母のみが7.2%、祖父母が3.6%、小学生のころのしつけは、甘やかされたが8.4%、普通が49.4%、厳しかったが42.2%、小学生のころの学業は、普通よりできが悪かった21.7%、普通53.0%、普通よりできがよかった25.3%、学歴は、中卒以下群が21.7%、高卒以上群が78.3%、40-50代の職業は、会社員等が80.8%、専業主婦が10.8%、主な収入源は、年金と給料が81.9%、無年金が10.8%、居住形態は、配偶者と同居が56.6%、婚姻歴群は、離婚歴なしが89.0%、人生の振り返りは、こんなはずではなかったが26.5%などである（Figure3-1-1、巻末資料1参照）。

#### （2）施設高齢者

調査対象の108名は、65歳から82歳まで、平均年齢70.57歳であるが、65歳から69

歳が 50.9%と約半数を占めている。男性が 89.8%、女性が 10.2%と男性が圧倒的に多い。小学生のころの養育者は、実父母が 73.1%、実母と義父、実父と義母及び実母のみがそれぞれ 3.7%、実父のみが 1.6%、祖父母が 5.8%、里親、親戚及び施設がそれぞれ 1.0%、小学生のころのしつけは、甘やかされたが 23.1%、普通が 42.6%、厳しかったが 34.2%、小学生のころの学業は、普通よりできが悪かった 25.0%、普通 46.3%、普通よりできがよかった 15.7%、学歴は、中卒以下群が 56.5%、高卒以上群が 23.5%、40-50 代の職業は、土木作業員等群が 31.5%、専業主婦が 3.7%、現在の主な収入源は、生活保護が 33.3%、無年金が 55.9%、居住形態は、配偶者と同居が 5.5%、婚姻歴は、離婚歴あり群が 60.2%、人生の振り返りは、こんなはずではなかったが 71.3%などである（Figure3-3-1、巻末資料 1-1 参照）。

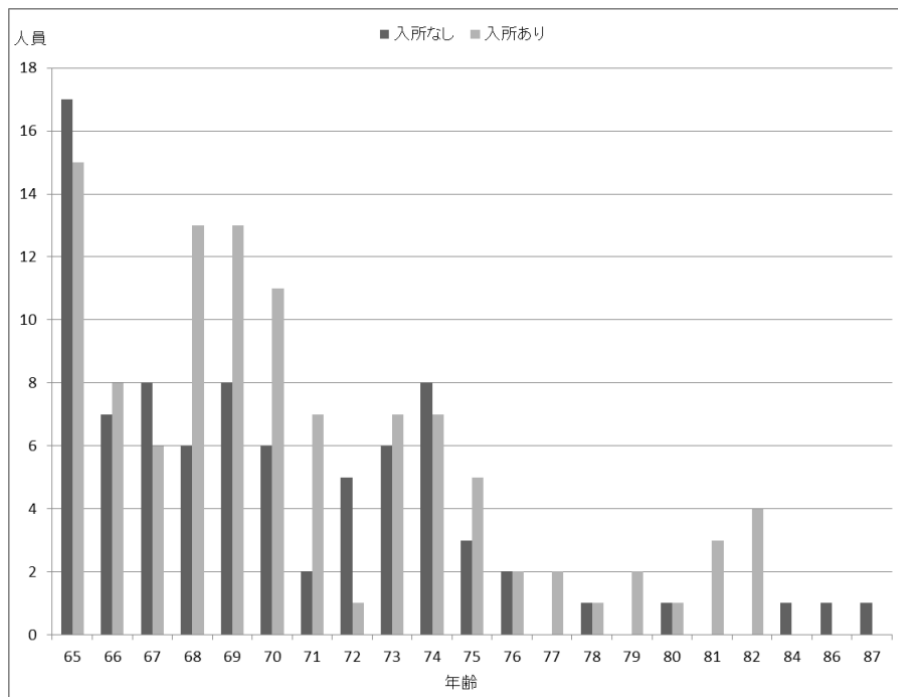


Figure 3-3-1 年齢構成

更生保護経験によるカイ 2 乗値は、性別 ( $\chi^2 = 62.95$ ,  $df = 1$ ,  $p < .001$ )、小学生のころのしつけ ( $\chi^2 = 7.32$ ,  $df = 2$ ,  $p < .05$ )、学歴 ( $\chi^2 = 26.88$ ,  $df = 5$ ,  $p < .001$ )、40 代から 50 代の職業 ( $\chi^2 = 52.45$ ,  $df = 11$ ,  $p < .001$ )、40 代から 50 代の生活状況 ( $\chi^2 = 6.82$ ,  $df = 2$ ,  $p < .05$ )、現在の同居者 ( $\chi^2 = 108.45$ ,  $df = 3$ ,  $p < .001$ )、婚姻歴 ( $\chi^2 = 71.47$ ,  $df = 2$ ,  $p < .001$ )、現在の主な収入源 ( $\chi^2 = 99.65$ ,  $df = 4$ ,  $p < .001$ )、年金の種類 ( $\chi^2 = 35.60$ ,  $df = 3$ ,  $p < .001$ )、現在の月収 ( $\chi^2 = 35.24$ ,  $df = 7$ ,  $p < .001$ )、人生の振り返り ( $\chi^2 = 42.17$ ,  $df = 2$ ,  $p < .001$ )、老後の準備 ( $\chi^2 = 13.10$ ,  $df = 2$ ,  $p < .005$ )、飲酒癖 ( $\chi^2 = 22.19$ ,  $df = 2$ ,  $p < .05$ )、喫煙癖 ( $\chi^2 = 22.19$ ,  $df = 2$ ,  $p < .05$ )、ギャンブル癖 ( $\chi^2 = 27.53$ ,  $df = 2$ ,  $p < .05$ )、現在世話になっている人 ( $\chi^2 = 144.93$ ,  $df = 8$ ,  $p < .001$ )、万引き経験と時期は ( $\chi^2 = 70.81$ ,  $df = 3$ ,  $p < .001$ ) は有意であった。一方、年齢 ( $\chi^2 = 22.93$ ,  $df = 20$ , n.s.)、小学生のころの養育者 ( $\chi^2 = 1.23$ ,  $df = 1$ , n.s.)、小学生のころの生活状況 ( $\chi^2 = 1.23$ ,  $df = 2$ , n.s.)、小学生のころの学業 ( $\chi^2 = 2.70$ ,  $df = 2$ , n.s.) は有意でなかった。

## 2 BIS/BAS 尺度

### (1) 確証的因子分析

収集した 191 名（一般 83 名、施設 108 名）のデータについて Amos Ver.19 を用いて確証的因子分析を行った。不適解が生じたため BAS\_R の残差と問 3・問 11 の残差、BAS\_F の残差と問 4 の残差との間にパスを引いた。その結果、全体の適合度指標は  $\chi^2(163) = 338.561$  ( $p < .001$ ), GFI = .857, AGFI = .816, CFI = .814, RMSEA = .075 であった。それぞれの質問項目の因子負荷量は、Table 3-3-2 のとおりであった。

Table 3-3-2 BIS/BAS 尺度の確証的因子分析

		先行研究	高齢者		
		全体 n = 446	一般 n = 191	一般 n = 83	施設 n = 108
BIS					
13	何かよくないことが起ころうとしていると考え、たいていなやむ	.75	.65	.59	.71
10	だれかが私のことを怒っていると考えたり、知ったりするとかなり心配になる	.74	.72	.81	.67
15	何か重要なことがあまりうまくできなかったと考え、不安になる	.69	.69	.79	.62
6	他人に非難されたり、怒られたりすると、かなり傷つく	.63	.53	.74	.40
20	私は、まちがいを犯すことをとても心配している	.54	.33	.23	.45
18	友人と比べると、不安の種はとても少ない(r)	.53	.02	.12	.01
1	たとえ何かよくないことが身に起ころうとしても、こわくなったり、しんけいしつになったりしない(r)	.43	-.07	.04	-.11
BAS_D					
7	ほしいものがあると、たいていそれを手に入れるために全力をあげる	.90	.73	.81	.68
2	ほしいものを手に入れるためには、とても努力する	.83	.66	.69	.63
9	ほしいものを手に入れるチャンスをみつけると、すぐ行動する	.43	.78	.77	.79
17	何かを追いかけているときには、てっていきにやる	.31	.32	.39	.26
BAS_R					
11	何かすきなことをするチャンスをみつけると、すぐこうふんする	.67	.71	.63	.80
19	競争に勝ったら、私はこうふんするだろう	.52	.55	.49	.71
5	ほしいものを手にいれたとき、こうふんし、活気づけられる	.49	.73	.82	.71
14	よくことが私の身に起こると、そのことは、私に強いえいきょうを与える	.30	.48	.52	.42
3	何かがうまくいっているときは、それを続けることをとても楽しいと思う	.20	.61	.68	.47
BAS_F					
8	楽しいかもしれないから、という理由だけで何かをすることがよくある	.91	.44	.42	.62
12	しばしば時のはずみで行動する	.34	.54	.59	.53
4	おもしろそうだと思えば、いつでも何か新しいものをためしたいと思っている	.26	.51	.56	.65
16	こうふんや新しいしげきをとてもものぞんでいる	.11	.56	.81	.36
注) (r)は、逆転項目。数値は因子負荷量(標準化係数)。					

注) (r) は、逆転項目。数値は因子負荷量(標準化係数)。

### (2) 信頼性分析

収集した 191 名（一般 83 名、施設 108 名）のデータについて SPSS Ver.19 を用いて信頼性分析を行った結果は Table 3-3-3 のとおりであった。一般高齢者の Cronbach の  $\alpha$  は、BAS は先行研究と遜色ない、あるいはそれ以上だが、施設高齢者のそれは総じて低かった。BIS については、相関係数と寄与率が低い問 1 と問 18 を削除した 5 項目にしたところ、一般高齢者  $\alpha = .73$ 、施設高齢者  $\alpha = .70$  を得た。

Table 3-3-3 BIS/BAS 尺度の信頼性分析

因子	先行研究(n = 446)		高齢者			
	$\alpha$	項目数	全体(n = 191)	一般(n = 83)	施設(n = 108)	施設(n = 108)
BIS	.80	7	.57(.70)	.64(.73)	.51(.70)	.7(5)
BAS	.81	13	.84	.88	.80	.80
BAS_D	.76	4	.70	.75	.67	.67
BAS_R	.75	5	.71	.77	.66	.66
BAS_F	.63	4	.52	.66	.38	.38

注) 高齢者の BIS ( ) 内は、問 1 と問 18 を削除し 5 項目にした場合の  $\alpha$  係数を示す。

### (3) BIS/BAS 尺度平均点の差の検定

#### 1) 施設の有無（一般と施設）

「一般高齢者」（ $n = 83$ ）と「施設高齢者」（ $n = 108$ ）について BIS/BAS 尺度平均点の差を確認するため  $t$  検定を実施したところ、Table 3-3-4 のとおり有意な差はみられなかった。

Table 3-3-4 施設の有無（施設と一般）の BIS/BAS 尺度平均点の差

	一般		施設		$t$	$p$
	平均	標準偏差	平均	標準偏差		
BIS	17.95	3.825	18.77	3.632	$t(189) = 1.505$	n.s.
BAS	34.25	7.535	35.52	6.655	$t(189) = 1.230$	n.s.
BAS_D	10.58	2.829	11.08	2.772	$t(189) = 1.237$	n.s.
BAS_R	14.07	3.134	14.30	2.888	$t(189) = 0.512$	n.s.
BAS_F	9.60	2.561	10.14	2.281	$t(189) = 1.534$	n.s.

#### 2) 性別（男性と女性）

「男性」（ $n = 126$ ）と「女性」（ $n = 65$ ）について BIS/BAS 尺度平均点の差を確認するため、 $t$  検定を実施したところ Table 3-3-5 のとおり有意な差はみられなかった。

Table 3-3-5 性別（男性と女性）の BIS/BAS 尺度平均点の差

	男性		女性		$t$	$p$
	平均	標準偏差	平均	標準偏差		
BIS	18.62	3.523	18.02	4.098	$t(189) = 1.060$	n.s.
BAS	35.40	6.591	34.12	7.875	$t(189) = 1.190$	n.s.
BAS_D	11.02	2.677	10.57	3.026	$t(189) = 1.044$	n.s.
BAS_R	14.28	2.847	14.05	2.617	$t(189) = 0.506$	n.s.
BAS_F	10.11	2.271	9.51	2.617	$t(189) = 1.651$	n.s.

#### 3) 年齢（69 歳以下と 70 歳以上）

「69 歳以下」（ $n = 101$ ）と「70 歳以上」（ $n = 90$ ）について BIS/BAS 尺度平均点の差を確認するため、 $t$  検定を実施したところ Table 3-3-6 のとおりであった。BIS で有意傾向がみられたが、他は有意な差はみられなかった。

Table 3-3-6 年齢（69 歳以下と 70 歳以上）の BIS/BAS 尺度平均点の差

	69歳以下		70歳以上		$t$	$p$
	平均	標準偏差	平均	標準偏差		
BIS	18.89	3.630	17.88	3.786	$t(189) = 1.887$	†
BAS	34.29	7.185	35.73	6.876	$t(189) = 1.417$	n.s.
BAS_D	10.60	2.786	11.16	2.804	$t(189) = 1.362$	n.s.
BAS_R	13.90	3.208	14.53	2.707	$t(189) = 1.463$	n.s.
BAS_F	9.78	2.394	10.04	2.421	$t(189) = 0.752$	n.s.

†  $p < .10$

以上のとおり、BIS/BAS 尺度は、特に施設高齢者に施行した場合、BIS 尺度の逆転項目と BAS\_F 尺度の一部項目の相関係数と寄与率が先行研究に比較して悪い結果となった。しかし、BIS/BAS 尺度の信頼性を棄却するとまでは言えない。この理由については、後に検討する。また、BIS/BAS 尺度平均点は、施設の有無、性別及び年齢別では有意な差がない結果となった。つまり、BIS/BAS 尺度平均点という一変量だけでは高齢者の犯罪行動を説明できないといえる。



### 3 セルフコントロール尺度

#### (1) 確証的因子分析

尾崎ら（2016）は、BSCS-J 尺度を用いたインターネット調査により、全国に在住する日本人 290 名（男 149 名、女 141 名）から回答を得た。その内訳は、学生を除く 20 代 61 名、30 代 58 名、40 代 59 名、60 代 56 名で平均年齢 44.30 歳（ $SD = 13.54$ ）であった。確証的因子分析の結果、1 因子構造であることや高い内部整合性を確認したと報告した<sup>497</sup>。

BSCS-J 尺度によって収集した 191 名（一般 83 名、施設 108 名）のデータについて Amos Ver.19 用いて確証的因子分析を行った結果は Table 3-3-7 のとおりである。全体の適合度指標は  $\chi^2(130) = 392.321$  ( $p < .001$ ), GFI = .861, AGFI = .805, CFI = .779, RMSEA = .073 であった。

Table 3-3-7 BSCS-J 尺度の確証的因子分析

	先行研究	高齢者		
		全体	一般	施設
	$n = 290$	$n = 191$	$n = 83$	$n = 108$
1 悪いクセがやめられない(r)	.709	.622	.674	.610
2 だらけてしまう(r)	.730	.716	.791	.729
3 場にそぐわないことを言ってしまう(r)	.529	.593	.712	.497
4 自分にとってはよくないことでも、楽しければやってしまう(r)	.667	.586	.780	.426
5 自分にとってよくない誘いは、断る	-.263	-.102	-.127	-.054
6 もっと自制心があればよいのにと思う(r)	.734	.329	.284	.353
7 誘惑に負けない	-.560	-.323	-.419	-.237
8 自分に厳しい人だと言われる	-.392	-.181	-.187	-.179
9 集中力がない(r)	.605	.492	.583	.409
10 先のことを考えて、計画的に行動する	-.382	-.442	-.477	-.411
11 よくないことと知りつつ、やめられない時がある(r)	.688	.647	.665	.659
12 他のどういう方法があるか、よく考えずに行動してしまう(r)	.533	.663	.713	.639
13 趣味や娯楽のせいで、やるべきことがそっちのけになることがある(r)	.684	.604	.594	.601

注) (r) は反転項目。数値は因子負荷量(標準化係数)。

#### (2) 信頼性分析

収集した 191 名（一般 83 名、施設 108 名）のデータについて SPSS Ver. 19 を用いて信頼性分析を行ったところ、Table 3-3-8 のとおり Cronbach の  $\alpha$  は先行研究と遜色なかった。

Table 3-3-8 BSCS-J 尺度の信頼性分析

先行研究	高齢者			
学生	一般	全体	一般	施設
$n = 232$	$n = 290$	$n = 191$	$n = 83$	$n = 108$
.75	.83	.80	.84	.77

#### (3) BSCS-J 尺度平均点の差の検定

##### 1) 施設の有無（一般と施設）

「一般高齢者」（ $n = 83$ ）と「施設高齢者」（ $n = 108$ ）について BSCS-J 尺度平均点の差を確認するため  $t$  検定を実施したところ、Table 3-3-9 のとおり有意な差はなかった。

<sup>497</sup> 尾崎ほか・前掲注 492。

Table 3-3-9 施設の有無（施設と一般）の BSCS-J 尺度平均点の差

一般		施設		<i>t</i>	<i>p</i>
平均	標準偏差	平均	標準偏差		
42.99	8.930	41.01	8.392	<i>t</i> (189) = 1.571	n.s.

## 2) 性別（男性と女性）

「男性」（*n* = 126）と「女性」（*n* = 65）について BSCS-J 尺度平均点の差を確認するため *t* 検定を実施したところ、Table 3-3-10 のとおり有意傾向が見られた。

Table 3-3-10 性別（男性と女性）の BSCS-J 尺度平均点の差

男性		女性		<i>t</i>	<i>p</i>
平均	標準偏差	平均	標準偏差		
41.04	8.260	43.48	9.248	<i>t</i> (189) = 1.854	†
注) † <i>p</i> < .10					

## 3) 年齢（69 歳以下と 70 歳以上）

「69 歳以下」（*n* = 101）と「70 歳以上」（*n* = 90）について BSCS-J 尺度平均点の差を確認するため *t* 検定を実施したところ、Table 3-3-11 のとおり有意な差はなかった。

Table 3-3-11 年齢（69 歳以下と 70 歳以上）の BSCS-J 尺度平均点の差

69歳以下		70歳以上		<i>t</i>	<i>p</i>
平均	標準偏差	平均	標準偏差		
40.92	8.531	42.93	3.786	<i>t</i> (189) = 1.609	n.s.

以上のとおり、BSCS-J 尺度の信頼性は、先行研究と比較しても遜色ない結果が得られた。また、BSCS-J 尺度平均点は、施設の有無及び性別、年齢別では有意な差がない結果となった。つまり、BSCS-J 尺度平均点という一変量だけでは高齢者の犯罪行動を説明できないといえる。

## 4 発達課題尺度

エバンス（Evans, 1967 = 岡堂・中園, 1996）は、エリクソンの理論では平均的に期待される環境に対応する生得的な調整機制を仮定するとした。そして、彼の自我発達論の特徴は、人間が漸成的各段階で出会う社会的環境との交わりの過程で、本質的に社会的な人間の特性が開花すると考えるところにある。社会は、人間が漸成的な発達において各段階特有の課題を解決していく方法に影響を与えることで、彼をその社会の一員とするのであると主張した<sup>498</sup>。そして、エリクソンの発達課題を次のように解説した。「信頼性」とは、文化、階層及び人種の差異によって、子どもが自分の母親の姿を通して自分の世界を信頼できるようになることを意味し、課題を克服できないと他人をうまく信頼することができない。「自律性」とは、幼少期のしつけによって、自分をコントロールすることを身につけることを意味する。養育者から過剰に干渉されたり、頭ごなしに叱られたりしていると、常に「失敗するのではないか」、「バカにされるのではないか」といった疑惑を持ち、表面ばかり取り繕うようになる。「自主性」とは、自分の意思で行動する一方

<sup>498</sup> エバンス（著）（岡堂哲雄・中園正身 訳）『エリクソンは語る：アイデンティティの心理学』（新曜社, 1996）158 頁。

で自制心が育まれ、ルールを守ったり、養育者や周囲の他人と合わせたりできるようになることを意味する。何事にも果敢にチャレンジしていく積極性（自発性）が高まる一方で、失敗して叱られたり失望されたりするのではないかという恐れ（罪悪感）を抱くようになる。「勤勉性」とは、社会に関心を示して自発的に加わろうとしたり、宿題など物事を完成させることで周囲から認められたりといったものを学習することを意味する。児童期・学童期にいくら頑張ってもうまくいかず、周囲に認められない経験が積み重なると、自信を無くして劣等感を募らせていく。「同一性」とは、「自分は自分である」という確信や自信のことを意味する。自分のことが分からなくなって混乱し、うまく同一性を確立できないままになると、人格や情緒が安定せず、社会にもうまく適応できなくなってしまう。「親密性」とは、異性との親密な関係、又はこれと関連した形での他者との親密さを意味する。課題を克服できないと人間関係から孤立したり、拒絶したり、又疎外感に悩むという心理的危機に陥る。「生殖性」とは、次の世代の育成と指導を意味する。課題を克服できないと停滞の感覚と人間関係での貧困化を招き、しばしば個人的課題にのみ自分の能力やエネルギーを費やしてしまう。「統合性」とは、自分の人生についての受容を意味し、課題を克服できないと人生のやり直しができないという絶望感や死を平穩に受け入れる態度を困難にさせる。

#### （１）信頼性分析

収集した 191 名（一般 83 名、施設 108 名）のデータについて SPSS Ver.19 を用いて信頼性分析を行ったところ、Table 3-3-12 のとおり一般高齢者、施設高齢者とも Cronbach の  $\alpha$  は先行研究と遜色なかった。

Table 3-3-12 発達課題尺度の信頼性分析

発達課題 下位尺度	先行研究 ( $n = 302$ )		高齢者					
			全体 ( $n = 191$ )		一般 ( $n = 83$ )		施設 ( $n = 108$ )	
	$\alpha$	項目数	$\alpha$	項目数	$\alpha$	項目数	$\alpha$	項目数
信頼性	0.708	10	0.573	10	0.562	10	0.575	10
自律性	0.705	10	0.689	10	0.685	10	0.691	10
自主性	0.764	10	0.607	10	0.681	10	0.538	10
勤勉性	0.779	10	0.812	10	0.816	10	0.808	10
同一性	0.563	10	0.586	10	0.552	10	0.597	10
親密性	0.751	10	0.747	10	0.712	10	0.759	10
生殖性	0.764	10	0.851	10	0.858	10	0.848	10
統合性	0.779	10	0.726	10	0.772	10	0.664	10

#### （２）発達課題尺度平均点の差の検定

##### １）施設の有無（一般と施設）

「一般高齢者」（ $n = 83$ ）と「施設高齢者」（ $n = 108$ ）について発達課題尺度平均点の差を確認するため  $t$  検定を実施したところ、Table 3-3-13 のとおり親密性と統合性で有意な差、信頼性と同一性で有意傾向がみられた。

Table 3-3-13 施設の有無（一般と施設）の発達課題尺度平均点の差

発達課題 下位尺度	一般		施設		<i>t</i>	<i>p</i>
	平均	標準偏差	平均	標準偏差		
信頼性	33.48	4.940	32.18	5.368	<i>t</i> (189) = 1.725	†
自律性	35.27	5.904	34.34	5.952	<i>t</i> (189) = 1.006	n.s.
自主性	31.59	6.028	32.59	5.195	<i>t</i> (189) = 1.232	n.s.
勤勉性	35.63	6.605	37.10	6.514	<i>t</i> (189) = 1.542	n.s.
同一性	31.95	5.331	30.36	5.695	<i>t</i> (189) = 1.952	†
親密性	37.19	6.431	35.14	7.647	<i>t</i> (189) = 1.969	*
生殖性	39.71	7.110	39.23	7.651	<i>t</i> (189) = 0.443	n.s.
統合性	38.29	6.209	35.08	5.855	<i>t</i> (189) = 3.654	***

† *p* < .10, \* *p* < .05, \*\*\* *p* < .001

## 2) 性別（男性と女性）

「男性」（*n* = 126）と「女性」（*n* = 65）について発達課題尺度平均点の差を確認するため *t* 検定を実施したところ、Table 3-3-14 のとおり統合性で有意な差がみられた。

Table 3-3-14 性別（男性と女性）の発達課題尺度平均点の差

発達課題 下位尺度	男性		女性		<i>t</i>	<i>p</i>
	平均	標準偏差	平均	標準偏差		
信頼性	32.58	5.120	33.11	5.412	<i>t</i> (189) = 0.693	n.s.
自律性	34.29	5.767	35.63	6.191	<i>t</i> (189) = 1.489	n.s.
自主性	32.35	5.485	31.78	5.784	<i>t</i> (189) = 0.662	n.s.
勤勉性	36.52	6.586	36.34	6.610	<i>t</i> (189) = 0.184	n.s.
同一性	30.64	5.556	31.83	5.589	<i>t</i> (189) = 1.397	n.s.
親密性	35.37	7.095	37.32	7.276	<i>t</i> (189) = 1.791	n.s.
生殖性	39.45	7.138	39.42	7.955	<i>t</i> (189) = 0.033	n.s.
統合性	35.63	5.738	39.12	6.765	<i>t</i> (189) = 2.540	*

\* *p* < .05

## 3) 年齢（69 歳以下と 70 歳以上）

「69 歳以下」（*n* = 101）と「70 歳以上」（*n* = 90）について発達課題尺度平均点の差を確認するため *t* 検定を実施したところ、Table 3-3-15 のとおり信頼性と勤勉性で有意な差、生殖性で有意傾向が見られた。

Table 3-3-15 年齢（69 歳以下と 70 歳以上）の発達課題尺度平均点の差

発達課題 下位尺度	69歳以下		70歳以上		<i>t</i>	<i>p</i>
	平均	標準偏差	平均	標準偏差		
信頼性	31.80	4.899	33.80	5.378	<i>t</i> (189) = 2.687	***
自律性	34.08	5.900	35.49	5.914	<i>t</i> (189) = 1.646	n.s.
自主性	31.71	5.447	32.66	5.714	<i>t</i> (189) = 1.167	n.s.
勤勉性	35.25	6.897	37.82	5.947	<i>t</i> (189) = 2.747	*
同一性	30.53	4.912	31.62	6.225	<i>t</i> (189) = 1.347	n.s.
親密性	35.75	7.002	36.34	7.440	<i>t</i> (189) = 0.566	n.s.
生殖性	38.46	7.479	40.54	7.204	<i>t</i> (189) = 1.961	†
統合性	36.02	6.070	36.99	6.345	<i>t</i> (189) = 1.078	n.s.

† *p* < .10, \* *p* < .05, \*\*\* *p* < .001

以上のとおり、発達課題尺度の信頼性は、先行研究と比較しても遜色ない結果が得られた。また、発達課題尺度平均点は、施設の有無及び性別で「統合性」に有意な差が見られ、年齢別で「信頼性」に有意な差が見られた。この結果は、後に検討する。

## 5 BIS 尺度平均点とデモグラフィック項目との交互作用の検討

デモグラフィック項目のうち過去の経験に関係するものは、小学生のころの養育者・しつけ・生活状況・学業・学歴、40代から50代のころの職業・生活状況・婚姻歴、酒・タバコ・ギャンブルの嗜好、児童期の万引きの経験であった。まず、BIS 尺度平均点を 50 パーセンタイルで高群（一般  $n = 29$ 、施設  $n = 45$ ）と低群（一般  $n = 54$ 、施設  $n = 63$ ）に 2 分し、BSCS-J 尺度平均点を従属変数とする BIS 尺度平均点（高群・低群）、デモグラフィック項目、一般・施設別との分散分析を行った。なお、性別、年齢を共変量とした。

### (1) BIS 尺度平均点（高群・低群）と小学生のころの養育者と一般・施設別

小学生のころの養育者を、「両親群」（一般  $n = 70$ 、施設  $n = 79$ ）と「両親以外群」（一般  $n = 13$ 、施設  $n = 29$ ）の 2 群に分けた。SCBC-J 尺度平均点を従属変数、小学生のころの養育者（2 群） $\times$  BIS 尺度平均点（高群・低群）（2 群） $\times$  一般・施設別（2 群）の 3 要因の分散分析を行った。その結果、Figure 3-3-1 のとおり、2 次交互作用、1 次交互作用とも有意とならなかった。また、小学生のころの養育者の主効果（ $F(1,183) = 0.753$ , n.s.）は有意とならなかったが、BIS 尺度平均点（高群・低群）の主効果（ $F(1,183) = 3.617$ ,  $p = .059$ ）は有意傾向を示し、一般・施設別の主効果（ $F(1,183) = 14.695$ ,  $p < .05$ ）は有意となった。

BSCS-J 尺度平均点は、小学生のころの養育者や一般・施設別にかかわらず、BIS 尺度平均点高群は、BIS 尺度平均点低群と比較して低い傾向にあること及び小学生のころの養育者や BIS 尺度得点平均（高群・低群）にかかわらず、施設は一般と比較して全体的に低いことが示された。

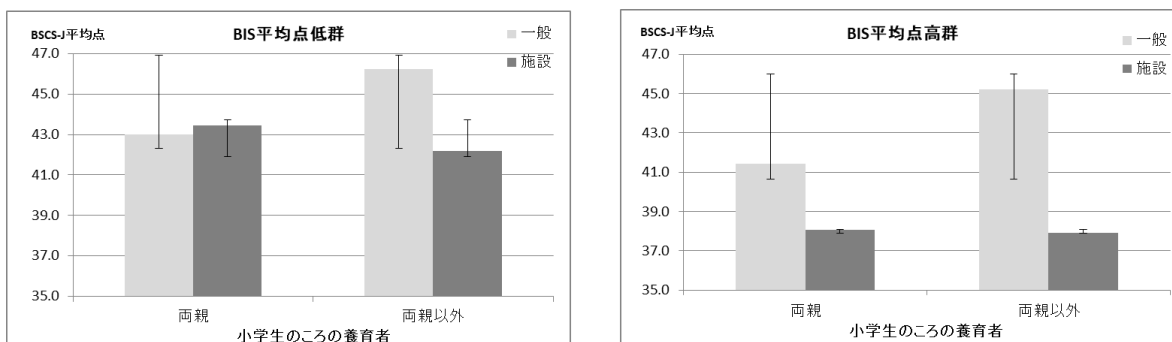


Figure 3-3-1 BIS 尺度平均点（高群・低群）と小学生のころの養育者と一般・施設別

### (2) BIS 尺度平均点（高群・低群）と小学生のころのしつけと一般・施設別

小学生のころのしつけを、「甘やかされた群」（一般  $n = 7$ 、施設  $n = 25$ ）、「どちらともいえない群」（一般  $n = 41$ 、施設  $n = 46$ ）、「厳しかった群」（一般  $n = 35$ 、施設  $n = 37$ ）の 3 群に分けた。BSCS-J 尺度平均点を従属変数、小学生のころのしつけ（3 群） $\times$  BIS 尺度平均点（高群・低群）（2 群） $\times$  一般・施設別（2 群）の 3 要因の分散分析を行った。その結果、Figure 3-3-2 のとおり、2 次交互作用、1 次交互作用とも有意とならなかった。また、一般の小学生のころのしつけの主効果（ $F(2,177) = 2.161$ , n.s.）、一般・施設別の主効果（ $F(1,177) = 1.524$ , n.s.）は有意とならなかったが、BIS 尺度平均点（高群・低群）の主効果（ $F(1,177) = 5.121$ ,  $p < .05$ ）は有意となった。

BSCS-J 尺度平均点は、小学生のころのしつけや一般・施設別にかかわらず、BIS 尺度平均点高群は、BIS 尺度平均点低群と比較して全体的に低いことが示された。

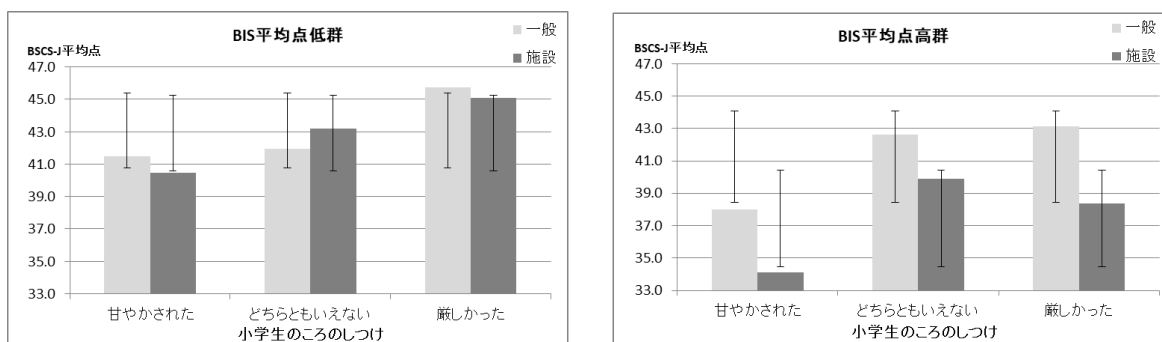


Figure 3-3-2 BIS 尺度平均点（高群・低群）と小学生のころのしつけと一般・施設別

### (3) BIS 尺度平均点（高群・低群）と小学生のころの生活状況と一般・施設別

小学生のころの生活状況を、「貧しかった群」（一般  $n = 29$ 、施設  $n = 43$ ）、「普通群」（一般  $n = 45$ 、施設  $n = 50$ ）、「裕福だった群」（一般  $n = 9$ 、施設  $n = 15$ ）の 3 群に分けた。BSCS-J 尺度平均点を従属変数、小学生のころの生活状況（3 群）×BIS 尺度平均点（高群・低群）（2 群）の 3 要因の分散分析を行った。その結果、Figure 3-3-3 のとおり、2 次交互作用 ( $F(2,177) = 3.091, p < .05$ ) は有意となったが、1 次交互作用は有意とならなかった。ただし、年齢の主効果 ( $F(1,75) = 0.543, p < .05$ ) は有意となった。また、小学生のころの生活状況 ( $F(2,177) = 0.996, \text{n.s.}$ )、一般・施設別 ( $F(1,177) = 1.489, \text{n.s.}$ ) は有意とならなかったが、BIS 尺度平均点(高群・低群)の主効果 ( $F(1,177) = 8.899, p < .01$ ) は有意となった。

施設の BSCS-J 尺度平均点は、年齢による影響を受ける。また、BSCS-J 尺度平均点は、小学生のころの生活状況、BIS 尺度平均点（高群・低群）、一般・施設別にあまり影響を受けないが、BIS 尺度平均点低群の場合、小学生のころの生活状況「貧しかった群」の施設は、一般と比較して高いが、BIS 尺度平均点高群の場合、小学生のころの生活状況「貧しかった群」の施設は、一般と比較して低いことが示された。さらに、小学生のころの生活状況や一般・施設別にかかわらず、BIS 尺度平均点高群は、BIS 尺度平均点低群と比較して全体的に低いことが示された。

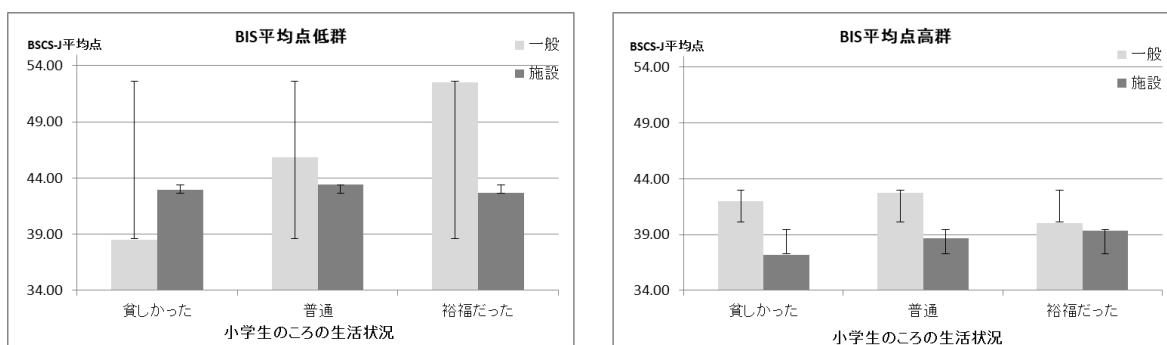


Figure 3-3-3 BIS 尺度平均点（高群・低群）と小学生のころの生活状況と一般・施設別

#### (4) BIS 尺度平均点（高群・低群）と小学生のころの学業と一般・施設別

小学生のころの学業を、「出来が悪かった群」（一般  $n = 18$ 、施設  $n = 27$ ）、「普通群」（一般  $n = 44$ 、施設  $n = 64$ ）、「出来がよかった群」（一般  $n = 21$ 、施設  $n = 17$ ）の3群に分けた。BSCS-J 尺度平均点を従属変数、小学生のころの学業（3群）×BIS 尺度平均点（高群・低群）（2群）×一般・施設別（2群）の3要因の分散分析を行った。その結果、Figure 3-3-4 のとおり、2次交互作用、1次交互作用とも有意とならなかった。また、小学生のころの学業の主効果（ $F(2,177) = 2.220$ , n.s.）、一般・施設別の主効果（ $F(1,177) = 0.558$ , n.s.）は有意とならなかったが、BIS 尺度平均点（高群・低群）の主効果（ $F(1,75) = 3.251$ ,  $p = .073$ ）は有意傾向を示した。

BSCS-J 尺度平均点は、小学生のころの学業や一般・施設別にかかわらず、BIS 尺度平均点高群は、BIS 尺度平均点低群に比較して全体的に低い傾向にあること示された。

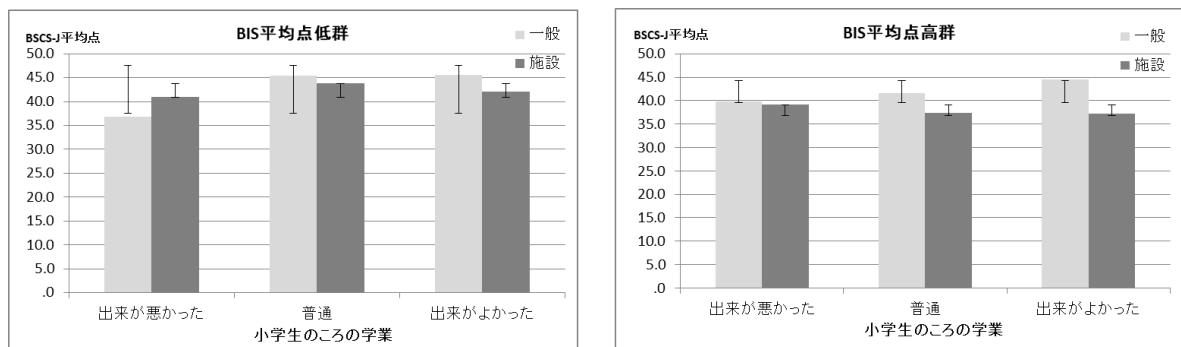


Figure 3-3-4 BIS 尺度平均点（高群・低群）と小学生のころの学業と一般・施設別

#### (5) BIS 尺度平均点（高群・低群）と学歴と一般・施設別

学歴を、「中卒以下群」（一般  $n = 18$ 、施設  $n = 61$ ）、「高卒以上群」（一般  $n = 65$ 、施設  $n = 47$ ）の2群に分けた。BSCS-J 尺度平均点を従属変数、学歴（2群）×BIS 尺度平均点（高群・低群）（2群）×一般・施設別（2群）の3要因の分散分析を行った。その結果、Figure 3-3-5 のとおり、2次交互作用及び1次交互作用の学歴×一般・施設別、学歴×BIS 尺度平均点（高群・低群）は有意とならなかったが、BIS 尺度平均点（高群・低群）×一般・施設別（ $F(1,181) = 68.074$ ,  $p < 0.001$ ）は有意となった。また、学歴の主効果（ $F(1,181) = 30.395$ ,  $p = .076$ ）は有意傾向を示したが、BIS 尺度平均点（高群・低群）、一般・施設別の主効果（ $F(1,181) = 0.044$ , n.s.）は有意とならなかった。ただし、年齢の主効果（ $F(1,181) = 3.419$ ,  $p = .066$ ）は有意傾向を示した。

施設の BSCS-J 尺度平均点は、年齢の影響を受ける傾向にある。また、BSCS-J 尺度平均点は、学歴、BIS 尺度平均点（高群・低群）、一般・施設別にあまり影響を受けないが、BIS 尺度平均点低群の場合、学歴にかかわらず施設は一般と比較して高いが、BIS 尺度平均点高群の場合、施設は一般と比較して低いことが示された。また、BSCS-J 尺度平均点は、BIS 尺度平均点（高群・低群）、一般・施設別にかかわらず、学歴「中卒以下群」は、「高卒以上群」と比較して低い傾向にあることが示された。

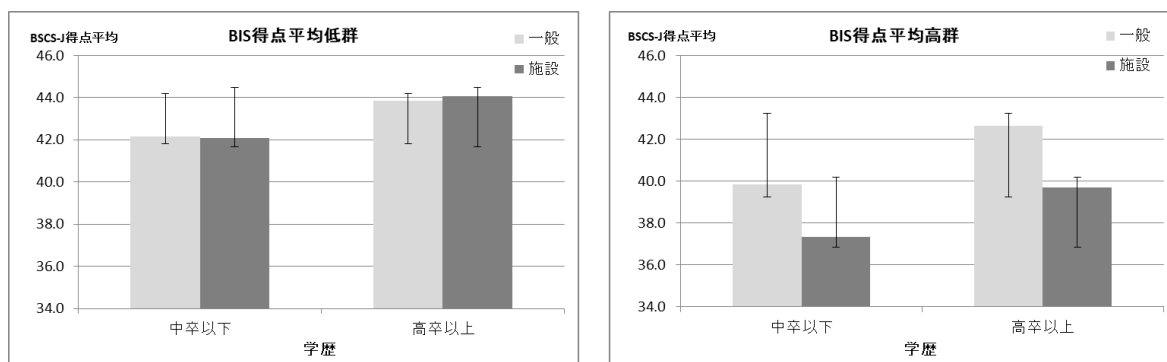


Figure 3-3-5 BIS 尺度平均点（高群・低群）と学歴と一般・施設別

#### (6) BIS 尺度平均点（高群・低群）と 40-50 代の職業と一般・施設別

40-50 代の職業を、土木作業員、工員、店員、その他を「土木作業員等群」（一般  $n = 16$ 、施設  $n = 66$ ）と会社員（正、契約、臨時）、公務員、自営業、専門職及び専業主婦を「土木作業員等以外群」（一般  $n = 67$ 、施設  $n = 42$ ）の 2 群に分けた。BSCS-J 尺度平均点を従属変数、40-50 代の職業（2 群）×BIS 尺度平均点（高群・低群）（2 群）×一般・施設別の 3 要因の分散分析を行った。その結果、Figure 3-3-6 のとおり、2 次交互作用、1 次交互作用とも有意とならなかった。また、40-50 代の職業の主効果 ( $F(1,181) = 0.825$ , n.s.)、一般・施設別の主効果 ( $F(1,181) = 2.111$ , n.s.) は有意とならなかったが、BIS 尺度平均点（高群・低群）の主効果 ( $F(1,181) = 6.985$ ,  $p < .01$ ) は有意となった。

BSCS-J 尺度平均点は、40-50 代の職業や一般・施設別にかかわらず、BIS 尺度平均点高群は BIS 尺度平均点低群と比較して低いことが示された。

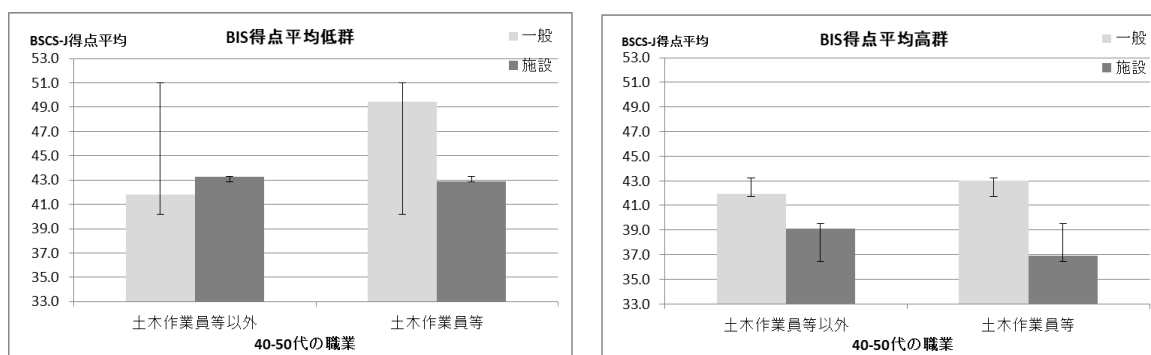


Figure 3-3-6 BIS 尺度平均点（高群・低群）と 40-50 代の職業と一般・施設別

#### (7) BIS 尺度平均点（高群・低群）と婚姻歴と一般・施設別

婚姻歴を、現在もしている、あるが死別の「婚姻継続・死別群」（一般  $n = 67$ 、施設  $n = 21$ ）、離婚の「離婚群」（一般  $n = 10$ 、施設  $n = 65$ ）、結婚したことがないの「婚姻歴なし群」（一般  $n = 6$ 、施設  $n = 22$ ）の 3 群に分けた。BSCS-J 尺度平均点を従属変数、婚姻歴（3 群）×BIS 尺度平均点（高群・低群）（2 群）×一般・施設別（2 群）の 3 要因の分散分析を行った。その結果、Figure 3-3-7 のとおり、2 次交互作用 ( $F(2,177) = 3.163$ ,  $p < .05$ )、1 次交互作用の BIS 尺度平均点（高群・低群）×一般・施設別 ( $F(1,177) = 8.304$ ,  $p < .01$ ) は有意となったが、婚姻歴×BIS 尺度平均点（高群・低群） ( $F(2,177) = 2.201$ , n.s.)、婚



婚姻歴×一般・施設別 ( $F(2,177) = 1.819, n.s.$ ) は有意とならなかった。また、婚姻歴の主効果 ( $F(2,177) = 1.044, n.s.$ )、BIS 尺度平均点 (高群・低群) の主効果 ( $F(1,177) = 0.166, n.s.$ )、一般・施設別の主効果 ( $F(1,177) = 0.553, n.s.$ ) は有意とならなかった。

BSCS-J 尺度平均点は、婚姻歴、BIS 尺度平均点 (高群・低群)、一般・施設別にあまり影響を受けないが、BIS 尺度平均点低群の場合、婚姻歴「離婚群」、「婚姻歴なし群」の施設は一般と比較して高が、BIS 尺度平均点高群の場合、婚姻歴「離婚群」、「婚姻歴なし群」の施設は一般と比較して低いことが示された。

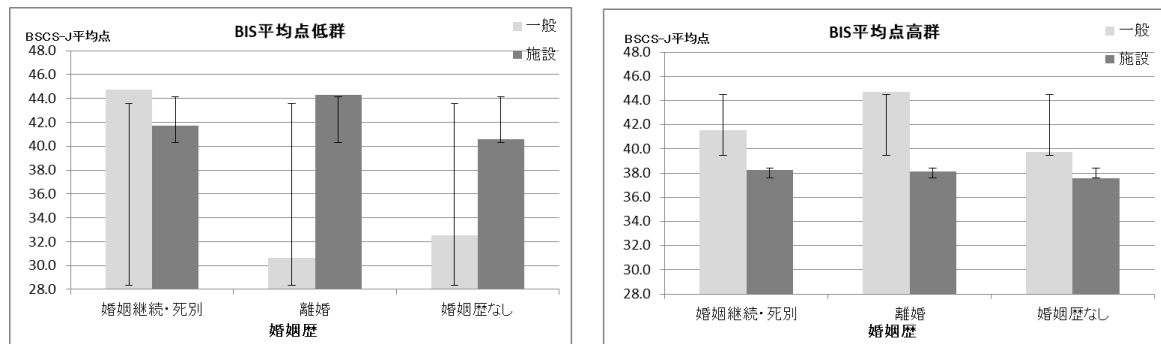


Figure 3-3-7 BIS 尺度平均点 (高群・低群) と婚姻歴と一般・施設別

#### (8) BIS 尺度平均点 (高群・低群) と児童期の万引き経験と一般・施設別

児童期の万引き経験を、「経験なし群」(一般  $n = 65$ 、施設  $n = 66$ ) と「経験あり群」(一般  $n = 18$ 、施設  $n = 42$ ) の 2 群に分けた。BSCS-J 尺度平均点を従属変数、児童期の万引き経験 (2 群) × BIS 尺度平均点 (高群・低群) (2 群) × 一般・施設別 (2 群) の 3 要因の分散分析を行った。その結果、Figure 3-3-8 のとおり、2 次交互作用 ( $F(1,181) = 2.560, n.s.$ )、1 次交互作用の BIS 尺度平均点 (高群・低群) × 児童期の万引き経験 ( $F(1,181) = 1.558, n.s.$ )、一般・施設別 × 児童期の万引き経験 ( $F(1,181) = 1.076, n.s.$ ) は有意とならなかったが、BIS 尺度平均点 (高群・低群) × 一般・施設別の交互作用 ( $F(1,181) = 5.063, p < .05$ ) は有意となった。また、児童期の万引き経験の主効果 ( $F(1,181) = 0.420, n.s.$ )、BIS 尺度平均点 (高群・低群) の主効果 ( $F(1,181) = 2.049, n.s.$ )、一般・施設別の主効果 ( $F(1,181) = 0.267, n.s.$ ) は有意とならなかった。

BSCS-J 尺度平均点は、児童期の万引き経験の有無、BIS 尺度平均点 (高群・低群)、一般・施設別にあまり影響を受けないが、BIS 尺度平均点低群の場合、施設は一般と比較して高いが、BIS 尺度平均点高群の場合、施設は一般と比較して低いことが示された。

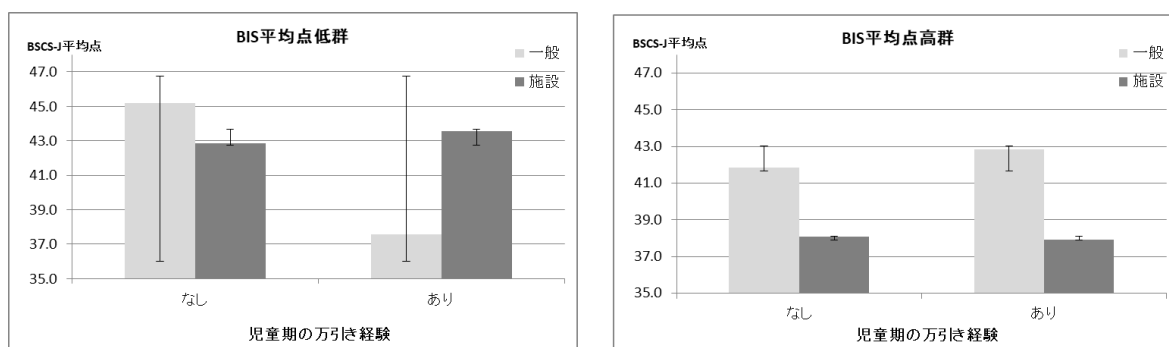


Figure 3-3-8 BIS 尺度平均点（高群・低群）と児童期の万引き経験と一般・施設別

#### (9) BIS 尺度平均点（高群・低群）と飲酒嗜好と一般・施設別

飲酒嗜好を、「飲まない群」（一般  $n = 30$ 、施設  $n = 45$ ）、「飲む群」（一般  $n = 45$ 、施設  $n = 38$ ）、「やめた群」（一般  $n = 8$ 、施設  $n = 25$ ）の3群に分けた。BSCS-J 尺度平均点を従属変数、飲酒嗜好（3群）×BIS 尺度平均点（高群・低群）（2群）×一般・施設別（2群）の3要因の分散分析を行った。その結果、Figure 3-3-9 のとおり、2次交互作用、1次交互作用とも有意とならなかった。また、飲酒嗜好の主効果（ $F(2,177) = 0.107$ , n.s.）、一般・施設別の主効果（ $F(1,177) = 0.766$ , n.s.）は有意とならなかったが、BIS 尺度平均点（高群・低群）の主効果（ $F(1,177) = 7.366$ ,  $p < .01$ ）は有意となった。

BSCS-J 尺度平均点は、飲酒嗜好や一般・施設別にかかわらず、BIS 尺度平均点高群は尺度 BIS 尺度平均点低群に比較して全体的に低いことが示された。

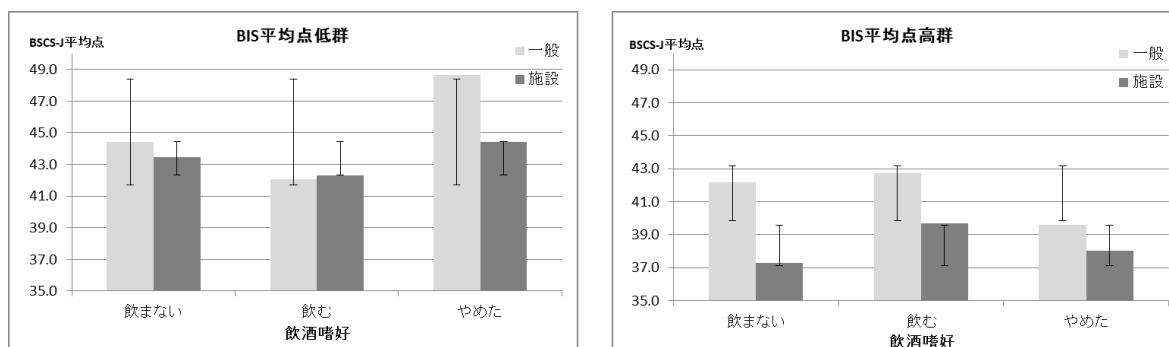


Figure 3-3-9 BIS 尺度平均点（高群・低群）と飲酒嗜好と一般・施設別

#### (10) BIS 尺度平均点（高群・低群）と喫煙嗜好と一般・施設別

喫煙嗜好を、「吸わない群」（一般  $n = 49$ 、施設  $n = 28$ ）、「吸う群」（一般  $n = 22$ 、施設  $n = 59$ ）、「やめた群」（一般  $n = 12$ 、施設  $n = 21$ ）の3群に分けた。BSCS-J 尺度平均点を従属変数、喫煙嗜好（3群）×BIS 尺度平均点（高群・低群）（2群）×一般・施設別（2群）の3要因の分散分析を行った。その結果、Figure 3-3-10 のとおり、2次交互作用（ $F(2,177) = 0.048$ , n.s.）、1次交互作用の喫煙嗜好×BIS 尺度平均点（高群・低群）の交互作用（ $F(2,177) = 1.518$ , n.s.）は有意とならなかったが、喫煙嗜好×一般・施設別（ $F(2,177) = 3.369$ ,  $p < .05$ ）は有意となり、BIS 尺度平均点（高群・低群）×一般・施設別（ $F(1,177) = 3.426$ ,  $p = .066$ ）は有意傾向を示した。ただし、年齢の主効果（ $F(1,177) = 16.760$ ,  $p = .094$ ）

は有意傾向を示した。また、BIS 尺度平均点（高群・低群）の主効果（ $F(1,177) = 16.760$ ,  $p < .05$ ）は有意となったが、喫煙嗜好の主効果（ $F(2,177) = 1.518$ , n.s.）、一般・施設別の主効果（ $F(1,177) = 1.518$ , n.s.）は有意とならなかった。

施設の BSCS-J 尺度平均点は、年齢の影響を受ける傾向にある。また、BSCS-J 尺度平均点は、喫煙嗜好、BIS 尺度平均点（高群・低群）、一般・施設別にあまり影響を受けないが、BIS 尺度平均点（高群・低群）にかかわらず、喫煙嗜好「吸わない群」の場合、施設は一般と比較して低いこと及び喫煙嗜好にかかわらず、BIS 尺度平均点高群は、BIS 尺度平均点低群と比較して全体的に低い傾向にあることが示された。

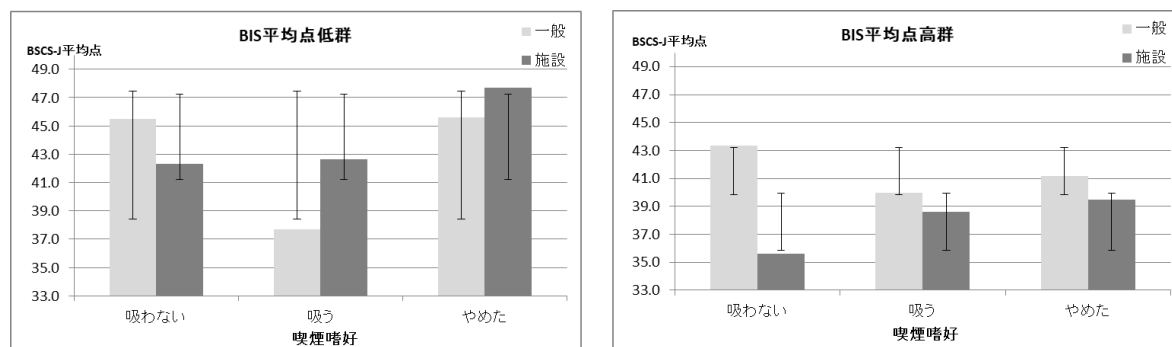


Figure 3-3-10 BIS 尺度平均点（高群・低群）と喫煙嗜好と一般・施設別

#### (11) BIS 尺度平均点（高群・低群）とギャンブル嗜好と一般・施設別

ギャンブル嗜好を、「やらない群」（一般  $n = 67$ 、施設  $n = 49$ ）、「やる群」（一般  $n = 10$ 、施設  $n = 20$ ）、「やめた群」（一般  $n = 6$ 、施設  $n = 39$ ）の 3 群に分けた。BSCS-J 尺度平均点を従属変数、ギャンブル嗜好（3 群）×BIS 尺度平均点（高群・低群）（2 群）×一般・施設別（2 群）の 3 要因の分散分析を行った。その結果、Figure 3-3-11 のとおり、2 次交互作用（ $F(1,177) = 0.041$ , n.s.）、1 次交互作用のギャンブル嗜好×BIS 尺度平均点（高群・低群）（ $F(2,177) = 1.913$ , n.s.）、BIS 尺度平均点（高群・低群）×一般・施設の別（ $F(1,177) = 0.041$ , n.s.）は有意とならなかったが、ギャンブル嗜好×一般・施設別の交互作用（ $F(2,177) = 2.419$ ,  $p = .091$ ）は有意傾向を示した。また、ギャンブル嗜好の主効果（ $F(2,177) = 6.822$ ,  $p < .01$ ）は有意となったが、BIS 尺度平均点（高群・低群）の主効果（ $F(1,177) = 2.516$ , n.s.）、一般・施設別の主効果（ $F(1,177) = 0.853$ , n.s.）は有意とならなかった。

BSCS-J 尺度平均点は、ギャンブル嗜好、BIS 尺度平均点（高群・低群）、一般・施設別にあまり影響を受けないが、BIS 尺度平均点（高群・低群）にかかわらず、施設の場合、ギャンブル嗜好「やらない群」は一般と比較して低く、「やる群」、「やめた群」は高い傾向にあることが示された。また、BIS 尺度平均点（高群・低群）や一般・施設別にかかわらず、ギャンブル嗜好「やる群」は「やらない群」と比較して低いこと示された。

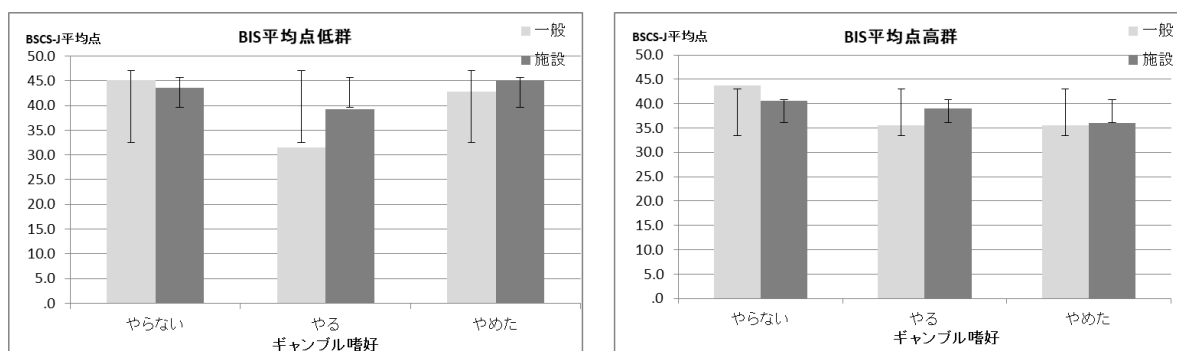


Figure 3-3-11 BIS 尺度平均点（高群・低群）とギャンブル嗜好と一般・施設別

以上のとおり、BSCS-J 尺度平均点に対しては、小学生のころの生活状況×BIS 尺度平均点（高群・低群）×一般・施設別、婚姻歴×BIS 尺度平均点（高群・低群）×一般・施設別の交互作用が認められた。しかし、小学生のころの生活状況、離婚歴によって一般高齢者と施設高齢者の BSCS-J 尺度平均点に有意な差は見られない。つまり、BSCS-J 尺度平均点の差は、人生の経験、BIS 尺度平均点、一般・施設別の相互作用を通じてのみ説明が可能であり、単一変数・主効果モデルではうまく説明できないことが明らかとなった。

## 6 BAS 尺度平均点とデモグラフィック項目との交互作用の検討

BAS 尺度平均点と過去の経験との相互作用を確認するため、BSCS-J 尺度平均点を従属変数とする、BAS 尺度平均点（高群・低群）とデモグラフィック項目と一般・施設別の分散分析を行った。なお、性別、年齢を共変量とした。

### (1) BAS 尺度平均点（高群・低群）と小学生のころの養育者と一般・施設別

小学生のころの養育者を、「両親群」（一般  $n = 70$ 、施設  $n = 79$ ）と「両親以外群」（一般  $n = 13$ 、施設  $n = 29$ ）の 2 群に分けた。SCBC-J 尺度平均点を従属変数、小学生のころの養育者（2 群）×BAS 尺度平均点（高群・低群）（2 群）×一般・施設別（2 群）の 3 要因の分散分析を行った。その結果、Figure 3-3-12 のとおり、2 次交互作用 ( $F(1,181) = 5.373$ ,  $p < .05$ ) は有意となったが、1 次交互作用は有意とならなかった。また、BAS 尺度平均点（高群・低群）の主効果 ( $F(1,181) = 5.135$ ,  $p < .05$ ) は有意となり、一般・施設別の主効果 ( $F(1,181) = 3.055$ ,  $p = .082$ ) は有意傾向を示したが、小学生のころの養育者の主効果 ( $F(1,181) = 1.204$ , n.s.) は有意とならなかった。

BSCS-J 尺度平均点は、小学生のころの養育者、BAS 尺度平均点（高群・低群）、一般・施設別の影響をあまり受けないが、BAS 尺度平均点低群の場合、小学生のころの養育者「両親群」の施設は一般と比較して高いが、BAS 尺度平均点高群の場合、小学生のころの養育者「両親群」の施設は一般と比較して低いことが示された。また、小学生のころの養育者にかかわらず、BAS 尺度平均点高群は、BAS 尺度平均点低群と比較して低いこと及びその傾向は施設と比較して一般の方が大きい傾向にあることが示された。

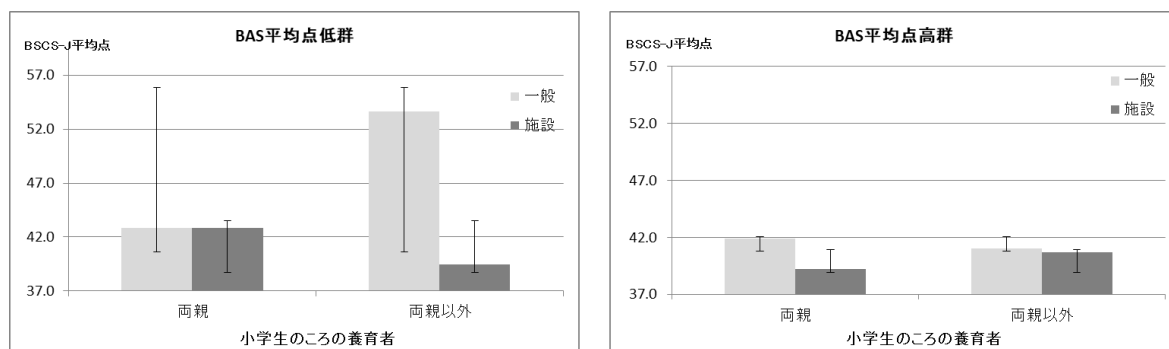


Figure 3-3-12 BAS 尺度平均点（高群・低群）と小学生のころの養育者と一般・施設別

## (2) BAS 尺度平均点（高群・低群）と小学生のころのしつけと一般・施設別

小学生のころのしつけを、「甘やかされた群」（一般  $n = 7$ 、施設  $n = 25$ ）、「どちらともいえない群」（一般  $n = 41$ 、施設  $n = 46$ ）、「厳しかった群」（一般  $n = 35$ 、施設  $n = 37$ ）の 3 群に分けた。BSCS-J 尺度平均点を従属変数、小学生のころのしつけ（3 群）×BAS 尺度平均点（高群・低群）（2 群）×一般・施設別（2 群）の 3 要因の分散分析を行った。その結果、Figure 3-3-13 のとおり、2 次交互作用、1 次交互作用とも有意とならなかった。また、BAS 尺度平均点（高群・低群）の主効果（ $F(1,177) = 4.516, p < .05$ ）は有意となり、小学生のころのしつけの主効果（ $F(2,177) = 2.941, p = .055$ ）は有意傾向を示したが、一般・施設別の主効果（ $F(1,177) = 0.033 \text{ n.s.}$ ）は有意とならなかった。

BSCS-J 尺度平均点は、小学生のころのしつけや一般・施設別にかかわらず、BAS 尺度平均点高群は BAS 尺度平均点低群と比較して全体的に低いことが示された。また、BAS 尺度平均点（高群・低群）や一般・施設別にかかわらず、小学生のころのしつけ「甘やかされた群」は、「どちらともいえない群」、「厳しかった群」と比較して低い傾向にあることが示された。

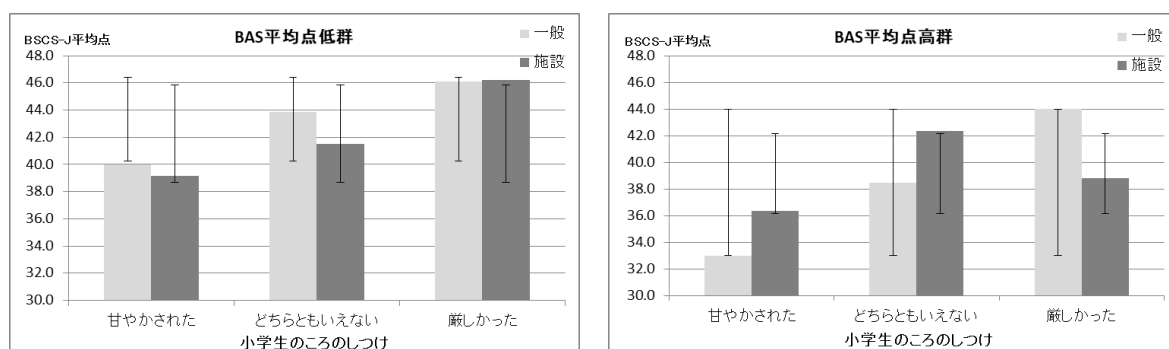


Figure 3-3-13 BAS 尺度平均点（高群・低群）と小学生のころのしつけと一般・施設別

## (3) BAS 尺度平均点（高群・低群）と小学生のころの生活状況と一般・施設別

小学生のころの生活状況を、「貧しかった群」（一般  $n = 29$ 、施設  $n = 43$ ）、「普通群」（一般  $n = 45$ 、施設  $n = 50$ ）「裕福だった群」（一般  $n = 9$ 、施設  $n = 15$ ）の 3 群に分けた。BSCS-J 尺度平均点を従属変数、小学生のころの生活状況（3 群）×BAS 尺度平均点（高群・低群）（2 群）×一般・施設別（2 群）の 3 要因の分散分析を行った。その結果、Figure 3-3-14

のとおり、2次交互作用、1次交互作用とも有意とならなかった。また、小学生のころの生活状況の主効果 ( $F(2,177) = 4.012, p = .058$ ) は有意傾向を示したが、BAS 尺度平均点 (高群・低群) の主効果 ( $F(1,177) = 1.946, n.s.$ )、一般・施設別の主効果 ( $F(1,177) = 0.021, n.s.$ ) は有意とならなかった。

BSCS-J 尺度平均点は、BAS 尺度平均点 (高群・低群) や一般・施設別にかかわらず、小学生のころの生活状況「貧しかった群」は、「普通群」、「裕福だった群」と比較して低い傾向にあることが示された。

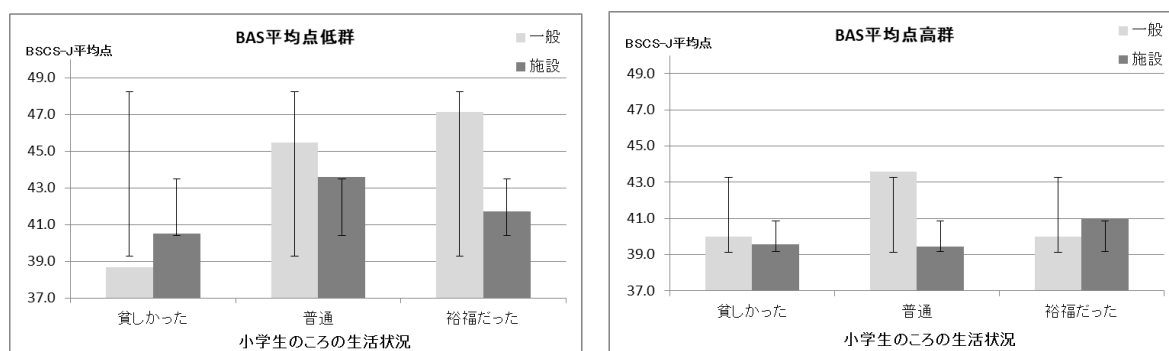


Figure 3-3-14 BAS 尺度平均点 (高群・低群) と小学生のころの生活状況と一般・施設別

#### (4) BAS 尺度平均点 (高群・低群) と小学生のころの学業と一般・施設別

小学生のころの学業を、「出来が悪かった群」(一般  $n = 18$ 、施設  $n = 27$ )、「普通群」(一般  $n = 44$ 、施設  $n = 64$ )、「出来がよかった群」(一般  $n = 21$ 、施設  $n = 17$ ) の3群に分けた。BSCS-J 尺度平均点を従属変数、小学生のころの学業 (3群)  $\times$  BAS 尺度平均点 (高群・低群) (2群)  $\times$  一般・施設別 (2群) の3要因の分散分析を行った。その結果、Figure 3-3-15 のとおり、2次交互作用、1次交互作用とも有意とならなかった。また、小学生のころの学業の主効果 ( $F(2,177) = 4.254, p < .05$ ) は有意となったが、BAS 尺度平均点 (高群・低群) の主効果 ( $F(1,177) = 0.051, n.s.$ )、一般・施設別の主効果 ( $F(1,177) = 0.255, n.s.$ ) は有意とならなかった。

BSCS-J 尺度平均点は、BAS 尺度平均点 (高群・低群)、一般・施設別にかかわらず、小学生のころの学業「出来が悪かった群」は、「普通群」、「出来がよかった群」と比較して低いことが示された。

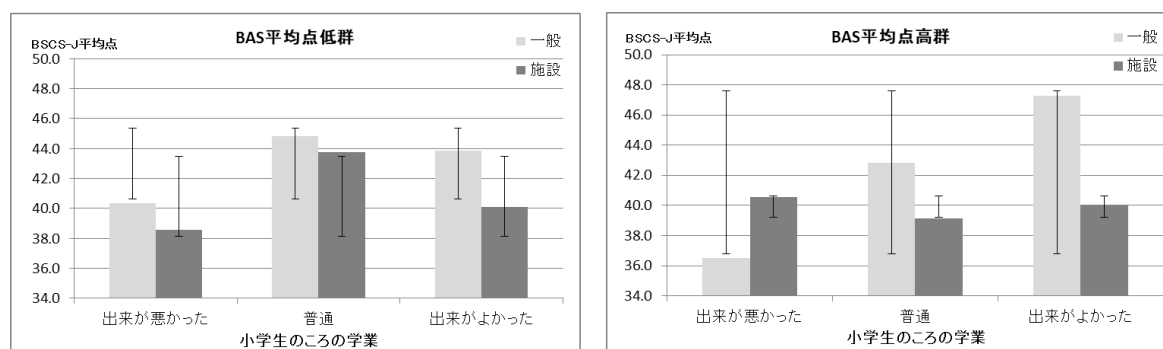


Figure 3-3-15 BAS 尺度平均点 (高群・低群) と小学生のころの学業と一般・施設別

#### (5) BAS 尺度平均点（高群・低群）と学歴と一般・施設別

学歴を、「中卒以下群」（一般  $n = 18$ 、施設  $n = 61$ ）、「高卒以上群」（一般  $n = 65$ 、施設  $n = 47$ ）の 2 群に分けた。BSCS-J 尺度平均点を従属変数、学歴（2 群）×BAS 尺度平均点（高群・低群）（2 群）×一般・施設別（2 群）の 3 要因の分散分析を行った。その結果、Figure 3-3-16 のとおり、2 次交互作用（ $F(1,181) = 3.558, p = .061$ ）は有意傾向を示したが、1 次交互作用は有意とならなかった。また、BAS 尺度平均点（高群・低群）の主効果（ $F(1,181) = 5.152, p < .05$ ）は有意となったが、学歴の主効果（ $F(1,77) = 2.612, n.s.$ ）、一般・施設別の主効果（ $F(1,102) = 2.015, n.s.$ ）は有意とならなかった。

BSCS-J 尺度平均点は、学歴、BAS 尺度平均点（高群・低群）、一般・施設別にあまり影響を受けないが、BAS 尺度平均点低群の場合、学歴「中卒以下群」の施設は一般と比較して低く、「高卒以上群」の施設は一般と比較して高いが、BAS 尺度平均点高群の場合、学歴「中卒以下群」の施設は一般と比較して高く、「高卒以上群」の施設は一般と比較して低い傾向にあることが示された。また、学歴、一般・施設別にかかわらず、BAS 尺度平均点高群は BAS 尺度平均点低群と比較して全体的に低いことが示された。

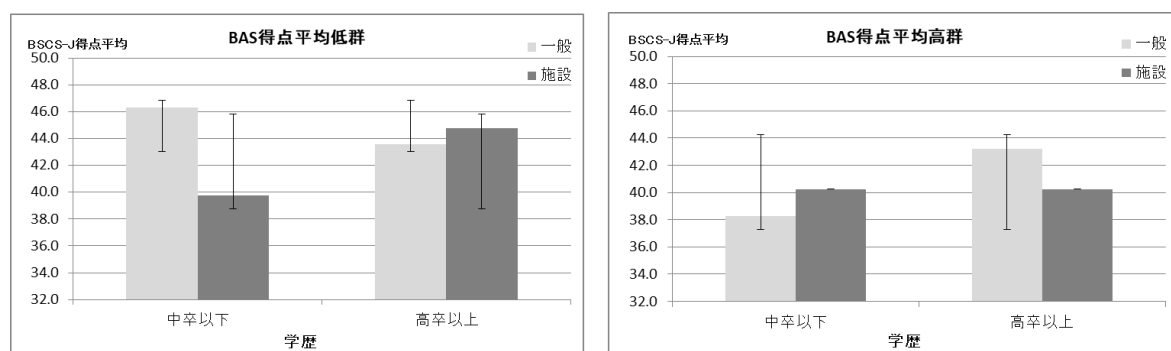


Figure 3-3-16 BAS 尺度平均点（高群・低群）と学歴と一般・施設別

#### (6) BAS 尺度平均点（高群・低群）と 40-50 代の職業と一般・施設別

40-50 代の職業を、土木作業員、工員、店員、その他の「土木作業員等群」（一般  $n = 16$ 、施設  $n = 66$ ）と会社員（正、契約、臨時）、公務員、自営業、専門職及び専業主婦の「その他群」（一般  $n = 67$ 、施設  $n = 42$ ）の 2 群に分けた。BSCS-J 尺度平均点を従属変数、40-50 代の職業（2 群）×BAS 尺度平均点（高群・低群）（2 群）×一般・施設別（2 群）の 3 要因の分散分析を行った。その結果、Figure 3-3-17 のとおり、2 次交互作用（ $F(1,181) = 0.071, n.s.$ ）は有意とならなかったが、1 次交互作用のうち、40-50 代の職業×一般・施設別の交互作用（ $F(1,181) = 0.396, p < .05$ ）は有意となった。BAS 尺度平均点（高群・低群）×40-50 代の職業（ $F(1,181) = 0.168, n.s.$ ）、BAS 尺度平均点（高群・低群）×一般・施設別（ $F(1,181) = 0.088, n.s.$ ）は有意とならなかった。また、40-50 代の職業の主効果（ $F(1,181) = 1.671, n.s.$ ）、BAS 尺度平均点（高群・低群）の主効果（ $F(1,181) = 2.610, n.s.$ ）、一般・施設別の主効果（ $F(1,181) = 2.566, n.s.$ ）は有意とならなかった。

BSCS-J 尺度平均点は、40-50 代の職業、BAS 尺度平均点（高群・低群）、一般・施設別にあまり影響を受けないが、40-50 代の職業「土木作業員等」の場合、BAS 尺度平均点（高群・低群）にかかわらず、施設は一般と比較して低いことが示された。

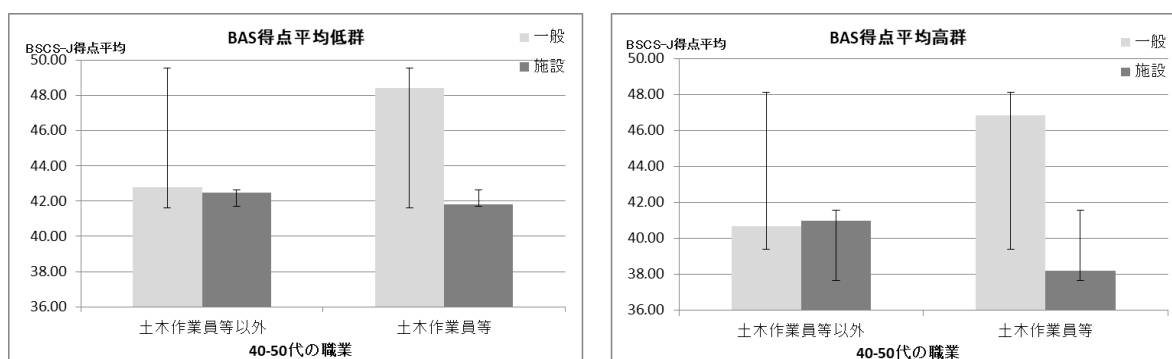


Figure 3-3-17 BAS 尺度平均点（高群・低群）と 40-50 代の職業と一般・施設別

#### (7) BAS 尺度平均点（高群・低群）と婚姻歴と一般・施設別

婚姻歴を、現在もしている、あるが死別の「婚姻継続・死別群」（一般  $n = 67$ 、施設  $n = 21$ ）、離婚「離婚歴あり群」（一般  $n = 10$ 、施設  $n = 65$ ）、結婚したことがない「婚姻歴なし群」（一般  $n = 6$ 、施設  $n = 22$ ）の 3 群に分けた。BSCS-J 尺度平均点を従属変数、婚姻歴（3 群）×BAS 尺度平均点（高群・低群）（2 群）×一般・施設別（2 群）の 3 要因の分散分析を行った。その結果、Figure 3-3-18 のとおり、2 次交互作用、1 次交互作用とも有意とならなかった。また、婚姻歴の主効果（ $F(2,177) = 1.171$ , n.s.）、BAS 尺度平均点（高群・低群）の主効果（ $F(1,177) = 0.806$ , n.s.）、一般・施設の主効果（ $F(1,177) = 0.072$ , n.s.）は有意とならなかった。

BSCS-J 尺度平均点は、婚姻歴、BAS 尺度平均点（高群・低群）、一般・施設別にあまり影響を受けないことが示された。

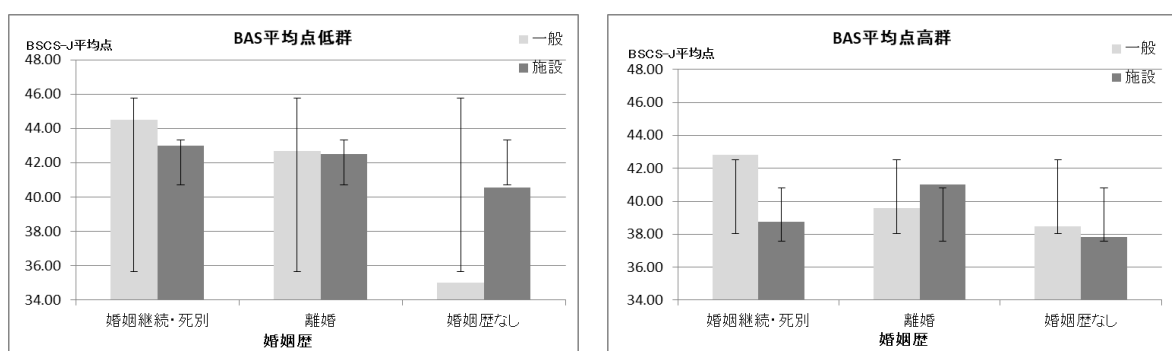


Figure 3-3-18 BAS 尺度平均点（高群・低群）と婚姻歴と一般・施設別

#### (8) BAS 尺度平均点（高群・低群）と児童期の万引き経験と一般・施設別

児童期の万引き経験を、「経験なし群」（一般  $n = 65$ 、施設  $n = 66$ ）と「経験あり群」（一般  $n = 18$ 、施設  $n = 42$ ）の 2 群に分けた。BSCS-J 尺度平均点を従属変数、児童期の万引き経験（2 群）×BAS 尺度平均点（高群・低群）（2 群）×一般・施設別（2 群）の 3 要因の分散分析を行った。その結果、Figure 3-3-19 のとおり、2 次交互作用、1 次交互作用とも有意とならなかった。また、BAS 尺度平均点（高群・低群）の主効果（ $F(1,181) = 4.410$ ,  $p < .05$ ）は有意となったが、児童期の万引き経験の主効果（ $F(1,181) = 0.655$ , n.s.）、一般・施設別の主効果（ $F(1,181) = 0.009$ , n.s.）は有意とならなかった。



BSCS-J 尺度平均点は、児童期の万引き経験や一般・施設別にかかわらず、BAS 尺度平均点高群は、BAS 尺度平均点低群と比較して全体的に低いことが示された。

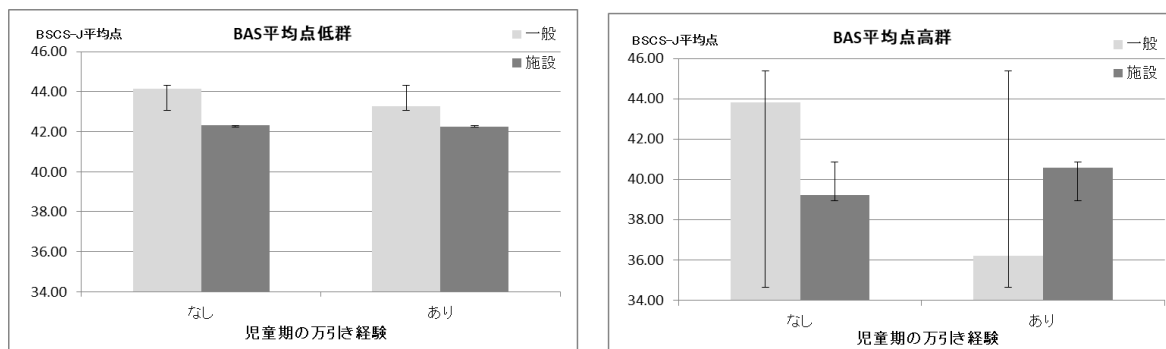


Figure 3-3-19 BAS 尺度平均点（高群・低群）と児童期の万引き経験と一般・施設別

#### (9) BAS 尺度平均点（高群・低群）と飲酒嗜好と一般・施設別

飲酒嗜好を、「飲まない群」（一般  $n = 30$ 、施設  $n = 45$ ）、「飲む群」（一般  $n = 45$ 、施設  $n = 38$ ）、「やめた群」（一般  $n = 8$ 、施設  $n = 25$ ）の 3 群に分けた。BSCS-J 尺度平均点を従属変数、飲酒嗜好（3 群） $\times$  BAS 尺度平均点（高群・低群）（2 群） $\times$  一般・施設別（2 群）の 3 要因の分散分析を行った。その結果、Figure 3-3-20 のとおり、2 次交互作用、1 次交互作用とも有意とならなかった。また、飲酒嗜好の主効果 ( $F(2,177) = 0.517$ , n.s.)、BAS 尺度平均点（高群・低群）の主効果 ( $F(1,177) = 1.335$ , n.s.)、一般・施設別 ( $F(1,177) = 4.771$ , n.s.) は有意とならなかった。

BSCS-J 尺度平均点は、飲酒嗜好、BAS 尺度平均点（高群・低群）、一般・施設別の影響をあまり受けないことが示された。

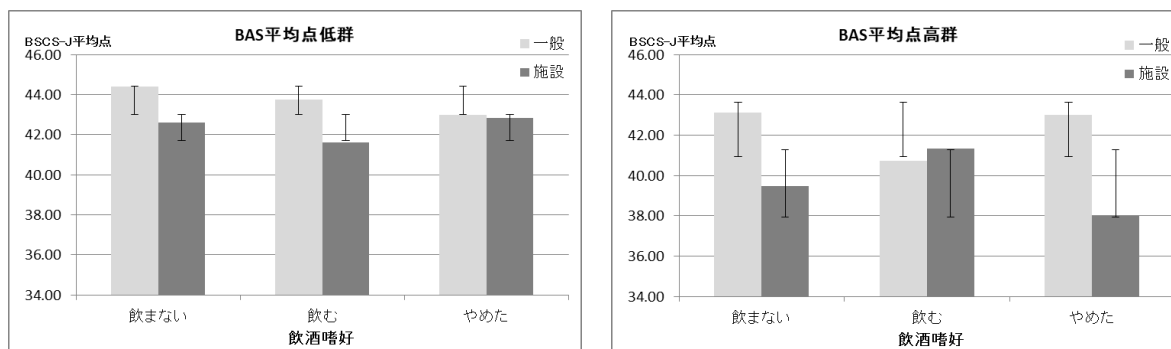


Figure 3-3-20 BAS 尺度平均点（高群・低群）と飲酒嗜好と一般・施設別

#### (10) BAS 尺度平均点（高群・低群）と喫煙嗜好と一般・施設別

喫煙嗜好を、「吸わない群」（一般  $n = 49$ 、施設  $n = 28$ ）、「吸う群」（一般  $n = 22$ 、施設  $n = 59$ ）、「やめた群」（一般  $n = 12$ 、施設  $n = 21$ ）の 3 群に分けた。BSCS-J 尺度平均点を従属変数、喫煙嗜好（3 群） $\times$  BAS 尺度平均点（高群・低群）（2 群） $\times$  一般・施設別（2 群）の 3 要因の分散分析を行った。その結果、Figure 3-3-21 のとおり、2 交互作用 ( $F(1,177) = 5.425$ ,  $p < .01$ )、1 次交互作用の喫煙嗜好  $\times$  一般・施設別 ( $F(2,177) = 3.912$ ,  $p < .05$ ) は有意となったが、喫煙嗜好  $\times$  BAS 尺度平均点（高群・低群） ( $F(2,177) = 0.548$ , n.s.)、

BAS 尺度平均点（高群・低群）×一般・施設別（ $F(1,177) = 0.069$ , n.s.）は有意とならなかった。また、BAS 尺度平均点（高群・低群）の主効果（ $F(1,177) = 8.057$ ,  $p < .01$ ）は有意となったが、喫煙嗜好の主効果（ $F(2,177) = 1.608$ , n.s.）、一般・施設別（ $F(1,181) = 0.102$ , n.s.）は有意とならなかった。

BSCS-J 尺度平均点は、喫煙嗜好、BAS 尺度平均点（高群・低群）、一般・施設別の影響をあまり受けないが、BAS 尺度平均点低群の場合、喫煙嗜好「吸わない群」の施設は一般と比較して高く、「吸う群」の施設は一般と比較して低いが、BAS 尺度平均点高群の場合、喫煙嗜好「吸わない群」の施設は一般と比較して低く、「吸う群」の施設は一般と比較して高いことが示された。また、BAS 尺度平均点高群は BAS 尺度平均点低群と比較して全体的に低いことが示された。

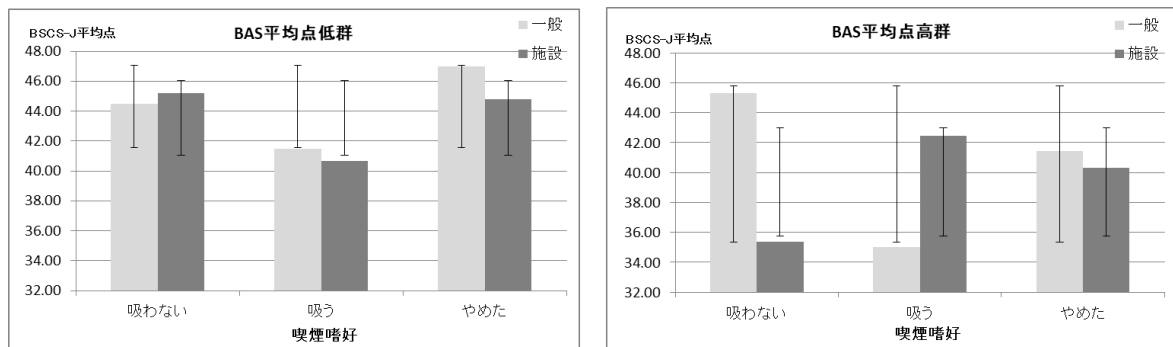


Figure 3-3-21 BAS 尺度平均点（高群・低群）と喫煙嗜好と一般・施設別

#### (11) BAS 尺度平均点（高群・低群）とギャンブル嗜好と一般・施設別

ギャンブル嗜好を、「やらない群」（一般  $n = 67$ 、施設  $n = 49$ ）、「やる群」（一般  $n = 10$ 、施設  $n = 20$ ）、「やめた群」（一般  $n = 6$ 、施設  $n = 39$ ）の 3 群に分けた。BSCS-J 尺度平均点を従属変数、ギャンブル嗜好（3 群）×BAS 尺度平均点（高群・低群）（2 群）×一般・施設別（2 群）の 3 要因の分散分析を行った。その結果、Figure 3-3-22 のとおり、2 次交互作用（ $F(2,177) = 1.760$ , n.s.）、1 次交互作用のギャンブル嗜好×BAS 尺度平均点（高群・低群）（ $F(2,177) = 1.544$ , n.s.）、BAS 尺度平均点（高群・低群）×一般・施設別（ $F(1,177) = 0.126$ , n.s.）は有意とならなかったが、ギャンブル嗜好×一般・施設別（ $F(2,177) = 3.243$ ,  $p < .05$ ）は有意となった。また、ギャンブル嗜好の主効果（ $F(2,177) = 9.060$ ,  $p < .001$ ）は有意となったが、BAS 尺度平均点（高群・低群）の主効果（ $F(1,177) = 0.606$ , n.s.）、一般・施設別の主効果（ $F(1,177) = 1.995$ , n.s.）は有意とならなかった。

BSCS-J 尺度平均点は、ギャンブル嗜好、BAS 尺度平均点（高群・低群）、一般・施設別にあまり影響を受けないが、ギャンブル嗜好「やらない群」の場合、BAS 尺度平均点（高群・低群）にかかわらず、施設は一般と比較して低く、「やる群」の場合、施設は一般と比較して高いことが示された。また、BAS 尺度平均（高群・低群）や一般・施設別にかかわらず、ギャンブル嗜好「やらない群」は、「やる群」、「やめた群」と比較して高いことが示された。

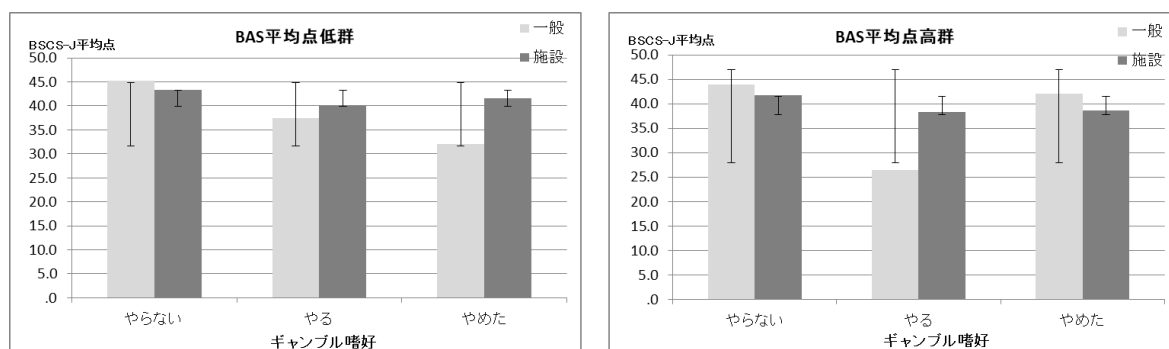


Figure 3-3-22 BAS 尺度平均点（高群・低群）とギャンブル嗜好と一般・施設別

以上のとおり、BSCS-J 尺度平均点に対しては、小学生のころの養育者×BAS 尺度平均点（高群・低群）×一般・施設別、学歴×BAS 尺度平均点（高群・低群）×一般・施設別、喫煙嗜好×BAS 尺度平均点（高群・低群）×一般・施設別の交互作用が認められた。しかし、小学生のころの養育者、学歴、喫煙嗜好によって一般高齢者と施設高齢者の BSCS-J 尺度平均点に有意な差は見られない。つまり、BSCS-J 尺度平均点の差は、人生の経験、BAS 尺度平均点、一般・施設別の相互作用を通じてのみ説明が可能であり、単一変数・主効果モデルではうまく説明できないことが明らかになった。

#### 7 BAS 下位尺度平均点とデモグラフィック項目との交互作用の検討

BAS\_D 尺度平均点、BAS\_R 尺度平均点、BAS\_F 尺度平均点をそれぞれ 50 パーセントイルで「高群」と「低群」に 2 分した。その結果、BAS\_D 尺度平均点「低群」（一般  $n = 48$ 、施設  $n = 60$ ）、「高群」（一般  $n = 35$ 、施設  $n = 48$ ）、BAS\_R 尺度平均点「低群」（一般  $n = 43$ 、施設  $n = 56$ ）、「高群」（一般  $n = 40$ 、施設  $n = 52$ ）、BAS\_F 尺度平均点「低群」（一般  $n = 48$ 、施設  $n = 58$ ）、「高群」（一般  $n = 35$ 、施設  $n = 50$ ）となった。BSCS-J 尺度平均点を従属変数、BAS 下位尺度平均点とデモグラフィック項目の分散分析を行った結果、交互作用が有意となったものは以下のとおりであった。なお、性別と年齢を共変量とした。

##### (1) BAS\_D 尺度平均点（高群・低群）と小学生のころの養育者と一般・施設別

小学生のころの養育者を、「両親群」（一般  $n = 70$ 、施設  $n = 79$ ）と「両親以外群」（一般  $n = 13$ 、施設  $n = 29$ ）の 2 群に分けた。SCBC-J 尺度平均点を従属変数、小学生のころの養育者（2 群）×BAS\_D 尺度平均点（高群・低群）（2 群）×一般・施設別（2 群）の 3 要因の分散分析を行った。その結果、Figure 3-3-23 のとおり、2 次交互作用（ $F(1,181) = 3.465, p = .064$ ）は有意傾向を示したが、1 次交互作用は有意とならなかった。また、小学生のころの養育者の主効果（ $F(1,181) = 0.221, n.s.$ ）、BAS\_D 尺度平均点（高群・低群）の主効果（ $F(1,181) = 0.025, n.s.$ ）、一般・施設別の主効果（ $F(1,181) = 2.088, n.s.$ ）は有意とならなかった。

BSCS-J 尺度平均点は、小学生のころの養育者、BAS\_D 尺度平均点（高群・低群）、一般・施設別の影響をあまり受けないが、BAS\_D 尺度平均点低群の場合、小学生のころの養育者「両親以外群」の施設は一般と比較して低い、BAS\_D 尺度平均点高群の場合、

小学生のころの養育者「両親以外群」の施設は一般と差がない傾向があること示された。

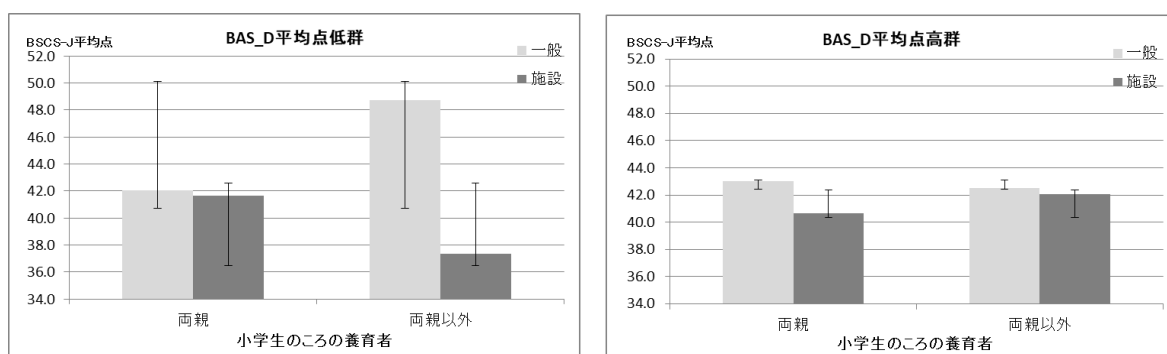


Figure 3-3-23 BAS\_D 尺度平均点（高群・低群）と小学生のころの養育者と一般・施設別

## (2) BAS\_D 尺度平均点（高群・低群）と喫煙嗜好と一般・施設別

喫煙嗜好を、「吸わない群」（一般  $n = 49$ 、施設  $n = 28$ ）、「吸う群」（一般  $n = 22$ 、施設  $n = 59$ ）、「やめた群」（一般  $n = 12$ 、施設  $n = 21$ ）の 3 群に分けた。BSCS-J 尺度平均点を従属変数、喫煙嗜好（3 群） $\times$  BAS\_D 尺度平均点（高群・低群）（2 群） $\times$  一般・施設別（2 群）の 3 要因の分散分析を行った。その結果、Figure 3-3-24 のとおり、2 次交互作用 ( $F(2,177) = 3.958, p < .05$ )、1 次交互作用の喫煙嗜好 $\times$ 一般・施設別 ( $F(2,177) = 1.548, p < .01$ ) は有意となったが、喫煙嗜好 $\times$  BAS\_D 尺度平均点（高群・低群） ( $F(2,177) = 0.274, n.s.$ )、BAS\_D 尺度平均点（高群・低群） $\times$  一般・施設別 ( $F(1,177) = 0.015, n.s.$ ) は有意とならなかった。また、喫煙嗜好の主効果 ( $F(2,177) = 0.897, n.s.$ )、BIS 尺度平均点（高群・低群）の主効果 ( $F(1,177) = 0.942, n.s.$ )、一般・施設別の主効果 ( $F(1,177) = 0.149, n.s.$ ) は有意とならなかった。

BSCS-J 尺度平均点は、喫煙嗜好、BAS\_D 尺度平均点（高群・低群）、一般・施設別の影響をあまり受けないが、BAS\_D 尺度平均点低群の場合、喫煙嗜好「吸う群」、「やめた群」の施設は一般と比較して低い、BAS\_D 尺度平均点高群の場合、喫煙嗜好「吸う群」、「やめた群」の施設は一般と比較して高いことが示された。

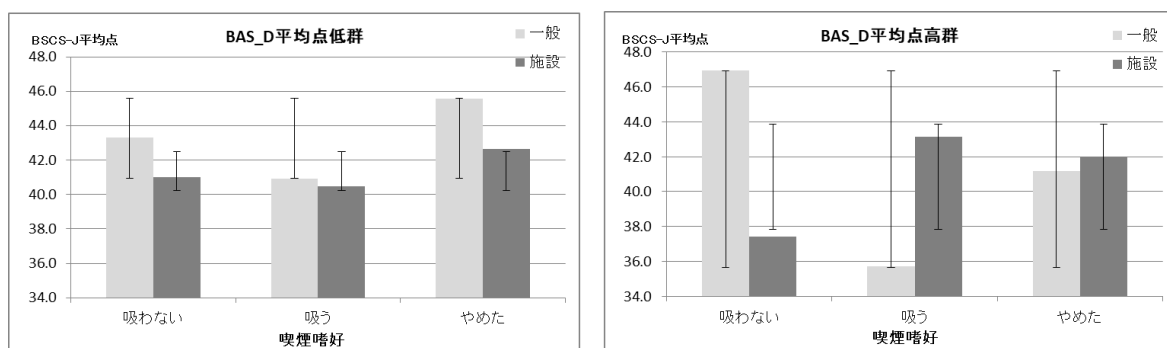


Figure 3-3-24 BAS\_D 尺度平均点（高群・低群）と喫煙嗜好と一般・施設別

## (3) BAS\_R 尺度平均点（高群・低群）と小学生のころの養育者と一般・施設別

小学生のころの養育者を、「両親群」（一般  $n = 70$ 、施設  $n = 79$ ）と「両親以外群」（一般  $n = 13$ 、施設  $n = 29$ ）の 2 群に分けた。SCBC-J 尺度平均点を従属変数、小学生のころ

の養育者（2群）×BAS\_R 尺度平均点（高群・低群）（2群）×一般・施設別（2群）の3要因の分散分析を行った。その結果、Figure 3-3-25 のとおり、2次交互作用（ $F(1,181) = 7.167, p < .01$ ）、1次交互作用のうち、BAS\_R 尺度平均点（高群・低群）×小学生のころの養育者（ $F(1,181) = 4.146, p < .05$ ）は有意となったが、BAS\_R 尺度平均点（高群・低群）×一般・施設別（ $F(1,181) = 0.460, n.s.$ ）、小学生のころの養育者×一般・施設別（ $F(1,181) = 2.477, n.s.$ ）は有意とならなかった。また、一般・施設別の主効果（ $F(1,181) = 3.305, p = .071$ ）は有意傾向を示したが、小学生のころの養育者の主効果（ $F(1,181) = 1.183, n.s.$ ）、BAS\_R 尺度平均点（高群・低群）の主効果（ $F(1,181) = 2.497, n.s.$ ）は有意とならなかった。

SCBC-J 尺度平均点は、小学生のころの養育者、BAS\_R 尺度平均点（高群・低群）、一般・施設別の影響をあまり受けないが、BAS\_R 尺度平均点低群の場合、小学生のころの養育者「両親群」の施設は一般と比較して高いが、BAS\_R 尺度平均点高群の場合、小学生のころの養育者「両親群」の施設は一般と比較して低いことが示された。また、小学生のころの養育者、BAS\_R 尺度平均点（高群・低群）にかかわらず、施設は一般と比較して全体的に低い傾向にあることが示された。

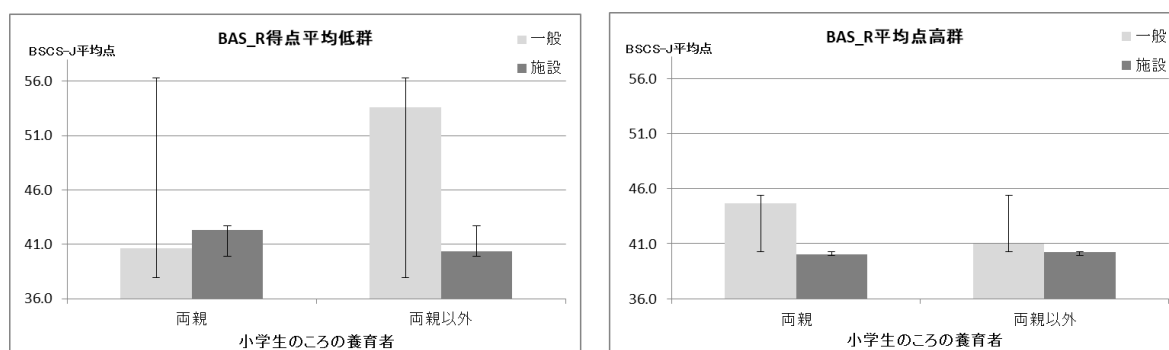


Figure 3-3-25 BAS\_R 尺度平均点（高群・低群）と小学生のころの養育者と一般・施設別

#### (4) BAS\_R 尺度平均点（高群・低群）と小学生のころの学業と一般・施設別

小学生のころの学業を、「出来が悪かった群」（一般  $n = 18$ 、施設  $n = 27$ ）、「普通群」（一般  $n = 44$ 、施設  $n = 64$ ）、「出来がよかった群」（一般  $n = 21$ 、施設  $n = 17$ ）の3群に分けた。BSCS-J 尺度平均点を従属変数、小学生のころの学業（3群）×BAS\_R 尺度平均点（高群・低群）（2群）×一般・施設別（2群）の3要因の分散分析を行った。その結果、Figure 3-3-26 のとおり、2次交互作用（ $F(2,177) = 0.299, n.s.$ ）、1次交互作用のうち、小学生のころの学業×一般・施設別（ $F(2,177) = 1.533, n.s.$ ）、BAS\_R 尺度平均点（高群・低群）×一般・施設別（ $F(1,177) = 1.233, n.s.$ ）は有意とならなかったが、小学生のころの学業×BAS\_R 尺度平均点（高群・低群）（ $F(2,177) = 2.848, p = .061$ ）は有意傾向を示した。また、一般の小学生のころの学業の主効果（ $F(2,177) = 4.137, p < .05$ ）は有意となったが、BAS\_D 尺度平均点（高群・低群）の主効果（ $F(1,177) = 0.948, n.s.$ ）、一般・施設の主効果（ $F(1,177) = 0.463, n.s.$ ）は有意とならなかった。

BSCS-J 尺度平均点は、小学生のころの学業、BAS\_R 尺度平均点（高群・低群）、一般・施設別にあまり影響を受けないが、BAS\_R 尺度平均点低群の場合、小学生のころの学業

「出来が悪かった群」は、「普通群」、「出来がよかった群」と比較して低い、BAS\_R 尺度平均点高群の場合、小学生のころの学業「出来が悪かった群」は、「普通群」と比較して高い傾向にあることが示された。また、BAS\_R 尺度平均点（高群・低群）、一般・施設別にかかわらず、小学生のころの学業「出来がよかった群」は「出来が悪かった群」と比較して高いことが示された。

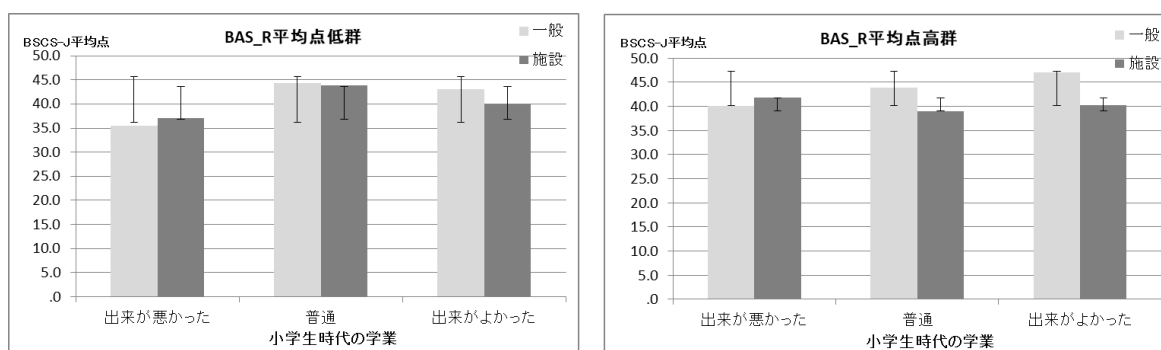


Figure 3-3-26 BAS\_R 尺度平均点（高群・低群）と小学生のころの学業と一般・施設別

#### (5) BAS\_F 尺度平均点（高群・低群）と小学生のころの養育者と一般・施設別

小学生のころの養育者を、「両親群」（一般  $n = 70$ 、施設  $n = 79$ ）と「両親以外群」（一般  $n = 13$ 、施設  $n = 29$ ）の 2 群に分けた。SCBC-J 尺度平均点を従属変数、小学生のころの養育者（2 群） $\times$  BAS\_F 尺度平均点（高群・低群）（2 群） $\times$  一般・施設別（2 群）の 3 要因の分散分析を行った。その結果、Figure 3-3-27 のとおり、2 次交互作用 ( $F(1,181) = 2.983, p = .086$ ) は有意傾向を示したが、1 次交互作用は有意とならなかった。また、年齢の主効果 ( $F(1,181) = 3.044, p = .083$ ) は有意傾向を示し、BAS\_F 尺度平均点（高群・低群）の主効果 ( $F(1,181) = 15.142, p < .001$ ) は有意であったが、小学生のころの養育者の主効果 ( $F(1,181) = 0.707, n.s.$ )、一般・施設別の主効果 ( $F(1,181) = 1.584, n.s.$ ) は有意とならなかった。

施設の BSCS-J 尺度平均点は、年齢の影響を受ける傾向にある。また、BSCS-J 尺度平均点は、小学生のころの養育者、BAS\_F 尺度平均点（高群・低群）、一般・施設別にあまり影響を受けないが、BAS\_F 尺度平均点低群の場合、小学生のころの養育者「両親以外群」は、施設は一般と比較して低い、BAS\_F 尺度平均点高群の場合、施設は一般と比較して高い傾向にあること及び小学生のころの養育者や一般・施設別にかかわらず、BAS\_F 尺度平均点高群は BAS\_F 尺度平均点低群と比較して全体的に低いことが示された。

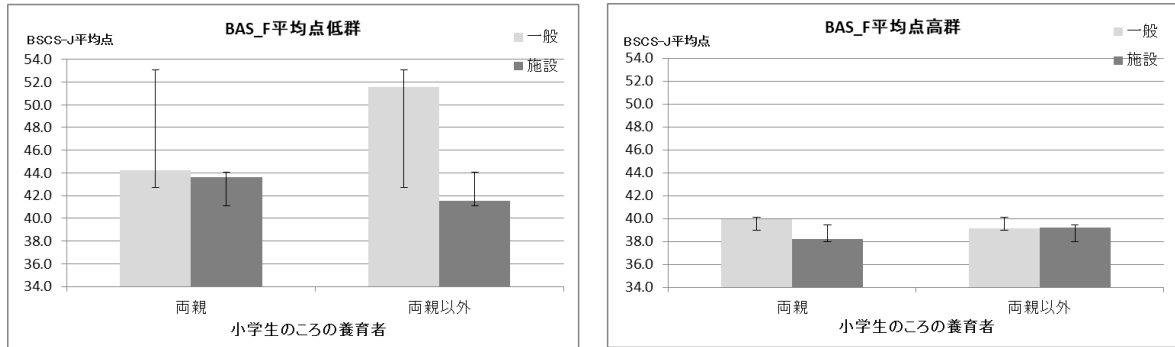


Figure 3-3-27 BAS\_F 尺度平均点 (高群・低群) と小学生のころの養育者と一般・施設別

#### (6) BAS\_F 尺度平均点 (高群・低群) と児童期の万引き経験と一般・施設別

児童期の万引き経験を、「経験なし群」(一般  $n = 65$ 、施設  $n = 66$ ) と「経験あり群」(一般  $n = 18$ 、施設  $n = 42$ ) の2群に分けた。BSCS-J 尺度平均点を従属変数、児童期の万引き経験 (2群)  $\times$  BAS\_F 尺度平均点 (高群・低群) (2群)  $\times$  一般・施設別 (2群) の3要因の分散分析を行った。その結果、Figure 3-3-28 のとおり、2次交互作用 ( $F(1,181) = 3.231$ ,  $p = .074$ ) は有意傾向を示し、1次交互作用のうち、児童期の万引き経験  $\times$  BAS\_F 尺度平均点 (高群・低群) ( $F(1,181) = 4.224$ ,  $p < .05$ ) は有意となったが、児童期の万引き経験  $\times$  一般・施設別 ( $F(1,181) = 1.036$ , n.s.)、BAS\_F 尺度平均点 (高群・低群)  $\times$  一般・施設別 ( $F(1,181) = 1.337$ , n.s.) は有意とならなかった。また、BAS\_F 尺度平均点 (高群・低群) の主効果 ( $F(1,181) = 21.933$ ,  $p < .001$ ) は有意となったが、児童期の万引き経験の主効果 ( $F(1,181) = 0.881$ , n.s.)、一般・施設別の主効果 ( $F(1,181) = 0.152$ , n.s.) は有意とならなかった。

BSCS-J 尺度平均点は、児童期の万引き経験、BAS\_F 尺度平均点 (高群・低群)、一般・施設別にあまり影響を受けないが、BAS\_F 尺度平均点低群の場合、児童期の万引き経験「あり群」の施設は一般と比較して低い、BAS\_F 尺度平均点高群の場合、児童期の万引き経験「あり群」の施設は一般と比較して高い傾向にあることが示された。また、児童期の万引き経験、一般・施設別にかかわらず、BAS\_F 尺度平均点高群は BAS\_F 尺度平均点低群と比較して全体的に低いことが示された。

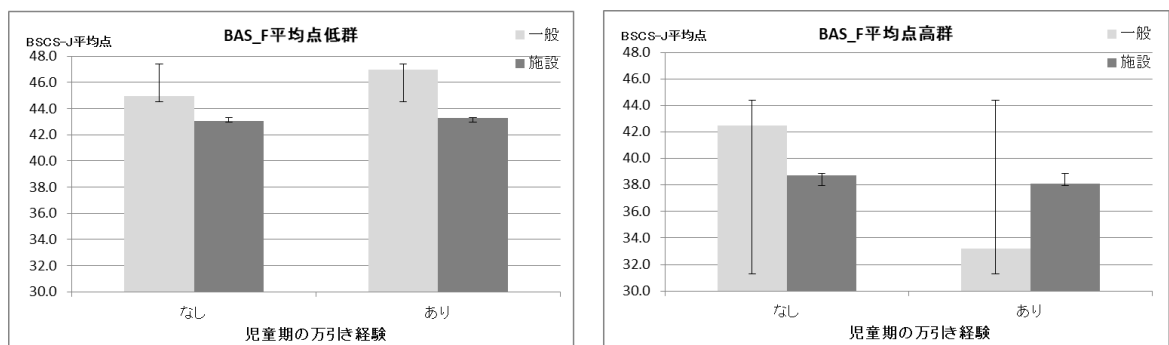


Figure 3-3-28 BAS\_F 尺度平均点 (高群・低群) と児童期の万引き経験と一般・施設別

(7) BAS\_F 尺度平均点（高群・低群）と喫煙嗜好と一般・施設別

喫煙嗜好を、「吸わない群」（一般  $n = 49$ 、施設  $n = 28$ ）、「吸う群」（一般  $n = 22$ 、施設  $n = 59$ ）、「やめた群」（一般  $n = 12$ 、施設  $n = 21$ ）の3群に分けた。BSCS-J 尺度平均点を従属変数、喫煙嗜好（3群） $\times$  BAS\_F 尺度平均点（高群・低群）（2群） $\times$  一般・施設別（2群）の3要因の分散分析を行った。その結果、Figure 3-3-29 のとおり、2次交互作用 ( $F(1,177) = 3.888, p < .05$ )、1次交互作用の喫煙嗜好 $\times$ 一般・施設別 ( $F(1,177) = 3.455, p < .05$ ) は有意となったが、喫煙嗜好 $\times$  BAS\_F 尺度平均点（高群・低群） ( $F(1,177) = 0.172, n.s.$ )、BAS\_F 尺度平均点（高群・低群） $\times$  一般・施設別 ( $F(1,177) = 0.000, n.s.$ ) は有意とならなかった。また、BAS\_F 尺度平均点（高群・低群）の主効果 ( $F(1,177) = 18.190, p < .001$ ) は有意となったが、喫煙嗜好の主効果 ( $F(2,177) = 1.192, n.s.$ )、一般・施設別の主効果 ( $F(1,177) = 0.193, n.s.$ ) は有意とならなかった。

BSCS-J 尺度平均点は、喫煙嗜好、BAS\_F 尺度平均点（高群・低群）、一般・施設別の影響をあまり受けないが、BAS\_F 尺度平均点低群の場合、喫煙嗜好「吸う群」の施設は一般と比較して低いが、BAS\_F 尺度平均点高群の場合、喫煙嗜好「吸う群」の施設は一般と比較して高いことが示された。また、喫煙嗜好、一般・施設別にかかわらず、BAS\_F 尺度平均点高群は BAS\_F 尺度平均点低群に比較して全体的に低いことが示された。

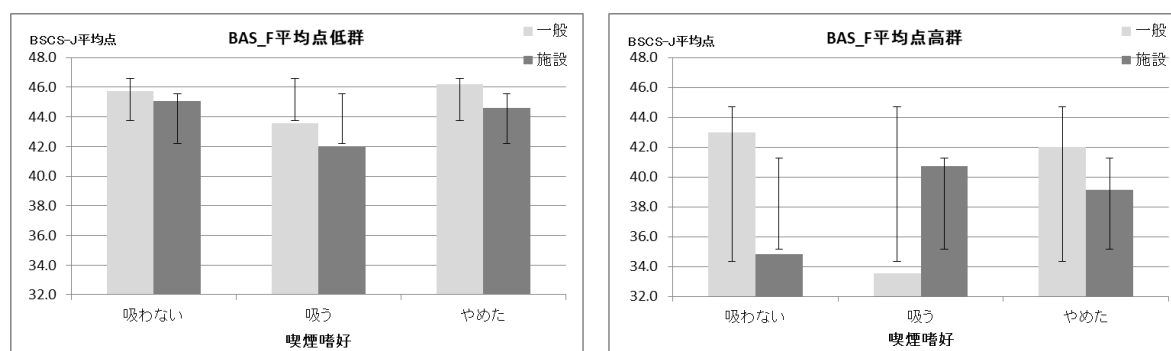


Figure 3-3-29 BAS\_F 尺度平均点（高群・低群）と喫煙嗜好と一般・施設別

以上のとおり、セルフコントロールに対しては、小学生のころの養育者とは BAS 下位尺度平均点のすべて、小学生のころの学業とは BAS\_R 尺度平均点、喫煙嗜好とは BAS\_D 尺度平均点と BAS\_F 尺度平均点、児童期の万引き経験とは BAS\_F 尺度平均点がそれぞれ一般・施設別と相互に影響を与えたことが明らかとなった。



## 8 BIS/BAS 尺度平均点（高群・低群）の組合せとセルフコントロールの関係

BIS 尺度平均点（高群・低群）と BAS 尺度平均点（高群・低群）によって、BIS 低・BAS 低、BIS 低・BAS 高、BIS 高・BAS 低、BIS 高・BAS 高の4組の組合せを行った結果は、Table 3-3-16 のとおりであった。

Table 3-3-16 BIS/BAS 尺度平均点（高群・低群）の組合せ

組合せ	一般( $n = 83$ )	施設( $n = 108$ )
BIS低・BAS低群	33(39.8%)	41(38.0%)
BIS低・BAS高群	21(25.3%)	22(20.4%)
BIS高・BAS低群	14(18.1%)	13(12.0%)
BIS高・BAS高群	15(16.8%)	32(29.6%)

BSCS-J 尺度平均点を従属変数、BIS/BAS 尺度平均点（高群・低群）の組合せ（4群）×一般・施設別（2群）の2要因の分散分析を行った。なお、性別、年齢を共変量とした。

その結果、Figure 3-3-30 のとおり、交互作用（ $F(3,181) = 1.544$ , n.s.）は有意とならなかった。また、BIS/BAS 尺度平均点の組合せの主効果（ $F(3,181) = 2.722$ ,  $p < .05$ ）は有意となったが、一般・施設別の主効果（ $F(1,181) = .392$ , n.s.）は有意とならなかった。ただし、年齢の主効果（ $F(1,181) = 2.911$ ,  $p = .090$ ）は有意傾向を示した。

BSCS-J 尺度平均点は、年齢の影響を受ける傾向にあるものの、一般・施設別にかかわらず、BIS/BAS 尺度平均点の組合せ「BIS 高・BAS 高」の場合、「BIS 低・BAS 低」に比較して低く、それは施設で顕著であった。

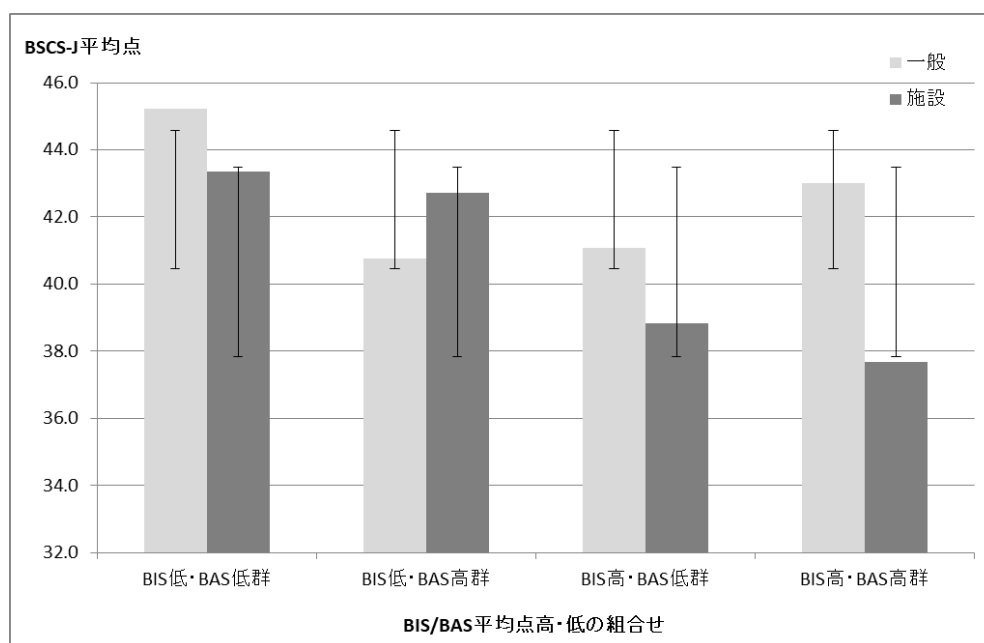


Figure 3-3-30 BIS/BAS 尺度平均点（高群・低群）の組合せと一般・施設別

## 9 セルフコントロールと発達課題との関係

BIS/BAS 尺度得点やセルフコントロール尺度得点が発達課題尺度得点とどのように関連しているのかを検討するため、発達課題尺度平均点を従属変数とする重回帰分析を一般・施設ごとに行った。その結果は、以下のとおりであった。

### (1) 信頼性

発達課題「信頼性」尺度平均点を従属変数、BSCS-J 尺度平均点、BIS 尺度平均点、BAS 下位尺度（BAS\_D、BAS\_R、BAS\_F）平均点、性別、年齢を独立変数とした重回帰分析を行った。その結果、Table 3-3-17 のとおり、BSCS-J 尺度平均点は、一般・施設とも有意となった。また、一般の BIS 尺度平均点は有意な傾向を示したが、BAS 下位尺度平均点はいずれも有意とならなかった。施設は、性別が有意となったが、BAS 下位尺度平均点はいずれも有意とならなかった。

Table 3-3-17 信頼性を従属変数とする重回帰分析

独立変数	一般( $n = 83$ )		施設( $n = 108$ )	
	$\beta$	$\gamma$	$\beta$	$\gamma$
BSCS-J	.25 *	.25 *	.40 ***	.34 ***
BIS	-.19 †	-.15 †	.06	-.03
BAS_D	.09	.26 **	.08	.21 *
BAS_R	.26	.25 *	.02	.15 †
BAS_F	.13	.14	.13	.08
年齢	-.06	.05	-.04	-.01
性別	-.03	-.07	.20 *	.26 **
$R^2$	.18 *		.22 **	
Adj. $R^2$	.10 *		.16 **	

注)  $\beta$  : 標準偏回帰係数、 $\gamma$  : 相関係数  
†  $p < .10$ , \*  $p < .05$ , \*\*  $p < .01$ , \*\*\*  $p < .001$

### (2) 自律性

発達課題「自律性」尺度平均点を従属変数、BSCS-J 尺度平均点、BIS 尺度平均点、BAS 下位尺度（BAS\_D・BAS\_R・BAS\_F）得点平均、性別、年齢を独立変数とした重回帰分析を行った。その結果、Table 3-3-18 のとおり、BSCS-J 尺度平均点は、一般・施設とも有意となった。また、BIS 尺度平均点は、一般・施設とも有意とならなかったが、BAS\_D 尺度平均点は、施設で有意となり、BAS\_R 尺度平均点は、一般で有意傾向を示した。

Table 3-3-18 自律性を従属変数とする重回帰分析

独立変数	一般( $n = 83$ )		施設( $n = 108$ )	
	$\beta$	$\gamma$	$\beta$	$\gamma$
BSCS-J	.63 ***	.65 ***	.54 ***	.53 ***
BIS	-.14	-.18 †	.05	-.13 †
BAS_D	.16	.24 *	.27 **	.27 *
BAS_R	.23 †	.19 *	-.01	.09
BAS_F	-.06	-.03	-.02	-.06
年齢	.04	.11	.01	.05
性別	-.04	.09	.04	.12
$R^2$	.52 ***		.36 ***	
Adj. $R^2$	.47 ***		.31 ***	

注)  $\beta$  : 標準偏回帰係数、 $\gamma$  : 相関係数  
†  $p < .10$ , \*  $p < .05$ , \*\*  $p < .01$ , \*\*\*  $p < .001$

### (3) 自主性

発達課題「自主性」尺度平均点を従属変数、BSCS-J 尺度平均点、BIS 尺度平均点、BAS 下位尺度（BAS\_D・BAS\_R・BAS\_F）得点平均、性別、年齢を独立変数とした重回帰分析を行った。その結果、Table 3-3-19 のとおり、BSCS-J 尺度平均点は、一般・施設とも有意となった。また、BIS 尺度平均点は、一般・施設とも有意とならなかったが、BAS\_D 尺度平均点は、施設で有意となり、BAS\_R 尺度平均点は、一般高で有意傾向を示した。

Table 3-3-19 自主性を従属変数とする重回帰分析

独立変数	一般( $n = 83$ )		施設( $n = 108$ )	
	$\beta$	$\gamma$	$\beta$	$\gamma$
BSCS-J	.50 ***	.45 ***	.34 ***	.41 ***
BIS	-.32	-.28 **	-.21	-.23 **
BAS_D	-.04	.23 *	.39 ***	.36 ***
BAS_R	.26 †	.20 *	.03	.11
BAS_F	.18	.12	.04	.05
年齢	-.07	-.01	-.02	.03
性別	-.16	.01	-.08	.01
$R^2$	.37 ***		.33 ***	
Adj. $R^2$	.31 ***		.28 ***	

注)  $\beta$  : 標準偏回帰係数、 $\gamma$  : 相関係数  
†  $p < .10$ , \*  $p < .05$ , \*\*  $p < .01$ , \*\*\*  $p < .001$

## (4) 勤勉性

発達課題「勤勉性」尺度平均点を従属変数、BSCS-J 尺度平均点、BIS 尺度平均点、BAS 下位尺度 (BAS\_D・BAS\_R・BAS\_F) 得点平均、性別、年齢を独立変数とした重回帰分析を行った。その結果、Table 3-3-20 のとおり、BSCS-J 尺度平均点は、一般・施設とも有意となった。また、BIS 尺度平均点は、一般・施設とも有意とならなかったが、BAS\_D 尺度平均点は、施設で有意となり、BAS\_R 尺度平均点は、一般で有意となった。

Table 3-3-20 勤勉性を従属変数とする重回帰分析

独立変数	一般( $n = 83$ )		施設( $n = 108$ )	
	$\beta$	$\gamma$	$\beta$	$\gamma$
BSCS-J	.37 **	.35 **	.41 ***	.41 ***
BIS	-.06	-.02	-.02	-.07
BAS_D	.09	.35 **	.33 **	.38 ***
BAS_R	.34 *	.40 ***	.10	.21 *
BAS_F	.07	.22 *	-.01	.06
年齢	.08	.09	-.02	.03
性別	.08	.16 †	.02	.12
$R^2$	.33 ***		.32 ***	
Adj. $R^2$	.27 ***		.27 ***	

注)  $\beta$  : 標準偏回帰係数、 $\gamma$  : 相関係数  
†  $p < .10$ , \*  $p < .05$ , \*\*  $p < .01$ , \*\*\*  $p < .001$

## (5) 同一性

発達課題「同一性」尺度平均点を従属変数、BSCS-J 尺度平均点、BIS 尺度平均点、BAS 下位尺度 (BAS\_D・BAS\_R・BAS\_F) 得点平均、性別、年齢を独立変数とした重回帰分析を行った。その結果、Table 3-3-21 のとおり、BSCS-J 尺度平均点は、一般・施設とも有意となった。また、BIS 尺度平均点は、一般で有意となったが、施設で有意とならなかった。

Table 3-3-21 同一性を従属変数とする重回帰分析

	一般( $n = 83$ )		施設( $n = 108$ )	
独立変数	$\beta$	$\gamma$	$\beta$	$\gamma$
BSCS-J	.54 ***	.57 ***	.29 *	.36 ***
BIS	-.34 **	-.41 ***	-.17	-.24 **
BAS_D	.09	.09	.10	.08
BAS_R	.01	-.03	.11	-.01
BAS_F	.09	-.07	-.05	-.10
年齢	.03	.08	-.06	-.04
性別	-.03	-.11	-.03	.01
$R^2$	.18 *		.16 **	
Adj. $R^2$	.10 *		.10 **	

注)  $\beta$  : 標準偏回帰係数、 $\gamma$  : 相関係数  
†  $p < .10$ , \*  $p < .05$ , \*\*  $p < .01$ , \*\*\*  $p < .001$

## (6) 親密性

発達課題「親密性」尺度平均点を従属変数、BSCS-J 尺度平均点、BIS 尺度平均点、BAS 下位尺度 (BAS\_D・BAS\_R・BAS\_F) 得点平均、性別、年齢を独立変数とした重回帰分析を行った。その結果、Table3-3-22 のとおり、BSCS-J 尺度平均点は、一般のみ有意となった。また、BIS 尺度平均点、BAS\_R 尺度平均点は、一般で有意となった。しかし、施設は、回帰分析自体が有意とならなかった。

Table 3-3-22 親密性を従属変数とする重回帰分析

	一般( $n = 83$ )		施設( $n = 108$ )	
独立変数	$\beta$	$\gamma$	$\beta$	$\gamma$
BSCS-J	.23 *	.23 *	.21 †	.16 *
BIS	-.03 **	.06	-.01	-.05
BAS_D	-.11	.19 *	.02	.06
BAS_R	.50 **	.36 ***	-.01	.03
BAS_F	-.04	.12	.13	.05
年齢	.11	.13	-.01	-.01
性別	.02	.10	-.11	-.08
$R^2$	.22 **		.05	
Adj. $R^2$	.15 **		-.01	

注)  $\beta$  : 標準偏回帰係数、 $\gamma$  : 相関係数  
†  $p < .10$ , \*  $p < .05$ , \*\*  $p < .01$ , \*\*\*  $p < .001$

## (7) 生殖性

発達課題「生殖性」尺度平均点を従属変数、BSCS-J 尺度平均点、BIS 尺度平均点、BAS 下位尺度 (BAS\_D・BAS\_R・BAS\_F) 得点平均、性別、年齢を独立変数とした重回帰分析を行った。その結果、Table3-3-23 のとおり、BSCS-J 尺度平均点は、一般・施設とも有意となった。また、BAS\_D 尺度平均点は施設で、BAS\_R 尺度平均点は一般で有意となった。

Table 3-3-23 生殖性を従属変数とする重回帰分析

	一般( $n = 83$ )		施設( $n = 108$ )	
独立変数	$\beta$	$\gamma$	$\beta$	$\gamma$
BSCS-J	.43 ***	.36 ***	.46 ***	.37 ***
BIS	-.04	.04	.12	-.03
BAS_D	-.06	.35 **	.23 *	.27 **
BAS_R	.51 **	.48 ***	-.12	.10
BAS_F	.08	.25 *	.15	.08
年齢	-.11	-.07	-.01	.03
性別	.03	.16 †	.02	.09
$R^2$	.41 ***		.23 ***	
Adj. $R^2$	.35 ***		.18 ***	

注)  $\beta$  : 標準偏回帰係数、 $\gamma$  : 相関係数  
†  $p < .10$ , \*  $p < .05$ , \*\*  $p < .01$ , \*\*\*  $p < .001$

## (8) 統合性

発達課題「統合性」尺度平均点を従属変数、BSCS-J 尺度平均点、BIS 尺度平均点、BAS 下位尺度 (BAS\_D・BAS\_R・BAS\_F) 得点平均、性別、年齢を独立変数とした重回帰分析を行った。その結果、Table3-3-24 のとおり、BSCS-J 尺度平均点は、一般・施設とも有意となった。また、BAS\_R 尺度平均点は一般で有意となった。

Table 3-3-24 統合性を従属変数とする重回帰分析

独立変数	一般( $n = 83$ )		施設( $n = 108$ )	
	$\beta$	$\gamma$	$\beta$	$\gamma$
BSCS-J	.52 ***	.46 ***	.49 ***	.53 ***
BIS	.07	.06	-.01	-.24 **
BAS_D	-.10	.15 †	.12	.14 †
BAS_R	.31 †	.25 *	.15	.04
BAS_F	.05	.04	-.09	-.15 †
年齢	-.02	.04	.04	.07
性別	-.01	.09	-.06	.01
$R^2$	.31 ***		.32 ***	
Adj. $R^2$	.24 ***		.27 ***	

注)  $\beta$  : 標準偏回帰係数、 $\gamma$  : 相関係数  
†  $p < .10$ , \*  $p < .05$ , \*\*  $p < .01$ , \*\*\*  $p < .001$

以上のとおり、発達課題の達成には、セルフコントロールが強く関係していること及び BIS はマイナス方向に影響することが明らかとなった。

## 10 BIS/BAS と高齢期の万引き経験との関係

### (1) 統計的特徴

調査対象者 191 名に対し、児童期からの万引き経験の有無と概ねの年齢をグラフに書き込む方法で回答を得た結果は Table3-3-25 のとおりであった。高齢期の万引き経験があると回答した者は、一般 83 名中 1 名、施設 108 名中 64 名であった。

万引き経験の時期によるカイ二乗値は、一般は ( $\chi^2 = 3.458$ ,  $df = 2$ , n.s.) 有意とならなかったが、施設は ( $\chi^2 = 10.754$ ,  $df = 3$ ,  $p < .05$ ) と有意となった。これらの結果から、以後、施設のみを対象として分析した。

Table 3-3-25 万引き経験の有無と時期

		なし	少年期のみ	高齢期のみ	少年期～高齢期	合計
一般高齢者 ( $n = 83$ )	男	20 (69.0%)	9 (31.0%)	—	—	29 (34.9%)
	女	45 (83.3%)	8 (14.8%)	1 (1.9%)	—	54 (63.1%)
施設高齢者 ( $n = 108$ )	男	27 (28.9%)	16 (15.5%)	25 (25.7%)	29 (29.9%)	97 (89.8%)
	女	1 (9.1%)	—	8 (72.7%)	2 (18.2%)	11 (10.2%)
合計 ( $n = 191$ )	男	47 (37.2%)	24 (19.0%)	25 (19.8%)	29 (23.0%)	126 (66.0%)
	女	46 (70.8%)	8 (12.3%)	9 (13.8%)	2 (3.1%)	65 (34.0%)

### (2) BIS/BAS 尺度平均点 (高群・低群) の組合せと万引き経験の有無と時期

施設のうち万引き経験があると回答した 80 名では、BIS/BAS 尺度平均点 (高群・低群) の組合せが困難になってしまうことから、BIS 高/BAS 低と BIS 低/BAS 高の組合せを合成し、「BIS 中/BAS 中群」とした。その上で、万引き経験の有無と時期及び BIS/BAS 尺度平均点組合せの関係をみた結果は Table3-3-26 のとおりであった。万引き経験の時期

によるカイ二乗値 ( $\chi^2 = 8.009$ ,  $df = 6$ , n.s.) は有意とならなかった。

Table 3-3-26 BIS/BAS 尺度平均点 (高群・低群) の組合せと万引き経験の有無・時期

万引き経験	BIS低・BAS低 ( $n = 41$ )	BIS中・BAS中 ( $n = 35$ )	BIS高・BAS高 ( $n = 32$ )
万引き経験なし	8 (19.5%)	12 (34.3%)	8 (25.0%)
少年期のみ	8 (19.5%)	7 (20.0%)	1 (3.1%)
老年期のみ	12 (28.3%)	9 (25.7%)	12 (37.5%)
少年期～高齢期	13 (31.7%)	7 (20.0%)	11 (34.4%)

また、高齢期の万引き経験を、「経験なし」( $n = 44$ )と「経験あり」( $n = 64$ )の2群に分け、BSCS-J 尺度平均点を従属変数、BIS/BAS 尺度平均点 (高群・低群) の組合せ (3群) × 高齢期の万引き経験の有無 (2群) を独立変数とする2要因の分散分析を行った。その結果、Figure 3-3-31 のとおり、交互作用 ( $F(2,102) = 1.093$ , n.s.) は有意とならなかったが、BIS/BAS 尺度平均点 (高群・低群) の組合せの主効果 ( $F(2,102) = 1.093$ ,  $p < .05$ ) は有意となった。

BSCS-J 尺度平均点は、高齢期の万引き経験の有無にかかわらず、BIS/BAS 尺度平均点の組合せ「BIS 高・BAS 高」は、「BIS 低・BAS 低」、「BIS 中・BAS 中」と比較して低いことが示された。

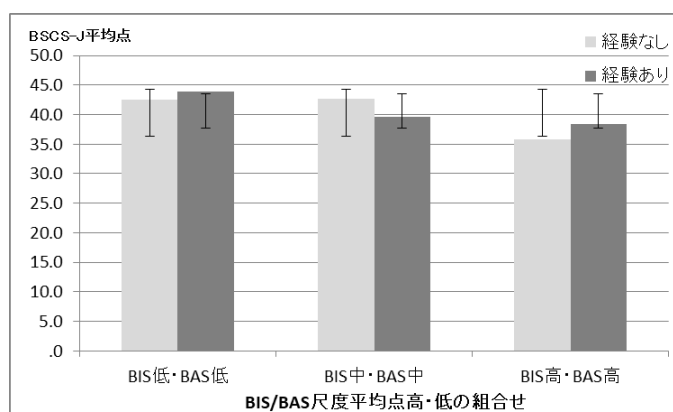


Figure 3-3-31 BIS/BAS 尺度平均点 (高群・低群) の組合せと高齢期の万引き経験

### (3) 万引きをした時の状況と万引き経験の有無と時期の関係

万引き経験があると回答した者に対し、「万引きする店は、よく買い物に行くところだ」、「なんにも考えずに、万引きしてしまうことがある」、「万引きしてしまっても、つかまらなければ気にしない」という質問に「はい」、「いいえ」で回答を求めた。回答があった 71 名の結果は Table 3-3-27 のとおりであった。

万引き経験時期によるカイ二乗値は、「よく買い物に行くところだ」( $\chi^2 = .082$ ,  $df = 2$ , n.s.)、「何も考えずに、万引きしてしまうことがある」( $\chi^2 = .420$ ,  $df = 2$ , n.s.)、「捕まらなければ気にしない」( $\chi^2 = 1.671$ ,  $df = 2$ , n.s.) であった。

Table 3-3-27 万引きをした時の状況と万引き経験の有無と時期

	少年期のみ ( $n = 9$ )		高齢期のみ ( $n = 31$ )		少年期～高齢期 ( $n = 31$ )	
	はい	いいえ	はい	いいえ	はい	いいえ
よく買い物に行くところだ	5 (55.6%)	4 (44.4%)	17 (54.8%)	14 (45.2%)	16 (51.6%)	15 (48.4%)
何も考えずに、万引きしてしまうことがある	4 (44.4%)	5 (55.6%)	15 (48.4%)	16 (51.6%)	15 (48.4%)	16 (51.6%)
捕まらなければ気にしない	2 (22.2%)	7 (77.8%)	13 (41.9%)	15 (58.1%)	17 (54.8%)	14 (44.1%)

さらに、高齢期の万引き経験があると回答した 64 名のうち、万引きをした時の状況に関する質問事項に欠損なく回答した者は 62 名であった。BIS/BAS 尺度得点（高群・低群）3 区分の組合せの関係をみた結果は Figure3-3-28 のとおりであった。

BIS/BAS 尺度平均点（高群・低群）3 区分の組合せによるカイ二乗値（ $\chi^2 = 4.819$ ,  $df = 2$ ,  $p = .090$ ）は有意傾向を示した。

「BIS 低・BAS 低」の組合せの者と比較して、「BIS 中・BAS 中」、「BIS 高・BAS 高」の組合せの者は、「何も考えずに、万引きしてしまうことがある」、「捕まらなければ気にしない」と答える傾向にあることが示された。

Table 3-3-28 BIS/BAS 尺度平均点（高群・低群）組合せと高齢期の万引きをした時の状況

	BIS低・BAS低 ( $n = 24$ )		BIS中・BAS中 ( $n = 15$ )		BIS高・BAS高 ( $n = 23$ )	
	はい	いいえ	はい	いいえ	はい	いいえ
よく買い物に行くところだ	13 (54.2%)	11 (45.8%)	8 (53.3%)	7 (46.7%)	12 (52.2%)	11 (47.8%)
何も考えずに、万引きしてしまうことがある	10 (41.7%)	14 (58.3%)	9 (60.0%)	6 (30.0%)	13 (56.5%)	10 (43.5%)
捕まらなければ気にしない	3 (12.5%)	21 (87.5%)	3 (20.0%)	12 (80.0%)	6 (26.1%)	17 (73.9%)

#### （４）高齢期の万引き経験とデモグラフィック項目との関係

デモグラフィック項目で老年期の状況を尋ねているのは、現在の同居者、現在の主な収入源、年金の種類、現在の月収、人生の振り返り、老後の準備などであった。高齢期の万引き経験とデモグラフィック項目の相互作用を検討するため、BSCS-J 尺度平均点を従属変数、高齢期の万引き経験の有無、デモグラフィック項目を独立変数とする分散分析を行った。その結果、交互作用が有意となったのは「人生の振り返り」であった。

人生の振り返りを、「こんなはずではなかった群」（ $n = 77$ ）と「どちらともいえない」、「こんなものだと思っていた」を合成した「こんなものだと思っていた群」（ $n = 31$ ）の 2 群に分けた。BSCS-J 尺度平均点を従属変数、人生の振り返り（2 群）×高齢期の万引き経験（2 群）の 2 要因の分散分析を行った。その結果、Figure 3-3-32 のとおり、交互作用（ $F(1,104) = 5.304$ ,  $p < .05$ ）は有意となった。また、人生の振り返りの主効果（ $F(1,104) = 5.331$ ,  $p < .05$ ）は有意となったが、高齢期の万引き経験の主効果（ $F(1,104) = 1.051$ , n.s.）は有意とならなかった。

BSCS-J 尺度平均点は、人生の振り返りや高齢期の万引き経験にあまり影響を受けないが、高齢期の万引き経験なしの場合、人生の振り返り「こんなものだと思っていた群」は、「こんなはずではなかった群」に比較して高いことが示された。

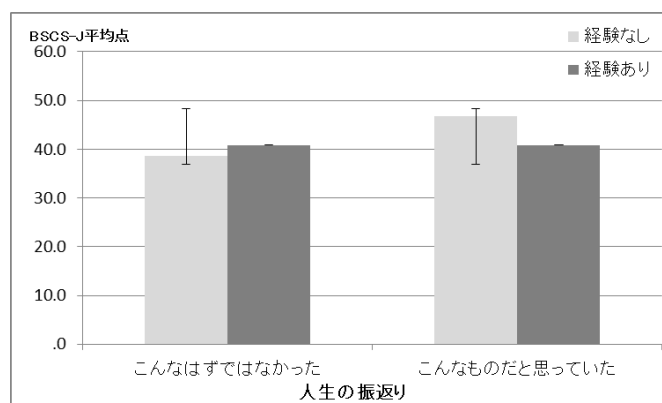


Figure 3-3-32 人生の振り返りと高齢期の万引き経験

#### (5) 人生の振り返りと BIS/BAS 尺度平均点（高群・低群）の組合せ

BSCS-J 尺度平均点を従属変数、人生の振り返り（2 群）×BIS/BAS 尺度平均点（高群・低群）の組合せ（3 群）の 2 要因の分散分析を行った。その結果、Figure 3-3-33 のとおり、交互作用（ $F(2,102) = .680$ , n.s.）は有意とならなかった。また、人生の振り返りの主効果（ $F(1,102) = 2.351$ , n.s.）は有意とならなかったが、BIS/BAS 尺度平均点（高群・低群）の組合せの主効果（ $F(2,102) = 4.021$ ,  $p < .05$ ）は有意となった。

BSCS-J 尺度平均点は、人生の振り返りにかかわらず、BIS/BAS 尺度平均点（高群・低群）の組合せ「BIS 高・BAS 高群」は、「BIS 中・BAS 中群」、「BIS 低・BAS 低群」と比較して低いことが示された。

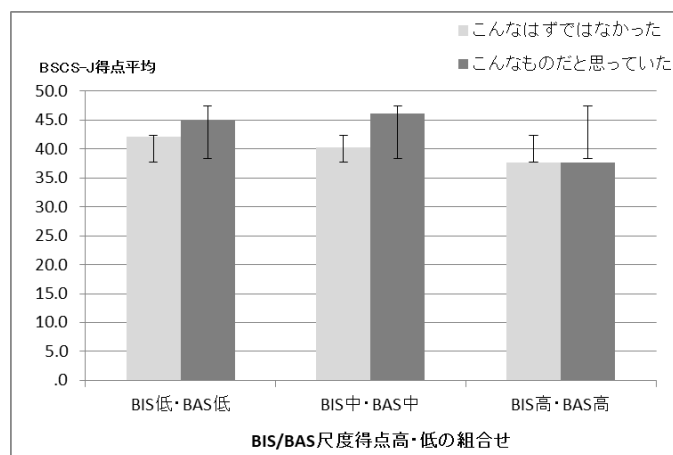


Figure 3-3-33 人生の振り返りと BIS/BAS 尺度平均点（高群・低群）の組合せ

以上のとおり、施設高齢者の中だけで高齢期の万引き経験の有無と BIS/BAS 尺度平均点（高群・低群）の組み合わせと BSCS-J 尺度平均点の関係を検討した。その結果、BSCS-J 尺度平均点は、高齢期の万引き経験の有無にかかわらず、BIS/BAS 尺度平均点（高群・低群）の組合せ「BIS 高・BAS 高」は、「BIS 低・BAS 低」、「BIS 中・BAS 中」と比較して低いことが示された。また、無意識に万引きをしていることがあると回答した者の BIS/BAS 尺度平均点（高群・低群）の組合せは、「BIS 低・BAS 低」、「BIS 中・BAS 中」に比較して、「BIS 高・BAS 高」の者が多いことが示された。さらに、人生の振り返りに BIS/BAS 尺度平均点が影響を与えるのは、一般群のみであった。つまり、施設の中でも、「BIS 高・BAS 高」の者は、セルフコントロールが低く、無意識で万引きをする傾向があるといえる。

#### 11 BIS/BAS とソーシャルサポートの受領との関係

物理的サポート項目（「お金を貸してくれる」、「病気になった時世話してくれる」、「引っ越しを手伝ってくれる」、「分からないことを教えてくれる」）、精神的サポート項目（「気持ちを分かってくれる」、「寂しい時に話ができる」、「自分のこれからを相談できる」、「会ってホットする」）に対し、「まったくのぞまない」、「ちょうどいい」、「もっとのぞみたい」で回答を求めた結果は Table 3-3-29 のとおりであった。



Table 3-3-29 一般・施設別ソーシャルサポートの回答

	一般 (n = 83)		施設 (n = 108)			
	まったくのぞまない	ちょうどいい	もったのぞみたい	まったくのぞまない	ちょうどいい	もったのぞみたい
お金を貸してくれる	50 (68.7%)	20 (24.1%)	6 (7.2%)	71 (65.7%)	30 (27.8%)	7 (6.5%)
病気になった時に世話してくれる	17 (20.5%)	53 (63.9%)	13 (15.7%)	28 (25.9%)	51 (47.2%)	29 (26.9%)
引っ越しを手伝ってくれる	33 (39.8%)	38 (45.8%)	12 (14.5%)	49 (45.4%)	43 (39.8%)	16 (14.8%)
分からないことを教えてくれる	23 (27.7%)	51 (61.4%)	9 (10.8%)	17 (15.7%)	66 (61.1%)	25 (23.1%)
気持ちを分かってくれる	13 (15.7%)	55 (66.3%)	15 (18.1%)	13 (12.0%)	73 (67.6%)	22 (20.4%)
寂しい時に話ができる	9 (10.8%)	61 (73.5%)	13 (15.7%)	19 (17.6%)	64 (59.3%)	25 (23.1%)
自分のこれからを相談できる	9 (10.8%)	59 (71.1%)	15 (18.1%)	16 (14.8%)	55 (50.9%)	37 (34.3%)
会ってホッとする	7 (8.4%)	67 (80.7%)	9 (10.8%)	14 (13.0%)	73 (67.6%)	21 (19.4%)

また、BIS/BAS 尺度平均点を一般・施設を区別せず 20 パーセンタイルで分割し、下位 20 パーセントを「低群」、上位 20 パーセントを「高群」、その中間を「中群」とした。「BIS 高・低」、「BAS 高・低」、それぞれの回答との相関関係は Table 3-3-30 のとおりであった。

「BIS 高・低」は、物理的サポート項目の「分からないことを教えてくれる」、「BAS 高・低」は、物理的サポート項目の「病気になった時に世話してくれる」、「分からないことを教えてくれる」及び精神的サポート項目の「寂しい時に話ができる」、「自分のこれからを相談できる」と有意な相関が示された。

Table 3-3-30 BIS/BAS 尺度平均点とソーシャルサポートの受領との相関係数

	BIS高・低	BAS高・低	お金を貸してくれ る	病気になった時に 世話してくれる	引っ越しを手伝っ てくれる	分からないことを 教えてくれる	気持ちを分かっ てくれる	寂しい時に話がで きる	会ってホッする
BIS高・低									
BAS高・低	.266**								
お金を貸してくれ る	.025	.094							
病気になった時に 世話してくれる	.059	.164*	.256**						
引っ越しを手伝っ てくれる	.045	.115	.273**	.497**					
分からないことを 教えてくれる	.200**	.208**	.211**	.386**	.506**				
気持ちを分かっ てくれる	.094	.107	.248**	.464**	.405**	.491**			
寂しい時に話がで きる	.016	.162*	.292**	.280**	.379**	.379**	.570**		
自分のこれからを 相談できる	.133	.233**	.349**	.394**	.382**	.515**	.545**	.659**	
会ってホッする	.063	.088	.239**	.183*	.210**	.348**	.454**	.565**	

注) \*  $p < .05$ , \*\*  $p < .005$

以上のとおり、BIS 尺度平均点が高い者は、「分からないことを教えてくれる」という物理的サポートを求める傾向、BAS 尺度平均点が高い者は、「病気になった時に世話してくれる」、「分からないことを教えてくれる」という物理的サポートだけでなく、「寂しい時にはなしができる」、「自分のこれからを相談できる」という精神的サポートを求める傾向が高い。そして、その傾向は、一般に比較して施設が高いことが示された。

## 第4節 考察

### 1 尺度の評価

#### (1) BIS/BAS 尺度

BIS/BAS 尺度日本語版（高橋ら, 2007）<sup>499</sup>を利用して収集した 191 名（一般 83 名、施設 108 名）のデータにより確証的因子分析を行った。BIS 尺度は罰の回避傾向を示す計 7 項目、BAS 尺度は報酬への接近傾向を示す 3 つの下位尺度を含む計 13 項目からなる。BAS\_D（Drive; 駆動）尺度は、望まれる目標への持続的な追求を示す 4 項目、BAS\_R（Reward Responsiveness; 報酬反応性）尺度は、報酬の存在や予期に関するポジティブな反応傾向を示す 5 項目、BAS\_F（Fun Seeking; 刺激探求）尺度は、新奇な刺激や報酬刺激に対し思いつきで接近しやすい傾向を示す 4 項目で構成されている。まず、因子の妥当性を検討する。構造方程式モデルによる確証的因子分析の結果、不適解が生じた。これを解消するため BAS-R の残差と問 3 及び問 11 の残差及び BAS-F の残差と問 4 の間に相関パスを設定した。このことは、本研究の対象者の場合、BAS-R や BAS-F という構成概念は、観測変数である質問項目のみでは説明しきれない部分があるということを示している。BIS 及び BAS\_D、BAS\_R、BAS\_F に対する各質問項目の寄与率は Table3-4-1 のとおりであった。

Table 3-4-1 BIS/BAS 日本語版の確証的因子分析（再掲）

		先行研究	高齢者		
			全体	一般	施設
		n = 446	n = 191	n = 83	n = 108
<b>BIS</b>					
13	何かよくないことが起ころうとしていると考え、たいていなやむ	.75	.65	.59	.71
10	だれかが私のことを怒っていると考えたり、知ったりするとかなり心配になる	.74	.72	.81	.67
15	何か重要なことがあまりうまくできなかったと考え、不安になる	.69	.69	.79	.62
6	他人に非難されたり、怒られたりすると、かなり傷つく	.63	.53	.74	.40
20	私は、まちがいを犯すことをとても心配している	.54	.33	.23	.45
18	友人と比べると、不安の種はとて少ない(r)	.53	.02	.12	.01
1	たとえ何かよくないことが身に起ころうとしても、こわくなったり、しんけいしつになったりしない(r)	.43	-.07	.04	-.11
<b>BAS_D</b>					
7	ほしいものがあると、たいていそれを手に入れるために全力をあげる	.90	.73	.81	.68
2	ほしいものを手に入れるためには、とても努力する	.83	.66	.69	.63
9	ほしいものを手に入れるチャンスをみつけると、すぐに行動する	.43	.78	.77	.79
17	何かを追い求めているときには、ていついてきにやる	.31	.32	.39	.26
<b>BAS_R</b>					
11	何かすきなことをするチャンスをみつけると、すぐこうふんする	.67	.71	.63	.80
19	競争に勝ったら、私はこうふんするだろう	.52	.55	.49	.71
5	ほしいものを手にいれたとき、こうふんし、活気づけられる	.49	.73	.82	.71
14	ようことが私の身に起こると、そのことは、私に強いいきょうを与える	.30	.48	.52	.42
3	何かがあまくいっているときは、それを続けることをとても楽しいと思う	.20	.61	.68	.47
<b>BAS_F</b>					
8	楽しいかもしれないから、という理由だけで何かをすることがよくある	.91	.44	.42	.62
12	しばしば時はずみで行動する	.34	.54	.59	.53
4	おもしろそうだと思えば、いつでも何か新しいものをためしたいと思っている	.26	.51	.56	.65
16	こうふんや新しいしげきをとてもものぞんでいる	.11	.56	.81	.36

注) (r) は、逆転項目。数値は因子負荷量(標準化係数)。

BIS の項目内容である問 1 「たとえ何かよくないことが身に起ころうとしても、こわくなったり、しんけいしつになったりしない」及び問 18 「友人と比べると不安の種はと

<sup>499</sup> 高橋ほか・前掲注 488, 276-289 頁。

ても少ない」は、いずれも逆転項目であるが、一般高齢者、施設高齢者とも相関係数と寄与率は極めて低かった。また、問 20「私は、まちがいを起こすことをとても心配している」という項目は、一般高齢者の相関係数と寄与率が低かった。

一方、BAS\_R と BAS\_F に対する質問項目の寄与率が先行研究と比較して全体的に高い理由は、残差同士に相関パスを設定したからであり、決して先行研究よりあてはまりが良いわけではないことに注意が必要である。また、BIS 及び BAS\_D、BAS\_R、BAS\_F の個々の適合度指標は Table3-4-2 のとおりであった。

Table3-4-2 BIS 及び BAS 下位尺度の適合度指標

	$\chi^2$ 二乗値	GFI	AGFI	CFI	RMSEA
BIS	$\chi^2 (28) = 63.802 (p < .001)$	.906	.956	.911	.058
BAS_D	$\chi^2 (4) = 8.179 (p < .085)$	.987	.989	.946	.052
BAS_R	$\chi^2 (10) = 34.186 (p < .001)$	.923	.966	.898	.080
BAS_F	$\chi^2 (4) = 3.028 (p < .558)$	1.000	.996	.981	.000
全体	$\chi^2 (163) = 338.561 (p < .001)$	.857	.816	.814	.075

次に、BIS/BAS 及び BAS 下位尺度の信頼性を検討した。信頼性分析によって得られた Cronbach の  $\alpha$  は Table3-4-3 のとおりであった。BIS は、一般高齢者、施設高齢者とも高橋ら（2007）の先行研究<sup>500</sup>に比較して低い。BIS 尺度に対して相関と寄与率が特に低い問 1 及び問 18 を削除して 5 項目とすると（ ）内のおとり、一般高齢者、施設高齢者とも Cronbach の  $\alpha$  は .70 以上を示した。

Tbale3-4-3 信頼性分析（再掲）

因子	先行研究 ( $n = 446$ )		高齢者全体 ( $n = 191$ )		一般 ( $n = 83$ )		施設 ( $n = 108$ )	
	$\alpha$	項目数	$\alpha$	項目数	$\alpha$	項目数	$\alpha$	項目数
BIS	.80	7	.57( .70)	7(5)	.64( .73)	7 (5)	.51( .70)	7 (5)
BAS	.81	13	.84	13	.88	13	.80	13
BAS_D	.76	4	.70	4	.75	4	.67	4
BAS_R	.75	5	.71	5	.77	5	.66	5
BAS_F	.63	4	.52	4	.66	4	.38	4

注) 高齢者の BIS ( ) 内は、問 1 と問 18 を削除し 5 項目にした場合の  $\alpha$  係数を示す。

さらに、BIS、BAS 及び BAS 下位尺度間の相関を検討した。一般高齢者、施設高齢者を含めた全体では Table3-4-4 のとおり、BIS と BAS 間の相関において（ ）内に示した高橋ら（2007）の先行研究<sup>501</sup>と大きく異なる結果となった。

Table3-4-4 高齢者全体の BIS、BAS 及び BAS 下位尺度間の相関

	BIS	BAS	BAS_D	BAS_R	BAS_F
BIS					
BAS	.35*** ( .12*)				
BAS_D	.19** ( .01)	.86*** ( .79**)			
BAS_R	.42*** ( .05)	.89*** ( .78**)	.64*** ( .37**)		
BAS_F	.28*** ( .25**)	.83*** ( .82**)	.56*** ( .49**)	.62*** ( .49**)	

注) BIS = 行動抑制系; BAS = 行動賦活系; BAS\_D = 駆動; BAS\_R = 報酬反応; BAS\_F = 刺激探求; ( ) 内は、高橋ら(2007)の結果。  
\*  $p < .05$ , \*\*  $p < .01$ , \*\*\*  $p < .001$

<sup>500</sup> 高橋ほか・前掲注 488, 280 頁

<sup>501</sup> 高橋ほか・前掲注 488, 280 頁

最後に、BIS、BAS 及び BAS 下位尺度間の相関を一般高齢者と施設高齢者を区分して検討したところ、Table3-4-5 のとおりであった。一般高齢者は、高橋ら（2007）の先行研究と遜色ない<sup>502</sup>が、施設高齢者の BIS と BAS 間の相関が高いことが明らかとなった。

Table3-4-5 一般・施設別の BIS、BAS 及び BAS 下位尺度間の相関

	BIS		BAS		BAS_D		BAS_R		BAS_F	
	一般	施設	一般	施設	一般	施設	一般	施設	一般	施設
BIS										
BAS	.21	.46***								
BAS_D	.11	.25**	.39***	.83***						
BAS_R	.30**	.52***	.90***	.88***	.71***	.58***				
BAS_F	.14	.38**	.85**	.80***	.65**	.49***	.65**	.60***		

注) BIS = 行動抑制系; BAS = 行動賦活系; BAS\_D = 駆動; BAS\_R = 報酬反応; BAS\_F = 刺激探求。  
 \*\*  $p < .01$ , \*\*\*  $p < .001$

本研究において適合度指標のあてはまりがあまりよくなかった主な原因は、データ量が少ないこと及び施設高齢者の BIS と BAS 間の相関が高すぎることにあると思われる。しかし、問 1 及び問 18 を削除しても施設高齢者の BIS、BAS 間の相関の高さは変化しない。グレイ（Gray, 1982）は、BIS と BAS は、それぞれに異なった神経学的基盤が仮定されていると主張した<sup>503</sup>。また、カーバー・ホワイト（Caver & White, 1994）は、理論的には、BIS と BAS の生理学的システムの感受性は独立しているべきであると主張した。そして、予測どおり BIS 尺度は、サンプルの BAS 下位尺度と比較的独立していたが、独立性の程度は下位尺度全体で変化したとした。また、BIS 尺度は、BAS\_D と  $-.12$ 、BAS\_R と  $.28$ 、BAS\_F と  $-.08$  の相関があったと述べた。さらに、BAS\_D は BAS\_R と  $.34$ 、BAS\_F と  $.41$ 、BAS\_R は BAS\_F と  $.36$  の相関があり、互いに強く関連しているが、期待されたほど強くはないと報告した<sup>504</sup>。したがって、当初から BIS と BAS における弱い相関と BAS 下位尺度相互の強い相関は予測されたものと思われる。高橋ら（2007）は、BIS/BAS 尺度は、質問内容からある程度人生経験を積んだ成人向けに作成されており、その適用範囲は広いと主張した<sup>505</sup>。ただし、BIS/BAS 尺度を完成させたカーバー・ホワイト（Caver & White, 1994）及び邦訳版を完成させた高橋ら（2007）は、ともに大学生を研究対象とした。BIS/BAS 尺度に関しては、わが国における先行研究が少ないだけでなく、高齢者に特化した研究は管見の限り見当たらないことから、本研究の結果が脳神経科学上の問題なのか質問の文脈の理解に関する問題なのか即断できないが、以下、本研究の結果について若干の検討を加える。

相関関係と因子寄与率がともに低い BIS の問 1「たとえ何かよくないことが身に起ころうとしても、こわくなったり、しんけいしつになったりしない」、問 18「友人と比べると不安の種はとても少ない」の逆転前の得点分布及び問 20「私は、まちがいを犯すことをとても心配している」の回答分布は Table3-4-6 のとおりである。いずれも、極端なフロア効果、天上効果は認められない。問 1 と問 18 の回答は、一般高齢者は「少しあてはま

<sup>502</sup> 高橋ほか・前掲注 488, 280 頁

<sup>503</sup> Gray, J. A., & McNaughton, N. (1982 = 2003). *The Neuropsychology of Anxiety: An Enquiry into the Functions of the Septo-Hippocampal System*, (2nd.ed.). Cambridge University Press. 84.

<sup>504</sup> Caver, et al.・前掲注 355, 323.

<sup>505</sup> 高橋ほか・前掲注 488, 286 頁。

る」に偏在傾向があるが、施設高齢者はほぼ均等に分散している。また、問 20 の回答は、一般高齢者は「あてはまらない」に、施設高齢者は「あてはまる」に偏在している。

Table 3-4-6 問 1、問 18、問 20 の得点分布

回答	問1		問18		問20	
	一般	施設	一般	施設	一般	施設
あてはまらない	15 (18.1%)	20 (18.5%)	10 (12.0%)	24 (22.2%)	35 (42.2%)	19 (17.6%)
あまりあてはまらない	20 (24.1%)	28 (25.9%)	24 (28.9%)	30 (27.0%)	12 (14.5%)	14 (13.0%)
少しあてはまる	32 (38.6%)	38 (35.2%)	31 (37.3%)	25 (23.1%)	26 (31.3%)	29 (26.9%)
あてはまる	16 (19.3%)	22 (20.4%)	18 (21.7%)	29 (26.9%)	10 (12.0%)	46 (42.6%)

問 1 「たとえ何かよくないことが身に起ころうとしていても、こわくなったり、しんけいしつになったりしない」及び問 18 の「友人と比べると不安の種はとても少ない」という 2 つの質問に対する回答の組み合わせは、一般高齢者は Table 3-4-7、施設高齢者は Table 3-4-8 のとおりであった。いずれの質問に対しても「あてはまらない」又は「あまりあてはまらない」と回答することが自らの行動にあまり不安を感じていないことになるはずだが、問 1、問 18 とも「あてはまらない」又は「あまりあてはまらない」と回答した人の割合は、一般高齢者が 25.2%、施設高齢者が 21.4%であった。反対に、いずれの質問に対しても「あてはまる」又は「少しあてはまる」と回答することが自らの行動に不安を感じていることになるはずだが、問 1、問 18 とも「あてはまる」又は「少しあてはまる」「あてはまらない」と回答した人の割合は、一般高齢者が 42.1%、施設高齢者が 26.9%であった。つまり、施設高齢者の回答に一貫性がないことが示唆される。

Table 3-4-7 一般高齢者の問 1 と問 18 の回答の組み合わせ

		問18			
		あてはまらない	あまりあてはまらない	少しあてはまる	あてはまる
問1	あてはまらない	6 (7.2 %)	5 (6.0 %)	2 (2.4 %)	2 (2.4 %)
	あまりあてはまらない	1 (1.2 %)	9 (10.8 %)	8 (9.6 %)	2 (2.4 %)
	少しあてはまる	1 (1.2 %)	8 (9.6 %)	14 (16.9 %)	9 (10.8 %)
	あてはまる	2 (2.4 %)	2 (2.4 %)	7 (8.4 %)	5 (6.0 %)

Table3-4-8 施設高齢者の問 1 と問 18 の回答の組み合わせ

		問18			
		あてはまらない	あまりあてはまらない	少しあてはまる	あてはまる
問1	あてはまらない	3 (2.8 %)	3 (2.8 %)	4 (3.7 %)	10 (9.3 %)
	あまりあてはまらない	7 (6.5 %)	10 (9.3 %)	6 (5.0 %)	5 (4.6 %)
	少しあてはまる	6 (5.6 %)	12 (11.1 %)	12 (11.1 %)	8 (7.4 %)
	あてはまる	8 (7.4 %)	5 (4.6 %)	3 (2.8 %)	6 (5.6 %)

問 1、問 18、問 20 回答について、一般高齢者と施設高齢者の差を検討するため  $t$  検定を実施したところ、Table3-4-9 のとおり、問 20 の「私は、まちがいを犯すことをとても心配している」について有意差が見られ ( $t(151) = 3.692, p < .001$ )、施設高齢者の得点が高いことが示された。更生保護施設の施設長に対するヒヤリングの結果、「入所者は、自分の再犯を恐れている。」という答えが多かったことから妥当な結果だと思われる。



Table 3-4-9 一般高齢者と施設高齢者の問 1、問 18、問 20 得点平均の差

	一般		施設		<i>t</i>	<i>p</i>
	平均	標準偏差	平均	標準偏差		
問1	2.59	1.000	2.57	1.016	<i>t</i> (189) = 0.111	<i>n.s.</i>
問18	2.69	.949	2.55	1.114	<i>t</i> (189) = 0.920	<i>n.s.</i>
問20	2.13	1.102	2.94	1.126	<i>t</i> (189) = 4.986	***
*** <i>p</i> < .001						

施設高齢者において相関関係と因子寄与率がともに低い BAS\_F の問 4 「おもしろそうだと思えば、いつでも何か新しいことをためしたいと思っている」及び問 12「しばしば時のはずみで行動する」の一般高齢者と施設高齢者別の回答分布は Table3-4-10 のとおりである。いずれも、極端なフロア効果、天上効果は認められない。*t* 検定では、一般高齢者と施設高齢者の平均点に有意な差は見られない。しかし、施設高齢者の回答は、問 4、問 12 とも、一般高齢者に比較して「あてはまる」が多い半面、「あてはまらない」という回答も多い。これらのことから、一般高齢者は漠然とした失敗に対して敏感なのに対し、施設高齢者は具体的な失敗について敏感になっているのではないかと思われた。また、高齢者は、大学生と比較して抽象的で長い文章の質問を理解することが苦手であること及び他者との比較に関する質問では人生経験によって大きな判断の違いが生じるのではないかと思われた。

Table3-4-10 一般・施設別の問 4 と問 12 の回答分布

回答	問4		問12	
	一般	施設	一般	施設
あてはまらない	6 (7.2%)	9 (8.3%)	20 (24.1%)	23 (21.3%)
あまりあてはまらない	20 (24.1%)	17 (15.7%)	28 (33.7%)	28 (25.9%)
少しあてはまる	35 (42.2%)	42 (36.9%)	28 (33.7%)	42 (38.9%)
あてはまる	22 (26.5%)	40 (37.0%)	7 (8.4%)	15 (13.9%)

次に、カスピほか (Caspi, Roberts, & Shiner, 2005) は、成人期以降のパーソナリティ特性の発達には成熟の原則 (mutuality principle) という強固な傾向が示されるとしている<sup>506</sup>。つまり、人間は、成人期以降社会的 (身体的、心理的) に望ましいとされる方向に発達する傾向にあるから、年齢が上がるにつれ Big Five にいう神経症傾向得点は下がり、調和性や勤勉性は上がる。一般的に Big Five の神経症傾向と対比される BIS 得点は、本研究においても Table3-4-11 のとおり、施設高齢者、一般高齢者の別にかかわらず、「70 歳以上群」は「69 歳以下群」に比較して低い傾向にあることが示された。

Table3-4-11 69 歳以下と 70 歳以上の BIS/BAS 尺度平均点の差 (再掲)

	69歳以下		70歳以上		<i>t</i>	<i>p</i>
	平均	標準偏差	平均	標準偏差		
BIS	18.89	3.630	17.88	3.786	<i>t</i> (189) = 1.887	†
BAS	34.29	7.185	35.73	6.876	<i>t</i> (189) = 1.417	<i>n.s.</i>
BAS_D	10.60	2.786	11.16	2.804	<i>t</i> (189) = 1.362	<i>n.s.</i>
BAS_R	13.90	3.208	14.53	2.707	<i>t</i> (189) = 1.463	<i>n.s.</i>
BAS_F	9.78	2.394	10.04	2.421	<i>t</i> (189) = 0.752	<i>n.s.</i>
† <i>p</i> < .10						

<sup>506</sup> Caspi, A., Roberts, B. W., & Shiner, R. L. (2005). Personality Development: Stability and Change. *Annual Review of Psychology*, 56, 468-469.

さらに、ヴィンカーほか（Vinokur, Schul, & Caplan, 1987）は、不安や抑うつ傾向が強い人は、重要な他者によって与えられたサポートを低く評価したと報告した<sup>507</sup>。また、藤原・狩野（1993）は、社会的適合度が高い人はサポート得点が高いが、抑うつ性、劣等感の強い傾向を持つ人はサポート得点が高いことを見出した<sup>508</sup>。

本研究においても、施設高齢者、一般高齢者の別を問わず、BIS/BAS 尺度平均点が高い高齢者は、心理的、物理的サポートを強く望む傾向が確認された。施設高齢者は刑事施設から地域社会に戻ってきたばかりであるという特性から回答が恣意的である可能性は否めない。しかし、そうだとした場合、どうして恣意的な回答になるのかという問題については、新たな解釈が必要になる。つまり、本研究で検討してきたように、グレイが主張する罰からの回避や報酬への接近といった感受性の源は、外部刺激に対する心拍数の増加や発汗の促進といった自律神経系の反応をどのように認識するかにかかっている。したがって、犯罪行為→刑事施設という経験が繰り返されれば、その自律神経系の反応に対する認知のフレームワークが変化することは当然考えられる。そして、そのような認識の変化こそが犯罪からの離脱の過程に必要なのではないかと解釈される。

以上のことから、本研究におけるこれまでの結果をもって BIS/BAS 強化感受性理論の信頼性がただちに棄却されるとは思えない。また、周辺の先行研究の結果を支持する結果も得られたことから、BIS/BAS 尺度に対する信頼性と有効性が確認できたものと判断した。

## （2）セルフコントロール尺度

日本語版 Brief Self-Control Scale (BSCS-J)（尾崎ら, 2016）<sup>509</sup>を利用して収集した 191 名（一般 83 名、施設 108 名）のデータにより確認的因子分析を行った。その結果、全体の適合度指標は  $\chi^2(130) = 392.321$  ( $p < .001$ ), GFI = .861, AGFI = .805, CFI = .779, RMSEA = .073 であった。また、信頼性分析によって得られた Cronbach の  $\alpha$  係数は Table3-4-12 のとおり、先行研究と遜色ない結果であることを確認した。

Table3-4-12 BSCS-J の信頼性分析（再掲）

先行研究		高齢者		
学生	一般	全体	一般	施設
$n = 232$	$n = 290$	$n = 191$	$n = 83$	$n = 108$
.75	.83	.80	.84	.77

尾崎ほか（2016）は、BSCS-J 尺度得点と BIS/BAS 尺度得点の相関を検討し、BAS\_F 尺度得点と弱い相関関係があったことを報告している<sup>510</sup>。また、セルフコントロールは目標と誘惑の葛藤状況における自己制御を意味するが、BIS/BAS 尺度は葛藤を含まない場面における行動抑制や行動活性化を扱っている。唯一、中程度の関連がみられたのは BAS\_F との負相関であったが、この下位尺度はセルフコントロールの阻害要因として指摘されて

<sup>507</sup> Vinokur, A., Schul, Y., & Caplan, R. D. (1987). Determination of Perceived Social Support: Interpersonal Transactions, Personal Outlook, Affective States. *Journal of Personality and Social Psychology*, 53(6), 1142.

<sup>508</sup> 藤原珠江・狩野素郎「ソーシャル・サポートの効果にかかわる性格要因の検討」九州大学教育学部紀要 教育心理学部門 38(2) (1993) 214 頁。

<sup>509</sup> 尾崎ほか・前掲注 492, 144-154 頁。

<sup>510</sup> 尾崎ほか・前掲注 492, 150-151 頁。

いる衝動性の強さを表しているからだと主張した<sup>511</sup>。

Table3-4-13 BSCS-J 尺度得点と BIS/BAS 尺度得点の相関

尺度	先行研究 BSCS-J	本研究 BSCS-J	BIS	BAS_D	BAS_R	BAS_F
BSCS-J						
BIS	-.147*	-.332**				
BAS_D	-.117*	-.019	.194**			
BAS_R	-.279**	-.122	.417**	.638**		
BAS_F	-.404**	-.335**	.276**	.554**	.624**	

注) \*  $p < .05$ , \*\*  $p < .005$

以上のとおり、本研究においては、これらセルフコントロール尺度に関係する周辺の先行研究の結果をも支持したことから、BSCS-J 尺度の信頼性と有効性が確認できたものと判断した。

### (3) 発達課題尺度

発達課題尺度日本語版（下仲ら，2000）<sup>512</sup>を利用して収集した 191 名（一般 83 名、施設 108 名）のデータを用いて信頼性分析を行った。その結果は Table3-4-14 のとおりであった。信頼性分析によって得られた Cronbach の  $\alpha$  は、「信頼性」と「自主性」が若干低いものの、他は先行研究と遜色なかった<sup>513</sup>。

Table 3-4-14 発達課題尺度日本語版の信頼性分析（再掲）

発達課題 下位尺度	先行研究 ( $n = 302$ )		高齢者					
			全体 ( $n = 191$ )		一般 ( $n = 83$ )		施設 ( $n = 108$ )	
	$\alpha$	項目数	$\alpha$	項目数	$\alpha$	項目数	$\alpha$	項目数
信頼性	0.708	10	0.573	10	0.562	10	0.575	10
自律性	0.705	10	0.689	10	0.685	10	0.691	10
自主性	0.764	10	0.607	10	0.681	10	0.538	10
勤勉性	0.779	10	0.812	10	0.816	10	0.808	10
同一性	0.563	10	0.586	10	0.552	10	0.597	10
親密性	0.751	10	0.747	10	0.712	10	0.759	10
生殖性	0.764	10	0.851	10	0.858	10	0.848	10
統合性	0.779	10	0.726	10	0.772	10	0.664	10

以上のことから、発達課題尺度の信頼性と有効性が確認できたものと判断した。

## 2 BIS/BAS とセルフコントロールとの関係

一般高齢者と施設高齢者の別によって経験した環境に有意な差がみられたのは、小学生のころのしつけ、学歴、40-50 代の主な職業・40-50 代の生活状況、婚姻歴、飲酒嗜好、喫煙嗜好、ギャンブル嗜好、人生の振り返り、老後の準備であった。また、現在の主な収入源・月収、年金の種類、現在の同居者・世話になっている人が有意な差が見られたが、これは、施設高齢者となった結果である。このような社会経済的地位が犯罪の原因だとする先行研究は多い。しかし、何故、同じような環境に置かれても犯罪を行わない者がいることについては説明がなされていない。また、最近、犯罪行為には脳の機能やホルモンの分

<sup>511</sup> 尾崎ほか・前掲注 492, 151 頁。

<sup>512</sup> 下仲ほか・前掲注 495, 525-537 頁。

<sup>513</sup> 下仲ほか・前掲注 495, 527 頁。



泌等が関係しているとする研究が脚光を浴びつつある。しかし、そこで説明されているのは、あくまで暴力を伴う犯罪であり、繰り返し行われる軽微な犯罪行為は説明できないとされる (Rain, 2013 = 高橋, 2015) <sup>514</sup>。

#### (1) BIS 尺度平均点 (高群・低群) と BSCS-J 尺度平均点と経験した環境の交互作用

BSCS-J 尺度平均点に対しては、3 要因では、一般・施設別×BIS 尺度平均点 (高群・低群) ×小学生のころの生活状況、一般・施設別×BIS 尺度平均点 (高群・低群) ×婚姻歴の交互作用が認められた。また、BIS 尺度平均点 (高群・低群) 及び一般・施設別がない場合、BSCS-J 尺度平均点は小学生のころの生活状況、婚姻歴の影響を受けない。一方、BIS 尺度平均点 (高群・低群) 及び一般・施設別がある場合、BSCS-J 尺度平均点は、BIS 尺度平均点高群の場合、1) 小学生のころの生活状況「貧しかった」は、施設は一般と比較して低い、2) 婚姻歴「離婚歴あり」は、施設は一般と比較して低い。

##### 1) BIS と小学生のころの生活状況がセルフコントロールに与える影響

BSCS-J 尺度平均点は、BIS 尺度平均点高群の場合、小学生のころの生活状況「貧しかった群」は、施設高齢者は一般高齢者と比較して低いことについて検討する。①BIS 尺度平均点が高いと小学生のころの生活状況が貧しいことによってセルフコントロールが弱くならざるを得なくなり、施設高齢者になってしまう。②BIS 尺度平均点が高く、小学生のころの生活状況が貧しく、高齢になってもセルフコントロールが低い人が、施設高齢者になってしまう。③施設高齢者は、BIS 尺度平均点が高く、小学生のころの生活状況が貧しいから、高齢になってもセルフコントロールが低い。という3つのことが考えられる。島津 (2010) は、貧困と犯罪には関係があるが、それは直接的因果関係があるとは考えにくいと主張した<sup>515</sup>。本研究における調査では、一般高齢者と施設高齢者の小学生のころの生活状況による分散分析は BIS 尺度平均点に有意な差は見られない。したがって、恐怖、不安、欲求不満及びこれらの手がかりに対する悲しみのような否定的な感情の経験を強化する生得的な行動抑制系システム (BIS) の感受性が高すぎると、小学生のころの貧しい生活環境との交互作用によってセルフコントロール能力が弱まり、高齢になっても犯罪を繰り返してしまうという説明が可能である。一方、何らかの原因で施設高齢者となったことで、BIS 尺度平均点の上昇を招き、自暴自棄となってさらにセルフコントロールを低下させる原因となっていることも考えられる。

##### 2) BIS と離婚がセルフコントロールに与える影響

BSCS-J 尺度平均点は、BIS 尺度平均点高群の場合、婚姻歴「離婚群」は、施設高齢者は一般高齢者と比較して低いことについて検討する。①BIS 尺度平均点が高いと離婚によってセルフコントロールが弱くならざるを得なくなり、施設高齢者になってしまう。②BIS 尺度平均点が高く、離婚し、高齢になってもセルフコントロールが低い人が、施設高齢者になってしまう。③施設高齢者は、BIS 尺度平均点が高く、離婚するから、高齢になって

<sup>514</sup> レーン (著) (高橋洋 訳) 『暴力の解剖学—神経犯罪学への招待—』 (紀伊國屋書店, 2015) 502 頁。

<sup>515</sup> 島津昌寛「貧困と犯罪に関する考察—両者の間に因果関係はあるのか?—」犯罪社会学研究 35 (2010) 15 頁。

もセルフコントロールが低いという3つのことが考えられる。この点、法務総合研究所（研究部報告 56, 2017）は、高齢入所受刑者の婚姻状況について、知的障害以外の精神障害を有する者と精神障害のない者とでは、構成比に大きな差はなく、「未婚」と「離別」がそれぞれ約4割を占めたと報告し、離婚率が高いことを明らかにしている<sup>516</sup>。また、浜井（2013）は、警察統計と総務省の人口動態統計を比較して、短期的には、一般刑法犯認知件数と失業率や離婚率と検挙人員との間にそれほど強い関係は認められず、両者の間に直接的な因果関係があるとは認められないと主張した<sup>517</sup>。犯罪行為と離婚原因に関する研究は管見の限り見当たらないが、細井・小柳・渡辺・古川・Pratt（2014）は、高齢受刑者の生活キャリアには、少年時代に家族の崩壊、両親の離婚、義父による養育など不適切な養育経験があることを明らかにしている<sup>518</sup>。本研究では、一般高齢者と施設高齢者の離婚歴による分散分析はBIS尺度平均点に有意な差は見られない。したがって、恐怖、不安、欲求不満及びこれらの手がかりに対する悲しみのような否定的な感情の経験を強化する生得的な行動抑制系システム（BIS）の感受性が高すぎると、離婚経験との交互作用によってセルフコントロール能力が弱まり、高齢になっても犯罪を繰り返してしまうという説明が可能である。一方、何らかの原因で施設高齢者となったことで、BIS尺度平均点の上昇を招き、自暴自棄となってさらにセルフコントロールを低下させる原因となっていることも考えられる。

## （2）BAS 尺度平均点（高群・低群）と BSCS-J 尺度平均点と経験した環境の交互作用

BSCS-J 尺度平均点に対しては、3 要因では、一般・施設別×BAS 尺度平均点（高群・低群）×小学生のころの養育者、一般・施設別×BAS 尺度平均点（高群・低群）×学歴、一般・施設別×BAS 尺度平均点（高群・低群）×喫煙嗜好の交互作用が認められた。また、BAS 尺度平均点（高群・低群）及び一般・施設別がない場合、BSCS-J 尺度平均点は小学生のころの養育者、学歴、喫煙嗜好の影響を受けない。一方、BAS 尺度平均点（高群・低群）及び一般・施設別がある場合、BSCS-J 尺度平均点は、BAS 尺度平均点高群の場合、1）小学生のころの養育者「両親以外群」は、施設は一般と比較して低い、2）学歴「中卒以下群」は、施設は一般と比較して低い、3）喫煙嗜好「吸う群」は、施設は一般と比較して低い。

### 1）BAS と小学生のころの養育者がセルフコントロールに与える影響

BSCS-J 尺度平均点は、BAS 尺度平均点高群の場合、小学生のころの養育者「両親以外群」は一般高齢者と比較して施設高齢者が低いことについて検討する。①BAS 尺度平均点が高いと両親以外に養育されたことによってセルフコントロールが弱くならざるを得なくなり、施設高齢者になってしまう。②BAS 尺度平均点が高く、小学生のころの養育者が両親以外であり、高齢になってもセルフコントロールが低い人が、施設高齢者になってしまう。

<sup>516</sup> 研究部報告 56・前掲注 6, 25 頁。

<sup>517</sup> 浜井浩一「なぜ犯罪は減少しているのかー課題研究 犯罪率の低下は、日本社会の何を物語るのか？ー」犯罪社会学研究 38（2013）63 頁。

<sup>518</sup> 細井洋子・小柳 武・渡辺 芳・古川隆司・Pratt, J.『高齢受刑者の生活キャリアと生活環境の変遷』（2014 年度科研費一般報告, 2014）25 頁。

う。③施設高齢者は、BAS 尺度平均点が高く、小学生時代に両親以外に養育されたから、高齢になってもセルフコントロールが低いという3つのことが考えられる。この点、金（2007）は、従来指摘されてきた家庭におけるひとり親と両親のいない家庭や貧困が非行原因として重要なのではなく、家庭内における不適切な親子関係、家族間の不調和や葛藤、不健康な緊張状態、意思疎通の欠如などという人間関係の障害がもっと重要な非行原因として注目されるようになってきていると主張した<sup>519</sup>。本研究における調査では、一般高齢者と施設高齢者の小学生のころの養育者による分散分析は BAS 尺度平均点に有意な差は見られない。したがって、人に目標への接近を開始（または増加）させ、報酬への積極的接近や略奪的攻撃性を促進する生得的な行動賦活系システム（BAS）の感受性が高すぎると、小学生のころの養育者が両親以外であったことの交互作用によってセルフコントロール能力が弱まり、高齢になっても犯罪を繰り返してしまうという説明が可能である。一方、何らかの原因で施設高齢者となったことで、BAS 尺度平均点の上昇を招き、自暴自棄となってさらにセルフコントロールを低下させる原因となっていることも考えられる。

## 2) BAS と学歴がセルフコントロールに与える影響

BSCS-J 尺度平均点は、BAS 尺度平均点高群の場合、学歴「中卒以下群」の施設高齢者は一般高齢者と比較して高いが、学歴「高卒以上群」の施設高齢者は、一般高齢者と比較して低いことについて検討する。まず、一般的な経験則からは、犯罪者の学歴は低いとされていることから、分析結果について検討を加える。分析結果を一般高齢者のセルフコントロールに限ってみれば、高卒以上群は、BAS 尺度平均点（高群・低群）別でほとんど差がないが、中卒以下群は、BAS 尺度平均点高群では BAS 尺度平均点低群と比較して低くなる。一方、施設高齢者に限ってみると、中卒以下群では、BAS 尺度平均点（高群・低群）別においてほとんど差がないが、高卒以上群では、BAS 尺度平均点高群では BAS 尺度平均点低群と比較して低いという逆の結果となる。現在 70 歳の高齢者が高校受験をした 1965 年の高校進学率は、すでに 70 パーセントを超えていたが<sup>520</sup>、中卒以下率は、一般高齢者 21.7 パーセントに対し、施設高齢者 56.6 パーセントと極めて高い。しかし、高校卒業率では一般高齢者 49.4 パーセントに対し、施設高齢者 29.6 パーセントと差が縮まる。これは、当時はすでに「高校ぐらい出ておこう」という世情になっていたものと考えられる。したがって、本研究の学歴に関しては、BAS 尺度平均点高群において施設高齢者の高卒以上群のセルフコントロールが中卒以下群のそれと同程度に低下してしまうことが問題であろう。そこで、セルフコントロールと学業意欲の問題として検討することとする。①BAS 尺度平均点が高いと学業意欲が低いことによってセルフコントロールが弱くならざるを得なくなり、施設高齢者になってしまう。②BAS 尺度平均点が高く、学業意欲が低く、セルフコントロールが低い人が、施設高齢者になってしまう。③施設高齢者は、BAS 尺度平均点が高く、学業意欲が低いから、高齢になってもセルフコントロールが低いという3つのことが考えられる。この点、矯正統計（2018）によると、2017 年中の新受刑者 18,272 名（うち女 1,769 名）の新入時の学歴は、中卒以下 6,491（うち女 567）名、高校中退 4,189

<sup>519</sup> 金 英淑「少年非行の原因としての家族関係」現代社会文化研究 39（2007）87 頁。

<sup>520</sup> 学校基本調査年次統計 <<https://www.e-stat.go.jp/dbview?sid=0003147040>>（2019.10.1）

(410) 名、高校卒業 4,719 (586) 名、大学中退 610 (34) 名、大卒以上 928 (157) 名などとなっており、受刑者に中卒以下の学歴が多いことが明らかになっている<sup>521</sup>。本研究における調査では、一般高齢者と施設高齢者の学歴による分散分析は BAS 尺度平均点に有意な差は見られない。したがって、人に目標への接近を開始（または増加）させ、報酬への積極的接近や略奪的攻撃性を促進する生得的な行動賦活系システム（BAS）の感受性が高すぎると、学業意欲が低いこととの交互作用によってセルフコントロール能力が弱まり、高齢になっても犯罪を繰り返してしまうという説明が可能である。一方、何らかの原因で施設高齢者となったことで、BAS 尺度平均点の上昇を招き、自暴自棄となってさらにセルフコントロールを低下させる原因となっていることも考えられる。

### 3) BAS と喫煙嗜好がセルフコントロールに与える影響

BSCS-J 尺度平均点は、BAS 尺度平均点高群の場合、喫煙嗜好「吸う群」は、施設高齢者は一般高齢者と比較して高いことについて検討する。まず、一般的な経験則からは、喫煙は、少年非行の始まりととらえられていることから、分析結果について検討を加える。分析結果を一般高齢者のセルフコントロールに限ってみれば、BAS 尺度平均点高群は BAS 尺度平均点低群と比較して低い。また、施設高齢者でも、「吸わない群」や「やめた群」のセルフコントロールに限れば、BAS 尺度平均点高群は BAS 尺度平均点低群と比較して低い。さらに、施設高齢者の喫煙嗜好「やめた群」が喫煙をやめた理由は、更生保護施設に入会したためであることも否定できない。このように施設高齢者の BAS 尺度平均点高群として検討すれば、BAS 尺度平均点（高群・低群）による喫煙嗜好「吸う群」のセルフコントロール尺度平均点の差は大きいものではなく、施設高齢者の喫煙嗜好「吸う群」は、BAS 尺度平均点（高群・低群）によってセルフコントロールに大きな差はないと理解すべきであろう。つまり、BAS 尺度平均点高群の施設高齢者の「吸う群」あるいは「やめた群」のセルフコントロール尺度平均点は、一般高齢者のそれと比較して低いと認められる。そこで、「吸う群」ではなく、「吸わない群」、「やめた群」も含めて検討することとする。① BAS 尺度平均点が高く、喫煙嗜好「吸わない」あるいは「やめた」によってセルフコントロールが弱くならざるを得なくなり、施設高齢者になってしまう。② BAS 尺度平均点が高く、喫煙嗜好が「吸わない」あるいは「やめた」であって、高齢になってもセルフコントロールが低い人が、施設高齢者になってしまう。③ 施設高齢者は、BAS 尺度平均点が高く、喫煙嗜好が「吸わない」あるいは「やめた」から、高齢になってもセルフコントロールが低いという3つのことが考えられる。この点、市村・下村・渡追（2001）は、中学生で喫煙経験あるいは喫煙と飲酒の両方を経験している者の薬物使用に対する規範意識が低いと報告した<sup>522</sup>。また、大石・安川（2002）は、大学生の喫煙習慣がある者は、非喫煙者と比較してタイプ A 者（敵意性・攻撃性、時間切迫感、勤労・仕事に対する強い欲求などに集約される行動様式）が有意に多い。そして、タイプ A 者は、たとえ活動量の豊富さで多くの業績を残したとしても、内面は満たされることが少なく自己不全感をかかえやすいという

<sup>521</sup> 矯正統計 2018 <<https://www.e-stat.go.jp/stat-search/files?page=1&layout=datalist&toukei=00250005&tstat=000001012930&cycle=7&year=20180&month=0>>（2019.8.30）

<sup>522</sup> 市村國夫 下村義夫 渡遣正樹「中・高生の薬物乱用・喫煙・飲酒行動と規範意識」学校保健研究 43(1)（2001）39-49 頁。

点などに大きな問題をかかえると主張した<sup>523</sup>。さらに、三好・吉本・勝野（2009）は、高校生の違法薬物使用と喫煙の関係は性差が大きい。高い危険性の環境に置かれても薬物乱用に手を染めない人が少なくないことを考慮すると、確かに最終的な薬物乱用の判断は個人の意志によるところが少なくないと主張した<sup>524</sup>。本研究における調査では、一般高齢者と施設高齢者の喫煙嗜好による分散分析は BAS 尺度平均点に有意な差が認められ、施設高齢者は一般高齢者と比較して全般的に低い傾向にある。したがって、人に目標への接近を開始（または増加）させ、報酬への積極的接近や略奪的攻撃性を促進する生得的な行動賦活系システム（BAS）の感受性が高すぎると、喫煙嗜好「吸わない群」あるいは「やめた群」との交互作用によってセルフコントロール能力が弱まり、高齢になっても犯罪を繰り返してしまうという説明が可能である。一方、何らかの原因で施設高齢者となったことで、BAS 尺度平均点の上昇を招き、自暴自棄となってさらにセルフコントロールを低下させる原因となっていることも考えられる。

### （3）BIS/BAS 尺度平均点（高群・低群）の組合せがセルフコントロールに与える影響

アイゼンク（Eysenck, 1964 = 1972, MPI 研究会）は、反応過剰の傾向にある自律神経系と、条件付けしにくい中枢神経を持って生まれた人は、問題行動をする可能性が高いと主張した<sup>525</sup>。つまり、外向性と神経症傾向のいずれも高い組み合わせが問題であるとする。しかし、カーバー・ホワイト（Caver & White, 1994）は、BIS/BAS は一般的な社会的適合度を測定するものではなく、ある状況に対する神経反応であるから、この高低をもってすぐさま犯罪行動が予想できるわけではない。また、BIS/BAS の組み合わせは、どのような組み合わせも可能であるが、BIS/BAS の組み合わせが行動にどのような影響を与えるかコンセンサスは得られていないと主張した<sup>526</sup>。リッケン（Lykken, 1995）は、一次サイコパスは異常な「弱い BIS」に起因するのに対し、二次サイコパスは異常に「強い BAS」に関連すると仮定した<sup>527</sup>。

本研究では、BIS 尺度平均点及び BAS 尺度平均点をそれぞれ 50 パーセンタイルで分割し、BIS 低・BAS 低、BIS 低・BAS 高、BIS 高・BAS 低、BIS 高・BAS 高の 4 組の組合せを行った。その結果は Table3-4-15 のとおり、施設高齢者は一般高齢者に比較して BIS 高・BAS 高の組合せに該当する者が多かった。

Table3-4-15 一般・施設別の BIS/BAS 尺度平均点の組合せ（再掲）

組合せ	一般 (n = 83)	施設 (n = 108)
BIS低・BAS低群	33 (39.8%)	41 (38.0%)
BIS低・BAS高群	21 (25.3%)	22 (20.4%)
BIS高・BAS低群	14 (18.1%)	13 (12.0%)
BIS高・BAS高群	15 (16.8%)	32 (29.6%)

<sup>523</sup> 大石和男・安川通雄「男性大学生の喫煙・飲酒習慣とタイプ A 行動様式」日本生理人類学会誌 7(4) (2002) 155-160 頁。

<sup>524</sup> 三好美浩・吉本佐雅子・勝野真吾「高校生の喫煙・飲酒、違法薬物乱用の実態—薬物乱用におけるライフスタイルの危険因子及び保護因子を検討する—」学校保健研究 50(1) (2009) 426-437 頁。

<sup>525</sup> MPI 研究会・前掲注 88, 236 頁。

<sup>526</sup> Caver et al. 前掲注 355, 320-321.

<sup>527</sup> Lykken, D. (1995). The antisocial personalities. Lawrence Erlbaum Associates; Hillsdale, NJ. 45.

また、BSCS-J 尺度平均点を従属変数、性別、年齢を共変量とした、BIS/BAS 尺度平均点（高群・低群）の組合せ（4 群）×一般・施設別（2 群）の 2 要因の分散分析を行った。

その結果、Figure 3-4-1 のとおり、BSCS-J 尺度平均点は、施設の場合、年齢の影響を受ける傾向にあるものの、一般・施設別にかかわらず、BIS/BAS 尺度平均点の組合せ「BIS 低・BAS 低」の場合、「BIS 高・BAS 高」に比較して高く、それは施設で顕著であった。

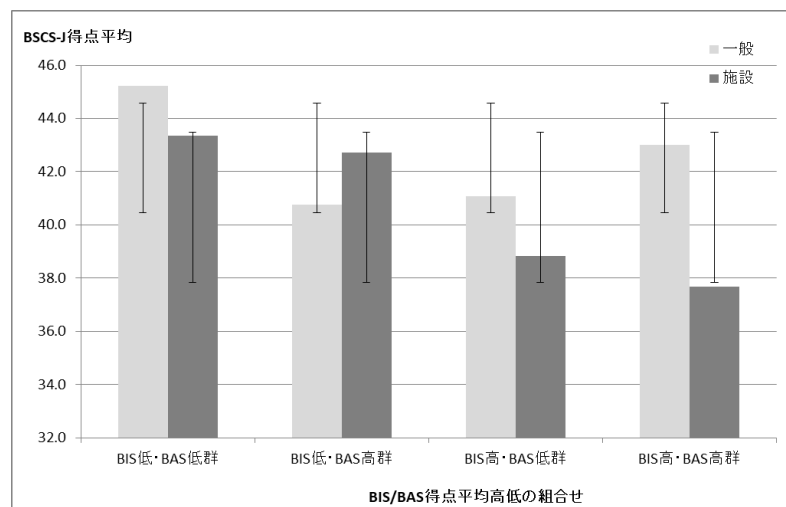


Figure 3-4-1 BIS/BAS 尺度平均点（高群・低群）の組合せと一般・施設別（再掲）

### 3 セルフコントロールと発達課題の関係

発達課題の下位尺度（「信頼性」、「自律性」、「自主性」、「勤勉性」、「同一性」、「親密性」、「生殖性」、「統合性」）得点平均について、一般高齢者と施設高齢者の差の検定を行った。その結果、「親密性」と「統合性」で有意な差、「信頼性」と「同一性」で差がある傾向がみられた。また、性別による差の検定では、統合性で有意な差がみられ、69 歳以下と 70 歳以上の年齢による差の検定では、「信頼性」と「勤勉性」で有意な差、「生殖性」で差がある傾向が見られた。次に、発達課題の下位尺度平均点を従属変数、BSCS-J 尺度平均点、BIS 尺度平均点、BAS 下位尺度（BAS\_D・BAS\_R・BAS\_F）得点平均、性別、年齢を独立変数とした重回帰分析を一般・施設ごとに行った。その結果、一般・施設の別を問わず、BSCS-J 尺度平均点が全ての発達課題の下位尺度に有意な効果を与えることが確認された。また、「信頼性」に対する BIS/BAS 尺度平均点の効果は確認されなかったが、BIS 尺度平均点は一般高齢者の「親密性」に有意な効果を与えることが確認された。さらに、BAS\_R 尺度平均点は一般高齢者の「自律性」、「自主性」、「勤勉性」、「親密性」、「生殖性」、「統合性」に対して有意な効果を与え、BAS\_D 尺度平均点は施設高齢者の「自律性」、「自主性」、「勤勉性」、「生殖性」、「同一性」、「親密性」に対して有意な効果を与えることが確認された。この点、下仲ら（2000）は、「親密性」、「生殖性」の達成の高い人は自尊感情が高く、抑うつ状態が低く安定し、自分にとって大切な人や家族の信頼感が高くサポートも受けている。さらに、「統合性」が高い高齢者ほど、自尊感情が高く、自分の人生に目的を見出し、抑うつ感情が低いと報告した<sup>528</sup>。これらの結果から、施設高齢者は、自尊感情、抑うつ状態、自分にとって大切な人や家族の信頼感とサポートの受領という大切な部分が抜け落ち

<sup>528</sup> 下仲ほか・前掲注 495, 528-535 頁。

ていることが伺えた。そして、それは BIS/BAS と人生経験の相互作用によって生じた低いセルフコントロールに依っているものといえる。

#### 4 BIS/BAS 尺度平均点（高群・低群）の組合せと高齢期の万引き行動との関係

高齢期に万引き経験があると申告した者は、一般高齢者 1 名、施設高齢者 64 名であった。そこで、高齢期の万引きと BIS/BAS 尺度平均点との関係を施設高齢者の中だけで検討した。まず、施設高齢者の万引き経験の有無及び時期を「万引き経験なし（ $n = 28$ ）」、「少年期のみ（ $n = 16$ ）」、「高齢期のみ（ $n = 33$ ）」、「少年期～高齢期（ $n = 31$ ）」の 4 群に分けた。万引き経験の時期による BIS/BAS 尺度平均点（高群・低群）の組合せ（BIS 低・BAS 低、BIS 中・BAS 中、BIS 高・BAS 高）3 群のカイ二乗値（ $\chi^2 = 8.009, df = 6, n.s.$ ）は有意とならなかった。

次に、万引き経験と BIS/BAS 尺度平均点（高群・低群）の組合せがセルフコントロールに与える影響を検討した。高齢期の万引き経験を、「経験なし（ $n = 44$ ）」と「経験あり（ $n = 64$ ）」の 2 群に分け、BSCS-J 尺度平均点を従属変数、BIS/BAS 尺度得点（高群・低群）の組合せ（3 群）×高齢期の万引き経験の有無（2 群）を独立変数とする 2 要因の分散分析を行った。その結果、交互作用（ $F(2,102) = 1.093, n.s.$ ）は有意とならなかったが、BIS/BAS 尺度平均点（高群・低群）の組合せの主効果（ $F(2,102) = 1.093, p < .05$ ）は有意となった。これにより、BSCS-J 尺度平均点は、高齢期の万引き経験の有無にかかわらず、BIS/BAS 尺度平均点の組合せ「BIS 高・BAS 高群」は、「BIS 低・BAS 低群」や「BIS 中・BAS 中群」と比較して低いことが示された。

Table4-4-16 のとおり、高齢期の万引き経験があると回答した 64 名のうち、万引きをした時の状況に関する質問事項（「よく買い物に行くところだ」、「何も考えずに、万引きしてしまうことがある」、「捕まらなければ気にしない」）に欠損なく回答した者は 62 名であった。BIS/BAS 尺度得点（高群・低群）3 区分の組合せによるカイ二乗値（ $\chi^2 = 4.819, df = 2, p = .090$ ）は有意傾向を示した。また、「何も考えずに、万引きしてしまうことがある」という質問に「はい」と回答した者の割合は、BIS 高・BAS 高群は、BIS 低・BAS 低群と比較して高い。さらに、「何も考えずに、万引きしてしまうことがある」という質問に「はい」と回答した BIS 中・BAS 中群 8 名のうち、BIS 低・BAS 高であった者は 7 名、BIS 高・BAS 高であった者は 1 名であった。この点について、カーバーとホワイト（Caver & White, 1994）は、多くの理論家が概念的に BAS 及び BIS の活動に関連する行動の質は衝動性である述べているが、その原因については意見が一致していないとする。そして、衝動性は、BAS の感受性が高レベルを反映しているとされている。なぜなら、人は欲望の刺激に強く引き寄せられるからであるとする。衝動性は、BIS の感受性が低いレベルを反映しているため、差し迫った懲罰に直面した衝動を抑制することができないことがある。また、衝動的行動は、これらの 2 つのシステムのどちらかから本質的に生じるのではなく、グレイによって提案されたシステムを超えた、より複雑な力の織り合わせに由来すると主張されていると述べた<sup>529</sup>。本研究の結果から、BAS の感受性が高いことが高齢になっても万引きを繰り返す原因である可能性が示唆された。

<sup>529</sup> Caver et al. 前掲注 355, 331.

Table3-4-16 BIS/BAS 尺度平均点（高群・低群）の組合せと  
高齢期の万引きをした時の状況との関係

	少年期のみ (n = 9)		高齢期のみ (n = 31)		少年期～高齢期 (n = 31)	
	はい	いいえ	はい	いいえ	はい	いいえ
よく買い物に行くところだ	5 (55.6%)	4 (44.4%)	17 (54.8%)	14 (45.2%)	16 (51.6%)	15 (48.4%)
何も考えずに、万引きしてしまうことがある	4 (44.4%)	5 (55.6%)	15 (48.4%)	16 (51.6%)	15 (48.4%)	16 (51.6%)
捕まらなければ気にしない	2 (22.2%)	7 (77.8%)	13 (41.9%)	15 (58.1%)	17 (54.8%)	14 (44.1%)

BSCS-J 尺度平均点を従属変数、人生の振返り（2群）×BIS/BAS 尺度得点（高群・低群）の組合せ（3群）の2要因の分散分析を行った。その結果、交互作用 ( $F(2,102) = 0.680$ , n.s.) は有意とならなかった。また、人生の振返りの主効果 ( $F(1,102) = 2.351$ , n.s.) は有意とならなかったが、BIS/BAS 尺度平均点（高群・低群）の組合せの主効果 ( $F(2,102) = 4.021$ ,  $p < .05$ ) は有意となった。BSCS-J 尺度平均点は、人生の振返りにかかわらず、BIS/BAS 尺度得点（高群・低群）の組合せ「BIS 高・BAS 高群」は、「BIS 中・BAS 中群」、「BIS 低・BAS 低群」と比較して低いことが示された。これらの結果から、施設高齢者の中においても、高齢になっても万引きを繰り返す者は、BIS/BAS 尺度平均点の組合せ「BIS 高・BAS 高」であることが明らかとなった。また、「何も考えずに、万引きしてしまうことがある」と回答した者、つまり、万引き行為が習慣化している者については、BAS 尺度平均点が高い者であることが明らかとなった。

以上のことから、BIS/BAS 尺度で測定される BIS（不安や恐怖の回避）と BAS（報酬への接近）という生得的な感受性が両方とも高い者が、小学生のころに両親以外の者に養育されたり、貧しい生活状況を送ったりするとセルフコントロールが低くなり、万引き経験をする、高校進学をあきらめる、喫煙経験をする、離婚経験をするなどして施設高齢者になる可能性が高いと説明することができる。また、本研究において、高齢者の犯罪行動に BIS/BAS が関与している可能性が示唆され、高齢者の犯罪行動について新たな説明が可能になった意義は大きいと考える。ただし、ゴットフレッドソン・ハーシ (Gottfredson & Hirschi, 1990 = 大淵, 2018) が主張するように、状況的諸条件や個人の他の諸特性によって犯罪が抑制されることがあるからセルフコントロールの欠如が必ず犯罪をもたらすとは限らない<sup>530</sup>。それは、まさしく、ラウブ・サンプソン (Sampson & Laub, 1993, 2005) が、個人的そして社会的条件の交錯ないし連動によって動かされている<sup>531,532</sup>と主張するとおり、人生経験の中において、偶然に遭遇したソーシャル・サポートを受領できるきっかけにかかっていると思われる。

<sup>530</sup> 大淵・前掲注 100, 80 頁。

<sup>531</sup> Sampson, et al.・前掲注 446, 309-312.

<sup>532</sup> Sampson, et al.・前掲注 448, 42.



## 第4章 総合的考察

### 第1節 本調査研究の結論

アイゼンク（Eysenck, 1964 = MPI 研究会, 1972）が犯罪とパーソナリティの関係を主張してから 65 年が経過した<sup>533</sup>。また、ジェフェリー（Jeffery, 1971）が、妊娠中の母親への強い衝撃を防ぎ、栄養の供給、ストレスなどに配慮することや出産後に乳幼児の栄養や夜尿症、暴力、火遊び、学校の無断欠席などの問題に早期に取り組むことが重要な犯罪予防策になると主張してから 50 年が経過した<sup>534</sup>。藤本（1984）は、アメリカにおいて生物学的犯罪学が発達しなかった理由について、シカゴ学派が優勢を占めたという単なる歴史的偶然だけでなく犯罪学者の知識不足や過小評価と無縁ではないとしている。また、人間は自由意思を持つという仮説が生物学的前提と相容れないこと及び社会学的犯罪学の基盤となっているラマルク主義の共産原則や環境決定主義の概念が生物学的犯罪学理論の基盤となる行動の遺伝的基礎概念や個人間の遺伝学的相違についての概念を打破するという結果をもたらしたことを指摘した<sup>535</sup>。

本研究では先行研究を基に、「犯罪」を、何らのスキルも必要としない自己利益を追求する行為、あるいは単に規範を破る行為と捉えるべきであるとした。そして、研究すべきは、犯罪とされる行為に限らず、ある状況において目の誘惑あるいは欲求不満に反応し規範を破りやすい「犯罪性向」であると考えた。さらに、犯罪性向は低いセルフコントロールに起因している。そのセルフコントロールは、恐怖や不安、欲求不満など否定的な感情の経験を担っている BIS と報酬や目標への接近など肯定的な感情の経験を担っている BAS という生得的な感受性及び児童期の養育者や生活状況を含む人生経験の相互作用による学習の結果に大きな影響を受ける。そして、低いセルフコントロールは、高齢になっても大きく変化しないが、更生保護施設などでの人間的触れ合いの経験による逆の学習によって行動を変容させることは可能であるとする仮説を立てた。

収集したデータの分析結果から、施設高齢者の犯罪行動は、BIS/BAS という生得的な感受性と小学生のころの養育者・生活状況、学歴、離婚歴、喫煙嗜好などという人生経験との相互作用によって形成された低いセルフコントロールが関係しているという説明が可能であり、仮説を証明することができた。ただし、人間の行動は非常に複雑であることは言うまでもない。そういった意味で、本研究は高齢者の犯罪行動を単純化しすぎているが、本研究においてさえ、3 要因の相互作用をみなければ高齢者の犯罪行動を説明できなかった。このようなことから、犯罪の原因は、遺伝だけ、環境だけという単一の要因や心理尺度だけではなく、複数要因の相互作用を検討しなければ解明することができないと考える。

土井（2001）は、自ら教鞭を執る大学の学生が社会学を専攻する理由が、マクロな視点から心の問題へ変化していることを「心理学化する社会」と呼んだ<sup>536</sup>。同じく赤羽（2017）は、我が国における少年法適用年齢の引き下げの議論やアメリカ連邦最高裁判において少

<sup>533</sup> MPI 研究会・前掲注 88。

<sup>534</sup> Jeffery・前掲注 93。

<sup>535</sup> 藤本・前掲注 97, 140-147 頁。

<sup>536</sup> 土井政和「心理学化される現実と犯罪社会学」犯罪社会学研究 26（2001）194-195 頁。

年に対する死刑や終身刑は、脳の発達の未熟さゆえに許されないとする判決がなされたことを取り上げ、「脳科学化する社会」と呼んだ<sup>537</sup>。そういった意味では、本調査研究は、まさしく「心理学化される社会」、「脳科学化する社会」の象徴といえるのかもしれない。しかし、ガザニガ（Gazzaniga, 2011 = 藤井, 2014）が、文明との共進化がヒトの脳の社会的な部分を形成した<sup>538</sup>と主張したとおり、もともと人類は他者との協力の過程で進化したのである。したがって、集団生活の問題を研究する社会学や他者との関係を研究する心理学が蓄積した知見を脳科学が裏付けるようになってきたことは、当然の帰着と思われる。単純に言い表すことは難しいが、社会環境を中心とした社会学、心理学、脳科学の関係とは、社会学は心理学で扱う心をブラックボックスに閉じ込め、心理学は脳科学で扱う個人の特性をブラックボックスに閉じ込めて学問を発達させてきたのではないだろうか。最近では、この関係が曖昧になっているように感じるが、それは 1980 年代後半以降に科学技術が急速に進展し解剖を伴わずに脳の働きが解明されるようになったからだと思われる。

## 第 2 節 本研究の限界と今後の課題

### 1 本研究の限界

#### （1）脳科学における責任の所在

アイゼンク（Eysenck, 1964 = MPI 研究会, 1967）は、犯罪性は社会概念であり連続的特性であり、犯罪性又は犯罪の概念は、学習や社会的経験、さらに一般的にいて、人間の相互作用と関連してはじめて意味をもつとした<sup>539</sup>。そして、生得的な犯罪性、つまり犯罪を行うひとの素質が現実の行動に反映する仕方を理解しないでいると、ある個人の犯罪性あるいは非犯罪性を規定する環境の影響力を研究することが、不可能ではないにしろ非常に困難になると主張した<sup>540</sup>。一方で、行動は遺伝と学習によって完全に決定づけられるから、個人によって責任の多少を決めることはあまり意味がない<sup>541</sup>とした。ただし、アイゼンクは、刑罰による行動抑制の効果を認めており<sup>542</sup>、刑罰不要論を主張しているわけではない。

山口ほか（2019）は、最近のアメリカ連邦最高裁における少年裁判で脳科学に基づいた新しい判断がなされていることを報告した<sup>543</sup>。一方、ガザニガ（Gazzaniga, 2011 = 藤井, 2014）は、脳スキャンの画像で意図を活動につなげる経路に損傷があった場合、本人が正常か異常かという主張がどちらにも展開可能であるから、法廷に脳スキャン画像を証拠として持ち込むのは時期尚早と主張した<sup>544</sup>。さらに、責任とは何かを突き詰めれば、それは

<sup>537</sup> 赤羽由紀夫「脳科学化する社会と少年観」犯罪社会学研究 42（2017）19 頁。

<sup>538</sup> 藤井・前掲注 310, 191 頁。

<sup>539</sup> MPI 研究会・前掲注 88, 95 頁。

<sup>540</sup> MPI 研究会・前掲注 88, 96 頁。

<sup>541</sup> MPI 研究会・前掲注 88, 253 頁。

<sup>542</sup> MPI 研究会・前掲注 88, 213 頁。

<sup>543</sup> 山口ほか・前掲注 537, 22-24 頁。

<sup>544</sup> 藤井・前掲注 310, 252 頁。

脳の特長ではなく二者間の契約である。その文脈の中では決定論は何の役にも立たない。人間の本性は常に一定だが、いざ社会という場に出てみると、そこでの行動は変化する。無意識の意図にもブレーキをかけることは可能だ。責任ある動作主になれるかどうかの分かれ道はそこにあると主張した<sup>545</sup>。ただし、精神と脳の関係は、いまだすべてが解明されたわけではなく、今後の脳科学の発展を待たなければならない。

## (2) 人権と生命倫理

レーン (Raine, 2013 = 高橋, 2015) は、どの遺伝的な変異が、暴力を導く生物学的な危険因子を生む欠陥タンパク質の生成をもたらすのかを解明するには長い時間がかかるだろうが、勇気と信念を持って取り組みれば理論的可能性に鑑みて、犯罪の撲滅に大きな期待ができるとした。しかし、犯罪被害がなくなる半面、それには、まだ犯罪を実行していない人の拘禁や優生学上の問題において社会政治学的な分岐点が必ず訪れると主張した<sup>546</sup>。また、ミンスキー (Minsky, 2006 = 竹林, 2009) は、AI 技術の進化に関し、大規模で成長し続ける人工知能を構築する取り組みの多くは、あらゆる種類の心的障害を抱えると思っても差し支えないとした。そして、例えば、記憶システムを過度にコントロールする思考法を許せば、その人の過去の記憶すべてを上書きしてしまう。また、どのような思考素であっても、それが何らかの本能的な衝動を完全に抑圧できるとしたら、その思考素は人を決して眠らせず、死ぬまで働かせ、餓死に追いやるのが可能となると警告した。そして、私が思いつく限りの最善策は、批判的思考の能力と科学的検証の方法を子どもたちがもっと学べる教育を試みることでありと主張した<sup>547</sup>。

山下ほか (2000) によれば、無侵襲性、小型・簡便性の高い光トポロジ技術が進んでいるとされる<sup>548</sup>。現在行われている行動矯正は、認知行動療法や SST によって行動を変容させ、その結果、学習のやり直し図するという手法である。しかし、脳の学習の進化メカニズムが解明されれば、無侵襲性で活動中でも脳活動の計測ができる画期的な技術を活用するなどして特定の脳領域にアクセスすることによって行動変容が可能になるかもしれない。岡田・福井 (2019) は、最近、愛着と犯罪の関係を明らかにした<sup>549</sup>が、理論的には、他者に対する愛着すら再構築が可能になると思われる。しかし、罪を犯すのも人間ならば、刑の審理や罰の執行をするのも人間である。したがって、犯罪の取締りや刑罰にどのような科学技術を用いるのかについて、人類の英知を集約しなければならない時代がやってくるものと考えている。

---

<sup>545</sup> 藤井・前掲注 310, 368-369 頁。

<sup>546</sup> 高橋・前掲注 514, 550 頁。

<sup>547</sup> 竹林・前掲注 308, 404-405 頁。

<sup>548</sup> 山下優一・牧 敦・山本 剛・小泉英明「光による無侵襲脳機能画像化技術—『光トポグラフィ』」分光研究 48(6) (2000) 275-286 頁。

<sup>549</sup> 岡田尊司・福井裕輝「情動と犯罪—共感・愛着の破綻と回復の可能性—」(朝倉書店, 2019)。

## 2 今後の課題

### (1) BIS/BAS 尺度の検討

BIS/BAS 尺度を高齢者に施行した結果、先行研究との差異が生じたが、十分な検討がなされなかった。今後は、本調査研究に協力してもらった更生保護施設や清掃事業者・ビルメンテナンス事業者の責任者に結果を還元するなどして協力者を確保し、データ量を増やしたい。また、BIS/BAS 尺度を大学生に施行して尺度を構成する項目ごとに比較を行うなど、先行研究と差異が生じた理由を明らかにする必要がある。また、国外の先行研究によれば、犯罪者の BAS 得点が高いことは概ね一致した結果が得られているが、BIS については、グレイが主張するような結果はあまり報告されていない。反対に、本調査研究では、BIS 得点平均は一般高齢者と比較して施設高齢者の方が高いという結果であった。そして、発達課題に対しても BIS はマイナスの方向に作用していた。この点に関し、アイゼンク (Eysenck, 1983) は、神経症傾向は、人が獲得したどんな無意識の、あるいは常習的な行動であっても促進する。また、若いときは年をとったときほど習慣が強くないので、神経症傾向は成人の犯罪者に関しての重要な要素であるとした。さらに、典型的な不安神経症の人は、条件反射をたやすく形成する中枢神経系と、反応過剰な自律神経系をもって生まれると主張した。BIS は広い意味で神経症傾向の指標でもあるから、アイゼンクの主張に従えば、BIS と BAS の得点平均が両方とも高いことは、高齢犯罪者に適合的であることになる。しかし、先行研究においても、BIS/BAS 高低の組合せが人間の行動にどのような影響を及ぼすのかという結論は出ていないし、高齢者のみに限定した研究もなされていないことから、引き続き高齢者を調査対象としつつ BIS/BAS の高低の組合せの効果を検討する必要がある。

### (2) 発達課題やソーシャルサポートと BIS/BAS の関係の検討

本調査研究では、BIS/BAS と成育環境の相互作用が一般高齢者と施設高齢者のセルフコントロール得点に差をもたらすことが明らかとなった。また、セルフコントロールが発達課題やソーシャルサポートの受領に大きく関係していることが明らかとなった。そして、発達課題やソーシャルサポートの受領は、ライフ・コースにおける犯罪からの離脱にとって重要な概念である。今後の研究において、発達課題やソーシャルサポートの受領と成育環境の相互関係について明らかにする必要がある。

## 3 犯罪者に対する刑罰と社会内処遇に関する展望

道徳的判断システムを理解することがすなわち犯罪の原因を理解することに他ならない。ただし、人間が意識を持つのはなぜかという神秘的な問題が解決されない限りは不可能かもしれない。そういった意味で犯罪研究は、常に新しい脳科学の知見に触れていく必要があると考える。一方、染田 (2012) は、最近、刑事施設や更生保護施設では、エビデンスに基づく実践 (Evidence-Based Practice ; EBP) のもと RNR (Risk Need Responsivity) や社会生活技能訓練 (Social-Skill Training ; SST) を含む認知行動療法 (Cognitive

Behavior Theory ; CBT) が導入され成果を上げていると報告した<sup>550</sup>。宮下 (2007) によれば、CBT は、その名のとおり、学習 (条件づけ) に関する行動分析学の知見に精神医療の臨床的知見が融合したものであるが、その主体は行動療法である<sup>551</sup>。また、鈴木ほか (1999) は、CBT とは、クライアントの不適応状態に関連する行動的、情緒的、認知的な問題を標的とし、学習理論をはじめとする行動科学の諸理論や行動変容の諸技法を用いて、不適応な反応を軽減するとともに、適応的な反応を学習させていく治療法であるとした<sup>552</sup>。

本調査研究の最終的な目的は、犯罪を繰り返して高齢になった者であっても、社会生活を送りながら支援者が直接接しつづき働き掛けを行うことによって犯罪行動を選択しないように学習できるという社会内処遇の実践の一助とすることである。そのために、高齢者の犯罪行動が生得的な特性である感受性と経験した環境との相互作用による脳の学習機能の結果であることを証明しようとした。

生島 (2017) は、知的障害者は、服役後の再犯期間の短さから、社会内処遇の最初の段階での働き掛けが必要で、窃盗更生プログラムに高いニーズがある。犯罪原因が究明できないからプログラムができなかったという趣旨の発表をした<sup>553</sup>。さらに、自身が関わっている再犯防止プログラムについて、1) 反省を迫るプログラム (直面化) は効果がない。2) 何かをして効果が出るものではない。3) 立ち直りは、自分のために多くの人がかかわってくれる (気にしてくれる) という感情の発露である。4) 本人の意思決定を尊重しなければならない。同じ方向を向いているという思い込みではうまくいかない。5) スタッフ側の動機付けが重要であると主張した<sup>554</sup>。本調査研究では、北海道から九州まで全国の更生保護施設を訪問したが、複数の施設において、これまで「収容期限が来ると、入所者に対して『二度と帰ってくるな。』と言って追い出してきた。」という声が聞こえた。一方、「もうすぐ、アフター・フォローが法制化されるので、それから協力できると思う。」という発言もあった。実際にフォローアップ制度が始まったが、問題は、人間的触れ合いの効果に関する科学的に根拠づけられた研究がないことである。一度、刑務所に入ると元受刑者というレッテルが重くのしかかる。それを跳ね返す能力がなければ転がり落ちてしまうから、もともと生活能力が低い高齢者には離脱を続ける手助けをするシステムが必要である。つまり、低いセルフコントロールは変わらないから、犯罪という行動を選択しないように学習させる必要がある。それには、まず、日々の生活を支える居場所が必要である。それは更生保護施設、宗教団体、AA・ダルク等の互助組織など、いつでも自分を受け入れてくれる場所であることが多い。次に仕事は、再犯防止に協力する事業主が経営し、他から非難されない (尊敬される)、独立できる、仲間意識をもてる、自分が納得できる、といった自己効力感が得られる限られた職種なのである。

550 染田 恵「犯罪者の社会内処遇における最善の実務を求めて—実証的根拠に基づく実践の定着、RNR モデルと GL モデルの相克を超えて—」(更生保護学研究創刊号, 2012) 123-147 頁。

551 宮下照子『新行動療法入門』(ナカニシヤ出版, 2007) 22-24 頁。

552 鈴木伸一・熊野宏昭・坂野雄二 (著) (1999)「認知行動療法」<[http://hikumano.umin.ac.jp/cbt\\_text.html](http://hikumano.umin.ac.jp/cbt_text.html)> (2018.6.11)。

553 生島 浩 更生保護学第 6 回大会シンポジウム発表 (2017 年 12 月 3 日)。

554 生島・前掲注 553。

本調査研究では限られた対象者ではあるが、再犯防止や社会復帰を目的とした更生保護施設に在会する高齢者を対象に調査を行い、BIS/BAS と人生における経験との相互作用が犯罪行動と関わっていることを証明することができた。ゴットフレッドソンとハーシは、セルフコントロールは幼少期に形成され生涯不変であるとするが、規範に従うことが条件づけの結果であるとするアイゼンクの主張<sup>555</sup>に従うならば、たとえ高齢者であっても、逆方向の条件づけによって犯罪行動を修正できるのでは不<sup>レ</sup>である。

高齢犯罪者の多くは、児童期に本人の気質にあった人間関係を経験できなかったことが原因し、長い人生で常に突き離され、さげすまれ、社会に対して背を向けてきたといえるのではないか。しかし、そのようにして行き着いた更生保護施設において、一度や二度失敗しても親身になって寄り添ってくれる施設スタッフとの人間的触れ合いを経験することによって「自分に注意が向けられている。」「自分のことを本当に気遣ってくれる人がいる。」と感じ取り、いつのまにかそのことで心が満たされていることに気づき、ふと、なりたかった自分の姿を見いださせるのではなかろうか。

高齢者は長い人生で多様な経験をしていることや脳機能の低下などから少年がもつ可塑性に乏しいと言われている。一方、多くの発達心理学者が中年期に主張した人生に関する理論を自身が高齢になったときに修正していることから人間は自身が経験しないことはうまく理解できないと推測できる。だからこそ、高齢者には、それに見合った人生経験豊富な人間による対応が必要なのでは不<sup>レ</sup>いだろうか。

2017 年 12 月 14 日に「再犯の防止等の推進に関する法律」が公布された。また、翌 15 日には「再犯防止推進計画」が閣議決定された。ただし、閣議決定は、具体的な数字は示されているものの、「再犯の実態把握や指導等の効果検証及び効果的な処遇の在り方等に関する調査研究」という文言があるのみで基礎研究について触れられていない。海外では精神医学や脳神経科学とのかかわりの中で BIS/BAS と犯罪行動に関する研究が活発に行われている現実を見れば、我が国においても再犯防止の観点から犯罪原因の新たな理解方法に関する実証研究を重ねる価値があろう。また、人権等の倫理的な問題に意を傾けつつ、社会内処遇の現場で活躍する方々の直近で現場の役に立つ研究を続ける必要があるのでは不<sup>レ</sup>いだろうか。

---

<sup>555</sup> MPI 研究会・前掲注 88, 236 頁。

引用文献

- 安倍治夫・樋口幸吉『グリュック犯罪予測法入門』（一粒社. 1959）
- 赤羽由紀夫「脳科学化する社会と少年観」犯罪社会学研究 42（2017） 19-31 頁
- 安香 宏『犯罪心理学への招待ー犯罪・非行を通して人間を考えるー』（サイエンス社. 2008）
- Agnew, R. (1997). Stability and change in crime over the life-course: A strain theory explanation. In T. Thornberry (Ed.), *Developmental theories of crime and delinquency*. New Brunswick, NJ : Transaction. 101-132
- Agnew, R. (2005). *Why do criminals offend?: A general theory of crime and delinquency*. Roxbury Publishing Co.
- Akers, R.L., Krohn, M. D., Lanza-Kaduce, L., & Radosevich, M, (1979). Social Learning and Deviant Behavior: A Specific Test of a General Theory. *American Sociological Review*, 44(4), 636-655.
- American Sociological Association, Obituaries 2007. <<https://www.asanet.org/ernest-w-burgess>>（2019 年 10 月 1 日閲覧）
- American Sociological Association, Obituaries 2010. <https://www.asc41.com/obituaries/2010obits.html>.（2019 年 10 月 1 日閲覧）
- American Sociological Association, Obituaries 2015. <[https://www.asanet.org/sites/default/files/savvy/footnotes/feb15/obit\\_0215.html](https://www.asanet.org/sites/default/files/savvy/footnotes/feb15/obit_0215.html)>（2019 年 10 月 1 日閲覧）
- Ando, J., Ono, Y., Yoshimura K., Onoda, N., Shinohara, M., Kanda, S., Asai, M. (2002). The genetic structure of Cloninger's seven-factor model of temperament and character in a Japanese sample. *Journal of Personality*, 70, 583-609.
- Andrews D. A., Zinger, I., Hoge, R. D., Bonta, J., Gendreau, P., & Cullen, F. T. (1990). Does Correctional Treatment Work? A Clinically Relevant and Psychologically Informed Meta-Analysis. *Criminology*, 28(3). 369-404.
- Andrews, D. A., Bonta, J., & Wormith, J. S. (2011). The Risk-Need-Responsivity (RNR) Model; Does Adding the Good Lives Model Contribute to Effective Crime Prevention? *Criminal Justice and Behavior*, 38(7). 735-755.
- Arizona State University Gang Research at ASU, <<https://ccj.asu.edu/gangresearch>>（2019 年 10 月 1 日閲覧）
- Arneklev, B. J., Harold, G., Grasmick, C. R., Tittle, R. J., & Bursik, Jr. (1993). Low self-control and imprudent behavior. *Journal of Quantitative Criminology*, 9(3), 225-247.
- Arnetta, P. A., & Newman, J. P. (2000). Gray's three-arousal model: an empirical investigation. *Personality and Individual Differences*, 28, 1171-1189.
- Aron, E. N. (1996). Love and expansion of the self: The state of the model. *British Journal of Psychotherapy*, 3(1), 45-58.
- Aron, E. N. (2010). *Psychotherapy and the Highly Sensitive Person*. Routledge.
- Aron, E.N., Aron, A., & Jagiellowicz, J. (2012). Sensory Processing Sensitivity: A Review in the Light of the Evolution of Biological Responsivity. *Personality and Social Psychology Review*, 16 (3), 262-282.

- Atchley, R. C. (1989). A Continuity Theory of Normal Aging. *The Gerontologist*, 29(2), 183-190.
- Atchely, R. C. (1999). *Continuity and adaptation in aging: creating positive experiences*. Johns Hopkins University Press, Baltimore.
- アシュレー, R. C., & バル, A. S. (著) ニッセイ基礎研究所ジェロントロジーフォーラム (監訳) 宮内康二 (編訳) 『ジェロントロジー: 加齢の価値と社会の力学』 (きんざい, 2005)
- Babin, J. B., & Babin, L. A. (1996). Effects of Moral Cognitions and Consumer Emotions on Shoplifting Intentions. *Psychology & Marketing*. 13 (8), 785-802.
- Bandura, A. (1973). *Aggression: A social learning analysis*. Prentice Hall PTR
- Barlow, J. (2016). University of Oregon Around, Mary Rothbart Honored for her Careerin Personality Psychology. <<https://around.uoregon.edu/content/mary-rothbart-honored-her-career-personality-psychology>> (2018 年 8 月 30 日閲覧)
- バートル, C. R., & バートル, A. M. (著) 羽生和紀 (監訳) 横井幸久・田口真二 (編訳) 『犯罪心理学—行動科学のアプローチ』 (北大路書房, 2007)
- Bernard, T. J. Encyclopedia Britannica. Ronald L. Akers. <<https://www.britannica.com/biography/Ronald-L-Akers>> (2019 年 10 月 1 日閲覧)
- Bernard, T. J. (Sep 16, 2019). Encyclopedia Britannica. Walter Reckless.<[https:// www.britannica.com/biography/Walter-Reckless](https://www.britannica.com/biography/Walter-Reckless)> (2019 年 10 月 1 日閲覧)
- Bell, S. (2015) In memoriam : Sarnoff Mednick,87. <<https://news.usc.edu/80381/in-memorial-sarnoff-mednick-87/>> (2019 年 10 月 1 日閲覧)
- Bill, G. (2012). The Oregonian, Michael Gottfredson sole finalist for University of Oregonpresident.<[https://www.oregonlive.com/education/2012/06/michael\\_gottfredson\\_sole\\_final.html](https://www.oregonlive.com/education/2012/06/michael_gottfredson_sole_final.html)> (2018 年 8 月 30 日閲覧)
- Blanco, Grant, Petry, Simpson, Alegria, Shong-min, & Hasin. (2008). Prevalence and Correlates of Shoplifting in the United States Results from the National Epidemiologic Survey on Alcohol and Related Condition (NESARC), *American Journal of Psychology*. 165 (7), 905-913.
- Bonta, J., & Andrews, D. A. (2007). *Risk-need-responsivity model for offender assessment and rehabilitation (User Report 2007-06)*. Ottawa, Ontario: Public Safety Canada.
- ボンタ, J. (著) 染田 恵 (監訳) 「日本の犯罪者の社会内処遇制度における RNR モデルの有効性」『更生保護学研究創刊号』 (日本更生保護学会. 2012) 43-56 頁
- Brunellea, C., Douglasb, R. L., Pihlc, R. O., & Stewart, S. H. (2009). Personality and substance use disorders in female offenders: A matched controlled study. *Personality and Individual Differences*, 46, 472-476.
- Broidy, L. & Argnew, R. (1987). Gender and Crime: A General Strain Theory Perspective. *Journal of Research in Crime and Delinquency*, 34(3), 275-306.
- Burgess, R. L., & Akers, R. L. (1966). A differential association-reinforcement theory of criminal behavior. *Social Problems*, 14(2), 128-147.
- Buy Reports. (July 28, 1987). Prof. Donald R. Cressey, 68, Expert on Sociology of Crime.



- <<https://www.nytimes.com/1987/07/28/obituaries/prof-donald-r-cressey-68-expert-on-sociology-of-crime.html>> (2019 年 10 月 1 日閲覧)
- Caballo, V. E. (1997). Hans Jurgen Eysenck (1916-1997), *Revista Latinoamericana de Psicología*, 29(3), 517-522.<[https://www.researchgate.net/search.Search.html?type=publication&query=Hans%20Jurgen%20Eysenck%20\(1916-1997\)](https://www.researchgate.net/search.Search.html?type=publication&query=Hans%20Jurgen%20Eysenck%20(1916-1997))> (2019 年 10 月 1 日閲覧)
- カシオボ, J. T., & ペトリック, W. (著) 柴田裕之 (訳)『孤独の科学—人はなぜ寂しくなるのか—』(河出書房新社, 2010)
- Carleton University. David Philip Farrington. <<https://carleton.ca/socanth/wp-content/uploads/David-Farringtons-Resume-October-2016.pdf>> (2019 年 10 月 1 日閲覧)
- Carstensen, L. L., & Isaacowitz, D. M., & Charles, S. T. (1999). Taking time seriously: A theory of socioemotional selectivity. *American Psychologist*, 54(3), 165-181.
- Caspi, A., Roberts, B. W., & Shiner, R. L. (2005). Personality Development: Stability and Change. *Annual Review of Psychology*, 56, 453-84.
- Caver, C. S., & White, T. L. (1994). Behavioral Inhibition, Behavioral Activation, and affective responses to Impending Reward and Punishment: The BIS/BAS Scales. *Journal of Personality and Social Psychology*, 67, (2) 319-333.
- Clark, C. (2010). Emory Report. <[https://www.emory.edu/EMORY\\_REPORT/stories/2010/06/07/Robert\\_agnew\\_profile.html](https://www.emory.edu/EMORY_REPORT/stories/2010/06/07/Robert_agnew_profile.html)> (2019 年 10 月 1 日閲覧)
- Cloninger, C. R. (1987). A systematic method for clinical description and classification of personality variants: A proposal. *Archives of General Psychiatry*, 44, 573-588.
- Cloninger, C. R., Svrakic, D. M., & Przybeck, T. R. (1993). A psychological model of temperament and character. *Archives of General Psychiatry*, 50, 975-990.
- Cloward, R. A., & Ohlin, L. E., (1960). *Delinquency and Opportunity*. The Free Press New York.
- コーヘン, A. (著) 細井洋子 (訳)『逸脱と統制』(至誠社, 1968)
- コナー, D. F. (著) 小野善郎 (訳)『子どもと青年の攻撃性と反社会的行動：その発達理論と臨床介入のすべて』(明石書店, 2008)
- Cumming, E. & Henry, W. (1961 = 1979). *Growing Old: The Process of Disengagement*. Basic Books, New York.
- Dienstbier, R. A. (1984). The role of emotion in moral socialization. In C. Izard, J. Kagan, & R. B. Zajonc (Eds.), *Emotions, cognitions and behavior*. Cambridge University Press. 484-513.
- Dodge, K. A., & Pettit, G. S. (2003). A biological model of the development of chronic conduct problems in adolescence. *Developmental Psychology*, 39, 349-371.
- 土井政和「心理学化される現実と犯罪社会学」犯罪社会学研究 26 (2001) 182-198 頁
- Driver, E. (1957). Pioneers in Criminology XIV--Charles Buckman Goring (1870-1919). *Journal of Criminal Law and Criminology*, 47(5), 515-525.
- Duke Institute for Genome Sciences & Policy. Terrie Moffitt, PhD. <<https://web.archive.org/web/20120223175057/http://www.genome.duke.edu/directory/faculty/moffitt/>>

(2019年10月15日閲覧)

Duke Sanford School of Public Policy. Faculty Kenneth A. Dodge <<https://sanford.duke.edu/people/faculty/dodge-kenneth>> (2019年10月15日閲覧)

デュルケム, E. (著) 井伊玄太郎 (訳) 『社会分業論 (上・下)』 (講談社学術文庫, 1989)

Egan, V., & Taylor, D. (2010). Shoplifting, unethical consumer behavior, and personality, *Personality and Individual Differences*, 48(8), 878-883.

Encyclopedia Britannica, Goddard, Henry H. (1866–1957). <<https://www.encyclopedia.com/education/encyclopedias-almanacs-transcripts-and-maps/goddard-henry-h-1866-1957>> (2019.10.14 閲覧)

Encyclopedia Britannica, Sheldon Glueck and Eleanor Glueck. <<https://www.Britannica.com/biography/Glueck-Sheldon-and-Glueck-Eleanor#ref196545>> (2019年10月1日閲覧)

エリクソン, E. H. (著) 仁科弥生 (訳) 『幼児期と社会 I・II』 (みすず書房, 1977・1980)

エリクソン, E. H. (著) 小此木啓吾 (編訳) 『自我同一性—アイデンティティとライフサイクル—』 (誠信書房, 1975)

エリクソン, E. H. (著) 村瀬孝雄・近藤邦夫 (訳) 『ライフサイクル：その完結』 (みすず書房, 1989)

アイゼンク, H. J. (著) MPI 研究会 (訳) 『犯罪とパーソナリティ』 (誠信書房, 1972)

アイゼンク, H. J., & ラックマン, S. (著) 黒田実郎 (訳) 『精神科学全書 神経症—その原因と治療』 (岩崎学術出版社, 1967)

Eysenck, H. J. (1967 = 2006). *The biological basis of personality*. Springfield, IL: Charles C. Thomas.

Eysenck, S. B. G., & Eysenck, H. J. (1970). Crime and Personality: An empirical study of the three-factor theory. *British Journal of Criminology*, 10, 225-239.

Eysenck, H. J. (1973). *The inequality of man*. San Diego, CA: EDITS.

Eysenck, H. J. (1977). *Crime and Personality* (3<sup>rd</sup>. ed.). London: Routledge & Kegan Paul.

Eysenck, H. J. (1979). Crime and Personality. *Medico-Legal Journal*, 47(1), 18-32.

Eysenck, H. J. (1981). *A model for personality*. New York, Springer.

Eysenck, H. J. (1983). Personality, conditioning, and antisocial behavior. In W. S. Laufer & J. M. Day (Eds.), *Personality theory, model development, and criminal behavior*. Lexington Books.

アイゼンク, H. J. (著) 宮内 勝、中野明德、藤山直樹、小澤道雄、中込和幸、金生由紀子、海老沢尚、岩波 明 (訳) 『精神分析に別れを告げよう—フロイト帝国の衰退と没落—』 (批評社, 1988)

Eysenck, H. J. & Gudjonson, G. H. (1989). *The Case and Causes of Criminality: Institute of Psychiatry*. University of London.

Eysenck, H. J. (1996). Personality and crime: Where do we stand?. *Psychology, Crime & Law*, 2, 143-152.

エバンス, R. I., & エリクソン, E. (著) 岡堂哲雄, 中園正身 (訳) 『エリクソンは語る: アイ

- デンティティの心理学』(新曜社, 1991)
- 江崎徹治「東京都内における高齢万引き被疑者の現状」早稲田大学社会安全政策研究所紀要 4 (2012) 167-199 頁
- 江崎徹治「高齢者の万引き非行の要因についてーハーシの社会的絆理論を適用してー」日本大学大学院博士前期課程学位論文 (未公刊, 2014)
- 江崎徹治「提言 高齢者立直り支援法」『季刊現代警察』(啓正社, 2016) 18 - 29 頁
- 江崎徹治「万引きを繰り返す高齢者の行動を説明するためのモデル構築」国士舘大学法研論集 18 (2017) 123-150 頁
- Farrington, D. (2003). Developmental and Life-course Criminology : Key Theoretical and Empirical Issues - The 2002 Sutherland Award Address. *Criminology*. 41(2), 220-255.
- Fishbein, D. (2008). The American Sociological of Criminology, 2007 OBITUARIES. <<https://www.asc41.com/obituaries/2007obits.html>> (2019 年 10 月 1 日閲覧)
- Flanders, S. (Aug. 23, 2001). Richard Cloward, Welfare Rights Leader, Dies at 74. The New York Times, p.B9. <<https://www.nytimes.com/2001/08/23/nyregion/richard-cloward-welfare-rights-leader-dies-at-74.html>> (2019 年 10 月 1 日閲覧)
- Fowles, D. C. (1980). The three-arousal model: implications of Gray's two-factor learning theory for heart rate, electro-dermal activity and psychopathology. *Psychopathology*, 17, 87-104.
- Fox, M. (Jan. 3, 2009). Lloyd E. Ohlin, Expert on Crime and Punishment, Is Dead at 90. The New York Times, p. A28. <<https://www.nytimes.com/2009/01/04/us/04ohlin.html>> (2019 年 10 月 1 日閲覧)
- 藤原珠江・狩野素郎「ソーシャル・サポートの効果にかかわる性格要因の検討」九州大学教育学部紀要教育心理学部門 38(2) (1993) 207-215 頁
- 藤本哲也『犯罪学講義』(八千代出版, 1978)
- 藤本哲也『犯罪学入門』(立花書房, 1980)
- 藤本哲也『犯罪学諸論』(成文堂, 1984)
- 藤本哲也『犯罪学原論』(日本加除出版, 2003)
- 藤本哲也『犯罪はなぜくり返されるのかー社会復帰を支える制度と人びとー』(ミネルバ書房, 2016)
- 藤野京子「セルフコントロールの概念をめぐってーGottfredson & Hirshi の Self- Control についての心理学的視点からの検討ー」早稲田大学大学院文学研究科紀要第 1 分冊哲学/東洋哲学/心理学/社会学/教育学 58 (2012) 21-34 頁
- 藤野京子「女性高齢財産犯の実情」早稲田大学大学院文学研究科紀要第 1 分冊哲学/東洋哲学/心理学/社会学/教育学 61 (2016) 5-20 頁
- 古川隆司「社会福祉・老年学からみた高齢者犯罪」警察政策 18 (2014) 183-192 頁
- Garn, S. M., & Giles, E. (1995). National Academy of Sciences, Arnest Albert Hooton 1887-1954.<[www.nasonline.org/publications/biographical-memoirs/memoir-pdfs/hooton-earnest.pdf](http://www.nasonline.org/publications/biographical-memoirs/memoir-pdfs/hooton-earnest.pdf)> (2019 年 10 月 1 日閲覧)
- ガザニガ, M. S. (著) 柴田裕之 (訳)『人間とは何か; 脳が明かす「人間らしさ」の起源 (上・

- 下)』(ちくま文庫, 2018)
- ガザニガ, M. S. (著) 藤井留美 (訳) 『<わたし>はどこにあるのかーガザニガ脳科学講義ー』(紀伊國屋書店, 2014)
- Giordano, R.C., Cernkovich, S.A., & Rudolph, J.I. (2002). Gender, crime, and desistance: Toward a theory of cognitive transformation. *American Journal of Sociology*. 107, 990-1064.
- Gillespie, N. A., Cloninger, C.R., Heath, A. C., & Martina, N. G. (2003). The genetic and environmental relationship between Cloninger's dimensions of temperament and character. *Personality and Individual Differences*. 35, 1931-1946.
- Glaser, D. (1956). Criminality Theories and Behavioral Images. *American Journal of Sociology*. 61, 433-444.
- Glaser, D. (1978). *Crime in our changing society*. Holt, Rinehart and Winston.
- Glueck, S., & Glueck, E. (1950). *Unraveling juvenile delinquency*. Harvard University Press, 192-196.
- Glueck, S., & Glueck, E. (1956). *Physique and Delinquency*. Harper,
- Goleman, D. New York Times (Sept. 16, 1994). Richard Herrnstein, 64, Dies: Backed Nature Over Nurture, <<https://www.nytimes.com/1994/09/16/obituaries/richard-herrnstein-64-dies-backed-nature-over-nurture.html>> (2019 年 10 月 1 日閲覧)
- Goring, C., (1913 = 2016). *The English Convict: A statistical Study*. Wentworth Press.
- ゴットフレッドソン, M. R. & ハーシ, T. (著) 大淵憲一 (訳) 『犯罪の一般理論ー低自己統制シンδροームー』(丸善出版, 2018)
- Gray, J. A. (1970). The psychophysiological basis of introversion-extraversion. *Behavioral Research and Theory*, 8, 249-266.
- Gray, J. A. (1981). A critique of Eysenck's theory of personality. In Eysenck, H. J (Ed.). *A model for Personality*. Springer. 246-276.
- Gray, J. A., & McNaughton, N. (1982 = 2003). *The Neuropsychology of Anxiety: An Enquiry into the Functions of the Septo-Hippocampal System*, (2<sup>nd</sup>.ed.). Cambridge University Press.
- グレイ, J. A. (著) 八木欽治 (訳) 『ストレスと脳』(朝倉書店, 1991)
- Gray, J. A., (1994). Framework for a taxonomy of psychiatric disorder. In van Goozen, S. H. M., van de Poll, N. E., & Sergeant, J. A. (Eds.), *Emotions: Essays on emotion theory*. Lawrence Erlbaum 29-59.
- 浜井浩一「なぜ犯罪は減少しているのか(課題研究 犯罪率の低下は,日本社会の何を物語るのか?)」犯罪社会学研究 38 (2013) 53-77 頁
- 原田知佳・吉澤寛之・吉田俊和「自己制御が社会的迷惑行為および逸脱行為に及ぼす影響ー気質レベルと能力レベルからの検討ー」実験社会心理学 48(2) (2009) 122-136 頁
- Hare, R. D., Harpur, T. J., Hakstian, A. R., Forth, A. E., Hart, S. D., & Newman, J. P. (1990). The Revised Psychopathy Checklist: Reliability and Factor Structure. *A Journal of Consulting and Clinical Psychology*, 2(3), 338-341.
- ハリス, J. R. (著) 石田理恵 (訳) 『子育ての大誤解 (新版)ー重要なのは親じゃない (上・

- 下)』(早川書房, 2017)
- Harvard University. Robert J. Sampson <<https://scholar.harvard.edu/sampson/home>> (2019年10月1日閲覧)
- 橋本成仁・厚海尚哉「高齢者の余暇活動と主観的幸福感に関する研究」土木学会論文集 D3(土木計画学)71(5), 土木計画学研究・論文集 32 (2015) 567-576 頁
- Havighurst, R.J., Williams, R. H., Tibbits, C., & Donahue, W. (1963). *Processes of aging*. Atherton, New York.
- Heath, A. C., Cloninger, C. R., & Martin, N. G. (1994). Testing a model for the genetic structure of personality: A comparison of the personality systems of Cloninger and Eysenck. *Journal of Personality and Social Psychology*, 66(4), 762-775.
- Hernstein, R., & Wilson, J. (1985). *Crime and nature*. Simon and Shuster.
- ハーシ, T. (著) 森田洋司・清水新二 (監修) 森田洋司・清水新二・竹内郁雄・原田 豊・島 和博・山根真理・津富 宏・山本祥子・上野加代子・田村雅夫・谷岡一郎・松田智子 (訳)『非行の原因—家庭・学校・社会へのつながりをもとめて—最新版』(文化書房博文社, 2010)
- Hirschi, T. (2004). Self-control and crime. In R. F. Baumeister & K. D. Vohs (Eds.), *Handbook of self-regulation: Research, theory, and applications*. The Guilford Press. 537-552.
- Hodges, H., Harnad, S., Finlay, B. L., & Bloom, P. (2004). Cambridge University Press. In Memoriam: Jeffrey Gray (1934-2004). <<https://www.cambridge.org/core/journals/behavioral-and-brain-sciences/article/in-memoriam-jeffrey-gray-19342004/4596ABFD7885C2F08A6E5E35544EDC27>> (2018年4月5日閲覧)
- 細井洋子・小柳 武・渡辺 芳・古川隆司・Pratt, J.『高齢受刑者の生活キャリアと生活環境の変遷』(2014年度科研費一般報告, 2014)
- 法務総合研究所『昭和 59 年版犯罪白書—豊かな社会における犯罪—』(1984)
- 法務総合研究所『平成 3 年版犯罪白書—高齢化社会と犯罪—』(1991)
- 法務総合研究所『平成 20 年版犯罪白書—高齢犯罪者の実態と処遇—』(2008)
- 法務総合研究所研究部報告 37『高齢犯罪者の実態と意識に関する研究—高齢受刑者及び高齢保護観察対象者の分析—』(2007)
- 法務総合研究所研究部報告 42『再犯防止に関する研究』(2007)
- 法務総合研究所研究部報告 56『高齢者及び精神障害のある者の犯罪と処遇に関する研究』(2016)
- 法務総合研究所研究部報告 57『窃盗事犯者に関する研究』(2017)
- 法務総合研究所研究部報告 58『青少年の立ち直り(デシスタンス)に関する研究』(2019)
- 北海道警察犯罪脆弱者対策研究委員会『犯罪脆弱者調査最終報告書—犯罪を起こさない、起こさせない社会環境を目指して—』(北海道警察犯罪脆弱者対策研究委員会, 2011)
- 堀田利恵・湯原悦子「高齢になって初めて犯罪に手を染めた女性犯罪者に関する研究(総説)」日本福祉大学社会福祉論集 123 (2010) 69-83 頁
- 井上和則「少年鑑別所在所者の TCI の特徴」日本パーソナリティ心理学会大会発表論文集 17 (2008) 170-171 頁

- 市村國夫 下村義夫 渡邉正樹「中・高生の薬物乱用・喫煙・飲酒行動と規範意識」学校保健研究 43(1) (2001) 39-49 頁
- いわて地域犯罪防止研究調査会 (ICPR)『犯罪の加害者となる高齢者に関する調査・研究』(岩手県立大学社会福祉学部細江研究室, 1999)
- Jeffery, C. R. (1965). Criminal Behavior and Learning Theory. *Journal of Criminal Law and Criminology*, 56(3), 294-300.
- Jeffery, C. R. (1971). *Crime prevention through environmental design*. Sage Publications, Inc.
- Jeffery, C. R. (1977). *Crime prevention through environmental design (2<sup>nd</sup> edit.)*. Sage Publications, Inc.
- Johan Thorsten Sellin papers, Kislak Center for Special Collections, Rare Books and Manuscripts, University of Pennsylvania. <[http://dla.library.upenn.edu/dla/ead/detail.html?id=EAD\\_upenn\\_rbml\\_MsColl694](http://dla.library.upenn.edu/dla/ead/detail.html?id=EAD_upenn_rbml_MsColl694)> (2019 年 10 月 1 日閲覧)
- Jung, C. G. (1960). *The stage of life, the collected works: Structure and dynamics of the psyche*. Pantheon.
- 川上麻由「我が国における高齢者犯罪の特異性について—米国における高齢者犯罪研究からの一考察—」中央大学大学院研究年報 47 (2018) 131-149 頁
- 警察庁刑事局編, 警察統計年鑑 1989-2014.
- 木島伸彦「日本語版 Temperament and Character Inventory (TCI)の信頼性と妥当性に関する研究」日本性格心理学会発表論文集 5 (1996) 72-73 頁
- 菊田幸一・西村春夫『犯罪・非行と人間社会—犯罪学ハンドブッカー』(評論社, 1982)
- 金 英淑「少年非行の原因としての家族関係」現代社会文化研究 39 (2007) 73-90 頁
- 国立社会保障・人口問題研究所「日本の将来推計人口—平成 29 年推計の解説および条件付推計—」(2017) <[http://www.ipss.go.jp/pp-zenkoku/j/zenkoku2017/pp29suppl\\_reportALL.pdf](http://www.ipss.go.jp/pp-zenkoku/j/zenkoku2017/pp29suppl_reportALL.pdf)> (2018 年 10 月 1 日閲覧)
- 近藤淳哉・岡本英生・白井利明・栃尾順子・河野莊子・柏尾眞津子・小玉彰二「非行からの立ち直りにおける抑うつに耐える力とソーシャル・ネットワークとの関連」(犯罪心理学研究 46(1) (2008) 1-13 頁
- クレッチマー, E. (著) 齊藤良象 (訳)『體格と性格』(肇書房, 1944)
- 国里愛彦・山口陽弘・鈴木伸一「パーソナリティ研究と神経科学をつなぐ気質研究について」群馬大学教育学部紀要 (人文・社会科学編) 56 (2007) 359-377 頁
- Kutztown University. <<https://www.kutztown.edu/academics/colleges-and-departments/liberal-arts-and-sciences/departments/criminal-justice/faculty/glenn-walters.htm>> (2019 年 10 月 1 日閲覧)
- 矯正統計 2018 年 <<https://www.e-stat.go.jp/stat-search/files?page=1&layout=datalist&toukei=00250005&tstat=000001012930&cycle=7&year=20180&month=0>> (2019 年 8 月 30 日閲覧)
- Laub, J. H. & Sampson, R. J. (1993). Turning points in the life course: Why change matters to the study of crime. *Criminology*, 31(3), 301-325.
- ル・ドゥ, J. (著) 森 憲作 (監) 谷垣曉美 (訳)『シナプスが人格をつくる—脳細胞から

- 自己の総体へ』(みすず書房, 2004)
- Leue, A., Brocke, B., & Hoyer, J. (2008). Reinforcement sensitivity of sex offenders and non-offenders: An experimental and psychometric study of reinforcement sensitivity theory. *British Journal of Psychology*, 99, 361-378.
- レビンソン, D. J. (著) 南 博 (訳) 『ライフサイクルの心理学(上)』(講談社学術文庫, 1992)
- リリー, R. J., カレン, F. T., & ボウル, R. A. (著) 影山任佐 (監訳) 藤田眞幸・小林寿一・石井利文・小島秀吾・岩井宣子・安宅勝弘・鈴木 護 (訳) 『犯罪学—理論的背景と帰結—第5版』(金剛出版, 2013)
- 「万引きをしない・させない」社会環境づくりと規範意識の醸成に関する調査研究委員会  
『万引きに関する調査研究報告書』(「万引きをしない・させない」社会環境づくりと規範意識の醸成に関する調査研究委員会, 2009)
- マリンチャック, A. A. (著) 辻本義男・西村春夫 (訳) 『老人と犯罪—せまりくる高齢化社会のために—』(成文堂, 1983)
- Maruna, S., & Copes H. (2005). What Have We Learned from Five Decades of Neutralization Research?. *Crime and Justice*. 32, 221-320.
- マルナ, S. (著) 津富 宏 (監訳) 河野莊子 (訳) 『犯罪からの離脱と「人生のやり直し」—元犯罪者のナラティブから学ぶ—』(明石書店, 2011)
- Matza, D., & Sykes, G. M. (1961). Juvenile delinquency and subterranean values. *American sociological review*, 26(5), 712-719.
- マツア, D. (著) 非行理論研究会 (訳) 『漂流する少年: 現代の少年非行論』(成文堂, 1986)
- MacAndrew, C., & Steele C. (1991). Gray's behavioral inhibition system: A psychometric examination. *Personality and Individual Differences*, 12(2), 157-171.
- Mednick, S. A., Gabrielli, W. F., & Hutchings, B. (1983). Social Class and Crime in an Adoption Cohort, *Journal of Criminal Law and Criminology*, 74(1), 249-269.
- マートン, R. K. (著) 森 東吾・森 好夫・金沢 実・中島竜太郎 (訳) 『社会理論と社会構造』(みすず書房, 1961)
- Messner, S. F., & Rosenfeld, R. (2013). *Crime and the American Dream 5<sup>th</sup>.ed.* Cengage Learning.
- Miller, W. B. (1958). Lower class culture as a generating milieu of gang delinquency. *Journal of social issues*, 14(3), 4-13.
- ミンスキー, M. L. (著) 竹林洋一 (訳) 『ミンスキー博士の脳の探検: 常識・感情・自己とは』(共立出版, 2009)
- 宮下照子 『新行動療法入門』(ナカニシヤ出版, 2007)
- 三好美浩・吉本佐雅子・勝野眞吾 「高校生の喫煙, 飲酒, 違法薬物乱用の実態—薬物乱用におけるライフスタイルの危険因子及び保護因子を検討する—」学校保健研究 50(1) (2009) 426-437 頁
- Moffitt, T. (1993). Adolescent-Limited and Life-Course-Persistent Adolescent Behavior: A Developmental Taxonomy. *Psychological Review*, 100(4), 674-701.
- 守山 正・小林寿一 『ビギナーズ犯罪学』(成文堂, 2016)
- 宗像恒次 「行動論の実行を支える諸条件」看護技術 29(14) (1983) 30-38 頁

- 内閣府『28年版高齢社会白書』(2016)
- 内閣府『30年版高齢社会白書』(2018)
- 中尾暢見「激増する高齢者犯罪」専修人間科学論集 社会学篇 4(2) (2014) 101-117 頁
- 中田 修『犯罪精神医学』(金剛出版, 1987)
- Neblitsyn, V. D., & Gray, J. A. (1972). *Biological bases of individual behavior*. New York, NY: Academic Press.
- Newman, MacCoon, Vaughn, & Sadeh. (2005). Validating a distinction between primary and secondary psychopathy with measures of Gray's BIS and BAS constructs. *Journal of Abnormal Psychology*, 114(2), 319-323.
- ニューマン, B. M., & ニューマン, P. R. (著) 福富護 (訳)『生涯発達心理学: エリクソンによる人間の一生とその可能性』(川島書店, 1988)
- Nietzel, M. T. (1979). *Crime and its modification: A social learning perspective*. Pergamon Press.
- Nolen, J. L. Encyclopedia Britannica, <[https://www.britannica.com/biography/ Albert-Bandura](https://www.britannica.com/biography/Albert-Bandura)>. (2019年10月1日閲覧) .
- NPO 法人生活・福祉環境づくり 21・日本応用老年学会『ニッポンのネクストステージ高齢社会の「生・活」事典—「生・活」知識検定試験公式テキスト—』(社会保険出版社, 2011)
- NYU Art & Science. Center for Neural Science, <[as.nyu.edu/cns/people/ faculty.Joseph-e-ledoux.html](https://as.nyu.edu/cns/people/faculty/Joseph-e-ledoux.html)> (2019年8月30日閲覧)
- 『20世紀西洋人名辞典』(日外アソシエーツ, 1995)
- 西村茉桜・橋口美香・川村和史・平野裕子「T 町在住の高齢者の生活満足度を規定する要因」保健学研究 28 (2016) 9-19 頁
- 小田利勝「社会老年学における適応理論再考」神戸大学発達科学部紀要 11(2) (2004) 361-376 頁
- OHAIO State University, Criminal Justice Research Center. <<https://cjrc.osu.edu/events/reckless-dinitz/honorees>> (2019年10月1日閲覧)
- 大石和男・安川通雄「男性大学生の喫煙・飲酒習慣とタイプ A 行動様式」日本生理人類学会誌 7 (4) (2002) 155-160 頁
- 大久保智生・時岡晴美・岡田涼『万引き防止対策に関する調査と社会的実践』(ナカニシヤ出版, 2013)
- 太田達也「高齢者犯罪の実態と対策」警察政策 11 (2009) 126-161 頁
- 太田達也「高齢者犯罪の対策と予防—高齢犯罪者の特性と警察での対応を中心に—」警察学論集 67 (6) (2014) 3-14 頁
- 岡田尊司・福井裕輝『情動と犯罪—共感・愛着の破綻と回復の可能性—』(朝倉書店, 2019)
- OECD 学習センター (編) 小泉英明 (監) 小山麻紀・徳永優子 (訳)『脳から見た学習—新しい学習科学の誕生』(明石書店, 2010)
- 尾崎由佳・後藤崇志・小林麻衣・沓澤 岳「セルフコントロール尺度短縮版の邦訳および信頼性・妥当性の検討」心理学研究 87 (2) (2016) 144-154 頁
- Perry, B. D., & Pollard, R. (1998). Homeostasis, stress, trauma, and adaptation: A



- neurodevelopmental view of childhood trauma. *Child and Adolescent Psychiatric Clinics*. 7(1), 33-51.
- Posner, M.I., & Raichle, M. E. (1994). *Images of mind*. Scientific American Library.
- Poythress, N. G., Skeem, J. L., Weir, J., Lilienfeld, S. O., Douglas, S. K., Edens, J. F., & Kennealy, P. J. (2008). Psychometric Properties of BIS/BAS Scales in a Large Sample of Offenders Carver and White's (1994), *Personality and Individual Difference*. 45(8), 732-737.
- Psychology Today. (2019). <<https://www.psychologytoday.com/us/experts/elaine-n-aron-phd>> (2019年10月15日閲覧)
- Quartz, S.R., & Sejnowski, T. J. (1997). The neural basis of cognitive development: A constructivist manifesto. *Behavioral and brain sciences*. 20 (4), 537-556.
- クインドゥス, J. (著) 福本 修 (監訳) 『フロイトを読む—年代順に紐解くフロイト著作—』 (岩崎学術出版社, 2013)
- Raine, A. (1993). *The psychopathology of crime: Criminal behavior as a clinical disorder*. San Diego, CA: Academic Press.
- レーン, A. (著) 高橋 洋 (訳) 『暴力の解剖学—神経犯罪学への招待—』 (紀伊國屋書店, 2015)
- Reckless, W. C., Dinitz, S., & Kay, B. (1967). Pioneering with Self-Concept as a Vulnerability Factor in Delinquency. *Journal of Criminal Law and Criminology*, 58(4), 515-522.
- Rifkin, G. (2016). The New York Times, Marvin Minsky, Pioneer in Artificial Intelligence, Dies at 88. <<https://www.nytimes.com/2016/01/26/business/marvin-minsky-pioneer-in-artificial-intelligence-dies-at-88.html>> (2018年7月30日閲覧)
- Rothbart, M. K., Derryberry, D. (1981). Development of individual differences in temperament. In: Lamb ML, Brown AL, editors. *Advances in developmental psychology*. 1, 37-86.
- Rothbart, M.K., Derryberry, D., & Posner, M. I. (1994). A psychobiological approach to the development of temperament. *Individual differences at the interface of biology and behavior*. 83-116.
- Rothbart, M. K., & Bates, J. E. (1998). *Temperament*. Hoboken. New York Willy.
- Rothbart, M. K., Ahadi, S., Hershey, K., & Fisher, P. (2001). *Investigations of temperament at 3-7 years: The children's behavior questionnaire*. Manuscript submitted for publication.
- Rothbart, M.K., Bates, J. E., Damon, W., & Lerner, R. (2006). Handbook of child psychology: 3. *Social Emotional and Personality Development*. Wiley; New York.
- Roberts, S. (2018). The New York Times, John Cacioppo, Who Studied Effects of Loneliness, Is Dead at 66. <<https://www.nytimes.com/2018/03/26/obituaries/john-cacioppo-who-studied-effects-of-loneliness-is-dead-at-66.html>> (2018年8月15日閲覧)
- Sabri, I. (2019). The Daily Californian, (October 12, 2019) . Pillar in the field of

- sociology : UC Berkeley professor emeritus David Matza dies at 87. <[https:// www.dailycal.org/2018/04/11/pillar-field-sociology-uc-berkeley-professor-emeritus-david-matza-dies-87/](https://www.dailycal.org/2018/04/11/pillar-field-sociology-uc-berkeley-professor-emeritus-david-matza-dies-87/)> (2019 年 10 月 1 日閲覧)
- 齊藤知範「犯罪行為が学習される？」岡邊 健(編)『犯罪・非行の社会学—常識をとらえなおす視座』(有斐閣ブック, 2014) 131-146 頁
- Sampson, R. J. & Laub, J. H. (1993). Turning Points in the Life-Course: Why change matters to the study of Crime, *Criminology*, 31(3), 301-325.
- Sampson, R. J. & Laub, J. H. (2005). A life-course view of the development of crime. *Annals of the American Academy of Political and Social Science*. 602, 12-45.
- Sanders, R. (2013). Berkley News (March 1, 2013), Physics Nobel and biotech pioneer Donald Glaser dies at 86. <<https://news.berkeley.edu/2013/03/01/physics-nobel-and-biotech-pioneer-donald-glaser-dies-at-86/>> (2019 年 10 月 1 日閲覧)
- Scholars@Duke, Kenneth Land. <<https://scholars.duke.edu/person/kland>> (2019 年 12 月 30 日閲覧)
- 瀬川 晃『犯罪学』(成文堂, 2009)
- セリン, T. (著) 小川太郎・佐藤勲平(訳)『りぶらりあ選書 文化葛藤と犯罪』(法政大学出版局, 1973)
- Sheldon, W. H., & Stevens, S. S. (1942=1970). *The varieties of temperament: a psychology of constitutional differences*. Macmillan Pub Co.
- Sheldon, W. H. (1949). *Varieties of delinquent youth: an introduction to constitutional psychiatry*. Harper.
- 島津昌寛「貧困と犯罪に関する考察—両者の間に因果関係はあるのか?—」犯罪社会学研究 35 (2010) 8-20 頁
- 下仲順子・中里克治・高山 緑・落合千恵子「E.エリクソンの発達課題尺度の検討」心理臨床学研究 17(6) (2000) 525-537 頁
- 下仲順子『老年心理学』(培風館, 2012)
- 白井利明・岡本英生・小玉彰二・近藤淳哉・井上和則・梶尾良弘・福田研次・安部晴子「非行からの少年の立ち直りに関する生涯発達の研究 (VI) —「出会いの構造」モデルの検証—」大阪教育大学紀要第IV部門 60(1) (2011) 59-74 頁
- スレーター A. M., & クイン, P. C. (著) 加藤弘通・川田 学・伊藤 崇(監訳)『発達心理学再入門—ブレイクスルーを生んだ 14 の研究』(新曜社, 2017)
- Snodgrass, J. (1976). Clifford R. Shaw and Henry D. McKay: Chicago criminologists. *British Journal of Criminology*. 16, 1-19.
- 総務省統計局「人口推計」(2018) <<https://www.stat.go.jp/data/jinsui/index.html>> (2019 年 10 月 1 日閲覧)
- 総務省統計局「矯正統計」(2018) <<https://www.e-stat.go.jp/stat-search/files?page=1&layout=datalist&toukei=00250005&tstat=000001012930&cycle=7&year=20180&month=0>> (2019 年 10 月 1 日閲覧)
- 総務省統計局「学校基本調査年次統計」 <<https://www.e-stat.go.jp/dbview?sid=0003147-040>> (2019 年 10 月 1 日閲覧)

- 染田 恵「犯罪者の社会内処遇における最善の実務を求めて—実証的根拠に基づく実践の定着、RNRモデルとGLモデルの相克を超えて—」『更生保護学研究創刊号』(2012) 123-147 頁
- ストール, A. (著) 山中康弘 (監訳) 皆藤 章・川寄克哲・菅野信夫・濱野清志 (訳) 『エッセンシャル・ユング—ユングが語るユング心理学—』(創元社, 1997)
- 鈴木伸一・熊野宏昭・坂野雄二「認知行動療法」(1999) <[hikumano.umin.ac.jp/cbt\\_text.html](http://hikumano.umin.ac.jp/cbt_text.html)> (2018年6月11日閲覧)
- サザランド E., & クレッシー, R. D. (著) 平野龍一・所 一彦 (訳) 『犯罪の原因 (犯罪学原論 I)』(有信堂, 1974)
- 諏訪源四郎「Daniel Glaser の犯罪理論と行動のイメージ」家庭裁判所月報 11(9) (1959) 47-84 頁
- Sykes, G. M. & Matza, D. (1957). Techniques of Neutralization: *A Theory Delinquency. American Sociological Review*, 22(6), 664-670.
- 生島 浩 更生保護学第6回大会シンポジウム発表 (2017年12月3日)
- 高城和義「マートン文書の『知の社会史』上の意義—マートン研究の今日的課題—」帝京社会学 24 (2011) 61-78 頁
- 高橋雄介・山形伸二・木島信彦・繁柊数男・大野 裕・安藤寿康「Gray の気質モデル—BIS/BAS 尺度日本語版の作成と双生児法による行動遺伝学的検討—」パーソナリティ研究 15-3 (2007) 276-289 頁
- Tangney, J. P., Baumeister, R. F., & Boone, A. L. (2004). High self-control predicts good adjustment, less pathology, better. *Journal of Personality*, 72, 271-324.
- 橘木俊詔『21世紀日本の格差』(岩波書店, 2016)
- Taylor, J. & Eitle, D. (2015). The moderating role of BIS/BAS personality tendencies in the relationship between General Strain and Crime. *Deviant Behavior*, 36, 874-889.
- The Library of Congress, Daniel S. Nagin. <<http://id.loc.gov/authorities/names/n780220-19.html>> (2019年12月30日閲覧)
- The New York Times, (July 28, 1987), Buy Reprints. Prof. Donald R. Cressey, 68, Expert on Sociology of Crime. B, p.6. <<https://www.nytimes.com/1987/07/28/obituaries/prof-donald-r-cressey-68-expert-on-sociology-of-crime.html>> (2019年10月1日閲覧)
- Tittle, C. R. (2000). Control balance: In R. Paternoster & R. Bachman (Eds.), *Explaining criminals and crime: Essays in contemporary theory*. Los Angeles: Roxbury 315-334.
- 東京万引き防止官民合同会議『万引きに関する調査研究報告書』(東京万引き防止官民合同会議事務局, 2011)
- Tornstam, L. (1994). Gerotranscendence - A Theoretical and Empirical Exploration, *Aging and the Religious Dimension*. Springer, New York, 203-225.
- Torrubia, R., Ávila, C., Moltó J., & Casras, X. (2001). The Sensitivity to Punishment and Sensitivity to Reward Questionnaire (SPSRQ) as measure of Gray's anxiety

- and impulsivity dimensions. *Personality and Individual Differences*, 31, 837-862.
- Torrubia, R., & Tobena, A. (1994). A scale for the assessment of susceptibility to punishment as a measure of anxiety: Preliminary results. *Personality and Individual Differences*, 5(3), 371-375.
- 上田光明「犯罪学におけるコントロール理論の最近の展開と主な論争点の検討」犯罪社会学研究 32 (2007) 134-144 頁
- 上田 光明・尾山 滋・津富 宏「General Theory of Crime におけるセルフコントロールの尺度化」犯罪社会学研究 34 (2009) 116-133 頁
- United Nations, (2018). World Population Prospects : The 2018 Revision. <<https://population.un.org/wpp/Download/Standard/Population>>. (2019 年 10 月 1 日閲覧)
- University at Albany State University New York, <<https://www.albany.edu/news/experts/8025.php>> (2019 年 10 月 1 日閲覧)
- University of California Berkeley, Sociology. <<http://sociology.berkeley.edu/david-matza-1960>> (2019 年 9 月 30 日閲覧)
- University of California, Santa Barbara, (2018). College of Letters & Science. <<https://www.psych.ucsb.edu/people/michael-gazzaniga>> (2019 年 9 月 30 日閲覧)
- University of Cambridge, Institute of Criminology People Professor Per-Olof Wikström <<https://www.crim.cam.ac.uk/People/professor-per-olof-wikstrom>> (2019 年 9 月 30 日閲覧)
- University of Florida, Liberal Arts and Science. Sociology and Criminology & Law , <<https://soccrim.clas.ufl.edu/directory/emeritus/akers/>> (2019 年 9 月 30 日閲覧) .
- University of Missouri–St. Louis, <<https://www.umsl.edu/ccj/faculty/rosenfeld.html>> (2019 年 9 月 30 日閲覧)
- University of Pennsylvania School of Arts and Sciences, Department of Criminology. <<https://crim.sas.upenn.edu/people/adrian-raine>> (2019 年 10 月 1 日閲覧)
- Unnever, J. D., Cullen, F. T., Mathers, S. A., & McClure, T. E. (2009). Racial Discrimination and Hirschi's Criminological Classic: A Chapter in the Sociology of Knowledge. *Justice Quarterly*, 26(3), 377-409.
- ウルズラ, L. (著) 滝川 昇 (訳)『老いの心理学』(六法出版社, 1991)
- Vinokur, A., Schul, Y., & Caplan, R. D. (1987). Determination of Perceived Social Support: Interpersonal Transactions, Personal Outlook, Affective States. *Journal of Personality and Social Psychology*, 53(6), 1137-1143.
- ボルド, G. B & バーナード, T. J. (著) 平野龍一・岩井弘融 (監訳) 星野周弘・田村雅幸・荒木伸怡・横山 実・内山絢子・松木良夫・米川重信 (訳)『犯罪学—理論的考察—』(東京大学出版会, 1990)
- Wallace, J. F., Malterer, M. B., & Newman, J. P. (2009). Mapping Gray's BIS and BAS constructs on to Factor 1 and Factor 2 of Hare's Psychopathy Checklist – Revised. *Personality and Individual Differences*, 47(8), 812-816.
- ウォルシュ, A. (著) 松浦直己 (訳)『犯罪学ハンドブック』(明石書店, 2017)
- Walters, G. D. (1990). *Criminal Lifestyle: Patterns of Serious Criminal Conduct*. Sage

Publications, Inc.

Ward, T. & Stewart, C., (2003). The treatment of sex offenders: Risk management and good lives. *Professional Psychology Research and Practice*, 34(4). 353-360.

Ward, T. & Beech, A. R., (2005). An integrated theory of sexual offending. *Aggression and Violent Behavior*, 11(1). 44-63.

Ward, T. & Cannon, T. A., (2006). Rehabilitation, etiology, and self-regulation: The comprehensive good lives model of treatment for sexual offenders. *Aggression and Violent Behavior*, 11(1). 77-94.

Washington University School of Medicine in St. Louis. Department of Psychiatry.

<<https://psychiatry.wustl.edu/people/c-robert-cloninger-md-phd/>> (2019 年 10 月 1 日閲覧)

渡部 諭・澁谷康秀「犯罪被害に遭いやすい高齢者の認知バイアス—高齢者はなぜ犯罪に狙われやすいのか—」社会安全研究財団 2010 年一般研究助成最終報告書(2010)

<<https://www.syaanken.or.jp/wp-content/uploads/2012/05/A-13.pdf>> (2019 年 8 月 15 日閲覧) .

ウイストラム, P. H., & サンプソン, R. A. (著) 松浦直己 (訳)『犯罪学研究—社会学・心理学・遺伝学からのアプローチ』(明石書店, 2016)

Wilson, J. M., Barrett, P. T., & Gray, J. A. (1989). Human Reactions to Reward and Punishment: A questionnaire of Gray' s personality theory. *British Journal of Psychology*, 80, 509-515.

Woo, E. Los Angeles Times, (March 3, 2012). James Q. Wilson dies at 80; pioneer in 'broken windows' approach to improve policing. <<https://www.latimes.com/local/obituaries/la-me-james-q-wilson-20120303-story.html>> (2019 年 9 月 30 日閲覧)

Wright, J. P., & Cullen, F. T. (2012). The Future of Biosocial Criminology: Beyond Scholars' Professional Ideology, *Journal of Contemporary Criminal Justice*, 28(3), 237 -253.

安田朝子・佐藤 徳「行動抑制システム・行動接近システム尺度の作成ならびにその信頼性と妥当性の検討」心理学研究 73 (2002) 234-242 頁

山口直也・友田明美・仲真紀子・赤羽由紀夫・本庄 武・山崎俊恵・須藤明・安西 敦・大塚正之『脳科学と少年司法』(現代人文社, 2019)

山下優一・牧敦・山本剛・小泉英明「光による無侵襲脳機能画像化技術—『光トポグラフィ』—」分光研究 48(6) (2000) 275-286 頁

吉益脩夫『犯罪人』(東洋書館, 1952)

巻末資料 1

調査対象者のデモグラフィック特徴

質問	回答	一般	施設	合計
性別	男	29(34.9%)	97(89.8%)	126(66.0%)
	女	54(65.1%)	11(10.2%)	65(34.0%)
小学生時代の養育者	実父母	70(84.3%)	79(73.1%)	149(78.0%)
	実母と義父	1(1.2%)	4(3.7%)	5(2.6%)
	実父と義母	3(3.6%)	4(3.7%)	7(3.7%)
	実母のみ	6(7.2%)	4(3.7%)	10(5.2%)
	実父のみ	0	3(2.8%)	3(1.6%)
	祖父母	3(3.6%)	8(5.8%)	11(5.8%)
	親戚	0	2(1.0%)	2(1.0%)
	里親	0	2(1.0%)	2(1.0%)
	施設	0	2(1.0%)	2(1.0%)
小学生時代の養育者群	両親	70(84.3%)	79(73.1%)	149(78.0%)
	両親以外	13(15.7%)	29(26.9%)	42(22.0%)
小学生時代のしつけ	甘やかされた	7(8.4%)	25(23.1%)	32(16.8%)
	普通	41(49.4%)	46(42.6%)	87(45.5%)
	厳しかった	35(42.2%)	37(34.3%)	72(37.7%)
小学生時代の生活状況	普通より貧しかった	29(34.9%)	43(39.8%)	72(37.7%)
	普通	45(54.2%)	50(46.3%)	95(49.7%)
	普通より裕福	9(10.8%)	15(13.9%)	24(12.6%)
小学生時代の学業	普通よりできが悪かった	18(21.7%)	27(25.0%)	45(23.6%)
	普通	44(53.0%)	64(59.3%)	108(56.5%)
	普通よりできがよかった	21(25.3%)	17(15.7%)	38(19.9%)
最終学歴	小学校(尋常高等小学校)	1(1.2%)	1(0.9%)	2(1.0%)
	中学校	17(20.5%)	60(55.6%)	77(40.3%)
	高等学校(旧制中学)	41(49.4%)	29(26.9%)	70(36.6%)
	高専・専門・短大	10(12.0%)	7(6.5%)	17(8.9%)
	大学	14(16.9%)	9(8.3%)	23(12.0%)
	大学院	0	2(1.9%)	2(1.0%)
最終学歴	中卒以下群	18(21.7%)	61(56.5%)	79(41.4%)
	高卒以上群	65(78.3%)	47(43.5%)	112(58.6%)
40代、50代の職業	正社員	34(41.0%)	28(25.9%)	62(32.5%)
	契約(派遣)社員	2(2.4%)	7(6.5%)	9(4.7%)
	臨時(パート)社員	23(27.7%)	7(6.5%)	30(15.7%)
	店員	5(6.0%)	4(3.7%)	9(4.7%)
	工員	0	5(4.6%)	5(2.6%)
	建設作業員	1(1.2%)	28(25.9%)	29(15.2%)
	公務員	2(2.4%)	1(0.9%)	3(1.6%)
	自営業	5(6.0%)	16(14.8%)	21(11.0%)
	専門職	1(1.2%)	1(0.9%)	2(1.0%)
	その他	1(1.2%)	5(4.6%)	6(3.1%)
	専業主婦	9(10.8%)	4(3.7%)	13(6.8%)
	無職	0	2(1.9%)	2(1.0%)
40代、50代の職業群	土木作業員等	7(8.4%)	34(31.5%)	41(21.5%)
	土木作業員等以外	76(91.6%)	74(68.5%)	150(78.5%)
現役時代の生活状況	普通より貧しかった	8(9.6%)	20(18.5%)	28(14.7%)
	普通	64(77.1%)	64(59.3%)	128(67.0%)
	普通より裕福	11(13.3%)	24(22.2%)	35(18.3%)
現在の主な同居者	配偶者(内縁を含む)	47(56.6%)	6(5.6%)	53(27.7%)
	子供、孫	18(21.7%)	2(1.9%)	20(10.5%)
	ひとり	18(21.7%)	49(45.4%)	67(35.1%)
	施設・寮の集団	0	51(47.2%)	51(26.7%)
婚姻歴	現在もしている	50(60.2%)	6(5.6%)	56(29.3%)
	離婚	10(12.0%)	65(60.2%)	75(39.3%)
	死別	17(20.5%)	15(13.9%)	32(16.8%)
	したことがない	6(7.2%)	22(20.4%)	28(14.7%)
婚姻歴群	婚姻継続・死別	67(80.7%)	21(19.4%)	88(46.1%)
	離婚歴あり	10(12.1%)	65(60.2%)	75(39.3%)
	婚姻歴なし	6(7.2%)	22(20.4%)	28(14.3%)

質問	回答	一般	施設	合計
現在の月収	5万円未満	7(8.4%)	38(35.2%)	45(23.6%)
	5万円以上10万円未満	17(20.5%)	29(26.9%)	46(24.1%)
	10万円以上15万円未満	19(22.9%)	24(22.2%)	43(22.5%)
	15万円以上20万円未満	13(15.7%)	7(6.5%)	20(10.5%)
	20万円以上25万円未満	14(16.9%)	8(7.4%)	22(11.5%)
	25万円以上30万円未満	9(10.8%)	1(0.9%)	10(5.2%)
	30万円以上40万円未満	3(3.6%)	0	3(1.6%)
	40万円以上	1(1.2%)	1(0.9%)	2(1.0%)
月収群	5万円未満	7(8.4%)	38(35.2%)	45(23.6%)
	5万円以上15万円未満	36(43.4%)	53(49.1%)	89(46.6%)
	15万円以上	43(48.2%)	17(15.7%)	60(29.8%)
人生の振り返り	こんなはずではなかった	22(26.5%)	77(71.3%)	99(51.8%)
	どちらともいえない	35(42.2%)	25(23.1%)	60(31.4%)
	こんなものだと思っていた	26(31.3%)	6(5.6%)	32(16.8%)
人生の振り返り	満足群	61(73.5%)	31(28.7%)	92(48.2%)
	後悔群	22(26.5%)	77(71.3%)	99(51.8%)
老後の準備	何もなかった	51(61.4%)	88(81.5%)	139(72.8%)
	他人の指示に従った	12(14.5%)	13(12.0%)	25(13.1%)
	自分で勉強した	20(24.1%)	7(6.5%)	27(14.1%)
飲酒	飲まない	30(36.1%)	45(41.7%)	75(39.3%)
	飲む	45(54.2%)	38(35.2%)	83(43.5%)
	やめた	8(9.6%)	25(23.1%)	33(17.3%)
タバコ	吸わない	49(59.0%)	28(25.9%)	77(40.3%)
	吸う	22(26.5%)	59(54.6%)	81(42.4%)
	やめた	12(14.5%)	21(19.4%)	33(17.3%)
ギャンブル	やらない	67(80.7%)	49(45.4%)	116(60.7%)
	やる	10(12.0%)	20(16.5%)	30(15.7%)
	やめた	6(7.2%)	39(36.1%)	45(23.6%)
現在世話になっている人	施設の先生	0	65(60.2%)	65(34.0%)
	配偶者(内縁を含む)	43(51.8%)	0	43(22.5%)
	子供、孫	23(27.7%)	4(3.7%)	27(14.1%)
	兄弟姉妹	6(7.2%)	8(7.4%)	14(7.3%)
	その他の親戚	2(2.4%)	0	2(1.0%)
	友人知人	7(8.4%)	7(6.5%)	14(7.3%)
	役所の担当者	0	19(17.6%)	19(9.9%)
	保護司	0	5(4.6%)	5(2.6%)
	その他	2(2.4%)	0	2(1.0%)
お金を貸してくれる	満足	57(68.7%)	71(65.7%)	128(67.0%)
	ちょうどいい	20(24.1%)	30(27.8%)	50(26.2%)
	もっと望みたい	6(7.2%)	7(6.5%)	13(6.8%)
病気になった時世話してくれる	満足	17(20.5%)	28(25.9%)	45(23.6%)
	ちょうどいい	53(63.9%)	51(47.2%)	104(54.5%)
	もっと望みたい	13(15.7%)	29(26.9%)	42(22.0%)
引っ越しを手伝ってくれる	満足	33(39.8%)	49(45.4%)	82(42.9%)
	ちょうどいい	38(45.8%)	43(39.8%)	81(42.4%)
	もっと望みたい	12(14.5%)	16(14.8%)	28(14.7%)
分からないことを教えてくれる	満足	23(27.7%)	17(15.7%)	40(20.9%)
	ちょうどいい	51(61.4%)	66(61.1%)	117(61.3%)
	もっと望みたい	9(10.8%)	25(23.1%)	34(17.8%)
気持ちを分かってくれる	満足	13(15.7%)	13(12.0%)	26(13.6%)
	ちょうどいい	55(66.3%)	73(67.6%)	128(67.0%)
	もっと望みたい	15(18.1%)	22(20.4%)	37(19.4%)
寂しい時に話ができる	満足	9(10.8%)	19(17.6%)	28(14.7%)
	ちょうどいい	61(73.5%)	64(59.3%)	125(65.4%)
	もっと望みたい	13(15.7%)	25(23.1%)	38(19.9%)
自分のこれからを相談できる	満足	9(10.8%)	16(14.8%)	25(13.1%)
	ちょうどいい	59(71.1%)	55(50.9%)	114(59.7%)
	もっと望みたい	15(18.1%)	37(34.3%)	52(27.2%)
会ってホッとする	満足	7(8.4%)	14(13.0%)	21(11.0%)
	ちょうどいい	67(80.7%)	73(67.6%)	140(73.3%)
	もっと望みたい	9(10.8%)	21(19.4%)	30(15.7%)
手段的サポート	どちらかといえば満足群	74(89.2%)	98(90.7%)	172(90.1%)
	不満群	9(10.8%)	10(9.3%)	19(9.9%)
精神的サポート	どちらかといえば満足群	69(83.1%)	76(70.4%)	145(75.9%)
	不満群	14(16.9%)	32(29.6%)	46(24.1%)

質問	回答	一般	施設	合計
万引き経験	高齢期・幼少期ともあり群	0	62(57.4%)	62(32.5%)
	高齢期のみ群	0	1(0.9%)	1(0.5%)
	幼少期のみ群	18(21.7%)	13(12.0%)	31(16.2%)
	なし群	65(78.3%)	32(29.6%)	97(50.8%)
万引きの責任	自分	17(20.5%)	75(69.4%)	92(48.2%)
	誰の責任でもない	1(1.2%)	0	1(0.5%)
	社会や経済	0	1(0.9%)	1(0.5%)
	万引きしたことがない	65(78.3%)	32(29.6%)	97(50.8%)
捕まる前の万引き頻度	ほぼ毎日		4(5.6%)	
(n = 71)	週に1回くらい		22(31.0%)	
	月に3、4回くらい		11(15.5%)	
	月に1回くらい		9(12.7%)	
	年に数回くらい		25(35.2%)	
万引きする店はよくいく	はい		38(53.5%)	
(n = 71)	いいえ		33(46.5%)	
気付いたら万引きしている	はい		36(50.7%)	
(n = 71)	いいえ		35(49.3%)	
捕まらなければ気にしない	はい		14(19.7%)	
(n = 71)	いいえ		57(80.3%)	



ちょうさようし  
調査用紙

- 1 このアンケートは、みなさんがどのような人生を歩んできたのかなどについて、おたずねするものです。
- 2 研究以外の目的で使用することはありません。また、個人を特定するものではありませんので、安心して、ありのままに答えてください。
- 3 このアンケートに協力していただくことはあくまでも任意です。協力していただかなくても不利になることはありません。
- 4 質問文を読んで、あてはまる項目を○で囲んでください。当てはまるものがない場合は、その内容を具体的に（ ）に記入してください
- 5 記入し終わったら、担当者に提出または返信用封筒に入れ、切手をはらずにポストに投函してください。
- 6 アンケートは全部で9ページあります。もれのないように記入してください。

調査者：国土館大学 大学院法学研究科博士後期課程 江 崎 徹 治

国土館大学 大学院法学研究科 教 授 たつ の ぶん り

では、次のページから質問が続きます。質問文をよく読んで、それぞれの文があなたにあてはまる程度をお答えください。

「あてはまる」場合は1、「まったくあてはまらない」場合は5 というように、あてはまる番号に○をしてください。

## 第1 あなたの今の気持ちについておたずねします。

	あてはまらない	あまりあてはまらない	少しあてはまる	あてはまる			
Q1 たとえ何かよくないことが身 <small>み</small> に起 <small>おこ</small> ころうとしていても、こわくなったり、しんけいしつになったりしない	1	—	2	—	3	—	4
Q2 ほしいものを手に入れるためには、とても努力 <small>どりよく</small> する	1	—	2	—	3	—	4
Q3 何かがうまくいっているときは、それを続 <small>つづ</small> けることをとても楽しいと思う	1	—	2	—	3	—	4
Q4 おもしろそうだと思えば、いつでも何か新しいものをためしたいと考えている	1	—	2	—	3	—	4
Q5 ほしいものを手に入れたとき、こうふんし、活気 <small>かつき</small> づけられる	1	—	2	—	3	—	4
Q6 他人 <small>ひなん</small> に非難 <small>ひなん</small> されたり、怒 <small>おこ</small> られたりすると、かなり傷 <small>きず</small> つく	1	—	2	—	3	—	4
Q7 ほしいものがあると、たいていそれを手に入れるために全 <small>ぜん</small> 力をあげる	1	—	2	—	3	—	4
Q8 楽しいかもしれないから、という理由 <small>りゆう</small> だけで何かをすることがよくある	1	—	2	—	3	—	4
Q9 ほしいものを手に入れるチャンスをみつけると、すぐに行動する	1	—	2	—	3	—	4
Q10 だれかが私のことを怒 <small>おこ</small> っていると考えたり、知ったり、するとかなり心配 <small>しんぱい</small> になる	1	—	2	—	3	—	4
Q11 何か好きなことをするチャンスをみつけると、すぐこうふんする	1	—	2	—	3	—	4
Q12 しばしば時のはずみで行動する	1	—	2	—	3	—	4
Q13 何かよくないことが起ころうとしていると考え、たいていなやむ	1	—	2	—	3	—	4
Q14 よいことが私の身に起こると、そのことは、私に強いえいきょうを与える	1	—	2	—	3	—	4
Q15 何か重要なことがあまりうまくできなかったと考えると不安になる	1	—	2	—	3	—	4
Q16 こうふんや新 <small>あた</small> しいしげきをとてものぞんでいる	1	—	2	—	3	—	4
Q17 何かを <small>お</small> 追 <small>もと</small> 求 <small>もと</small> めているときにはてっていきにやる	1	—	2	—	3	—	4
Q18 友人と比べると、不安 <small>ふあん</small> の種 <small>たね</small> はとても少ない	1	—	2	—	3	—	4
Q19 競争 <small>きょうそう</small> に勝 <small>か</small> ったら、私はこうふんするだろう	1	—	2	—	3	—	4
Q20 私は、まちがい <small>おか</small> を犯 <small>おか</small> すことをとてもしんぱいしている	1	—	2	—	3	—	4

## 第2 あなたの現在の<sup>じょうきょう</sup>状況についておたずねします。

	まったくあてはまらない		あまりあてはまらない		どちらともいえない		少しあてはまる		あてはまる	
Q1	じぶんの <sup>のうりよく</sup> 能力に <sup>じしん</sup> 自信をもっている									
	1	—	2	—	3	—	4	—	5	
Q2	いつでも人にたよることができる									
	1	—	2	—	3	—	4	—	5	
Q3	たいていのいざごさは話し合 <sup>かいけつ</sup> いで解決できる									
	1	—	2	—	3	—	4	—	5	
Q4	じぶんのいかりをどうすればよいのかわからない									
	1	—	2	—	3	—	4	—	5	
Q5	ほとんどいつもイライラしていて、 <sup>よつきゅうふまん</sup> 欲求不満だ									
	1	—	2	—	3	—	4	—	5	
Q6	人の言うことを信じられる									
	1	—	2	—	3	—	4	—	5	
Q7	たいていの人はじぶんを助けてくれると思う									
	1	—	2	—	3	—	4	—	5	
Q8	新しい考えを何でもとり入れる									
	1	—	2	—	3	—	4	—	5	
Q9	たいていのことは <sup>らくてんてき</sup> 楽天的にかんがえる									
	1	—	2	—	3	—	4	—	5	
Q10	じぶんの <sup>もんだい</sup> 問題を <sup>かいけつ</sup> 解決する <sup>のうりよく</sup> 能力をもっている									
	1	—	2	—	3	—	4	—	5	
Q11	<sup>ゆうじゅうふだん</sup> 優柔不断だ									
	1	—	2	—	3	—	4	—	5	
Q12	とってもきちんとした人間だ									
	1	—	2	—	3	—	4	—	5	
Q13	人はじぶんがなしとげたいと思えば、たいていのことはなしとげることができると思う									
	1	—	2	—	3	—	4	—	5	
Q14	<sup>しょうらい</sup> 将来のためによろこんで働く									
	1	—	2	—	3	—	4	—	5	
Q15	じぶんを <sup>りつ</sup> 律することができる									
	1	—	2	—	3	—	4	—	5	
Q16	若い人が人にたよらず <sup>じりつ</sup> 自立することはたいせつなことだ									
	1	—	2	—	3	—	4	—	5	
Q17	私の <sup>いけん</sup> 意見はほとんど <sup>あいて</sup> 相手にされない									
	1	—	2	—	3	—	4	—	5	
Q18	じぶんの <sup>いけん</sup> 意見を言うのは <sup>にがて</sup> 苦手だ									
	1	—	2	—	3	—	4	—	5	
Q19	<sup>きゅうりょう</sup> 決まった給料よりその人の <sup>のうりよく</sup> 能力で変わる <sup>きゅうりょう</sup> 給料の方がよい									
	1	—	2	—	3	—	4	—	5	
Q20	「じぶんの人生や生活はじぶんできめてきちんとする」というのが私の <sup>せいかつ</sup> 考え方だ									
	1	—	2	—	3	—	4	—	5	
Q21	すぐオロオロする									
	1	—	2	—	3	—	4	—	5	
Q22	<sup>もんだい</sup> 問題にぶつかったとき、いろいろな <sup>かいけつさく</sup> 解決策を <sup>とくい</sup> 考え出すのがとても得意だ									
	1	—	2	—	3	—	4	—	5	
Q23	<sup>せきにん</sup> 責任のない <sup>しごと</sup> 仕事のほうがすきだ									
	1	—	2	—	3	—	4	—	5	

	まったくあて はまらない		あまりあて はまらない		どちらとも いえない		少し あてはまる		あてはまる
Q24 もし、知らない町をたずねたとしたら、 できればその町をあちこち歩いてたのしむ	1	—	2	—	3	—	4	—	5
Q25 何かするとき、あたらしいやり方をかんがえ だすのがすきだ	1	—	2	—	3	—	4	—	5
Q26 とても積極的な人間だ	1	—	2	—	3	—	4	—	5
Q27 うまくいくみとおしが無い限り、あたらしい 計画をやりはじめない	1	—	2	—	3	—	4	—	5
Q28 失敗するたびに、じぶんがとても情けなくなる	1	—	2	—	3	—	4	—	5
Q29 あたらしい計画をはじめるとは、たやすい	1	—	2	—	3	—	4	—	5
Q30 とても好奇心が旺盛だ	1	—	2	—	3	—	4	—	5
Q31 何かやる時には、力一杯やりたい	1	—	2	—	3	—	4	—	5
Q32 何かあたらしいことを学ぶとき、しばしば 人と比べて劣等感を感じる	1	—	2	—	3	—	4	—	5
Q33 あたらしいことを考え出す人間だと 思われている	1	—	2	—	3	—	4	—	5
Q34 「あたらしいことを考え出す」ということは、 人生で大切にしていることの一つである	1	—	2	—	3	—	4	—	5
Q35 働くことは私に大きな満足をもたらす	1	—	2	—	3	—	4	—	5
Q36 何事にも熱心にやるので、ボーッとしている 時間がない	1	—	2	—	3	—	4	—	5
Q37 あたらしいことを考え出すということは大切 なことだ	1	—	2	—	3	—	4	—	5
Q38 やらなければならないときには、骨のおれる 仕事でも、多くのエネルギーをそそぐことができる	1	—	2	—	3	—	4	—	5
Q39 いそがしいのがすきだ	1	—	2	—	3	—	4	—	5
Q40 働くことは本当にたのしい	1	—	2	—	3	—	4	—	5
Q41 ときどき、「じぶんがどんな人間なのか」 と考えることがある	1	—	2	—	3	—	4	—	5
Q42 十代のころは、異性とデートするようなこと などめったになかった	1	—	2	—	3	—	4	—	5
Q43 十代のころ、とても恥ずかしがりやだった	1	—	2	—	3	—	4	—	5
Q44 いつもじぶんに自信をもっている	1	—	2	—	3	—	4	—	5
Q45 じぶんがどう生きたいのか、だいたい わかっている	1	—	2	—	3	—	4	—	5
Q46 はた目からは気楽そうに見えても、 心の中では不安なときがよくある	1	—	2	—	3	—	4	—	5

	まったくあて はまらない		あまりあて はまらない		どちらとも いえない		少し あてはまる		あてはまる	
Q47 じぶんの考え方（価値観）は正しいと おもっている	1	—	2	—	3	—	4	—	5	
Q48 人間はじぶんの行動に責任をもたなければ ならないと、強くつよと思う	1	—	2	—	3	—	4	—	5	
Q49 宗教や政治の問題について、じぶんの 意見をしっかりもっている	1	—	2	—	3	—	4	—	5	
Q50 他人は、私のことを気まぐれな人間だという	1	—	2	—	3	—	4	—	5	
Q51 これまでに親しい友人をもったことがある	1	—	2	—	3	—	4	—	5	
Q52 とても親しい人間関係をもてた人が、 これまで何人かいる	1	—	2	—	3	—	4	—	5	
Q53 そばに誰かいてもさびしく感じることが よくある	1	—	2	—	3	—	4	—	5	
Q54 すきな人と、本当に仲がよいと感じることが よくある	1	—	2	—	3	—	4	—	5	
Q55 心の奥深くにある考えと一緒に分かち合いたい と思った人がいた	1	—	2	—	3	—	4	—	5	
056 心から尊敬できる人に、まだ出合ったことがない	1	—	2	—	3	—	4	—	5	
057 これまでの人生のなかでは、ぜんたいとして、 じぶんの異性関係には満足している	1	—	2	—	3	—	4	—	5	
058 十代のころには、多くの経験とともに分ち合う とても親しい友人がいた	1	—	2	—	3	—	4	—	5	
Q59 人と一緒にいるのがたのしい	1	—	2	—	3	—	4	—	5	
Q60 見知らぬ人とも親しくできる	1	—	2	—	3	—	4	—	5	
Q61 こどもが新しいことができるようになるのを 見守るのはとてもたのしい	1	—	2	—	3	—	4	—	5	
Q62 私にはたくさんの楽しみがある	1	—	2	—	3	—	4	—	5	
Q63 今までの人生でいろいろなことをなしとげ てきたし、今も努力している	1	—	2	—	3	—	4	—	5	
Q64 若い人たちに教えることができたなら どんなにたのしいことだろう	1	—	2	—	3	—	4	—	5	
Q65 子どもたちが公害でよごれた世界で育って いくことは、とても心配だ	1	—	2	—	3	—	4	—	5	
Q66 次の世代のための、計画を立てることは とても大切である	1	—	2	—	3	—	4	—	5	
Q67 若い人たちが何かをなしとげるのを見るのは とてもたのしい	1	—	2	—	3	—	4	—	5	
Q68 科学技術が進歩したのでだれも一生懸命 働く必要はない	1	—	2	—	3	—	4	—	5	

	まったくあて はまらない		あまりあて はまらない		どちらとも いえない		少し あてはまる		あてはまる
Q69 いっしょうけんめい 一生懸命働けば、じぶんに自信がもてる	1	—	2	—	3	—	4	—	5
Q70 新しいことを習得することはたのしい	1	—	2	—	3	—	4	—	5
Q71 良心や心の中で信じているものは、 以前より強くなっている	1	—	2	—	3	—	4	—	5
Q72 これまでの人生はよかった	1	—	2	—	3	—	4	—	5
Q73 人生にはたのしいことがたくさんある	1	—	2	—	3	—	4	—	5
Q74 私は生きていてもあまり役に立たない	1	—	2	—	3	—	4	—	5
Q75 私はだれの役にも立たない	1	—	2	—	3	—	4	—	5
Q76 じぶんに勇氣さえあれば、人生をおわらせて いただろう	1	—	2	—	3	—	4	—	5
Q77 これがじぶんだという感じをつよくもつこと がどんなに意味のあることか知っている	1	—	2	—	3	—	4	—	5
Q78 私が死んだらみんなが悲しんでくれると思う	1	—	2	—	3	—	4	—	5
Q79 年をとってから、新しい趣味や活動 始めるのは意味のないことだ	1	—	2	—	3	—	4	—	5
Q80 からだの力のつづく限り、身のまわりの ことをじぶんでやっている	1	—	2	—	3	—	4	—	5
Q81 だまされやすい者は、利用されて当然だ	1	—	2	—	3	—	4	—	5
Q82 多くの方は、福祉の世話になっている人を あまり尊敬しない	1	—	2	—	3	—	4	—	5
Q83 車の盗難は、それを盗んだ人と同じくらい 車のカギを置き忘れた人にも責任がある	1	—	2	—	3	—	4	—	5
Q84 犯罪を行った人は、ほとんどつかまって 罰を受けている	1	—	2	—	3	—	4	—	5
Q85 この世の中、注意していないと他人に 利用される	1	—	2	—	3	—	4	—	5
Q86 警察につかまらなければ、なにをやっても かまわない	1	—	2	—	3	—	4	—	5
Q87 どうあがいても、物事は起こるときには 起こる	1	—	2	—	3	—	4	—	5
Q88 自分の面倒を見られない人たちは社会で 面倒を見るべきだ	1	—	2	—	3	—	4	—	5
Q89 出世するためには、正しくないことも しなければならない	1	—	2	—	3	—	4	—	5
Q90 人は今日のために生きるべきで、明日は なるようになる	1	—	2	—	3	—	4	—	5

### 第3 あなたが、現在じぶんのことをどのように見ているかおたずねします。

	まったくあて はまらない		あまりあて はまらない		どちらとも いえない		少し あてはまる		あてはまる	
Q1 じぶんの感情 <small>かんじょう</small> をコントロールすることは とてもむずかしい	1	—	2	—	3	—	4	—	5	
Q2 悪いクセをやめられない	1	—	2	—	3	—	4	—	5	
Q3 だらけてしまう	1	—	2	—	3	—	4	—	5	
Q4 場にそぐわないことを言うてしまう	1	—	2	—	3	—	4	—	5	
Q5 じぶんにとってよくないことでも、楽しければ やってしまう	1	—	2	—	3	—	4	—	5	
Q6 自分にとってよくないさそいは、ことわる	1	—	2	—	3	—	4	—	5	
Q7 もっと自制心 <small>じせいしん</small> があればよいのと思う	1	—	2	—	3	—	4	—	5	
Q8 誘惑 <small>ゆうわく</small> にまけない	1	—	2	—	3	—	4	—	5	
Q9 じぶんにきびしい人だといわれる	1	—	2	—	3	—	4	—	5	
Q10 集中 <small>しゅうちゅうりよく</small> 力がない	1	—	2	—	3	—	4	—	5	
Q11 先のことを考えて、計画的 <small>けいかくてき</small> に行動 <small>こうどう</small> する	1	—	2	—	3	—	4	—	5	
Q12 よくないことと知りつつ、やめられない ときがある	1	—	2	—	3	—	4	—	5	
Q13 他にどういふ方法 <small>ほうほう</small> があるか、よく考えずに 行動 <small>こうどう</small> してしまう	1	—	2	—	3	—	4	—	5	
Q14 趣味や娯楽 <small>ごらく</small> のせいで、やるべきことが そっちのけになることがある	1	—	2	—	3	—	4	—	5	

#### 第4 ご自身のことについて、おたずねします。

Q1 あなたの性別 1. 男 2. 女

Q2 あなたは、現在、何歳ですか ( 歳)

Q3 あなたは、小学生のころ主に誰に育てられましたか (疎開のときは除き、ひとつだけ○をしてください。)

1. 両親      2. 実母と義父      3. 実父と義母      4. 実母のみ      5. 実父のみ  
6. 祖父母      7. 親戚      8. 里親      9. 施設      99. わからない

Q4 あなたが小学生のころしつけはどうでしたか。

1. 甘やかされた      2. どちらともいえない      3. きびしかった

Q5 あなたが小学生のころの生活状況はどうでしたか

1. 普通より貧しい      2. 普通      3. 普通より裕福

Q6 あなたが小学生のころの成績はどうでしたか

1. 普通よりできがわるかった      2. 普通      3. 普通よりできがよかった

Q7 あなたが最後に卒業した学校はどこですか

1. 小学校 (尋常高等小学校)      2. 中学校      3. 高等学校 (旧制中学校)      4. 専門学校・高専  
5. 大学 (旧制高校)      6. 大学院      99. その他 (具体的に: )

Q8 あなたが40歳から50歳代ころの主な職業は何でしたか (主なものひとつだけ)

1. 正社員      2. 契約 (派遣) 社員      3. 臨時 (パート) 社員  
4. 店員      5. 工員      6. 建設作業員      7. 公務員      8. 教職員  
9. 自営業 (商店、運送、建設、機械、金属加工)      10. 専門職 (医師、弁護士、税理士など)  
11. その他 ( )      12. 専業主婦      99. 無職 (専業主婦を除く)

Q9 あなたの現役時代を通しての生活状況はどうでしたか

1. 普通より貧しかった      2. 普通      3. 普通より裕福だった

Q10 あなたは現在、誰と暮らしていますか (主なもの1つだけ)

1. 配偶者 (内縁を含む)      2. 子供、孫      3. 友人、知人      4. 自分ひとりだけ  
5. 更生施設・寮での集団      99. その他 (具体的に: )



Q11 あなたは結婚したことがありますか

1. 現在もしている      2. あるが離婚      3. あるが死別      4. したことがない

Q12 あなたの現在の主な収入源はなんですか（ひとつだけ）

1. 年金のみ      2. 年金と給料（売上）などの両方      3. 給料（売上）のみ  
4. 生活保護      5. 無収入

Q13 現在、受給している年金の種類（主なものひとつだけ）

1. 厚生（船員・炭鉱・共済）年金      2. 国民年金      3. 恩給  
4. その他（      ）      99. 受給なし

Q14 あなたの、現在の月収（月平均にして）はどれくらいですか

1. 5万円未満      2. 5万円以上10万円未満      3. 10万円以上15万円未満  
4. 15万円以上20万円未満      5. 20万円以上25万円未満      6. 25万円以上30万円未満  
7. 30万円以上40万円未満      8. 40万円以上

Q15 あなたは、現役で働いていたとき、現在のような生活を予測していましたか、

1. こんなはずではなかった      2. どちらともいえない      3. こんなものだと思っていた

Q16 あなたは、現役時代を通じて、老後（現在）に向けて準備をしましたか

1. 何もしなかった      2. 会社や他人の指示に従った      3. じぶんで勉強して準備した

Q17 次のものを飲んだり、吸ったり、やったりしますか、あてはまる番号にひとつだけ○をつけてください

- ・酒      1. 飲まない      2. 飲む      3. やめた  
・タバコ      1. 吸わない      2. 吸う      3. やめた  
・ギャンブル      1. やらない      2. やる      3. やめた

Q18 あなたは、いま誰にいちばん助けられていますか（ひとつだけ）

1. 施設の先生      2. 配偶者（同居人）      3. 子供・孫      4. 兄弟姉妹  
5. その他の親戚      6. 友人・知人      7. 役所の人      8. 保護司の先生      9. その他（      ）

Q19 現在、あなたを助けてくれる人に、のぞむことは何ですか？

- ・お金を貸してくれる・・・ 1. まったくのぞまない 2. ちょうどよい 3. もっとのぞみたい
- ・病気になった時に世話をしてくれる 1. まったくのぞまない 2. ちょうどよい 3. もっとのぞみたい
- ・引っ越しを手伝ってくれる・・・ 1. まったくのぞまない 2. ちょうどよい 3. もっとのぞみたい
- ・分からないことを教えてくれる・・・ 1. まったくのぞまない 2. ちょうどよい 3. もっとのぞみたい
- ・気持ちを分かってくれる・・・ 1. まったくのぞまない 2. ちょうどよい 3. もっとのぞみたい
- ・寂しい時に話しができる・・・ 1. まったくのぞまない 2. ちょうどよい 3. もっとのぞみたい
- ・自分のこれからを相談できる・・・ 1. まったくのぞまない 2. ちょうどよい 3. もっとのぞみたい
- ・会ってホッとする・・・ 1. まったくのぞまない 2. ちょうどよい 3. もっとのぞみたい

Q20 幼いころに万引き（店のお菓子や文具をだまってもってくること）をした記憶がありますか

1. ない 2. ある

Q21 あなたが万引きするのは誰の責任だと思いますか

1. 自分 2. 親・兄弟・子供 3. 誰の責任でもない 4. 社会や経済  
5. 役所（福祉事務所） 6. コンビニ・スーパー 7. 警察 99. 万引きしたことがない

Q22 あなたが初めて万引きをしたときから現在まで万引きを行っていた時期の二重線内を塗りつぶしてください

	15 歳	20 歳	30 歳	40 歳	50 歳	60 歳	70 歳	80 歳
【例】								
【答】								

Q23 あなたは、捕まる前、どれくらいの頻度で万引きをしていますか（万引きをしたことがない方は無記入）

1. ほぼ毎日 2. 週に1回くらい 3. 月3～4回くらい 4. 月1回くらい 5. 年に数回

024 次の質問に、「はい」「いいえ」に○で答えてください。（万引きをしたことがない方は無記入）

- ・万引きをする店は、よく買い物に行くところだ 1. はい 2. いいえ
- ・なにも考えずに、万引きしてしまうことがある 1. はい 2. いいえ
- ・万引きしてしまっても、つかまらなければ気にしない 1. はい 2. いいえ

以上で、質問は終わりです。ご協力ありがとうございました。